

深谷市

もり した と もり まつ ばら おき あい
森下・戸森松原・起会

一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告

— VI —

1995

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



森下遺跡1区航空写真



戸森松原遺跡中央部航空写真



森下遺跡 1 区第 7 号住居跡出土遺物(1)



森下遺跡 1 区第 7 号住居跡出土遺物(2)

序

埼玉県の北縁に位置する深谷市は、利根川の奔流に臨み、肥沃で緑に囲まれ、環境に恵まれた地であります。江戸時代には中山道の宿場町として栄え、また、明治時代以降の商工業の基礎が築られました。

しかし、近年は住宅や道路、公共施設の建設など、首都圏都市としての機能整備が進んでおります。深谷市と岡部町のほぼ中央を横断して走る、深谷バイパスの建設もその一例であります。

国道17号線は東京と新潟を結ぶ大動脈ですが、近年は激増する交通量や、これに伴う沿道環境の悪化に対して、早急な解決が迫られておりました。このため、建設省ではバイパス建設を実施し、道路網の充実、交通混雑の緩和を図ることになりました。

深谷市には、肥沃な土地や地理的環境を背景に、古代からの史跡、文化財が多く残されております。弥生時代の再葬墓群として著名な上敷免遺跡をはじめ、古墳時代後期の割山輪竈跡や木の本古墳群、関東管領上杉氏が築城した深谷城などが代表的なものです。

深谷バイパスが計画された路線内にも、古墳時代を中心とした14遺跡の所在が確認されました。事業実施にあたり、これらの遺跡の取り扱いについて関係各機関と慎重に協議が進められた結果、当事業団が記録保存のための発掘調査を実施することになりました。

調査の対象となった遺跡は、縄文時代から中世にまでおよんでおり、数多くの住居跡や墳墓などが発見され、膨大な遺物が出土しました。

本書は、森下遺跡、戸森松原遺跡、起会遺跡の調査成果をまとめた、深谷バイパス関係では最終の報告書であります。

すでに刊行されております6冊とともに、本書が今後の埋蔵文化財保護に関する啓発と普及、さらに学術研究のための基礎資料として活用され、本県文化の振興に寄与するところがあれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および報告書の作成に際し、御指導と多大の御協力を賜った埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、建設省大宮国道工事事務所、同熊谷出張所、深谷市教育委員会、並びに発掘と整理事業に携わられました皆様に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例 言

- 1 本書は、一般国道17号(深谷バイパス)改築工事業にかかる、森下(もりした)遺跡、戸森松原(ともりまつばら)遺跡、起会(おきあい)遺跡の発掘調査報告書である。各遺跡のコード番号と所在地、および発掘調査届に対する文化庁長官からの指示通知番号は、以下に示すとおりである。

森下遺跡	60-251	深谷市大字高畑字本田1068-1番地他	昭和61年6月30日	委保第5の798号
戸森松原遺跡	60-252	深谷市大字戸森字松原500番地他	昭和61年6月30日	委保第5の802号
			昭和62年5月18日	委保第5の610号
起会遺跡	60-253	深谷市大字内ヶ島字弁財69-1番地他	昭和61年6月30日	委保第5の801号
			昭和62年5月18日	委保第5の612号

- 2 発掘調査は埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課の調整を経て、建設省大宮国道工事事務所の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 3 現地における発掘調査は、昭和61年4月1日から昭和63年3月31日まで、整理・報告書作成作業は、平成6年4月1日から平成7年3月31日まで、それぞれ実施した。
- 4 出土遺物の整理および挿図等の作成は齋持和夫が担当し、村田章人、藤澤晶子の協力を得た。
- 5 本書で用いた遺構番号は、原則的には発掘調査時のものである。ただし、遺構数と略称は整理過程で補正・改訂を行なったため、既刊の調査年報や遺物註記、原因とは異なっている。
- 6 掲載した遺構写真は各遺跡の調査担当者が、遺物写真は巻頭カラーの土器集合を小川忠博氏、他を水村孝行が撮影した。
- 7 各遺跡での基準点測量と航空写真測量は中央航業株式会社に、出土土器の胎土分析は(株)第四紀地質研究所の井上巖氏に委託した。
- 8 本書の執筆は1の1を文化財保護課が、戸森松原遺跡出土の縄文土器を村田が、他を齋持が担当した。
- 9 本書の編集は、資料部資料整理第二課の齋持が行なった。
- 10 本書にかかる資料は、平成7年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管している。
- 11 本書にかかる遺物の註記は、以下の略号で遺跡名を表示している。
- 森下…MRST 戸森松原…TMRMTBR 起会…OKAI
- 12 現地での調査から本書の刊行まで、下記の方々より御教示、御協力を賜った。
- 荒川 弘 金子正之 古池晋祿 澤出晃越 (敬称略)

例 則

1 本書における挿図の指示は以下のとおりである。

- ・遺構の表記記号はS Jが住居跡(現地記録はS I)、S Bが掘立柱建物跡、S Kが土坑、S Dが溝、S Tが周溝墓(現地記録はS Z)である。
- ・XとYで示された数値は、国家標準直角座標第IX系に基づく各座標値を表し、矢印の方向はすべて座標北を示す。第IX系の座標原点は北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒で、原点座標値はX=0.000m、Y=0.000mである。(第1図参照)
- ・グリッドは30m×30mで、3遺跡に共通している。名称は南東隅の杭名称を用い、南から北へ50音順、東から西へ算用数字で表示している。小グリッドはその中を6m×6mに25分割したものである。(下図参照)
- ・住居跡の主軸は、カマドを備えるものはその付設された壁と直交する軸線、炉を備えるものは中心からその偏在する方向を軸線とした。規模は主軸長×これに直交する軸長を示し、主軸方向は座標北を起点に、東西に偏する角度を記した。
- ・土層図中のレベル数値は、すべて標高(単位m)を表す。
- ・土層図の説明文中で用いた土の色調は、『新版標準土色帳』1990年版(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)による。ただし、現地調査で「土色帳」を用いなかったものについては、説明文に土色番号が入っていない。
- ・縮尺は次の率を原則とし、それ以外のものは個別に示した。

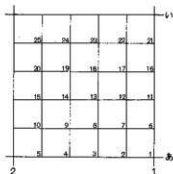
遺構 住居跡・掘立柱建物跡 1/60 土坑 1/40 周溝墓 1/100・1/200
周溝墓断面図 1/50

遺物 土器実測図 1/4 縄文土器拓影図 1/3 土製品・石製品 1/2

- ・遺物の断面は縄文土器および土師器を白抜きで、須恵器を塗りつぶして表現した。

2 土器観察表の記載は以下のとおりである。

- ・法量の単位はcmで、()を付したものは口径と底径では推定値、器高では現存高を示す。
- ・胎土は肉眼で観察された範囲での混有物を記し、Wは白色、W'は白色透明、Bは黒色、B'は黒色光沢、Rは赤色のもので、針は白色針状物質、片は結晶片岩である。
- ・焼成は焼きしまり具合によりA(良)、B(普通)、C(劣)にランキングしたが、多分に感覚的なものである。
- ・色調は土層と同様、「土色帳」を用いた。
- ・残存率はおおまかに目測したものである。
- ・出土位置は現地で記録した際の番号である。



グリッド呼称例

目 次

序	
例 言	
例 則	
I 発掘調査の概要	
1 調査に至るまでの経過	1
2 発掘調査の組織	2
3 調査の経過	3
II 遺跡群の立地と環境	
1 妻沼低地の地勢	7
2 妻沼低地における人々の足跡	14
III 森下遺跡の調査	
1 遺跡の概要	20
2 検出された遺構と遺物	23
IV 戸森松原遺跡の調査	
1 遺跡の概要	125
2 検出された遺構と遺物	129
V 起会遺跡の調査	
1 遺跡の概要	181
2 検出された遺構と遺物	183
VI 森下遺跡出土土器の胎土分析	
1 分析の目的	211
2 分析の結果	213
VII 結語	
1 戸森松原遺跡の周溝墓群について	220

挿 図 目 次

第1図	森下・戸森松原・起会遺跡調査範囲	5	第38図	1区第1号掘立柱建物跡(1)	59
第2図	埼玉県の地形と遺跡群の位置	7	第39図	1区第1号掘立柱建物跡(2)	60
第3図	深谷バイパス・上部道路 関連遺跡と周辺の主な遺跡	8・9	第40図	1区第1号・2号 掘立柱建物跡出土遺物	61
第4図	森下・戸森松原・起会遺跡の位置	10	第41図	1区第2号掘立柱建物跡(1)	62
第5図	明治17・18年当時の河川と水田分布	12・13	第42図	1区第2号掘立柱建物跡(2)	63
森下遺跡			第43図	1区第3号掘立柱建物跡	64
第6図	森下遺跡調査区と周辺の地形	21	第44図	1区第1号柱穴列	65
第7図	森下遺跡1区全体図	22	第45図	1区第1号・2号埋壘	66
第8図	1区第1号住居跡	23	第46図	1区第1号埋壘出土遺物(1)	67
第9図	1区第1号住居跡出土遺物(1)	24	第47図	1区第1号埋壘(2)・第2号埋壘出土遺物	68
第10図	1区第1号住居跡出土遺物(2)	25	第48図	1区第34号土坑・第2号溝・ ピット出土遺物	70
第11図	1区第2号住居跡	27	第49図	1区第1号・2号・3号土坑	71
第12図	1区第2号住居跡出土遺物	28	第50図	1区第4号・5号・6号・7号土坑	72
第13図	1区第3号住居跡遺物出土状態	29	第51図	1区第9号・21号~25号土坑	73
第14図	1区第3号住居跡	30	第52図	1区第26号~30号土坑	74
第15図	1区第3号住居跡出土遺物(1)	31	第53図	1区第31号~33号・35号土坑	75
第16図	1区第3号住居跡出土遺物(2)	32	第54図	1区第34号土坑	76
第17図	1区第3号住居跡出土遺物(3)	33	第55図	1・2区埋没河川出土遺物(1)	77
第18図	1区第3号住居跡出土遺物(4)	34	第56図	1・2区埋没河川出土遺物(2)	78
第19図	1区第4号住居跡(1)	36	第57図	1・2区埋没河川出土遺物(3)	79
第20図	1区第4号住居跡(2)	37	第58図	森下遺跡2区~5区全体図	81
第21図	1区第4号・7号住居跡出土遺物	38	第59図	2区第1号・2号土坑	82
第22図	1区第5号住居跡	40	第60図	2区・4区・5区出土遺物	83
第23図	1区第5号住居跡出土遺物	41	第61図	3区風倒木痕1・第1号土坑	84
第24図	1区第6号住居跡	42	第62図	5区第1号土坑	86
第25図	1区第6号住居跡出土遺物(1)	43	第63図	森下遺跡6区全体図	87
第26図	1区第6号住居跡出土遺物(2)	44	第64図	6区第1号住居跡(旧住居)	88
第27図	1区第7号住居跡遺物出土状態(1)	46	第65図	6区第1号住居跡(新住居)	89
第28図	1区第7号住居跡遺物出土状態(2)	47	第66図	6区第1号住居跡出土遺物	90
第29図	1区第7号住居跡	48	第67図	6区第2号住居跡	91
第30図	1区第7号住居跡出土遺物(1)	49	第68図	6区第2号住居跡出土遺物	92
第31図	1区第7号住居跡出土遺物(2)	50	第69図	6区第3号住居跡	93
第32図	1区第7号住居跡出土遺物(3)	51	第70図	6区第3号住居跡出土遺物	95
第33図	1区第7号住居跡出土遺物(4)	52	第71図	6区第4号住居跡	96
第34図	1区第7号住居跡出土遺物(5)	53	第72図	6区第4号住居跡出土遺物	97
第35図	1区第7号住居跡出土遺物(6)	54	第73図	6区第1号掘立柱建物跡	98
第36図	1区第8号住居跡	57	第74図	6区第2号掘立柱建物跡	100
第37図	1区第8号住居跡出土遺物	58			

第75図	6区第3号掘立柱建物跡	101
第76図	6区第4号掘立柱建物跡	102
第77図	6区第5号掘立柱建物跡	103
第78図	6区第6号掘立柱建物跡	105
第79図	6区第7号・8号掘立柱建物跡(1)	106
第80図	6区第7号・8号掘立柱建物跡(2)	107
第81図	6区第9号掘立柱建物跡	109
第82図	6区第10号掘立柱建物跡	110
第83図	6区第11号掘立柱建物跡	111
第84図	6区第12号掘立柱建物跡	112
第85図	6区第13号掘立柱建物跡(1)	114
第86図	6区第13号掘立柱建物跡(2)	115
第87図	6区第14号掘立柱建物跡	116
第88図	6区第1号・2号・11号・13号 掘立柱建物跡出土遺物	117
第89図	6区第2号・3号土坑	119
第90図	6区第4号・5号土坑	120
第91図	6区第4号・5号土坑出土遺物	121
第92図	6区第6号・7号土坑	122
第93図	6区第1号・8号・10号土坑	123
戸森松原遺跡		
第94図	戸森松原遺跡調査区と周辺の地形	126
第95図	戸森松原遺跡全体図(1)西端部	127
第96図	戸森松原遺跡全体図(2)中央部	128
第97図	戸森松原遺跡全体図(3)東端部	129
第98図	第1号住居跡	130
第99図	第1号住居跡出土遺物	131
第100図	第2号住居跡	132
第101図	第2号住居跡出土遺物	132
第102図	第3号住居跡	133
第103図	第3号住居跡出土遺物	134
第104図	第1号掘立柱建物跡	135
第105図	第1号周溝墓	137
第106図	第2号周溝墓	139
第107図	周溝墓間埋設土器	140
第108図	埋設土器・第3号・5号 周溝墓出土遺物	141
第109図	第3号周溝墓(1)	142
第110図	第3号周溝墓(2)	143
第111図	第4号周溝墓(1)	145
第112図	第4号周溝墓(2)	146
第113図	第5号周溝墓(1)	147

第114図	第5号周溝墓(2)	148
第115図	第5号周溝墓出土の縄文時代遺物(1)	149
第116図	第5号周溝墓出土の縄文時代遺物(2)	151
第117図	第5号周溝墓出土の縄文時代遺物(3)	152
第118図	第5号周溝墓出土の縄文時代遺物(4)	153
第119図	第5号周溝墓出土の縄文時代遺物(5)	154
第120図	第6号周溝墓(1)	156
第121図	第6号周溝墓(2)	157
第122図	第6号周溝墓遺物出土状態	158
第123図	第6号周溝墓・グリッド出土遺物	159
第124図	第7号周溝墓(1)	161
第125図	第7号周溝墓(2)	162
第126図	第7号周溝墓出土遺物	162
第127図	第8号周溝墓(1)	163
第128図	第8号周溝墓(2)	164
第129図	第8号周溝墓出土遺物	165
第130図	第9号周溝墓(1)	166
第131図	第9号周溝墓(2)	167
第132図	第9号周溝墓遺物出土状態	168
第133図	第9号周溝墓出土遺物	168
第134図	第10号・11号周溝墓(1)	170
第135図	第10号・11号周溝墓(2)	171
第136図	第12号・13号周溝墓	173
第137図	第1号溝出土遺物	174
第138図	第3号溝出土遺物	176
第139図	第4号・6号溝出土遺物	179
第140図	第7号溝出土遺物	180
起会遺跡		
第141図	起会遺跡Ⅰ区・Ⅱ区 調査区と周辺の地形	182
第142図	起会遺跡Ⅰ区出土遺物	183
第143図	起会遺跡Ⅰ区・Ⅱ区全体図	184
第144図	起会遺跡Ⅱ-A区・F区・ G区・L区全体図	185
第145図	起会遺跡Ⅱ-H区・I区・ J区・K区全体図	186
第146図	Ⅱ区第1号土坑出土遺物	187
第147図	Ⅱ区第1号住居跡・第1号土坑	188
第148図	Ⅱ区第2号住居跡	189
第149図	Ⅱ区第2号住居跡出土遺物	190
第150図	Ⅱ区床上げ田状遺構(1)	192
第151図	Ⅱ区床上げ田状遺構(2)	193

第152図	II区床上げ印状遺構(3)	194	第162図	III区土器集中	206
第153図	II区床上げ印状遺構(4)	195	第163図	III区土器集中出土遺物	206
第154図	II区土器集中	197	第164図	III区グリッド出土遺物	207
第155図	II区土器集中出土遺物(1)	198	第165図	起会遺跡IV区調査区と 周辺の地形・B区全体図	209
第156図	II区土器集中出土遺物(2)	199	第166図	IV区畝状遺構	210
第157図	II区土器集中出土遺物(3)	200	粘土分析・結語		
第158図	起会遺跡III区調査区と周辺の地形	201	第167図	分析試料と 石英(Qt)―斜長石(Pl)相関図	217
第159図	起会遺跡III区全体図	202	第168図	群分類と築造の復元	221
第160図	起会遺跡III―B区・H区全体図	203			
第161図	起会遺跡III―G区・I区・J区全体図	204			

写真図版目次

巻頭図版1 上段 森下遺跡1区全景

下段 戸森松原遺跡中央部全景

巻頭図版2 森下遺跡1区第7号住居跡出土遺物

森下遺跡

図版1 1区全景

図版2 1区検出遺構(1)

図版3 1区検出遺構(2)

図版4 2区～6区全景・6区検出遺構(1)

図版5 6区検出遺構(2)

図版6 6区検出遺構(3)

図版7 1区出土遺物(1)

図版8 1区出土遺物(2)

図版9 1区出土遺物(3)

図版10 1区出土遺物(4)

図版11 1区出土遺物(5)

図版12 1区出土遺物(6)

図版13 1区出土遺物(7)

図版14 1区出土遺物(8)

図版15 1区出土遺物(9)

図版16 1区出土遺物(10)

図版17 1区出土遺物(11)

図版18 1区出土遺物(12)

図版19 1区出土遺物(13)

図版20 1区出土遺物(14)

図版21 1区出土遺物(15)

図版22 1区出土遺物(16)

図版23 1区出土遺物(17)

図版24 1区出土遺物(18)

図版25 1区出土遺物(19)

図版26 1区埋没河川・2区・5区出土遺物

図版27 6区出土遺物(1)

図版28 6区出土遺物(2)

戸森松原遺跡

図版29 調査区中央部全景

図版30 検出遺構(1)

図版31 検出遺構(2)

図版32 検出遺構(3)

図版33 出土遺物(1)

図版34 出土遺物(2)

図版35 出土遺物(3)

図版36 出土遺物(4)

図版37 出土遺物(5)

図版38 出土遺物(6)

起会遺跡

図版39 II―D・E区全景

図版40 III―A～D・G～J区全景

図版41 II・III区検出遺構

図版42 III・IV区検出遺構

図版43 I・II区出土遺物(1)

図版44 II区出土遺物(2)

図版45 II区出土遺物(3)

図版46 II区出土遺物(4)

図版47 II区出土遺物(5)

図版48 III区出土遺物(1)

図版49 III区出土遺物(2)

図版50 III区出土遺物(3)

I 発掘調査の概要

1 調査に至るまでの経過

一般国道17号は、東京から新潟に至る幹線道路で、増大する交通量に対処するため、建設省では昭和37年以来、各種バイパスを整備している。深谷バイパスもその一環として計画された。

埼玉県教育委員会では、この事業と文化財保護との調整を図るため、昭和45年に国庫補助を得て分布調査を実施してきた。

昭和46年、深谷バイパスの計画にあたり、建設省関東地方建設局大宮国道工事事務所調査課長から文化財保護室長(当時)あて、昭和46年11月25日付け大國調第146号をもって、「一般国道16号線の東大宮バイパス、西大宮バイパスおよび一般国道17号線の熊谷バイパス、深谷バイパス、上武バイパスの建設予定地内における埋蔵文化財の所在について(依頼)」があり、分布調査の結果とを照合し、深谷バイパス線路上に数箇所の遺跡が確認されているため、即日、教文第854号をもって埋蔵文化財が所在する旨回答した。

昭和48年7月30日付け大國調第151号をもって、調査費用等について協議があり、調査機関、時期、経費の明細等については改めて協議するよう回答した、昭和55年財団法人法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が設立され、実施機関は事業団とし、昭和55年10月、新ヶ谷戸遺跡から発掘調査は開始された。これについては昭和57年3月に報告書が刊行された。

工事区間の延長にともなって、昭和57年12月16日付け大國調第167号をもって、大宮国道工事事務所長から県教育長あて、「一般国道17号深谷バイパス改良工事に伴う埋蔵文化財の所在について(照会)」があり、昭和58年11月8日付け教文第755号をもって、上敷免遺跡ほか4遺跡が所在する旨回答した。また、これにともない、昭和59年3月14日付け大國調第27号で発掘調査について協議があり、昭和59年3月16日付け教文第1163号で、発掘調査は財団法人法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に依頼して実施するのが適当と思われる旨を回答した。これらの遺跡の調査は、昭和59年4月から実施された。

さらに、工事区間が岡部町方面に延長するにともない、その区間の埋蔵文化財の所在について、昭和60年10月9日付け大國調第147号で照会があり、昭和60年10月21日付け教文第699号をもって四十坂下遺跡のほか2遺跡が所在する旨回答した。これについては、埋蔵文化財の包蔵地の範囲を明確にするため予備調査を実施し、実施については文化財保護課と協議してほしい旨付け加えた。

この回答をもとに、大宮国道工事事務所長から県教育長あて、昭和62年3月3日付け大國調第17号をもって「一般国道17号(深谷バイパス)改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査について(協議)」があり、昭和62年3月23日付け教文第1127号で、その後新たに発見された明戸上敷免遺跡を加え、先に回答をした四十坂下遺跡、矢島遺跡、戸森遺跡の4遺跡が発掘調査を実施する必要がある、実施機関を財団法人法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団にする旨の回答をした。これらの遺跡は昭和61年4月から発掘調査が開始された。

(文化財保護課)

2 発掘調査の組織

主 体 者 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発 掘 調 査

昭和61年度

理 事 長 長 井 五 郎
副 理 事 長 岩 田 明
常 務 理 事 町 田 義 勝
兼 管 理 部 長

管 理 部

主 査 関 野 栄 一
主 事 江 田 和 美
主 事 岡 野 美 智 子
主 事 福 田 浩 人
主 事 本 庄 朗 人

調 査 研 究 部

部 長 中 島 利 治
副 部 長 小 川 良 祐
第 一 課 長 今 泉 泰 之
調 査 員 橋 本 勉 夫
調 査 員 鰐 持 和 純
調 査 員 西 口 正 英 一
調 査 員 宮 井 英 一
調 査 員 岩 瀬 夫 義 則
調 査 員 木 戸 春 夫
調 査 員 関 義 則

昭和62年度

理 事 長 長 井 五 郎
副 理 事 長 百 瀬 陽 二
常 務 理 事 早 川 智 明
兼 調 査 研 究 部 長

管 理 部

部 長 原 田 家 次
主 査 関 野 栄 一
主 事 江 田 和 美
主 事 岡 野 美 智 子
主 事 福 田 浩 人
主 事 本 庄 朗 人

調 査 研 究 部

副 部 長 塩 野 博
第 一 課 長 今 泉 泰 之
調 査 員 鰐 持 和 夫
調 査 員 磯 崎 昌 一
調 査 員 宮 高 崎 光
調 査 員 木 戸 春 夫
調 査 員 田 中 広 明

(2) 整 理 ・ 報 告 書 刊 行

平 成 6 年 度

理 事 長 荒 井 桂
副 理 事 長 富 田 真 也
専 務 理 事 長 栃 原 嗣 雄
常 務 理 事 長 加 藤 敏 昭
兼 管 理 部 長

管 理 部

兼 調 査 部 長 小 川 良 祐
庶 務 課 長 及 川 孝 之
主 査 市 川 有 三
主 事 長 滝 池 美 智 子
主 事 菊 野 栄 一

専 門 調 査 員

兼 經 理 課 長 関 野 栄 一
主 任 事 江 田 和 美
主 任 事 福 田 昭 美
主 任 事 腰 塚 雄 二

資 料 部

部 長 塩 野 博
副 部 長 谷 井 彪
兼 整 理 第 一 課 長
専 門 調 査 員 水 村 孝 行
兼 整 理 第 二 課 長
主 任 調 査 員 鰐 持 和 夫

3 調査の経過

一般国道17号線(深谷バイパス)改良工事事業は、深谷市と岡部町をほぼ横断するように路線計画がなされた。事業地内で調査対象となる遺跡は、事前の調査により、14箇所であることが確認されていた。これらについては、昭和59年(1984)7月より昭和63年(1988)6月まで、おおよそ4箇年にわたり現地調査を実施した。

このうち本書では、報告する森下遺跡、戸森松原遺跡、起会遺跡に関し、その調査経過の概要を年度ごとに記すこととする。深谷バイパス全体の調査経過については『新田裏・明戸東・原遺跡』、掲載した3遺跡以外については各報告書、それぞれを参照願いたい。本書は深谷バイパス関連では最終の報告となるため、発掘調査から整理・報告書刊行まで、まとめの意味でその経過を表示しておく。

なお、これまでに刊行された報告書は以下の6冊である。

- | | | |
|---------------|------------------------------|------|
| 【新田裏・明戸東・原遺跡】 | 一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財調査報告-I | 1989 |
| | 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第85集 | |
| 【樋詰・砂田前】 | 一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財調査報告-II | 1991 |
| | 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第102集 | |
| 【新屋敷東・本郷前東御】 | 一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財調査報告-III | 1992 |
| | 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第111集 | |
| 【原ヶ谷戸・滝下】 | 一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財調査報告-IV | 1993 |
| | 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第127集 | |
| 【上敷免遺跡】 | 一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財調査報告-V | 1993 |
| | 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第128集 | |
| 【矢島南遺跡】 | 一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財調査報告-VII | 1994 |
| | 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第149集 | |

昭和61年度 4月より森下遺跡と戸森松原遺跡で調査を開始。重機での表土層除去は順調に進み、遺構確認作業も本格化する。ところが、まもなく周囲の水田で耕作が始まったため、引水による地下水位の上昇が起こり、調査区は水没してしまった。事前に排水設備を充実させたつもりであったが、出水は激しく、確認面はつねに滞水状態にあった。このため戸森松原遺跡の調査は一時中断し、比較的狀態のよい起会遺跡I区の調査へ赴く。I区では土師器の壺や甕などの破片をわずかに得たものの、遺構は検出できないまま、6月27日に調査を終了した。

森下遺跡では水の処理に悩まされ続けながらも、7月の中旬からは本格的な精査に着手する。調査区東端の1区は基盤が砂層であるため、出水と崩落が特に激しかった。8月からは住居跡の精査を集中的に行ない、10月までに8軒すべてを終える。これと併行して2区～5区の調査を行なう。いずれも遺構・遺物に乏しく、12月からは西端の6区の調査へと移った。既に出水はやんでいるものの、冬場は名物の「赤城おろし」という強い北西風が吹き荒れる。確認された遺構は奈良・平安時代の住居跡や孤立柱建物跡が中心で、その分布はかなり濃密であった。3月中旬までには各遺構の

精査を終了、図面・写真類のチェックをもって森下遺跡の調査を完了する。

戸森松原遺跡は収穫期に入った10月16日、表土層除去と遺構確認を再開。その結果、西端部で奈良・平安時代の住居跡と掘立柱建物跡、中央部で大型の周溝墓群の存在が明らかとなった。周溝墓は順次精査を進めたが、周溝の掘り込みが深く、埋土の排出に困難を窮めた。それでも年度末までには7基の調査を終え、航空写真測量を実施した。

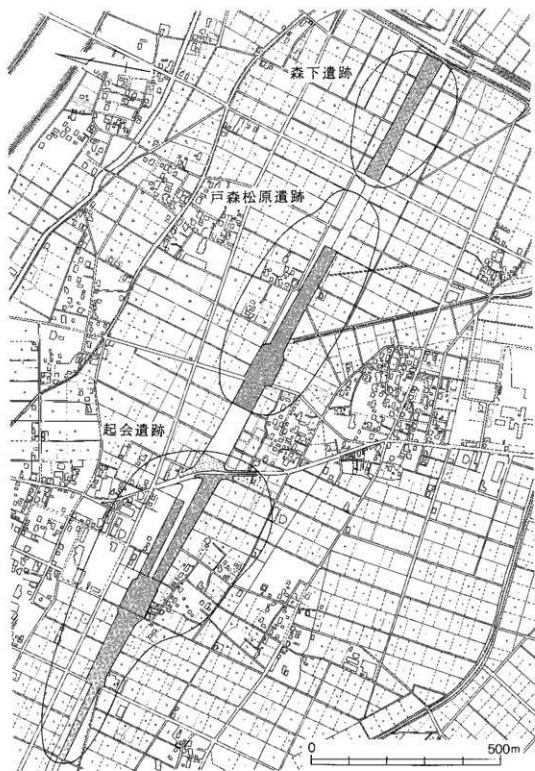
昭和62年度 戸森松原遺跡では前年度未着手であった、東半部の調査を開始する。新たに5基の周溝墓と古墳時代の住居跡を検出し、順次精査を行なう。水田に水が引かれる寸前、6月26日までにすべての調査を終える。

起会遺跡はII区、およびIII区の表土層除去を開始。ともに浅間B軽石の堆積が顕著で、縦横に掘られた畝状の溝が、その直下から多量に検出された。調査区が広範であることと相まって、測量に手間取る毎日となった。出水期を控えた6月の末、一部で崩落や水没が危惧されたため、航空写真測量を急遽敢行した。結果ことなきは得たものの、梅雨の長雨や台風の影響で、調査区が完全に水没してしまったことも一度や二度ではない。戸森松原遺跡が終了したことに伴い、7月からはIV区の調査に着手する。やはり浅間B軽石が全面に堆積しており、これの除去が主体となった。II～IV区ともに12月までにはすべての調査を終え、矢島南遺跡の調査へ移った。

平成6年度 深谷バイパス関係の整理作業最終年度。3遺跡の遺物復元と図面整理より着手し、6月からは遺物の実測、遺構のトレースを開始。9月～12月には遺物のトレースと写真撮影、原稿の執筆、図版類の版組みと編集を行なう。1月に入札。2月～3月の校正作業を経て、本書の刊行となる。



調査風景(森下遺跡6区)



第1図 森下・戸森松原・起会遺跡調査範囲

深谷バイパス関連遺跡調査工程

遺跡	発掘				整理						報告書	
	昭和59年度	60年度	61年度	62年度	63年度	平成元年度	2年度	3年度	4年度	5年度		6年度
原へ上敷免予備調査	■											
原	■											
明戸東 (F区)	■	■										
明戸東 (E区)	■	■										
新田裏	■	■										
新屋敷東	■	■										
本郷前東	■	■										
上敷免	■	■										
森下へ原ヶ谷予備調査	■											
森下	■											
戸森松原	■											
起会	■	■	■	■	■							
矢島南												
榑詰												
砂田前												
滝下												
原ヶ谷												

II 遺跡群の立地と環境

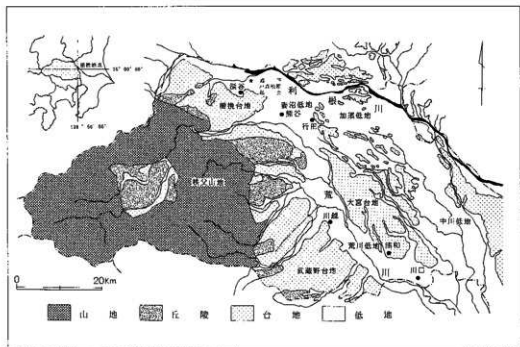
森下遺跡、戸森松原遺跡、起会遺跡は深谷市の北方、利根川に臨む妻沼低地上に立地している。この地域では深谷市をはじめ、隣接する熊谷市や妻沼町、岡部町の各教育委員会による発掘調査、さらには当事業団による深谷バイパス、上武道路、県道関係などの発掘調査が広範かつ頻繁に実施されている。したがって、本地域の自然環境や歴史環境についても、それぞれの調査報告書において繰り返し述べられている。

前章で触れたように、本書は深谷バイパス関係では最終の報告書となる。また、分岐して北へ延びる上武道路関係についても、本書と同時にすべての報告が完了する。

そこで、以下ではまとめの意味を含め、これらを大きな遺跡群として捉え、その特徴や特性を総合的に述べていくこととする。

1 立地

深谷バイパスはほぼ利根川に並走する東西方向の幹線道路で、熊谷市から深谷市を経て岡部町に達する。調査対象となったのは、西より岡部町原ヶ谷戸・滝下(村田 1993)、砂田前・榑詰(岩瀬 1991)、深谷市矢島南(西口 1994)、起会・戸森松原・森下(本書)、上敷免(瀧瀬・山本 1993)、本郷前東・新屋敷東(田中 1992)、新田裏・明戸東・原(磯崎 1989)の14遺跡である。

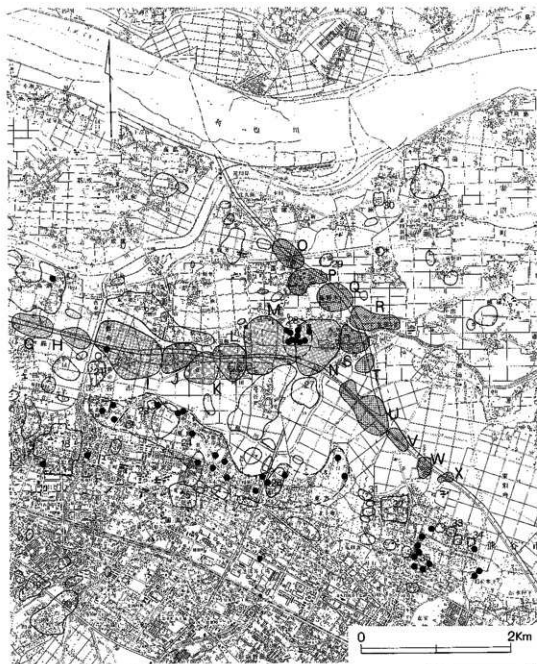


第2図 埼玉県の地形と遺跡群の位置



《深谷 B P 関連》	A. 原ヶ谷石遺跡	B. 滝下遺跡	C. 砂田前遺跡	D. 樋詰遺跡	E. 矢島河遺跡
F. 記念遺跡	G. 戸森村跡遺跡	H. 森下遺跡	I. 上敷免遺跡	J. 本郷前東遺跡	K. 新厚敷東遺跡
L. 新田裏遺跡	M. 明戸東遺跡	N. 原遺跡			
《上武道路関係》	O. ウツキ内遺跡	P. 砂田遺跡	Q. 柳町遺跡	R. 城北遺跡	S. 厩立遺跡
T. 前遺跡	U. 清水上遺跡	V. 根結遺跡	W. 柳間栗遺跡	X. 関下遺跡	

第3図 深谷バイパス・上武道路関連遺跡と周辺の主な遺跡



《周辺の遺跡》				
1. 六反田遺跡	2. 水窪遺跡	3. 西山古墳群	4. 千光寺古墳群	5. 川輪聖天塚古墳
6. 格山遺跡	7. 瀧瀬氏館跡	8. 四丁坂遺跡	9. 岡崎城跡	10. 中宿遺跡
11. 内山遺跡	12. 白山遺跡	13. 岡部六次太墓	14. 常福松原遺跡	15. 鳥之上遺跡
16. 前編遺跡	17. 深谷町遺跡	18. 深谷城跡	19. 香取山遺跡塚群	20. 小台遺跡
21. 黒沼城跡	22. 上敷免北遺跡	23. 船渡人部館跡	24. 木の本古墳群	25. 疋島城跡
26. 東方城跡	27. 東川原遺跡	28. 上増田古墳群	29. 速沼氏館跡	30. 佐原氏館跡
31. 西別府館跡	32. 西別府城跡	33. 別府氏館跡	34. 別府氏館跡	35. 東京府古墳群

(国土地理院発行 2万5千分の1地形図「深谷」本庄)



第4図 森下・戸森松原・起会遺跡の位置(迅速測図・深谷驛)

一方、上武道路は熊谷市の西端で深谷バイパスから分岐し、これより深谷市内を北西方向に延びるバイパスである。同様に、深谷市ウツギ内・砂田・柳町(鶴持 1993)、城北(山川 1995)、居立・前(岩瀬 1995)、清水上(大屋 1994)、熊谷市根絡・横間栗・関下(木戸 1995)の10遺跡が調査対象となった。

両者に伴う発掘調査の特色を一言で表わすならば、それは「深谷市を中心に長大なトレンチを設けて実施されたもの」、ということになろう。その結果は遺跡の立地状況ばかりではなく、周辺地形の解明にも大いに有効であった。特に原ヶ谷戸以外の遺跡はすべて、利根川の南岸に広がる妻沼低地内に展開しており、人々の低地部への進出、あるいはその開発過程を探るうえで絶好のフィールドとなった。原ヶ谷戸遺跡にしても、台地上となるのはごく一部分のみである。

「妻沼低地」は利根川によって形成された沖積低地の呼び名である。西南縁は比高差5m~10m程の崖線(深谷断層)によって、扇状地性のローム台地である櫛引台地と画され、北縁は利根川の奔流に限られている。また境界は明瞭でないが、東は加須低地、南東は荒川低地へと連続している。標高は東端の関下遺跡で約30m、西端の原ヶ谷戸遺跡の沖積面で約42mである。両遺跡間は10.5km隔たっており、勾配率にすれば0.1%あまりにしか過ぎない。これを雄弁に物語るかのように、低地全体には水田が広がり、県内有数の穀倉地帯を形成している。但し、冬季には地下水水位が極端に低下するため、低湿地的な環境とはなっていない。

もちろん、今日見られるような平坦な景観が不変のものであったわけではない。本来の地形的特徴は、河川による浸食や堆積作用、さらには開発に伴う人為的な削平などによって、厚く覆い隠されているのである。地質学の堀口万吉氏は原遺跡で遺構と地質の観察を行ない、「本地域は古墳時代以降に埋積されたものと推定」した(堀口ほか 1985)。本遺跡群の発掘調査では、低地内には後背湿地や旧流路、自然堤防の複雑に入り組んでいる様子が確認された。なかでも自然堤防の発達は顕著で、多くは旧流路に沿って細長い島状に形成されている。調査された集落跡のほとんどは、こうした自然堤防上に占地していた。

「土地分類基本調査 高崎・深谷」(埼玉県 1978)に記された妻沼低地の項によれば、「自然堤防地帯は表層土として黄~灰褐色、酸化沈殿物のない砂、泥が発達している。また、そこには集落が形成されている。後背湿地は灰色、酸化沈殿物のある泥質土が発達している。そのために、そこは水田耕作地として開けている。」とある。そこで、明治17・18年に測量された第一軍官地方迅速測図(旧参謀本部陸軍部測量局)から当時の河川、および水田や湿潤地部分を抜き出したものを作成してみた(第5図)。確かに水田は集落や畑地によって不定型に断続しており、おおよそかつての河川や後背湿地を示しているようである。なかには河川状に細長く形成されたものや、きれいにその蛇行が看取できる部分も認められる。蛇行をたどれば流路の復元もできそうであるが、詳細に見るとその方向や離合は複雑なものとなっている。こうしたことから、低地内ではいく筋もの中小河川が蛇行し、分岐と合流を繰り返していったものと推測される。河川に刻まれた地形は、かなり起伏に富んだものであったに違いない。いわば妻沼低地とは、かつては「乱流地帯」であったのである。

何か「低地」というと、湿潤で農耕に適した環境をイメージしやすいが、乱流地帯といえども水利に恵まれていたとはいいいきれない。古墳時代の集落跡である柳町遺跡と城北遺跡の間には埋没河川



第5図 明治17・18年当時の河川と水田分布(迅速測図「妻沼村」・「深谷驛」・「本庄驛」より)



があり、同時代の遺物を含む層が検出されている。この層を河底とすれば、柳町の集落部との比高差は2m以上となる。後世にあっても、利根川河畔に位置する中世のウツギ内遺跡では、150基にも及ぶ井戸が掘られ、江戸時代には農業用水である備前渠が開鑿されている。さらに、迅速潤園からも畑地の割合の高いことが読み取れる。思いのほか、土地の乾燥度は高かったのかもしれない。

乱流地帯であれば、時期的な水位の変化 一時には洪水— も当然あったであろう。しかし、本来は低平な可耕地が少なく、水の便も悪い土地であったと思われる。

2 妻沼低地における人々の足跡

深谷バイパスと上武道路関係24遺跡の時期は、縄文時代から中世にまで及んでいる。妻沼低地全体に目を転じてみても、この傾向は大きく変わるものではない。ここでは24遺跡の内容を中心に、各市・町教育委員会や、当事業団の関連遺跡の調査成果を加え、低地(乱流地帯という意味)への進出という視点から時代ごとに概観してみたい。

(1) 旧石器時代～縄文時代

妻沼低地内の遺跡では、旧石器時代～縄文時代早期にかけての遺構・遺物は未見である。原ヶ谷戸遺跡や本郷前東遺跡(深谷バイパス分ではなく、これに交差する県道の部分。川口 1989)では、縄文時代前期の土器片が少量出土しているが、集落跡とする確証は得られていない。中期についても同様で、遺跡数自体は飛躍的に増大する時期でありながらも、それらは櫛引台地の各谷筋から縁辺部にとどまっている。

低地内における人々の居住が明らかとなるのは、後期に至ってからである。明戸東遺跡では称名寺式期～堀之内式期の住居跡9軒、原遺跡では称名寺式期を中心とした土坑群と配石遺構、新屋敷東遺跡では堀之内式期～晩期の安行式期の住居跡8軒、それぞれが検出されている。このほか、台地から後背湿地にかけての緩斜面上ではあるが、原ヶ谷戸遺跡でも加曾利B式期～晩期の安行式期の住居跡10軒と土坑群が調査されている。また、遺構は伴わないものの、戸森松原遺跡では遺物包含層より加曾利B式の深鉢などが、上敷免遺跡では埋没流路より、堀之内式～晩期の安行式の多量の土器片や石器が出土している。

このように後期～晩期になると、遺跡は櫛引台地と妻沼低地の接線部から、さらには自然堤防上へと進出が始まる。その起因するところは、自然環境の変化に伴う生活形態の転換にあるのだろうが、ここでその内容を明らかにすることは困難である。

(2) 弥生時代

上敷免遺跡の埋没流路からは、上記のほかに縄文時代晩期最終末～弥生時代初頭にかけての土器片も数多く見いだされている。無文の粗製土器が大半だが、水神平系の条痕文を有する壺片、遠賀川式の壺片が認められることは特筆される。妻沼低地にも確実に弥生文化は波及し始めていたのである。同遺跡では、他にも中期中葉須和田式期の住居跡4軒、再葬墓2基(経間ほか 1978)が検出されている。

中期に関しては、飯塚南遺跡(荒川ほか 1981)でも再葬墓と住居跡4軒、関下遺跡で住居跡1軒

が確認されているほか、横間渠遺跡(金子 1988)では再葬墓13基が検出され注目を集めた。また、明戸東遺跡や樋詰遺跡で中期の遺物の出土が報告されている。但し、集落跡と再葬墓群は同じ須和田式期に位置づけられるとはいえ、併行関係にあるものではなく、再葬墓群のほうが先行するものである。

中期中葉の遺跡、特に集落跡は県内全体を見ても決して多いものではない。それが、嚙矢となった熊谷市から行田市にまたがる池上(中島 1984)・小敷田遺跡(吉田 1991)ははじめ、ほとんどは県北部の低地に営まれている。これは本格的な水稲耕作の伝播により、技術的伝統を踏襲したためであろうと考えられる。しかるに、次の中期後半には県内の遺跡数は激増するものの、集落跡は小さな谷を見下ろす台地上に移動し、低地内にはまったくといってよいほど営まれなくなる。このように、農耕社会が着実に進行しながらも、生産性の低い谷水田に依存せざるをえなくなったという状況は、初期の開拓者たちが獲得した技術をもってしても、乱流の地を墾することができなかったことに主因があるのではなかろうか。むしろ、そこには政治的、社会的要因も内在するのであろうが、自然環境の克服こそが農耕社会化の第一義であることは疑いがない。

この傾向は、後期になっても大きく進展するものではない。集落跡としては、明戸東遺跡が挙げられるにすぎない。吉ヶ谷式期の住居跡16軒、土坑6基などが検出されている。低地前面への進出はなお慎重であったのであろうか。

(3) 古墳時代

前期の五領式期になると、深谷バイパスと上武道路関係だけでも、横間渠遺跡・根結遺跡・清水上遺跡・明戸東遺跡・上敷免遺跡・戸森松原遺跡・矢島南遺跡といった集落跡の検出がある。これらは一見、急増かつ広範とも思える展開を示すが、位置的には低地内ながらも、いまだ南側の台地寄りに集中する傾向にある。とはいえ、東川端遺跡(瀧瀬 1990)で5基、上敷免遺跡で9基の方形周溝墓、清水上遺跡で畑跡の可能性が指摘される畝条遺構が検出されるなど、居住域・墓域・生産域が関連性を有して出現する事実は看過できない。

これが中期の和泉式期、それも後半になると集落は爆発的な増加と拡大現象を示し始め、後期の鬼高式期には最高潮を迎える。住居跡は24遺跡中16遺跡で確認されており、進出範囲もついに利根川河畔にまで達する。一遺跡あたりの分布密度は非常に高く、また重複も著しい。特に、上敷免遺跡から新屋敷東遺跡・本郷前東遺跡周辺、および3km程東方の砂田遺跡から柳町遺跡・城北遺跡・居立遺跡・前遺跡周辺では、蛇行する埋没河川に沿ってそれぞれ400軒以上が検出されている。

すべての住居が同時に軒を連ねていたわけではないとはいえ、これだけの集落が存在する状況、またそれを維持すべき必然性を考慮すれば、広く耕作の行なわれていたであろうことは想像に難くない。ところが、集落跡が広域で調査されているにもかかわらず、水田や灌漑施設といった生産にまつわる遺構は、樋詰遺跡で水路と思われる溝が報告されているのみで、ほかは一箇所も検出例がない。場所が限られ、遺存状態が悪いからとも考えられるが、前述のように、乱流地帯にあっては広大な耕地の獲得、安定した水の供給は達成されていなかったと見るほうが妥当のようである。

つまり、こうした集落跡のあり方は、小さな集団がよりよい耕地を求め、頻繁な移動を繰り返した結果と解釈することもできるのである。各集落には時期的な集合、離散の状況は看取されても、

完結した継続的な拡大の跡は認められない。住居跡の激しい重複も、可住地(=可耕地)が限られていたためにほかならない。それぞれの集落は、蛇行する埋没河川に面した自然堤防の縁辺に展開している。ということは、耕地はこの流路を利用した小規模な谷水田であったのかもしれない。移動の主たる原因としては、乱流地帯であるがゆえの災害、「洪水」による耕地や作物の損失が想起される。ただし堀口氏がいうように、古墳時代からこれらの河川が埋没し始めたとすれば、それに合わせるように、可耕地も次第に広がっていったことは充分考えられる。

水田跡や灌漑施設が未検出であることは既に触れたが、鋤などの木製農具は城北遺跡北縁の埋没河川から出土している。同遺跡からは牛馬の骨や歯の検出もあるが、馬は軍事的な価値も持ちうるもので、これをもって直ちに牛馬耕の普及を想定することは危険かもしれない。

一方、祭祀関係の遺構・遺物が数多く検出されたことも、集落の性格を検討するうえで重要である。起会遺跡(Ⅱ区)では河川に沿って並べられたように、鉢を中心とする40個体以上の土器が出土している。本郷前東遺跡では集落跡の北端、流路がやや湾状となった部分より、横楕形・剣形・有線の滑石製模造品、手捏ね土器などが見いだされている。さらに、同遺跡には集落内の一部に密集したピット群があり、これより滑石製の有孔円板・有線円板・馬形・勾玉が、坏の破片とともに出土している。横楕形・有線円板・馬形の滑石製模造品は、南西約3kmに所在する西別府祭祀遺跡(大場・小沢 1963)の例が有名である。これらは県内でも珍しい、というより現時点では両遺跡に限られている。城北遺跡では埋没河川が集落跡を取り囲むように検出されており、その肩部には5箇所の祭祀跡が点在していた。とりわけ中央部のは興味深く、大型・中型の壺や高坏などが据え置かれ、脇に200個体にも達する坏が数列、数段に積み重ねられていた。その上には降りかかったように滑石製の剣形品・勾玉・有孔円板・白玉が混入している。また、北縁で検出された木製の舟形模造品や、用途不明の加工材を含む土器群も注意を引く。このほか、上敷免遺跡では滑石製白玉の工房跡(澤出 1985)、特異な遺物としては同遺跡の滑石製子持勾玉(瀧瀬・山本 1993)がある。

ここで特徴的といえるのは、滑石製模造品などの祭祀遺物を伴う多量の土器が、埋没河川の縁辺部より見いだされていることである。これらが祭祀の場を示すか否かは定かでないが、「放置」されたものと「廃棄」されたものに二分できるようである。いずれにしても、水との強いかかわりを思わずにはいられない。馬形の模造品も従来より同様に解かれており、水霊信仰との関連が指摘されてきた。上記集落群が農耕を基盤としたこと、しかもそこが乱流地帯であったことからすれば、起居した人々は早乾に備えた安定した水の供給や、洪水からの回避を願わずにはいられなかったであろう。

墳墓についても近年明らかとはなりつつあるが、戸森松原遺跡の周溝墓群、上増田古墳群(澤出・古池 1991)、新ヶ谷戸遺跡(利根川 1982)が挙げられるにすぎない。台地上では岡部町方面に比較的多く存在し、深谷市では木の本古墳群(澤出 1991)が知られている。戸森松原遺跡以外の古墳群は、いずれも6世紀中葉から7世紀初頭頃に築造された、10基前後の小円墳からなっている。大型の前方後円墳は、5世紀末の熊谷市横塚山古墳(増田ほか 1971)のみで、深谷市一带には見当たらない。こうした状況を集落が大きく展開した原動力、と積極的に評価する向きもあるが(田中 前掲)、この地域の集団が生産性の低い谷水田に依拠していたことを勘案すれば、大型古墳の不在もあ

ながち不自然ではないのかもしれない。

(4) 奈良・平安時代

古墳時代後半の集落ではたびたび労働力の再編成が行なわれ、可耕地も河川の埋没による多少の増加があったとはいえ、ついに乱流地帯の克服にまでは至らなかった。その後も集落は引続き堅穴住居を主体にし、これに少数の掘立柱建物が増えてくる。立地はほぼ前代を踏襲しており、砂田前・矢島南・新屋敷東・明戸東・土敷免・柳町・前・居立・根絡の各遺跡に継続している。いずれも規模的には小さく、数軒から10軒前後である。

反而、ウツギ内・森下の両遺跡などはそれまでの集落跡との重複がなく、奈良・平安時代単独の居住域が認められる。こうした展開の背景に、律令という新たな国家体制のあることは否めないが、むしろ乱流地帯にあっては、環境の変化が大きな比重を占めていたといえよう。古墳時代からの河川埋没は平安時代までにはかなり進行し、既に起伏は緩やかなものとなっていたようである。事実、本郷前東遺跡ではかつての河川に黒色土が堆積し、広く水田に利用されていることが確認された。原々谷戸遺跡や森下遺跡でも水田跡、起会遺跡では床上げ田状遺構(Ⅱ区)や畝状遺構(Ⅳ区)の検出がある。一方、ウツギ内遺跡の集落は自然堤防を降り、利根川が形成した河成堆積層上に占地している。自然堤防は南側の砂田遺跡部分で終わっており、同遺跡から現利根川までは厚さ数メートルにもおよぶ砂層となっている。

自然堤防上の集落跡にしても、溝状遺構が多量に検出されるのはこの時期からである。なかには砂田前遺跡のように、集落を画すように巡るものも存在する。すべてが耕作にかかわるものではないにせよ、これは地下水位と居住面の比高差が接近していたことを示すものではなかろうか。

実態は明らかではないが、根絡遺跡から関下遺跡は別府条里、砂田前遺跡周辺は岡部条里、それぞれの遺構が推定されてきた地域内に所在する。条里制が実施されていたとすれば、乱流地帯も大規模な計画的開発を可能とする、低平な環境になりつつあったのであろう。最近、岡部町の中宿遺跡(鳥羽 1992)では7世紀末から8世紀代の掘立柱建物跡群が調査され、榛沢郡の正倉跡ではないかとの指摘を受けている。

なお、多くの遺跡には自然災害の跡も残されている。それは震度V以上の地震で形成されるといふ「噴砂」の亀裂と、浅間山を供給源とする「浅間B軽石」の堆積である。「噴砂」は弘仁9年(818)ないし元慶2年(878)の地震、「浅間B軽石」は天仁元年(1108)の噴出と考えられている。地震については直接の被害を被った住居跡などは検出されていないが、軽石は本郷前東遺跡の水田跡や起会遺跡の苗代状遺構を厚さ5cm程に覆っていた。これも風水による後の流れ込みかも知れず、その打撃のほどは明らかでない。しかし、環境の変化は耕地の拡大を可能なものとしつつありながらも、自然は人々の安住を拒むかのように、時として彼らに狂暴な牙を刺したのである。

(5) 中世

平安時代末期以降となると、この地域も中世武士団の活躍の舞台となる。主役は武蔵七党に代表される坂東武者達である。彼らは騎馬戦を得意とし、それぞれに所領を拡大していった。本地域でも蓮沼氏館・増田氏館・荏原氏館・高城城・東方城・別府館・西別府館といった城館が築かれていく。居立遺跡では増田氏館に関係すると思われる堀跡が検出されているほか、ウツギ内・砂田・柳

町・新田裏・新屋敷東・本郷前の各遺跡でも、数多くの遺構が調査されている。多くの場合、居住域は堀で囲まれ、素掘りの井戸を多く穿っている。なかには通水の痕跡が窺われる溝もあり、新屋敷東遺跡では水田跡とともに畑跡も検出されている。

乱流地帯もこのころには灌漑用施設が整備され、耕地もかなり広がっていたと考えられる。中世武士団もその獲得・安堵に奔走し、戦乱の世を活躍の舞台としたのである。しかし、畑跡や無数ともいえる井戸跡の存在は、妻沼低地内がなお湿潤とはならず、高燥な部分の多かったことを物語っている。

引用・参考文献

<深谷バイパス関係報告書>

- 磯崎 一 1989「新田裏・明戸東・原遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第85集
一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告—I—
- 岩瀬 譲 1991「樋詰・砂田前」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第102集
一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告—II—
- 田中広明 1992「新屋敷東・本郷前東」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第111集
一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告—III—
- 村田章人 1993「原ヶ谷戸・滝下」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第127集
一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告—IV—
- 瀧瀬芳之・山本 靖 1993「上敷免遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第128集
一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告—V—
- 飯持和夫 1995「森下・戸森松原・起会」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第148集
一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告—VI—
- 西口正純 1994「矢島南遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第149集
一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告—VII—

<上武道路関係報告書>

- 飯持和夫 1993「ウツギ内・砂田・柳町」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第126集
一般国道17号上武道路関係埋蔵文化財発掘調査報告—I—
- 山川守男 1995「城北遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第150集
一般国道17号上武道路関係埋蔵文化財発掘調査報告—II—
- 岩瀬 譲 1995「前・居立」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第151集
一般国道17号上武道路関係埋蔵文化財発掘調査報告—III—
- 大屋道則 1994「清水上遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第152集
一般国道17号上武道路関係埋蔵文化財発掘調査報告—IV—
- 木戸春夫 1995「根絡・横間栗・関下」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第153集
一般国道17号上武道路関係埋蔵文化財発掘調査報告—V—

<その他報告書等>

- 荒川 弘ほか 1981「妻沼西南遺跡群Ⅰ—道ヶ谷戸条里・道ヶ谷戸・飯塚南」
妻沼町埋蔵文化財調査報告 第1集 大里郡妻沼町教育委員会
- 大場 賢雄・小沢国平 1963「新発見の祭祀遺跡」『史迹と美術』第338号
- 金子正之 1988「熊谷市横間栗遺跡の調査(第2次)」『第21回 遺跡発掘調査報告会発表要旨』
埼玉考古学会・埼玉会館・(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団・埼玉県教育委員会
- 川口 潤 1988「本郷前東遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第78集
- 松丸國照ほか 1978「土地分類基本調査」高崎・深谷(埼玉県内) 埼玉県
- 澤出見越 1985「上敷免遺跡(第2次)・上敷免北遺跡」深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第11集
深谷市教育委員会
- 澤出見越 1991「深谷市内遺跡Ⅲ」深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第28集 深谷市教育委員会
- 澤出見越・古池晋祿1991「明戸南部遺跡群Ⅰ」深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第29集
深谷市教育委員会
- 瀧瀬芳之 1990「東川端遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第94集
- 利根川章彦 1982「新ヶ谷戸」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第9集
- 鳥羽政之 1992「岡部町中宿遺跡の調査」『第25回 遺跡発掘調査報告会発表要旨』
埼玉考古学会・埼玉会館・(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団・埼玉県教育委員会
- 中島 宏 1984「池守・池上」埼玉県教育委員会
- 姪間真一ほか 1978「上敷免遺跡」深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 深谷市教育委員会
- 堀口万吉ほか 1985「埼玉県深谷バイパス遺跡で発見された古代の“噴砂”について」『埼玉大学教養部紀要(自然科学編)』第21巻
- 増田逸朗ほか 1971「横塚山古墳—後円部周溝の調査—」埼玉県遺跡調査会報告第9集
埼玉県遺跡調査会
- 吉田 稔 1991「小敷田遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第95集

III 森下遺跡の調査

1 遺跡の概要

森下遺跡はJR高崎線、深谷駅の北方約2.4kmに所在する。利根川までは約3.0kmを隔て、東は上敷免遺跡、西は戸森松原遺跡とそれぞれ接している。地形図上での位置は、およそ北緯36°12'34"、東経139°17'30"である。標高は約34mを測り、西から東へわずかに傾斜している。調査前の地目は周囲を含め、全面が水田であった。

調査対象面積は15,990㎡であるが、全長360m、幅45mと狭長であるため、調査はこの範囲を6区画に分割して行なった(第6図)。地形的には1区と6区が自然堤防状の微高地、中央の2区から5区が浅い谷状の窪地(氾濫原)となっている。表土は30cm~40cm程の耕作土一枚のみで、1区と6区の遺構確認面は一樣に平坦となっている。これは後世、水田化に伴う削平を受けたためと思われる。以下、各区ごとの概要について記す。

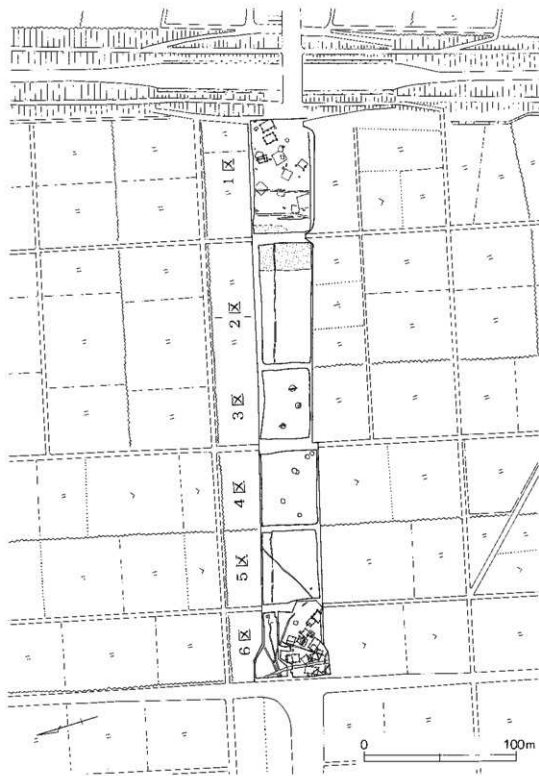
1区は調査区の東端に位置し、上敷免遺跡とは明治時代に開鑿された唐沢川をもって境をなしている。開鑿以前に測量された旧陸軍の迅速測図では、この部分に旧河道を思わせる水田が見られることから、1区は独立した微高地であったように見受けられる。削平はかなり激しく、遺構の残存状態はあまり良好なものとはいえない。また、本来的か否かは定かではないが、東半部の確認面は砂層であり、粘質土(シルト)層は認められなかった。西端から2区の東端には埋没した河川が存在する。

検出された遺構は古墳時代(和泉式期)の住居跡8軒、奈良・平安時代の掘立柱建物跡3棟、埋壙2基、中世の井戸跡1基、土坑22基、中近世溝4条、などである。住居跡のうち7軒はほぼ同一時期のもので、1軒の大型住居跡と、これを取り囲むような形で小型の住居跡が展開している。いずれも地床炉を備え、重複はない。第7号住居跡はこれらのうちの1軒を切断しており、時期的には後続するものである。火災により焼失し、床面上からは多量の土器が出土している。また、不完全ながらもカマドを備えているが、これは深谷市域においては初現的なものに位置づけられる。

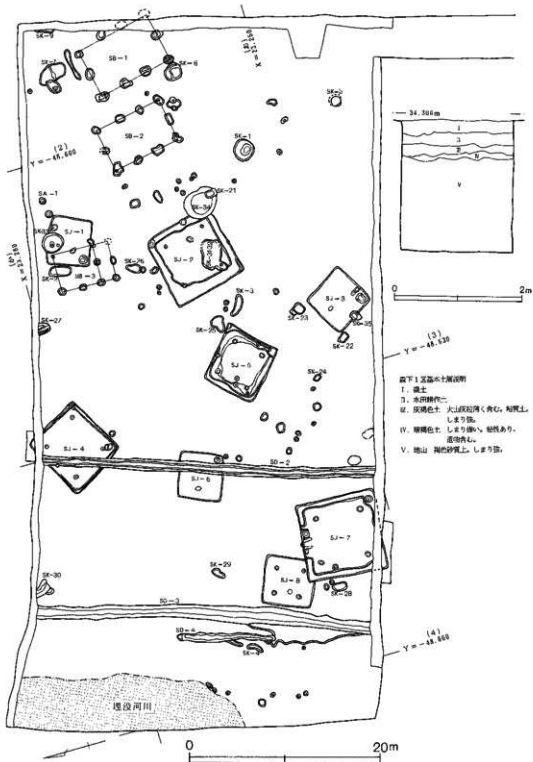
2区から5区は窪地であったため、広範にわたって浅間B軽石の堆積が認められた。3区ではその直下から、畦畔と思しき帯状の高まりが検出された。他の遺構は2区で縄文時代と考えられる土坑2基、3区および4区で時期不明の風倒木痕、5区で6区から延びる奈良・平安時代の溝1条が挙げられるにすぎない。

6区は西端部の調査区で、中央から北に向かって緩く傾斜している。北西は谷状の落ち込みとなっており、遺構は南半部に集中している。奈良・平安時代の住居跡4軒、掘立柱建物跡14棟のほか、溝4条、土坑10基の検出がある。住居跡の方向はおおよそ揃っているが、カマドの位置は東が3軒、北と南が各1軒とまちまちである。うち1軒は拡張住居である。掘立柱建物跡は南北棟が大半であり、方向は住居跡と並行するものと、東へ振れるものとの二者が見られる。

森下遺跡では1区と6区、すなわち東西両端に遺構が集中し、中間は無遺構帯といってもよい窪地である。時期的にも異なっており、本来は別の遺跡と捉えるべきものかもしれない。



第6図 森下遺跡調査区と周辺の地形



第7図 森下遺跡1区全体図

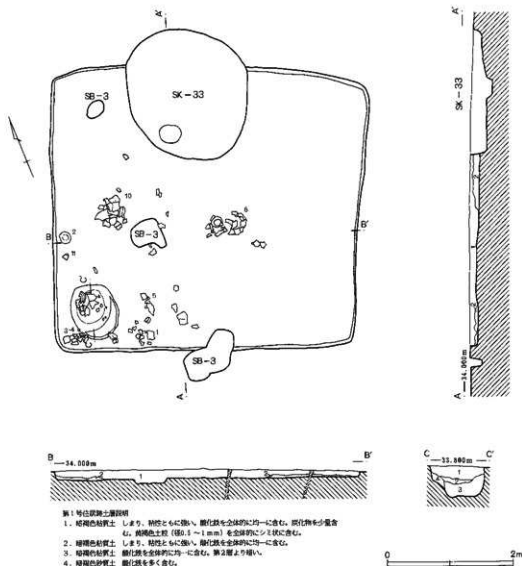
2 検出された遺構と遺物

(1) 1区

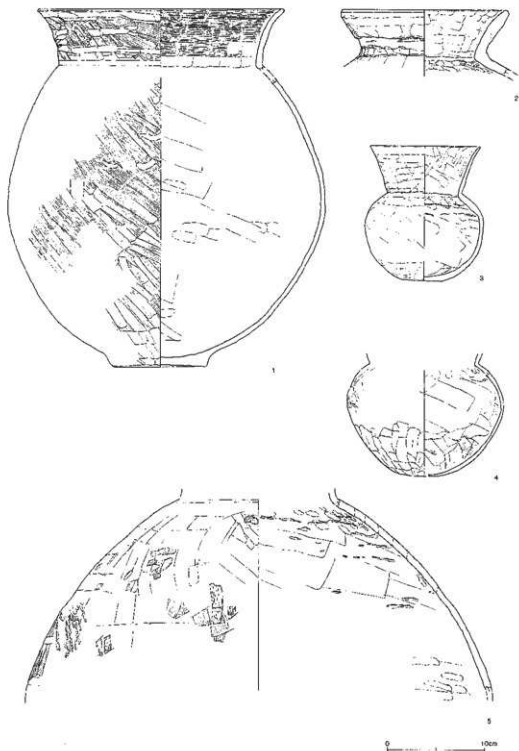
第1号住居跡(第8図)

おー2-22グリッドを中心に位置する。北壁中央部を第33号土坑に切断されるほか、第3号掘立柱建物跡の柱穴が床面を穿っている。全体は長方形で、東西5.00m×南北4.45m、面積約22.3m²を測る。主軸の方向はおよそN-20°-Eである。

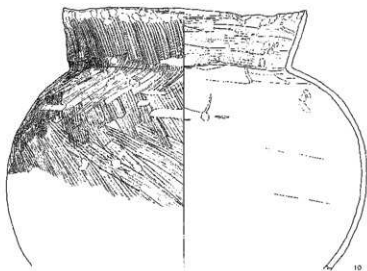
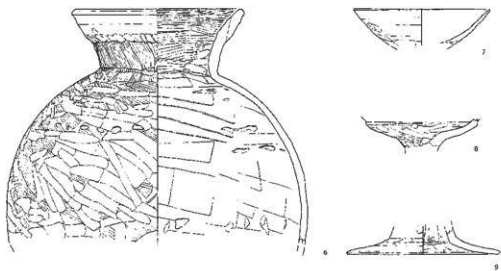
遺構確認面から床面までの深さは約15cmで、壁はほぼ垂直に掘り込まれる。床面は概ね平坦で、全体に硬く踏みしまっている。



第8図 1区第1号住居跡



第9図 1区第1号住居跡出土遺物(1)



第10图 1区第1号住居跡出土遺物(2)

第1号住居跡出土遺物(第9・10図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	26.0	27.0	9.8	WW'B'	B	褐	70	No.2 貯蔵穴
2	壺	17.6	(7.1)	—	WW'B'	B	橙	口縁	No.19
3	小型壺	11.4	14.1	4.5	WW'B'	B	橙	90	No.1
4	小型壺	—	(11.1)	3.5	W'B'R	B	橙	60	No.1 底部丸底状
5	壺	—	(20.0)	—	WW'B'R	B	橙	40	No.3・4・5・7・8・9・11 貯蔵穴
6	壺	18.2	(24.4)	—	WW'B'	B	明黄褐	50	No.16
7	高坏	(14.4)	(3.8)	—	WW'B'	B	橙	25	覆土 口縁片
8	高坏	—	(3.1)	—	WW'B'	B	橙	—	覆土 坏部底片
9	高坏	—	(3.0)	(16.2)	W'B'R	B	橙	30	覆土 脚部片
10	甕	25.2	(27.9)	—	WW'B'R	B	黄橙	40	No.20 台付甕か
11	台付壺	—	(6.9)	10.5	W'B'R	B	にぶい黄橙	80	No.18 脚部片

炉跡は、住居跡の中央部からやや北に寄って設けられている。円形の床地炉と思われるが、第33号土坑に切られ、残存するのは赤焼した底面のみであった。

貯蔵穴は南西の隅部に備わる。平面は70cm×60cmの楕円形、横断面は深さ46cmの箱形となる。底面は平坦で、東側に一段浅い張り出しを有する。

柱穴と壁溝については、床面を慎重に精査したが、まったく検出することはできなかった。

遺物は住居跡の南西部、特に貯蔵穴とその周囲に集中して出土している。貯蔵穴の壺(第9図1)が覆土中からであるほかは、いずれも床面直上から押し潰されたような状態で見いだされている。住居跡の南西隅部に小型壺(3)、中央部に壺(第10図6)、西壁寄りに大型甕(10)などである。

第2号住居跡(第11図)

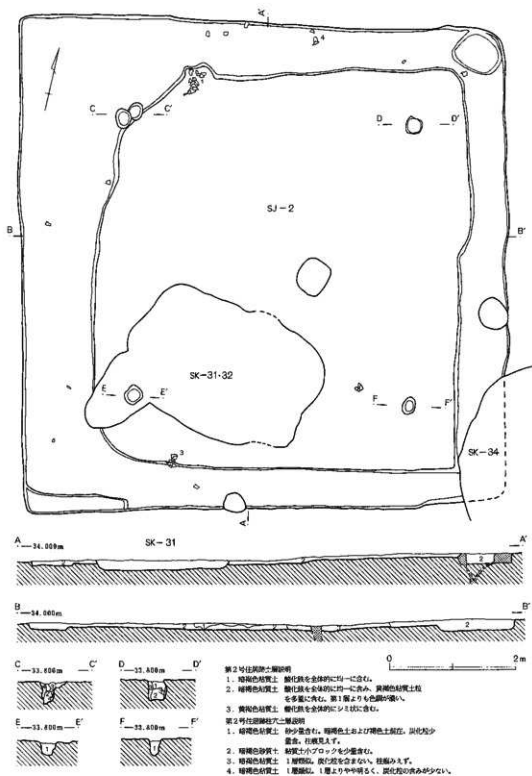
第1号住居跡の南西、お一2—13グリッドを中心に位置する。同跡とは中心間で約13mを隔てている。住居跡内に第31・32号土坑が重複して掘り込まれているほか、南東隅部は第34号土坑(井戸跡)に切断される。さらに、本跡は著しい削平を受けており、確認面は既に大部分が床面となっていた。このため、図示したものは住居跡の掘り方である。平面はきれいな方形を呈し、隅部はほぼ直角をなす。軸長7.70m×7.80m、面積約60㎡を測る。方位はおよそN—13°—Wである。

覆土もそのほとんどを失っていたが、北西部には焼土や炭化材が多く残存していた。焼失住居跡の可能性がある。床面は全体的に硬く踏みしまり、凹凸はないものの、中央部へ向けてわずかに傾斜している。掘り方は壁溝状に全周し、西半部で広がっている。およそ幅65cm、床面からの深さ10cm～15cmである。

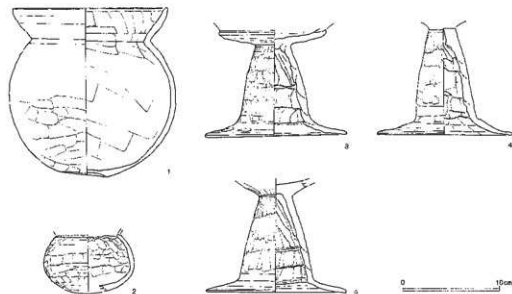
炉跡はやはり削平されたものと思われ、検出することはできなかった。掘り方の精査に際し、北東隅部で土坑状の掘り込みを確認した。底面まではさほど深くなく、開口していた様子も見られないことから、貯蔵穴と判断するには至らなかった。

柱穴は住居の対角線上に4本—北東のものは2本の重複ではなく、東側が段状の張り出しとなっている。—検出された。柱穴間は東西、南北ともに約4.40mである。直径と深さはいずれも30cm程度で、柱痕は観察されなかった。

遺物の遺存もきわめて少なく、壺(第12図1)や高坏の脚(3～5)が床面上から出土したほかは、掘り方の充填土に小片がわず含まれていたのみである。



第11図 1区第2号住居跡



第12図 1区第2号住居跡出土遺物

第2号住居跡出土遺物(第12図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	施	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	(16.2)	17.5	3.5	WW'B'	B	明赤褐	70	No11
2	罎	—	(6.0)	—	W'B'	A	橙	40	覆土
3	高坏	—	(11.2)	(14.8)	WW'B'	B	橙	60	No17
4	高坏	—	(11.4)	(14.4)	WW'B'	B	橙	30	No7
5	高坏	—	(11.9)	(15.2)	W'B'R	B	橙	40	No2

第3号住居跡(第14図)

えー2—24グリッドを中心に位置する。第2号住居跡からは南西へ約15m離れている。西壁を第35号土坑に切断されるほか、南北に走る噴砂の亀裂が壁や床を分断している。全体はほぼ方形であるが、東壁がやや短く台形気味となる。軸長は東西5.00m×南北4.90m、面積は約24.5㎡を測る。主軸方向はおよそN—31°—Wを指す。

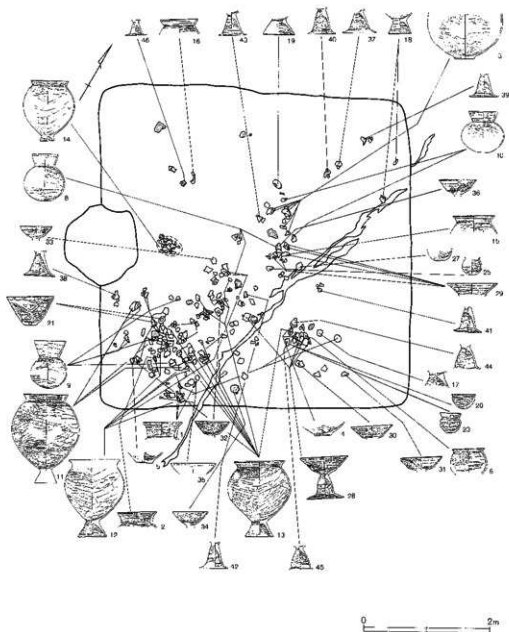
床面は概ね平坦なもの中央部はいくぶん高まり、かつ東側よりも西側がやや低くなっている。確認面からは15cm～25cmである。硬度的には南半部が硬く、特に南西の貯蔵穴周囲はこれが顕著である。

炉跡は住居跡中央、北壁寄りに設けられる。遺存状態は悪く、ほとんど焼土面として認められたにすぎない。

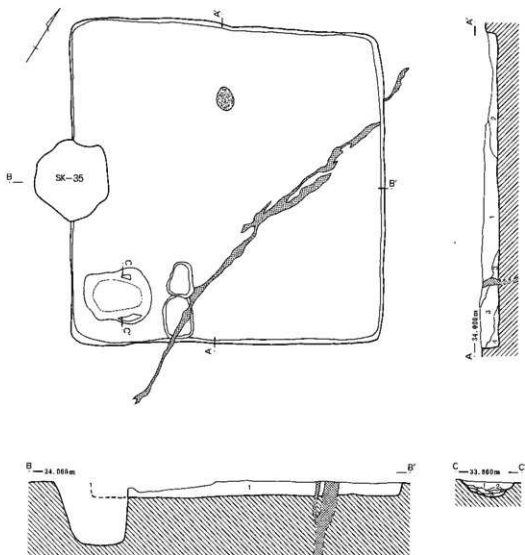
貯蔵穴は南西隅部に検出され、平面は0.75m×1.10mの楕円形、横断面は深さ20cm程の丸底形である。柱穴、および壁溝は検出されなかった。

遺物は南西部を中心に多量に出土している。大半は破片となっており、量の割には図示できたものが限られる。床面直上からの出土は複合口縁の壺片(第15図1)、高坏(27・29・31・38・40・41

・42)のみであり、他はすべて覆土の中位からである。これらに特異な遺物や出土状態は認められないが、半存体以下のものが多量に、しかも覆土の同一レベル上から見いだされている点は注意される。



第13図 1区第3号住居跡遺物出土状態

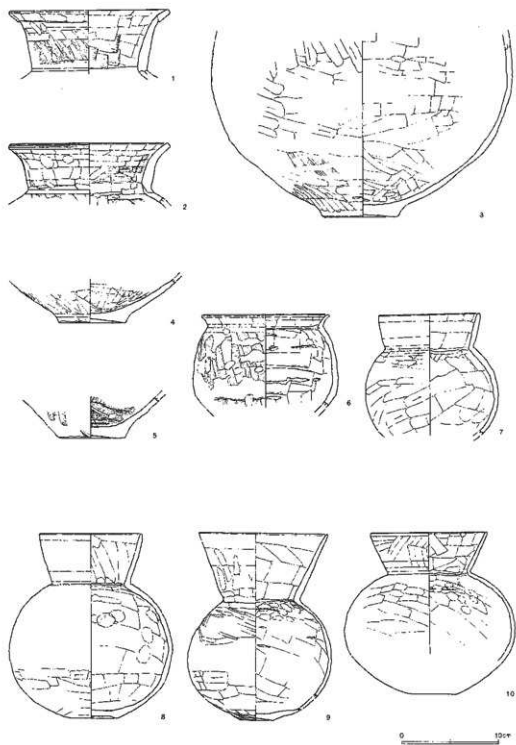


第3号住居跡土層説明

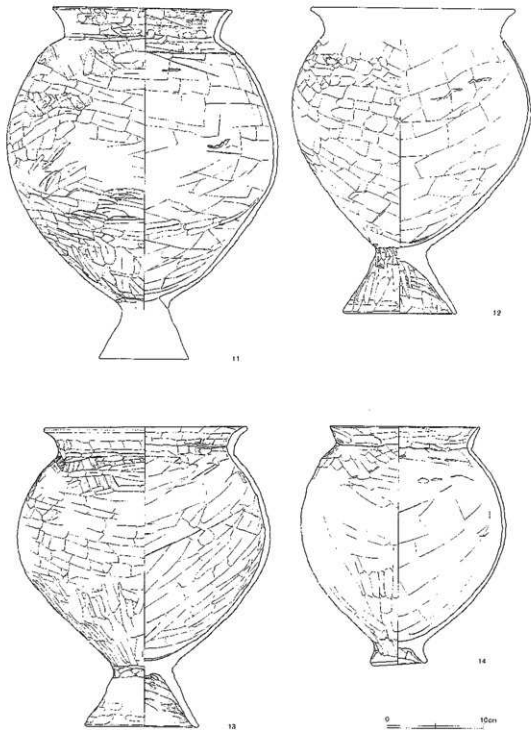
1. 暗褐色粘質土 しまり、粘性ともに強い。酸化鉄および腐植性土層（厚0.5～1mm）を全体的に均一に含み、炭化物粒、焼土粒（共に厚0.3～1mm）を多く含む。
2. 暗褐色粘質土 炭化物、焼土土層の層。
3. 暗褐色粘質土 しまり、粘性共に強い。黄褐色土層（厚0.5～1mm）を少量含む。
4. 暗褐色粘質土 しまり、粘性共に強い。第3層より弱い。

0 2m

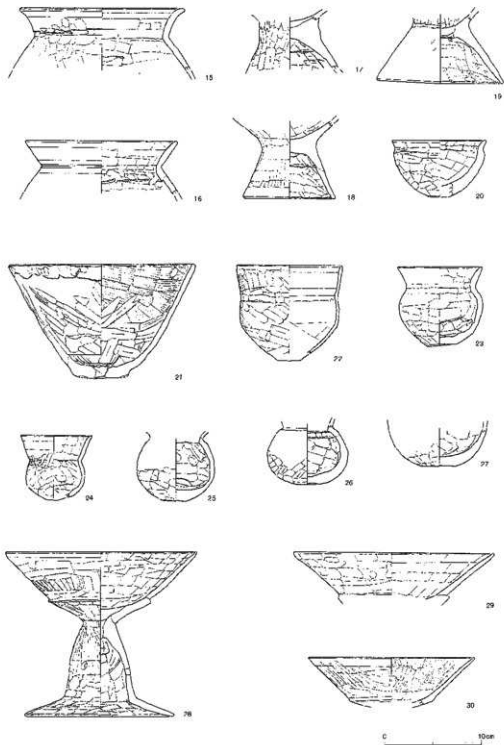
第14図 1区第3号住居跡



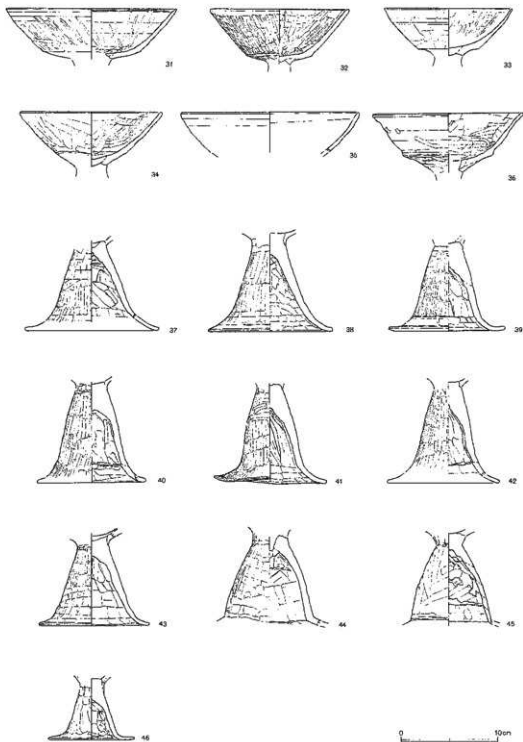
第15图 1区第3号住居跡出土遺物(1)



第16图 1区第3号住居跡出土遺物(2)



第17图 1区第3号住居跡出土遺物(3)



第18图 1区第3号住居跡出土遺物(4)

第3号住居跡出土遺物(第15~18区)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	敷	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	(17.0)	(6.7)	-	WW'B'	B	橙	-	No34-36-38 口縁片
2	壺	(17.0)	(6.4)	-	WW'BB'	B	にぶい橙	-	No126 口縁25%残
3	壺	-	(18.5)	7.6	WW'B'R	B	浅黄橙	20	No98-101~103-107
4	壺	-	(4.7)	7.2	WW'R	A	赤褐	-	No10 底部片
5	壺	-	(4.4)	6.9	WB'	B	にぶい黄橙	-	No120 底部片
6	小型壺	(13.6)	(9.8)	-	WW'B	B	明赤褐	20	No13 広口
7	小型壺	10.4	(12.5)	-	砂W	C	明褐	65	覆土一括
8	壺	(13.0)	19.4	4.6	B'W'砂	C	にぶい橙	65	No189 床直上
9	壺	13.6	19.6	3.2	WW'BR	B	橙	75	No49-122-133-142-157-161
10	壺	(12.2)	(12.7)	-	WW'B'R	B	赤褐	20	No97-104
11	台付甕	(18.8)	(31.6)	-	WW'BR	B	にぶい黄橙	45	No28-30-31-45-76-125-144~148
12	台付壺	-	(28.6)	(12.0)	W'B'B	B	褐	70	No4-8-32-33-47-56-81-127-128
13	台付壺	21.4	31.3	11.7	WW'砂	B	明褐	90	No18-48-50-51-68~71-74-82-120
14	台付壺	15.3	24.9	6.2	砂W'	B	黒褐	85	No172
15	壺	(17.4)	(6.6)	-	WW'R	B	橙	-	No93 口縁25%残
16	壺	(16.0)	(5.5)	-	WW'B	B	橙	-	No177 口縁30%残
17	台付壺	-	(5.4)	-	WW'B'	B	明赤褐	-	No21 脚部片 磨耗顯著
18	台付壺	-	(8.1)	9.8	WW'B'	B	橙	-	No185-186 脚部95%残
19	台付壺	-	(7.3)	13.4	WW'B'	B	明黄褐	-	No106 脚部100%残 磨耗顯著
20	甕	10.0	(6.0)	-	WW'B'	A	橙	40	No10
21	甕	19.8	11.9	5.0	砂WW'B'	B	橙	100	No149 孔径1.0
22	甕	(11.2)	(9.2)	-	W'BB'	C	にぶい橙	20	覆土
23	甕	8.9	8.2	3.1	WW'R	C	浅黄橙	100	覆土 磨耗顯著
24	甕	7.4	(6.8)	-	W'B'	B	浅黄橙	70	覆土
25	甕	-	(6.5)	2.4	WW'R	B	橙	-	No85 胴部40%残
26	甕	-	(6.3)	2.3	WW'	C	にぶい橙	-	No11 胴部50%残 磨耗顯著
27	甕	-	(4.0)	3.5	B'R	B	橙	30	覆土
28	高坏	20.2	17.1	16.0	WW'B'	A	赤橙	100	No8-12-13-15-64-65
29	高坏	21.0	(4.5)	-	WW'B'	B	明赤褐	-	No88-89-92~94 坏部100%
30	高坏	17.6	(5.0)	-	W'B'R	B	浅黄橙	-	No5 坏部50%残 磨耗顯著
31	高坏	(18.0)	(5.3)	-	W'B'	B	にぶい褐	-	No1 坏部30%残
32	高坏	(14.6)	(5.8)	-	W'B'	B	にぶい黄橙	-	No66 坏部30%残
33	高坏	(13.6)	(4.9)	-	WW'B'	B	明赤褐	-	No167 坏部50%残 内面刺落
34	高坏	(15.2)	(5.8)	-	WW'砂	C	橙	-	No26 坏部70%残 磨耗顯著
35	高坏	19.0	(4.2)	-	WW'R	C	橙	-	No33~36-41 坏部40%残
36	高坏	(16.0)	(6.2)	-	WW'R	B	橙	-	No91 坏部30%残 外面磨耗
37	高坏	-	(6.6)	-	WW'	B	明赤褐	-	No184 脚部70%残
38	高坏	-	(10.4)	13.2	WW'B'	B	にぶい橙	-	No175 脚部70%残
39	高坏	-	(9.3)	(12.6)	WW'B'	B	赤褐	-	No187 脚部70%残
40	高坏	-	(10.3)	-	WW'B'R	B	明赤褐	-	No183 脚部50%残
41	高坏	-	(10.4)	12.0	WW'B'	B	明赤褐	-	No22 脚部90%残
42	高坏	-	(9.9)	-	W'B'R	B	黄橙	-	No79 脚部60%残
43	高坏	-	(9.6)	(12.2)	WW'B'R	B	明赤褐	-	No110 脚部75%残
44	高坏	-	(9.3)	-	WW'	B	橙	-	No194 脚部65%残
45	高坏	-	(9.6)	-	WW'R	B	明赤褐	-	No6 脚部50%残
46	高坏	-	(6.4)	(9.0)	WW'B'	B	橙	-	No178 脚部55%残 磨耗顯著

第4号住居跡(第19・20図)

おー3ー25グリッドを中心に位置する。東方の第1号住居跡とは約22m、西方の埋没河川とは約24mを隔てる。西部を第2号溝によって分断されるに加え、事前に掘鑿した排水用側溝によって北隅を損壊してしまった。全体は長方形で、四壁の掘り込みは直線的である。軸長7.40m×6.50m、面積約41.8m²を測る。主軸方向は第3号住居跡と同じく、およそN-31°-Wを指す。

床面は概ね平坦で、やや壁際が浅くなっている。とりわけ硬化した部分は見られないが、比較的良好に踏みしめている。遺構確認面からは25cmの深さを有する。

急角度で立ち上がる壁には壁溝を伴う。北壁の東半を欠くものの、幅約20cm、深さ約5cmできれいに巡る。

炉跡は確認できなかった。第2号溝により破壊されたものと考えれば、中央部の北壁寄りの設営が想定される。

柱穴は対角線上に4本が検出されている。いずれも住居跡の隅部に近く、南北間が約4.10m、東西間が約4.50mである。直径30cm、深さ40cm～60cm程で、断面観察では各々に柱痕が確認されている。これより推定される柱の太さは約10cmとなる。

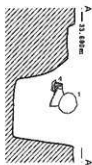
貯蔵穴は南隅の壁溝内側に穿たれる。50cm×60cmの楕円形で、柱穴寄りに浅いテラスを有する。横断面は箱形となり、底面はほぼ平坦である。

遺物は貯蔵穴の覆土中より、口縁を下に向けた状態で完形の壺(第21図1)、埴(4)、碗(10)、高坏(13・15・17・18)が出土している。このほか、貯蔵穴の脇からは完形の高坏(12・14)、南壁の壁溝からは碗(11)や小型壺(8)などの出土もあった。なお、覆土中ながら特筆されるものとして管玉(19)の出土が挙げられる。長さ2.8cm、直径0.8cm、孔径2.5mmの小型品である。



第4号住居跡断面穴土層説明

1. 暗褐色粘質土 しまり、粘性ともに強く、酸化鉄を全体的に均一に含む。また、黄褐色粘質土のブロック(径0.5～1cm)をシニ状に多量に含む。炭化灰を2点(即中)含む。
2. 暗褐色粘質土 しまり、粘性ともに強く、酸化鉄を全体的に均一に含む。また、黄褐色粘質土のブロック(径3～5mm)を少量含む。
3. 黄褐色粘質土 しまり、粘性ともに強く、酸化鉄を全体的に均一に含む。

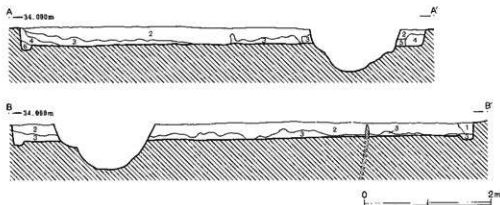
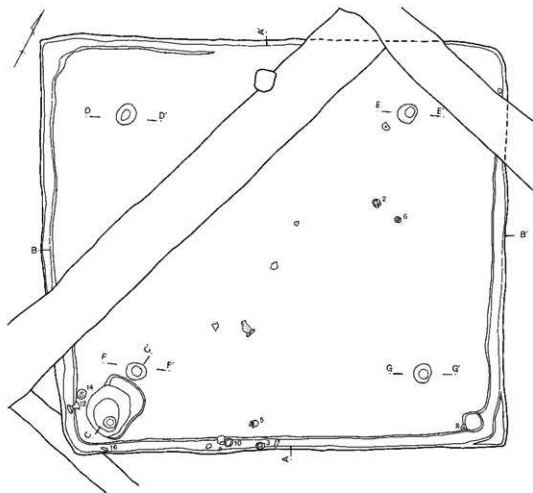


第4号住居跡柱穴断面説明

1. 暗褐色粘質土 しまり強。粘性あり。酸化鉄。地上粒少量含む。柱痕。
2. 褐色砂質土 しまりあり。粘性なし。暗褐色粘質土ブロック(径1～2cm)を塊状に含む。
3. 暗褐色粘質土 しまり。粘性あり。砂粒多量。炭化灰。



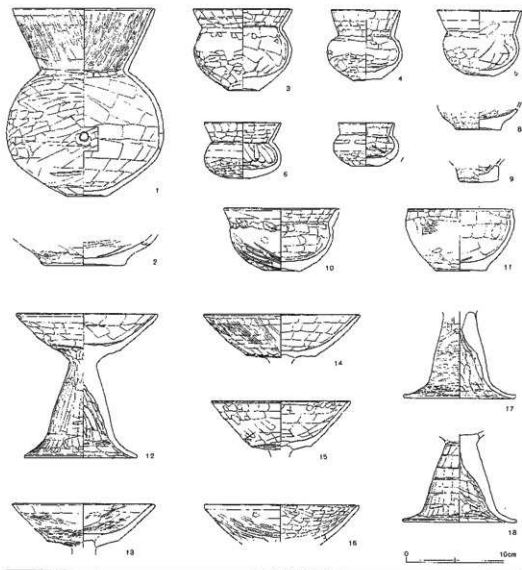
第19図 1区第4号住居跡(1)



第4号住居跡十層説明

- | | |
|--|---|
| <p>1. 暗褐色土 粘性、しまり強。暗黄褐色土ブロック含む。</p> <p>2. 暗褐色土 粘性、しまり強。暗黄褐色土塊含む。若干灰色を帯び、2層より軽い。</p> <p>3. 暗黄褐色土 粘性、しまり強。暗黄褐色、黄褐色土層に、砂粒多。</p> | <p>4. 暗褐色土 粘性、しまりあり。炭化塊、焼土粒少量。</p> <p>5. 黄褐色土ブロック 粘性強、しまりあり。暗褐色土をわずかに含む。</p> <p>6. 暗黄褐色土 粘性、しまりあり。3層類似。3層より軽。</p> |
|--|---|

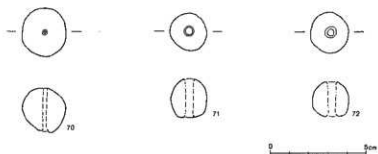
第20図 1区第4号住居跡(2)



SJ-4



SJ-7



第21图 1区第4号・7号住居跡出土遺物

第4号住居跡出土遺物(第21図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	14.5	19.6	4.0	WW'R	A	暗赤褐	100	貯蔵穴 胴部に穿孔
2	壺	-	(2.6)	8.5	WW'B'R	A	褐	-	No18 底部片
3	小型壺	10.3	8.6	3.2	W'B'R	B	赤褐	95	No9
4	埴	7.2	7.4	2.6	WW'B'	B	赤褐	95	貯蔵穴
5	埴	8.8	6.8	2.6	WW'R	C	橙	70	No11 磨耗顕著
6	埴	8.1	5.9	-	WW'R	B	明赤褐	95	No17 丸底
7	小型壺	(4.6)	(4.6)	(2.8)	WW'B'	B	明褐	40	覆土 ミニチュア
8	小型壺	-	(2.4)	4.6	WW'B'	A	明赤褐	-	No18 底部片
9	?	-	(1.9)	2.0	W'B'	A	橙	-	貯蔵穴 底部片 ミニチュアか
10	碗	12.3	6.5	3.6	WW'B'	B	明赤褐	100	No8 外面へう傷あり
11	碗	11.6	6.5	5.1	WW'B'R	B	明赤褐	55	貯蔵穴
12	高坏	15.0	15.1	11.6	WW'B'R	A	橙	100	No2
13	高坏	(15.0)	(4.6)	-	WW'B'R	B	明赤褐	-	貯蔵穴 坏部55%残
14	高坏	16.5	(4.6)	-	WW'B'R	B	赤褐	-	No3 坏部完存
15	高坏	14.6	(5.1)	-	WW'B'R	B	明赤褐	-	貯蔵穴 坏部65%残 磨耗顕著
16	高坏	(16.4)	(3.9)	-	WW'B'	A	赤褐	-	No1 口縁片
17	高坏	-	(9.0)	(11.8)	WW'B'R	B	明赤褐	-	貯蔵穴 13と同一個体か
18	高坏	-	(9.2)	(12.0)	WW'R	B	赤褐	-	覆土 脚部70%残

第5号住居跡(第22図)

第2号住居跡の西側約12m、おー2—10グリッドを中心に位置する。平面は南北に長い長方形ながらも、東隅を噴砂の亀裂で切断されるため、この部分がわずかに歪んでいる。隅部は他の住居跡に比して、やや丸味を有している。また、本跡は床面以下にまでおよぶ削平を受けており、覆土・壁・床面の状態はまったく観察できなかった。ここで図示したものは、掘り方の状態である。軸長は6.20m×5.80m、面積は約36.0㎡を測る。主軸方向はおよそN-45'-Wを指す。

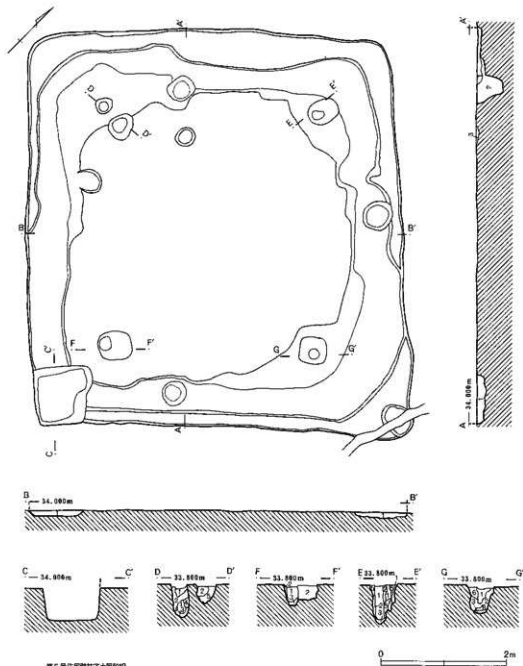
炉跡も炉床までほとんど削られており、痕跡となった焼土面の存在によって、その位置が確認されたにすぎない。おそらくは円形の地床炉となるものであろう。現状では直径約30cm、赤焼部の厚さ3cmである。中央部からは北西に寄って設けられている。

柱穴は住居跡の対角線上に主柱となる4本、および主軸線上の両壁寄りに各1本、東西両壁下の中央部に各1本、東隅部に1本が検出されている。主柱の4本は東隅のものが直径約25cm、他は約50cmで、深さは35cm～60cm程である。柱穴間は南北が約3.80m、東西が約3.35mである。柱痕から推定される柱の太さは約15cmとなる。なお、東隅の柱穴脇のものは浅く、建て替えてはく支柱かと思われる。主柱以外のものはいずれも深さ20cm以下である。

貯蔵穴は南隅に備わる。平面は80cm×90cmの長方形で、横断面は深さ50cm程の箱形を呈する。底面は平坦で、柱穴側がいくぶん突出している。

掘り方は床面中央部を掘り残し、幅広の壁溝状に巡っている。深さは10cm前後である。

遺物は貯蔵穴覆土中より台付壺(第23図1)、碗(2)が出土したのみであった。



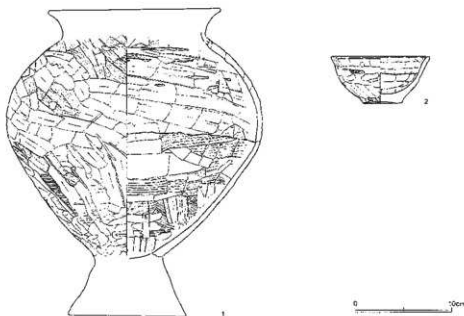
第5号住居跡柱土層説明

1. 暗褐色粘質土 しまり強、粘性あり、性質。
2. 褐色砂質土 しまり強、粘性なし、暗褐色粘質土ブロック（厚1~2cm）含む。
3. 灰白色粘土
4. 暗褐色粘質土 1層類似、明るい。
5. 褐色砂質土 土山に引るがわずかに粘性あり。
6. 暗褐色粘質土 2層に比して粘質土の混入多い。

第5号住居跡土層説明

1. 暗褐色土 粘土質、土山の暗褐色土を含む、しまり、粘性あり。
2. 灰褐色土 粘土質、土山の暗褐色土を含む、しまり、粘性あり。
3. 暗褐色土 塊土、炭化物を含む、多。

第22図 1区第5号住居跡



第23図 1区第5号住居跡出土遺物

第5号住居跡出土遺物(第23図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	台付壺	—	(23.0)	—	WW'B'	B	橙	60	口縁 脚欠
2	碗	(10.4)	5.0	4.0	WW'BB'	B	におい赤褐	35	P ₁

第6号住居跡(第24図)

お—3—11グリッドを中心に位置する。第4号住居跡からは南西へ約14m、第5号住居跡からは北西へ約13mを隔てる。東側を第2号溝に切断されるほか、西隅部には噴砂の亀裂が走っている。全体はいくぶん隅丸となる方形で、8軒の中で最も小型の住居跡である。軸長は4.90m×4.60m、面積は約22.5m²を測る。主軸方向はおよそN—70°—Wを指す。

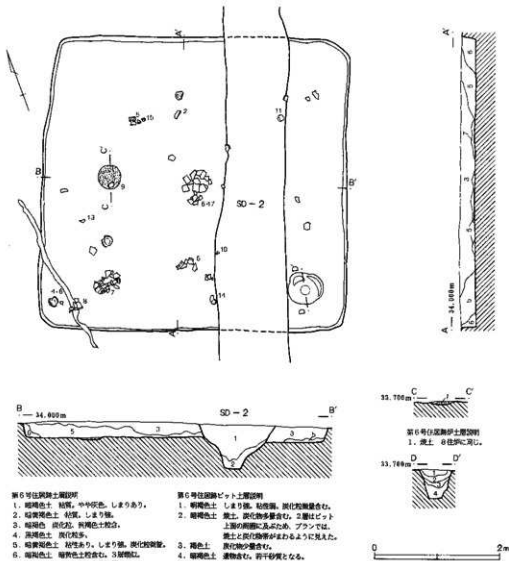
床面はよく踏みまじっており、遺構確認面からは約25cmの深さを有する。わずかに中央部が高まるものの、概ね平坦となっている。

炉跡は地床炉で、中央西壁寄りに設けられる。直径約40cmの円形で、深さ5cm程の浅い窪みとなっている。覆土はほとんど見られず、焼土の集中のような感じである。但し、壁側には炭化物の薄い広がりが見られた。掻き出された灰であろうか。

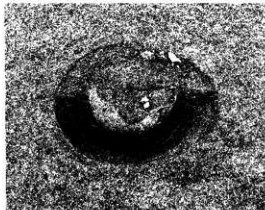
柱穴、壁溝はまったく検出できなかった。

貯蔵穴は南隅や内側に穿たれている。直径約55cmの円形で、深さは約45cmを測る。横断面は急な逆台形であるため、一見すると柱穴を思わせる。

遺物は覆土の中位～下位に多く出土している。床面上のものとしては、東隅部の甃(第25図4)、台付壺(7・第26図8)が挙げられる。



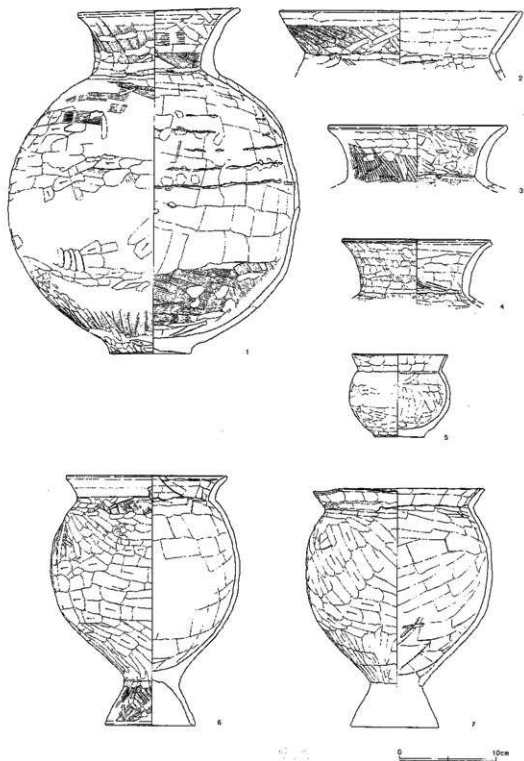
第24図 1区第6号住居跡



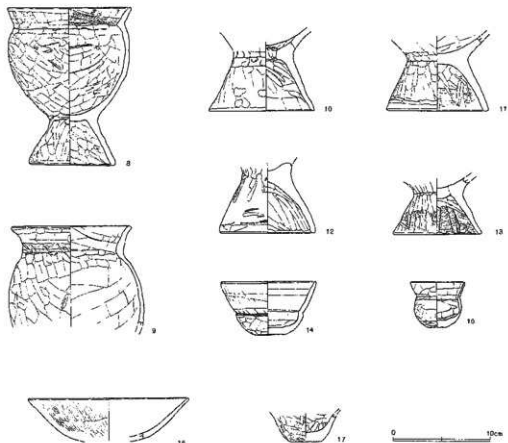
1区第5号住居跡遺物出土状態



1区第6号住居跡遺物出土状態



第25图 1区第6号住居跡出土遺物(1)



第26図 1区第6号住居跡出土遺物(2)

第6号住居跡出土遺物(第25・26図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	地蔵	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	17.2	(35.8)	8.3	WW'B'R	B	橙	65	No20
2	壺?	(25.8)	(5.7)	—	WW'	B	橙	—	No32 口縁30%残
3	壺	(19.0)	(6.7)	—	WB'R	B	にぶい黄橙	—	覆土 口縁20%残
4	壺	17.5	(6.8)	—	WW'B'	A	橙	—	No1 口縁95%残
5	小型壺	(10.0)	8.7	5.2	WW'B'R	B	明褐	65	No21・35・36 磨耗顯著
6	台付壺	17.0	26.2	(9.6)	WW'砂	B	にぶい黄褐	80	No1・10・12・19
7	台付壺	18.0	(20.5)	—	WW'R	B	暗赤褐	80	No3
8	台付壺	12.8	16.5	8.8	WW'B'R	B	明赤褐	85	No2 口縁・脚部む
9	台付壺?	(12.5)	(10.6)	—	W'B'R	C	暗褐	35	No23・41・42
10	台付壺	—	(7.2)	11.2	WW'	B	にぶい黄褐	—	No13 脚部完存
11	台付壺	—	(8.0)	(11.0)	WW'B'	C	にぶい黄橙	—	No25 脚部40%残 磨耗顯著
12	台付壺	—	(7.5)	10.2	WW'	B	明赤褐	—	覆土 脚部70%残 磨耗顯著
13	台付壺	—	(6.0)	9.0	WW'B'	B	橙	—	No43 脚部60%残
14	埴	(10.0)	5.6	3.0	WW'	B	橙	80	No9 磨耗顯著
15	小型壺	5.8	4.8	1.5	WW'	B	にぶい黄橙	100	覆土 ミニチュア
16	高坏	(16.6)	(4.5)	—	砂RW'	B	明赤褐	—	覆土 坏部45%残 磨耗顯著
17	壺?	—	(2.9)	3.1	WW'	A	にぶい橙	—	No19 ミニチュア? 底部

第7号住居跡(第27～29図)

おー3ー3グリッドを中心に位置する。第8号住居跡を切断する大型の住居跡である。軸長8.30m×8.30mの整った方形を呈し、各隅部のなす角度はほぼ直角である。面積は約69.0㎡におよび、主軸方向はおよそN-6°-Eを指す。

覆土は自然堆積を示すが、床面上や壁面には多量の炭化材が遺存している。壁面のもは太さ7cm程の丸太材で、壁面下部から斜めに50cm以上刺さっているものも少なくない。このことから、本跡は火災により焼失した住居跡で、壁面の材は垂木であったものと考えられる。

床面は中央部がやや高まっているものの、全体的に見れば平坦といえる。遺構確認面からは20cm～25cm程の深さを有し、壁の立ち上がりは急である。

カマドは北壁の中央部に設けられる。遺存状態は悪いが、概ね以下のような知見が得られた。袖は褐色の砂質土を用い、「ハ」字状に造り付けられている。燃焼部は焚き口で幅約65cm、奥行きは75cm程である。火床面は平坦で、床面からは7cm前後低い。焚き口前面からだらだらと傾斜し、明確に掘り込まれた様子はない。火床面と袖内面は赤焼が著しいが、燃焼部の奥壁側はあまり焼けていない。煙道はほとんど壁外に延びず、半円形のわずかな突出となっている。カマドの両側には土坑状の掘り込みが存在し、掻き出されたと思われる灰が堆積していた。東側の土坑中からは小型甕(第30図4)、高坏(第33図29・第34図30)、甕(第35図57・60・67・68)、西側の土坑中からは高坏(第33図24・第34図31・32・35)、甕(第34図41・45・46・第35図48・50・54)、脚付甕(第32図21)等が出土している。

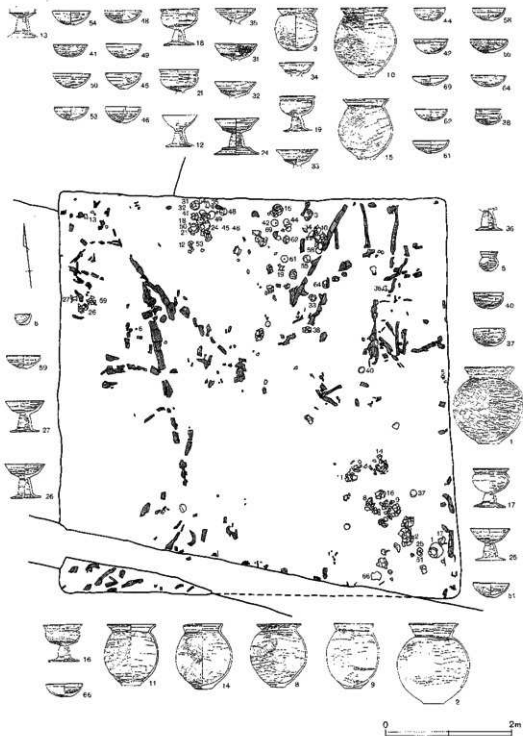
貯蔵穴は南東隅部のやや西寄り、壁溝中に穿たれる。平面は70cm×85cmの楕円形で、横断面は深さ60cm程のU字形を呈する。肩部からは高坏(第33図22・23・28)、甕(第34図43・第35図52・56)、脚付甕(第32図20)が出土している。

柱穴は住居跡の対角線上に4本の支柱穴、および北西部に1本が検出されている。支柱穴はいずれも楕円形気味で、長径35cm～45cm、深さ50cm～70cmを測る。観察された柱痕からは、太さ10cm程の柱が想定される。柱穴間は東西南北とも約4.75mである。

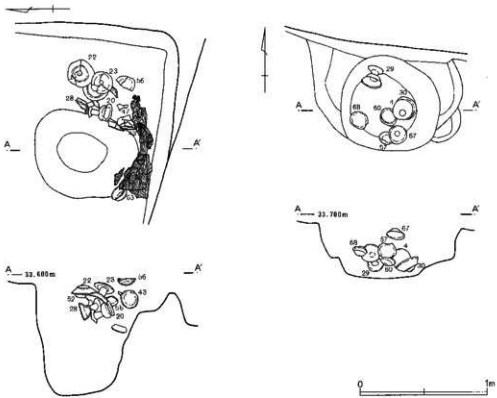
壁溝は幅約70cm、深さ20cm～35cmで全周するが、カマド部分は後から褐色土を充填、埋め戻している。

遺物の出土はカマドと貯蔵穴の周辺に集中している。多くは炭化材の下、すなわち床面に密着しており、残存率も高い。焼失住居跡であることを考慮すれば、ほぼ使用時の状態を保っているものと判断でき、1軒あたりの土器保有量のカウントに有効である。図示できたものの内訳は壺2、小型壺2、甕6、小型壺1、高坏15(完存7)、脚付甕6、器台?(穿孔高坏)2、甕33、ミニチュア土器2、土製丸玉3である。

土製丸玉は第21図70が直径2.3cm、孔径2.0mm、71が同じく1.8cmの3.5mm、72が2.0cmの4.0mmである。



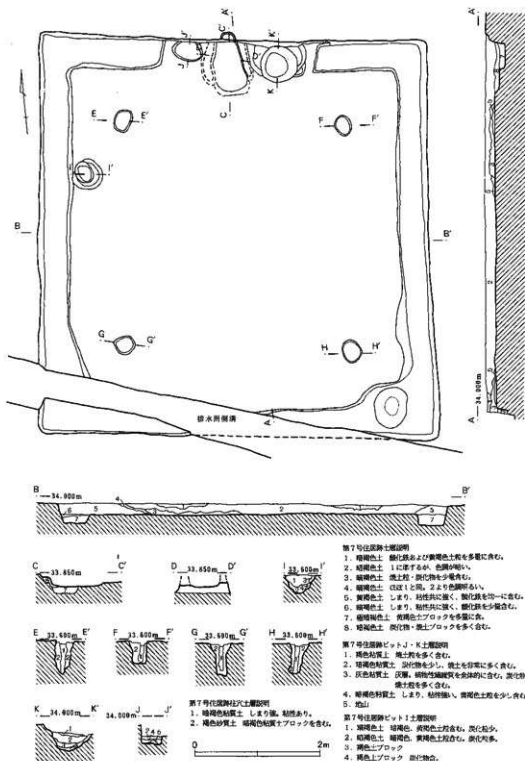
第27图 1区第7号住居跡遺物出土状態(1)



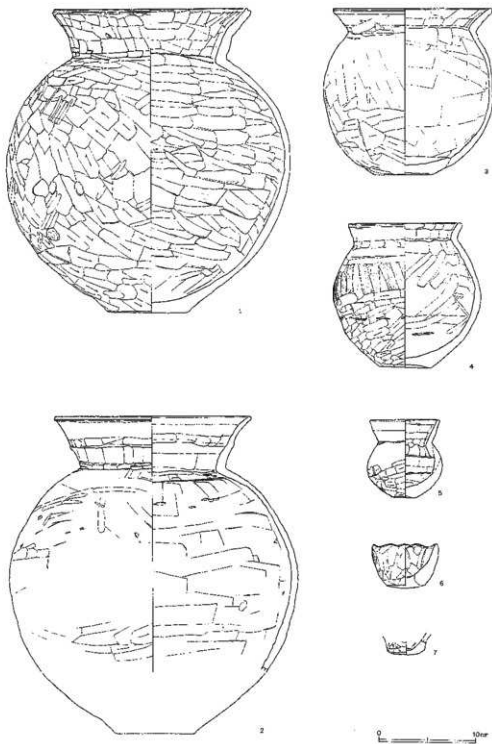
第28图 1区第7号住居跡遺物出土状態(2)



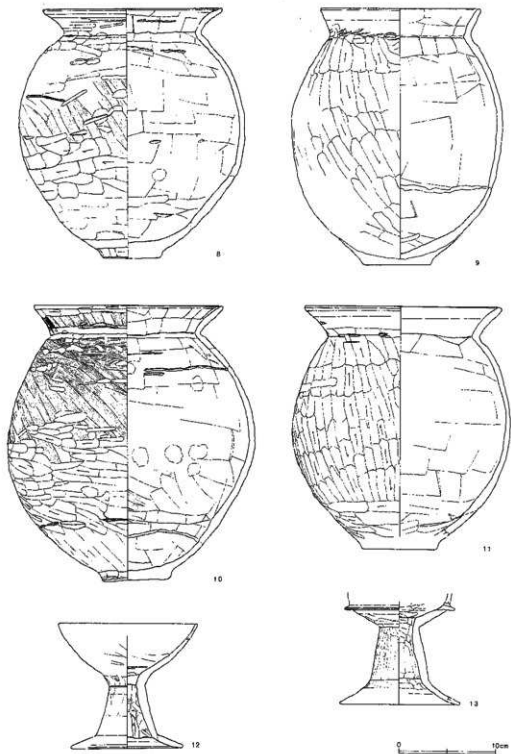
第7号住居跡 カマド東側土坑遺物出土状態(西から)



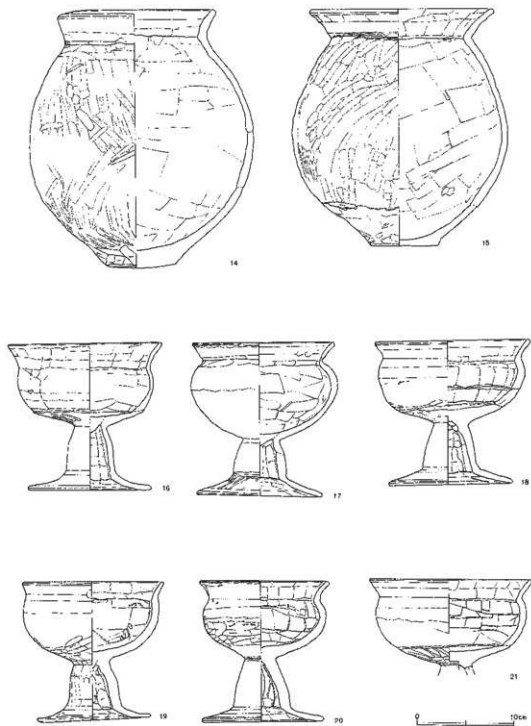
第29図 1区第7号住居跡



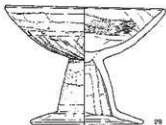
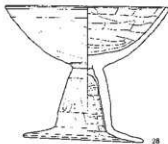
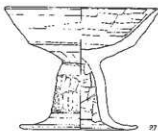
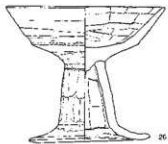
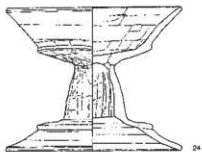
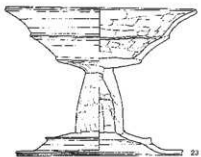
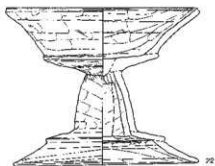
第30图 1区第7号住居跡出土遺物(1)



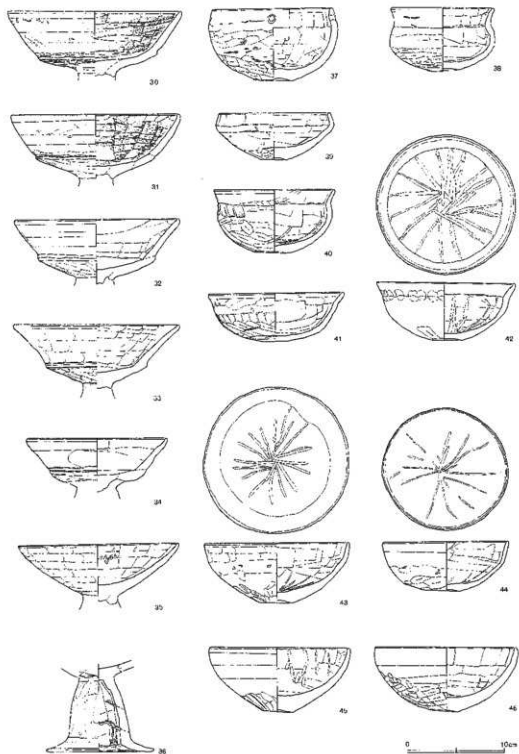
第31图 1区第7号住居跡出土遺物(2)



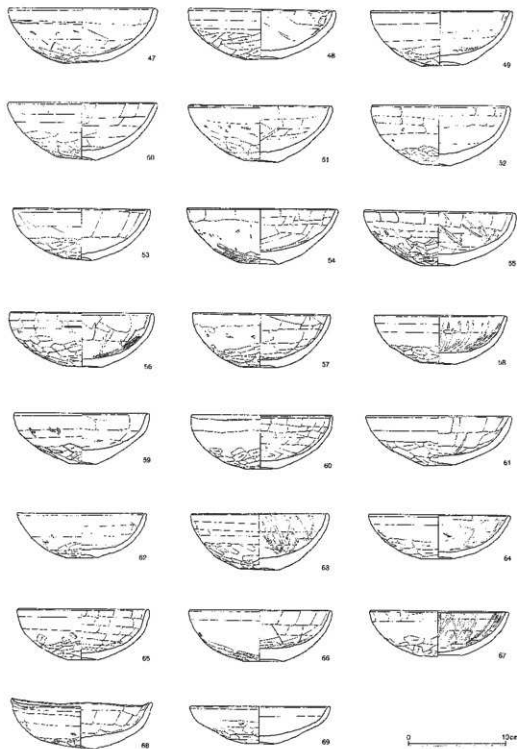
第32图 1区第7号住居跡出土遺物(3)



第33图 1区第7号住居跡出土遺物(4)



第34图 1区第7号住居跡出土遺物(5)



第35图 1区第7号住居跡出土遺物(6)

第7号住居跡出土遺物(1)(第30~35図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	施成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	21.0	31.5	6.5	W'片	B	にぶい赤褐	100	No.30
2	壺	20.6	(26.5)	—	WW'	B	橙	45	No.93 粗庄痕あり
3	小型壺	16.4	17.4	5.8	WW'	B	にぶい橙	100	No.19 口縁内面〜外面赤彩か
4	小型壺	11.8	15.1	5.2	WW'R	B	明赤褐	100	No.8
5	埴	7.2	8.2	2.0	WW'	B	橙	100	No.140 磨耗顯著
6	手捏ね	6.8	(4.6)	—	WW'R	B	明赤褐	40	No.17・43
7	?	—	(1.6)	2.5	WW'	A	橙	—	覆土 底部のみ ミニチュアか
8	壺	(18.8)	26.1	(6.5)	WW'R	B	にぶい橙	70	No.87・88 磨耗・剝落顯著
9	壺	16.8	(26.2)	—	WW'R	B	にぶい赤褐	65	No.87〜89 底部剝落
10	壺	19.6	28.8	7.0	W'片	B	橙	100	No.74 外面赤彩か
11	壺	20.6	(24.1)	—	WB	B	にぶい橙	70	No.82 磨耗顯著
12	器台?	—	(11.8)	(11.2)	WW'	B	橙	40	No.8 孔径1.0cm
13	器台?	—	(10.9)	—	WW'	B	橙	40	No.48 孔径1.4cm
14	壺	16.6	27.1	7.0	WW'B	B	橙	75	No.81 全体強く歪む
15	壺	19.8	24.8	7.0	WB片	B	にぶい褐	90	No.49
16	脚付碗	16.2	15.3	12.8	WW'B'R	B	橙	80	No.85・87 磨耗顯著
17	脚付碗	15.0	16.0	13.2	WW'B'R	B	橙	100	No.29 磨耗顯著
18	脚付碗	16.1	15.1	13.0	WW'B'R	B	赤褐	100	No.3・12・13・15 口縁歪む
19	脚付碗	14.8	14.5	11.9	WW'	B	褐	95	No.26
20	脚付碗	13.6	14.8	12.8	WW'R	A	明赤褐	95	No.125
21	脚付碗	17.0	(9.5)	—	WW'	B	明赤褐	—	No.9 底部95%残 外面剝落
22	高坏	20.6	16.3	19.6	WW'B'	B	明赤褐	100	No.31・129
23	高坏	20.4	16.4	18.2	WW'片	A	橙	95	No.128 磨耗
24	高坏	18.7	15.0	18.8	WW'B'R	B	明赤褐	95	No.15・16 磨耗顯著
25	高坏	16.8	(12.0)	—	WW'B'	B	橙	60	No.95・138 磨耗顯著
26	高坏	16.7	14.1	12.7	WW'R	B	明赤褐	95	No.2 磨耗顯著
27	高坏	16.2	12.8	12.5	WW'	B	橙	100	No.3
28	高坏	17.2	14.1	14.1	WR	B	明赤褐	90	No.126・127 磨耗顯著
29	高坏	17.1	12.3	11.8	WW'R	B	橙	100	貯蔵穴No.16
30	高坏	18.4	(6.8)	—	WW'	B	橙	—	貯蔵穴No.7 坏部95%残
31	高坏	17.8	(6.7)	—	WW'	B	明赤褐	—	No.7 坏部95%残
32	高坏	17.6	(6.8)	—	WW'R	B	橙	—	No.11 坏部完全 磨耗顯著
33	高坏	(17.2)	(6.7)	—	WW'	B	赤褐	—	No.60 坏部65%残
34	高坏	14.8	(5.6)	—	WW'B	B	橙	—	No.73 坏部90%残 磨耗顯著
35	高坏	16.8	(5.9)	—	WW'	B	明赤褐	—	No.14 坏部95%残 磨耗顯著
36	高坏	—	(9.2)	(11.6)	WW'B'R	B	橙	—	No.71 脚部70%残 磨耗顯著
37	碗	12.7	7.6	3.7	WW'R	A	明赤褐	100	No.28 口縁に2孔(径4mm)
38	碗	10.9	6.7	3.3	WW'B	B	明赤褐	100	No.61
39	碗	11.6	4.9	2.5	WW'B'	A	橙	90	貯蔵穴No.10
40	碗	12.7	6.6	3.3	WW'	B	にぶい褐	100	No.27
41	碗	14.2	5.0	—	WW'R	B	橙	90	No.10 磨耗顯著
42	碗	14.4	6.0	2.8	WW'	B	橙	100	No.39
43	碗	15.3	6.3	3.2	WW'R	A	赤褐	100	No.121
44	碗	13.2	5.2	3.5	WW'R	A	橙	100	No.112
45	碗	14.8	6.8	2.9	WW'	B	明赤褐	100	No.15
46	碗	14.8	6.8	2.7	WW'B'R	B	明赤褐	90	No.15 磨耗顯著
47	碗	(16.0)	5.8	3.8	WW'R	B	明赤褐	65	No.122〜124
48	碗	15.4	5.3	3.2	WW'	B	明赤褐	100	No.5 磨耗・剝落顯著

第7号住居跡出土遺物(2)(第30~35図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
49	甕	15.0	5.8	4.2	WW'B'	B	明赤褐	70	No11・23・49・50・53 磨耗顯著
50	甕	15.6	5.9	4.0	WW'R	B	明赤褐	100	No12 外面磨耗顯著
51	甕	(15.0)	5.9	3.5	WW'R	A	橙	55	No95 磨耗顯著
52	甕	14.4	6.3	2.3	WW'R	B	橙	100	No133 内面剥落
53	甕	14.3	5.4	2.8	WW'	B	明赤褐	100	No 8 磨耗顯著
54	甕	15.9	3.8	4.1	WB'	A	明赤褐	90	No 6
55	甕	16.0	5.7	3.2	WW'B'	B	赤褐	100	No38
56	甕	14.8	5.7	3.8	WW'R	B	明褐	95	No130・131 口縁歪む
57	甕	14.6	5.7	3.7	WW'R	B	橙	95	貯蔵穴No13 磨耗顯著
58	甕	13.9	5.0	3.1	WW'B'	B	明褐	100	No20 磨耗顯著
59	甕	14.2	5.4	3.0	WW'	B	明赤褐	95	No 1
60	甕	14.6	5.6	3.2	WW'R	B	にぶい橙	100	貯蔵穴No 9
61	甕	15.4	5.2	3.1	WW'R	B	明赤褐	100	No22
62	甕	13.6	4.7	3.0	WW'B'	C	明赤褐	100	No37 磨耗顯著
63	甕	14.4	6.9	3.6	WW'B'	B	橙	100	No119 磨耗顯著
64	甕	15.0	4.6	3.2	WW'R	B	明赤褐	100	No21 摩耗強
65	甕	13.8	5.4	3.1	WW'B	B	赤褐	70	No110
66	甕	15.0	5.4	3.9	WW'B'	A	橙	90	No101
67	甕	14.7	4.8	4.7	WW'R	A	明赤褐	100	貯蔵穴No12
68	甕	14.6	4.4	2.9	WW'R	B	橙	100	貯蔵穴No14 口縁歪む
69	甕	(14.7)	3.9	3.0	WW'B'	B	赤褐	50	No114

第8号住居跡(第36図)

おー3ー13グリッドを中心に位置する。南東隅部を第7号住居跡に切断される。西壁はやや張るものの、全体は隅丸気味の方形を呈する。軸長5.10m×5.10m、面積約26.0㎡をそれぞれ測る。主軸方向はおよそN-66°-Wを指す。

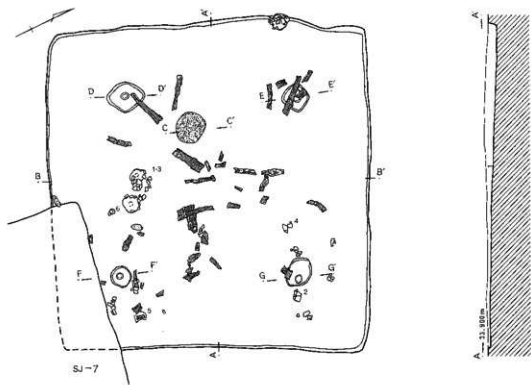
本跡も火災により焼失したものと思われ、床面上には多くの炭化材が散乱していた。床面はなだらかながらもいくぶん凹凸を有し、東から西へ向けかなり傾斜している。確認面からの深さは東側で5cm、西側で15cm程である。

炉跡は中央からわずかに西へ寄っているが、他の住居跡に比べて偏在の度合は低い。平面は直径約50cmの円形で、深さは10cm程である。炉床は中央が高まり、横断面は緩いW形となっている。

柱穴は対角線上に4本検出された。いずれも上面は径30cm~40cmの方形、ないしは円形だが、直下から急にすばまり、底面径は10cm程となる。柱痕の幅は10cm以下で、杭がうち込まれたような状態となっている。柱穴の南北間は約2.80m、東西間は北が約2.50m、南が約2.80mと不揃いである。

貯蔵穴、および壁溝は検出されなかった。

同じ被災住居跡である第7号住居跡の状況に反し、遺物はかなり少量で、しかも完形となるものが見られない。



第8号住居跡柱穴土層説明

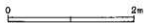
1. 4号住、柱穴1の1層に同じ。
2. 2号住、柱穴4の4層に同じ。
3. 4号住、柱穴1の2層に同じ。
4. 4号住、柱穴1の3層に同じ。

第8号住居跡土層説明

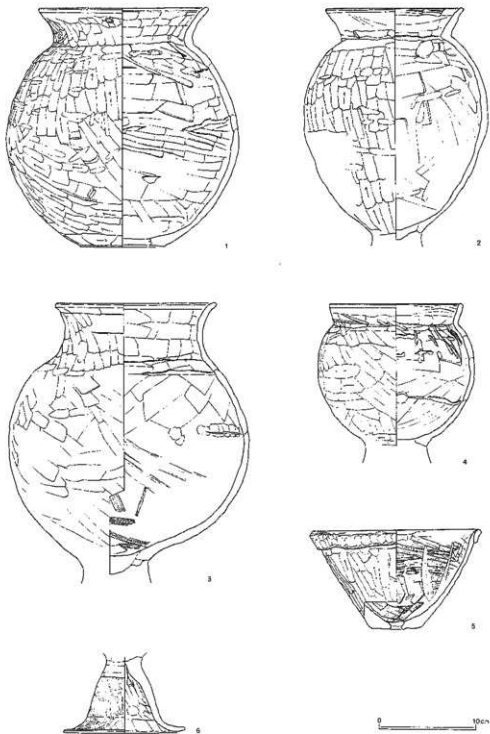
1. 軽褐色土、しまり、粘性あり、所々に明黄色土粒多。

第8号住居跡伊土層説明

1. 第十、上部に炭化物および灰を少量含む、下部は地山(灰岩)が火熱を受けて変化した。



第36図 1区第8号住居跡



第37图 1区第8号住居跡川土遺物

第8号住居跡出土遺物(第37図)

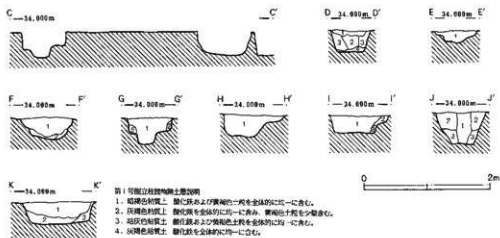
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	17.3	25.1	(7.2)	WW'BR	B	明赤褐	65	No11・12 口縁欠む
2	台付甕	14.6	(24.3)	—	WW'	B	褐	70	No4・8・13・14・16 口縁欠む
3	台付甕	17.0	(28.5)	—	WW'R	B	明褐	80	No11・12・20 全体強く歪む
4	台付甕	13.2	(15.0)	—	WW'B'	C	にぶい黄褐	60	No8・15・17 磨耗顯著
5	甕	18.2	9.3	4.9	WW'B'R	B	にぶい黄褐	75	No1 孔径1.2cm 口縁欠む
6	高坏	—	(8.0)	12.9	WW'B'	B	明赤褐	—	No8 脚部95%残

第1号掘立柱建物跡(第38・39図)

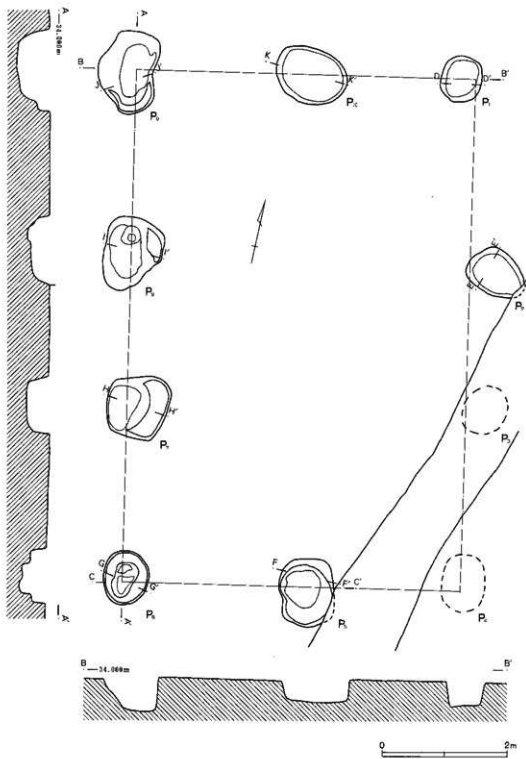
お一—14グリッドを中心に位置する。東側は調査区外となるため、全体の形状や規模は明らかとしない。おそらくは3間×2間の南北棟になるものと思われる。この時の規模は桁行が約8.10m、梁行約5.40mを測り、柱間は桁行、梁行ともに約2.70mとなる。主軸の方向はおよそN—13'—Wを指す。

確認された柱穴は長径0.90m～1.20mの楕円形で、深さは35cm～50cm程である。西の棟側柱穴には重複、ないしは抜き取り穴状の張り出しが見られるが、断面観察では抜き取りの様子は窺えなかった。柱痕はP₉のみで認められた。幅は約20cmである。

遺物はP₉より須恵器の坏(第40図上段1)が出土しているほか、図示できなかったが、P₇とP₉より土師器の小片が見いだされている。

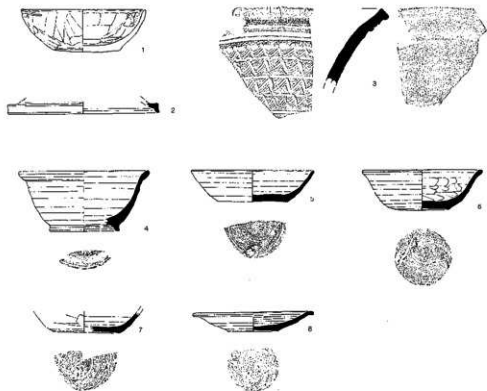


第38図 1区第1号掘立柱建物跡(1)



第39图 1区第1号掘立柱建物跡(2)

SB-1



SB-2



第40图 1区第1号・2号掘立柱建物跡出土遺物

第1号・2号掘立柱建物跡出土遺物(第40図)

SB-1

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(13.0)	4.4	7.0	WW'	A	にぶい黄褐	60	SK-6
2	蓋	—	(1.3)	(16.0)	WW'	B	褐灰	—	SK-6 口縁片
3	礎	—	—	—	W	B	褐灰	—	SK-6 波状文5本歯
4	高台付碗	(13.8)	6.2	(7.8)	WW'	A	褐灰	30	SK-6
5	坏	(13.2)	3.3	(7.0)	W'	B	黄褐	40	SK-14 底部回転糸切
6	坏	(12.8)	4.2	5.9	WW'	A	灰	60	SK-6 底部回転糸切
7	坏	—	(2.2)	(8.8)	WW'	B	にぶい黄褐	—	SK-6 底部回転糸切
8	皿	(13.0)	2.0	5.3	WW'R	B	橙	40	SK-6 底部回転糸切

SB-2

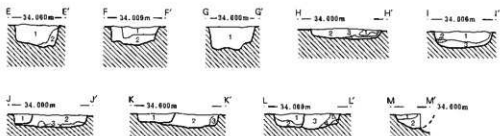
1	皿	(15.4)	3.1	(6.0)	WW'B'	C	にぶい黄褐	30	SK-19
2	坏	—	(1.5)	(7.0)	W	B	灰黄褐	—	SK-20 底部片
3	高台付碗	—	(2.1)	(7.8)	WW'	B	褐灰	—	P-16 底部片

第2号掘立柱建物跡(第41・42図)

おー2-11グリッドを中心に位置する。第1号掘立柱建物跡の西側約2.50m、同跡に並行して構築される。3間×2間の南北棟で、規模は桁行約7.20m、梁行約4.80mを測る。桁行の柱間は2.40mを基本とするようである。しかし、東の棟側は柱筋が乱れ、P₁—P₂間が2.80m、P₂—P₃間が2.40m、P₃—P₄間が1.80mと不揃いである。梁行の柱間も2.40mで、南側妻の中間柱P₅は柱筋の外へ出ている。主軸方向はおよそN—10°—Wを指す。

柱の掘り方は隅丸長方形ないし楕円形で、長径0.80m～1.20m、深さ15cm～40cmと浅い土坑状である。第1号掘立柱建物跡と同様、西の棟側柱穴には重複、または抜き取り穴状の張り出しが見られた。しかし、断面観察では抜き取りの様子は窺えなかった。

遺物はいずれも須恵器で、P₅より坏の底部片(第40図下段2)、P₅より皿片(1)、P₅より高台付碗の底部片(3)が出土している。



第2号掘立柱建物跡断面図

1. 粘褐色粘質土 腐化跡および表面色土塊を全体的に均一に含む。

2. 暗灰色粘質土 腐化跡を全体的に均一に含む。

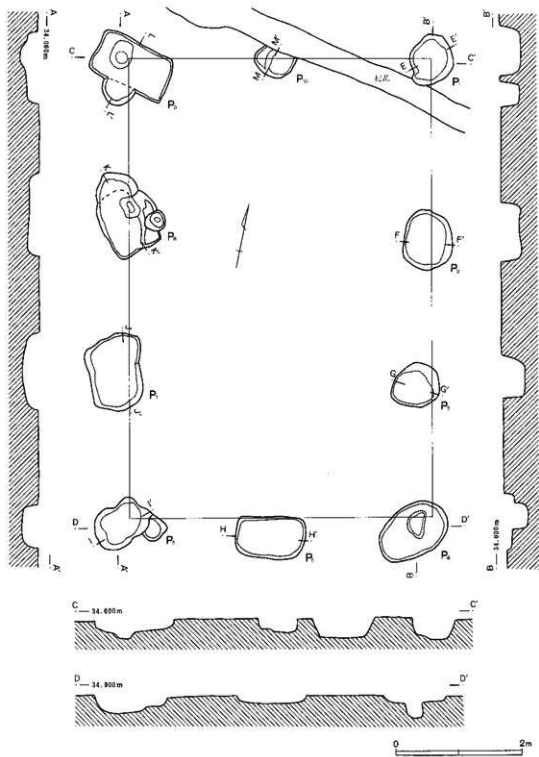
3. 緑灰色粘質土 腐化跡を全体的に均一に含む、炭化物粒を少量含む。

4. 緑褐色粘質土 腐化跡を全体的に均一に含む。

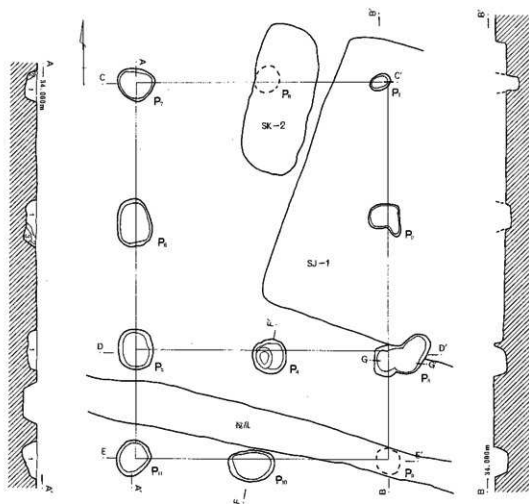
5. 粘褐色粘質土 腐化跡を全体的に均一に含む。

0 2m

第41図 1区第2号掘立柱建物跡(1)



第42图 1区第2号掘立柱建物跡(2)



第3号掘立柱建物跡説明

1. 黄褐色粘質土 しまり、粘性共に強く、酸化鉄を全体的に均一に含む。しまり、粘性共に強い。
2. 緑褐色粘質土 しまり、粘性共に強い。酸化鉄を全体的に均一に含む。黄褐色粘質土ブロック (厚1~2cm) を多量に含む。
3. 暗褐色粘質土 しまり、粘性共に強い。泥入物は特に目につかない。
4. 褐色粘質土 しまり、粘性共に強。酸化鉄および黄褐色粘質土ブロック (厚2~3mm) を多量に含む。第1層よりも強い。



第43図 1区第3号掘立柱建物跡

第3号掘立柱建物跡(第43図)

おー2-17グリッドを中心に位置する。第1号住居跡埋没後の構築で、第2号掘立柱建物跡とは北西へ約5mを隔てている。2間×2間で、南面に庇が付設される。柱穴の配置は比較的整っているが、北側妻の中間柱は第2号土坑によって削失しているほか、東棟側の柱は検出できなかった。身舎の規模は桁行約4.20m、梁行約4.00mを測り、柱間は各々その半分となる。南側妻と庇間は約1.70mである。主軸方向はおよそN-1°-Eを指す。

柱の掘り方は長径0.50m~0.70mの楕円形で、いずれも掘り込みはごく浅い。

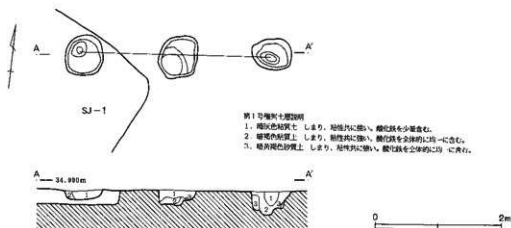
遺物は図示できなかったが、P₄とP₁₀から土師器の小片が出土している。

第1号柱穴列(第44図)

おー2-21グリッドを中心に位置し、西の柱穴は第1号住居跡の覆土を掘り込んでいる。3本の柱穴が等間隔一列に並ぶものである。掘立柱建物跡となる可能性もあったため、周辺を慎重に精査したが、関連しそうな柱穴は検出できなかった。第3号掘立柱建物跡と近接しているものの、方向的にはかなり異なり、これも関連性は薄いものと判断される。

柱間は各1.50mを測り、柱筋の方向はおよそN-85°-Eを指す。掘り方の平面は径65cm程の円形から楕円形を呈し、深さは15cm~40cmと一定していない。

遺物の出土はまったく見られなかった。覆土の状態から推せば、掘立柱建物跡と同時期の遺構と考えられる。



第44図 1区第1号柱穴列

第1号埋壺(第45図)

おー3-3グリッドに位置する。掘り方自体は径65cm程の不整形円形で、浅い皿状の窪みとなっている。調査時には須恵器の大型壺の底部付近が残存したものと認識したが、破片の接合率は低く、個体数も2ないし3個となることが判明した。このことから、実際は1個体が埋め込まれたものではなく、数個体の破片を窪みの底面に敷き詰めたものようである。また、周囲には拳大の礫も並べられていたと思われる。

第46図1～4は同一個体の破片で、黄灰色を呈する。頸部には寛指沈線と、その間に櫛指波状文（6本歯）が施されている。胴部外面は格子状の板目叩き、内面は同心円の当具痕が残る。5・6も施文は同様であるが、1～4とは別個体である。表面は灰色で、胎土には粗い砂を含む。口径は推定で32cm程となる。7・8もそれらとは別個体で、第2号溝に同一個体片がある。推定口径は24.8cmを測る。第47図9は壺下半部の破片で、底部は丸底となる。全体は6：4程で第1号埋壺の破片であるものの、上部には第2号埋壺の破片も多く接合した。

第2号埋壺(第45図)

おー3ー2グリッドを中心に位置する。第1号埋壺から7m程隔たっている。南側は排水用の側溝によって切断してしまったが、現状では60cm×40cm程度の不整な楕円形になる。やはり掘り込みは浅く、だらだらとした窪みである。

遺物の出土状態もほぼ同様で、須恵器大型壺の破片が敷き詰められたようになっている。但し、本跡では周囲に礫が並べられた様子は窺えなかった。

第47図2・3、4・5はそれぞれ同一個体の破片で、後者は第1号埋壺の9と同一個体である。



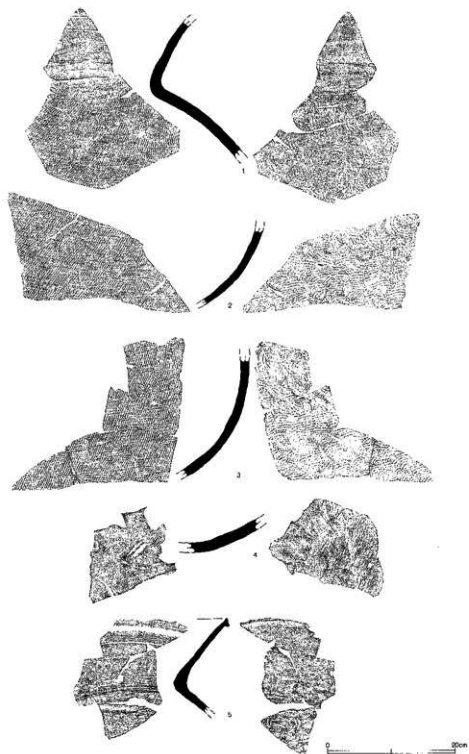
第45図 1区第1号・2号埋壺

溝(全体図)

4条検出されている。このうち、第1号溝は覆土が水田耕作土であること、瓦・磁器・火鉢などの破片が出土していることから、近世から近代に掘整されたものと判断される。第2・3号溝は検出長約36m、ほぼ並走する箱薬研形の溝である。規模もおおよそ同一で、幅1.30m、深さ0.60m程である。埋没河川とも方向が一致し、溝間は約14mを測る。方向はおよそN-20°-Eを指す。

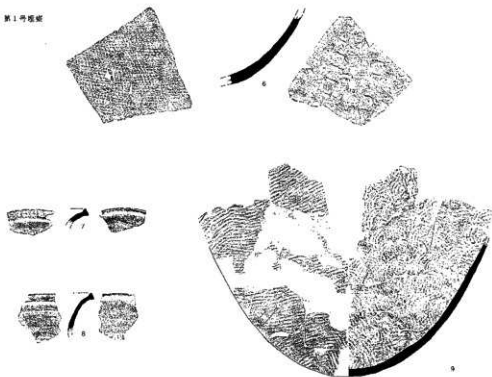
第2号溝からは須恵器の短頸壺片(第48図上段1)、埋壺や埋没河川のものと同じ個体の壺片(2～5)、中世の青磁片などが出土している。第3号溝には何ら遺物が見いだされていないが、その規模や形状などを考慮すれば、両者はほぼ同時期の関連深い遺構と捉えることができよう。

ともに通水されていたような形跡はなく、空堀であったことが窺える。1区側に中世の土坑や井戸跡が検出されていることから、屋敷地などの区画にかかわるものと推定される。あるいは道路遺構でもあるのだろうか。

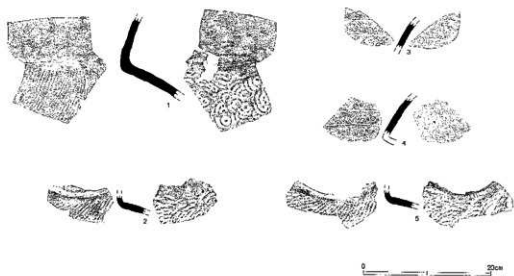


第46图 1区第1号埋瘞出土遺物(1)

第1号埋藏



第2号埋藏



第47图 1区第1号埋藏(2)・第2号埋藏出土遺物

土坑(第49～53図)

森下遺跡1区からは22基の土坑が検出されている。しかし、番号は35まで付けられている。これは当初土坑として調査に着手し、湘立柱建物跡、井戸跡と判明した後もそのまま使用したための組数である。本書でも番号は振り替えず、調査時のものをそのまま用いた。

大半は遺物の出土もなく、時期は不明である。このうち、第1号土坑からは板石塔婆が出土しているが、刻字は摩滅したものかまったく認められなかった。また、他の遺構と重複する土坑は多くがそれを切っており、第1号土坑と同様、中世以降の設営と考えられる。

井戸(第54図)

第34号土坑として調査された遺構である。お—2—7グリッドを中心に位置し、第2号住居跡を切断する。

掘り方平面は3.70m×2.90mの楕円形で、横断面は深さ1.60m程のU字形を呈する。地山は既に砂層ながらも、底面は砂層まで掘り抜いている。この底面には人頭大の礫を3～4段組み、周囲は粘土を充填している。さらに、礫の隙間には小礫が後詰めされている。井戸として機能する開口部の規模は、75cm×85cm程の長方形となる。石組みの上は崩壊しているが、わずかに残存する板材により、枠が設けられていたことが窺える。板は縦に組まれており、周囲は砂(地山)であった。枠を補強する横木や隅部の支柱らしきものは識別できなかった。

遺物はすべて覆土中からの出土で、常滑産の鎌片(第48図下段1～3)、片口の鉢片(4～7)、北宋銭(7)などがある。古銭は1078年初鋳の「元豊通宝」で、直径2.5cmを測る。

第2号溝・P-22・P-55・第34号土坑出土遺物(第48図)

SD-2

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	構成	色調	残存	出土位置・その他
1	始壺	(12.0)	(4.5)	—	W	B	黄灰	—	覆土 口縁～胴部片
2	壺	—	—	—	WW'	B	灰	—	覆土 胴部片; 第1号埋壺に同
3	壺	—	—	—	WW'	B	灰黄褐	—	覆土 口縁片; 個体あり
4	壺	—	—	—	WW'	B	灰褐	—	覆土 同・個体胴部片
5	壺	—	—	—	WW'	B	灰黄褐	—	第1号埋壺に同一あり

P-22

1	高台付壺	(13.9)	5.1	7.2	WW'	B	黄灰	35	覆土
---	------	--------	-----	-----	-----	---	----	----	----

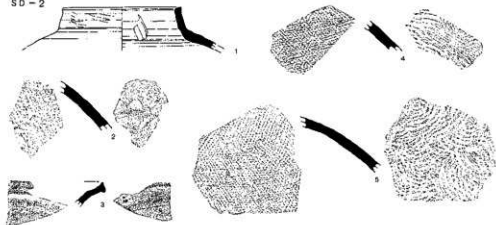
P-55

1	皿	17.2	2.8	7.2	WW'片	C	灰白	100	覆土 底部回転糸切
---	---	------	-----	-----	------	---	----	-----	-----------

SK-34

1	壺	—	—	—	—	A	にぶい黄褐	—	覆土 常滑産 口縁片
2	壺	—	—	—	—	A	灰オリーブ	—	覆土 常滑産 同一個体口縁片
3	壺	—	—	—	—	A	灰オリーブ	—	緑色釉
4	片口鉢	—	—	—	—	B	にぶい褐	—	覆土 口縁片
5	片口鉢	—	—	—	—	B	褐灰	—	覆土 口縁片
6	片口鉢	—	—	—	—	B	褐灰	—	覆土 口縁片

SD-2



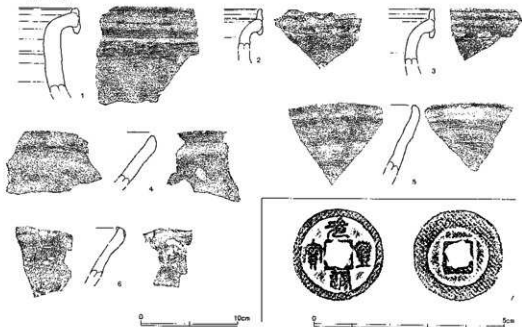
P-22



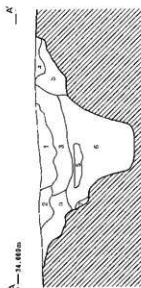
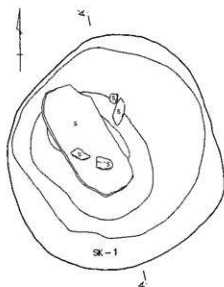
P-55



SK-34

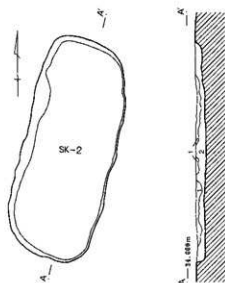


第48図 1区第34号土坑・第2号溝・ピット出土遺物



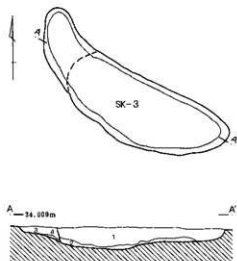
第1号土層説明

1. 青灰色粘質土 粘質土上層(厚5cm)先
2. 暗褐色粘質土 粘質多、炭化灰少量含まれる。
3. 暗褐色粘質土 砂質少、炭多量含。
4. 暗褐色粘質土 暗褐色粘質土ブロック(厚1cm)含。
5. 暗褐色粘質土上ブロック
6. 暗褐色粘質土 3層部
7. 暗褐色粘質土



第2号土層説明

1. 暗褐色粘質土 炭化灰を全体的に均一に含む。
2. 暗褐色粘質土 炭化灰を全体的に均一に含む。

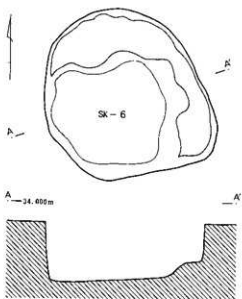
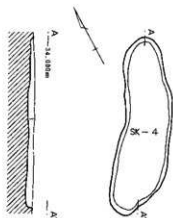


第3号土層説明

1. 暗褐色粘質土 炭化灰を全体的に均一に含む。
2. 暗褐色粘質土 第1層に限る。
3. 暗褐色粘質土 第1層に限る、第1層よりも明るい。
4. 暗褐色粘質土 炭化灰を全体的に均一に含む、第2層よりも明るい。

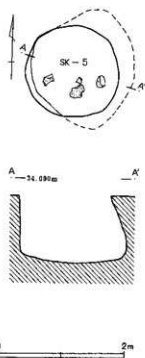
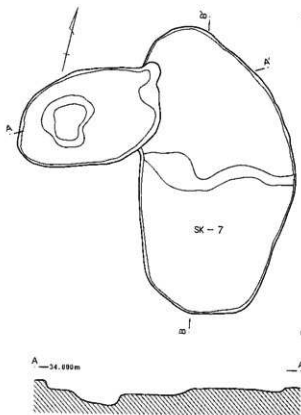
0 2m

第49図 1区第1号・2号・3号土坑

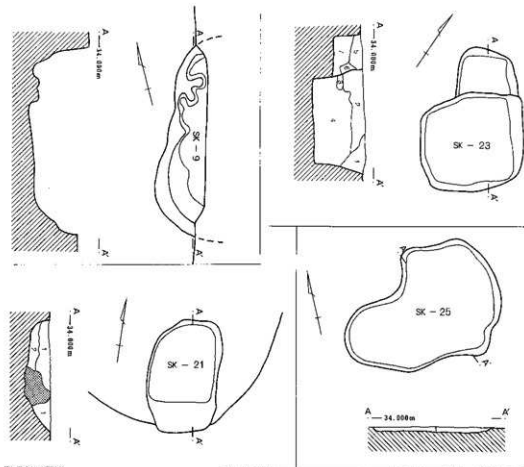


第47号土坑説明

1. 褐色土層にあり、形ともなく、遺物を全体的に均一に含む。



第50図 Ⅰ区第4号・5号・6号・7号土坑



第21号土坑七層説明

1. 緑褐色粘質土 燧石殻を全体的に均一に含む。中に小片焼物をわずかに含む。

2. 緑褐色粘質土 ほぼ1と同。

第22号土坑上層説明

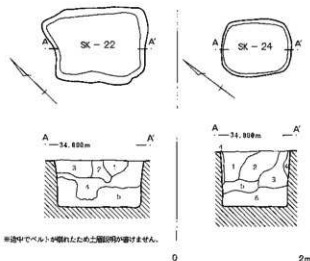
1. 黒褐色粘質土 燧石殻を全体的に均一に含む。黄褐色粘質土ブロック (厚3~5mm) を多量に含む。
2. 緑褐色粘質土 燧石殻を全体的に均一に含む。黄褐色粘質土のブロック (厚1.5~2cm) を多量に含む。
3. 黄褐色粘質土ブロック 燧石殻を全体的に均一に含む。黒褐色粘質土ブロック (厚1~5cm) を多量に含む。
4. 緑褐色粘質土 燧石殻を全体的に均一に含む。黄褐色粘質土ブロック (厚3~4mm) を多量に含む。
5. 褐色粘質土 燧石殻を全体的に均一に含む。黄褐色粘質土ブロック (厚0.1~1cm) を多量に含む。
6. 緑褐色粘質土 燧石殻を全体的に均一に含む。黄褐色粘質土ブロック (厚1cm) を少量含む。

第24号土坑十層説明

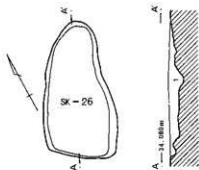
1. 黒褐色粘質土 黄褐色粘質土ブロック (厚2~3mm) を全体的に均一に含む。
2. 緑褐色粘質土 燧石殻および黄褐色粘質土ブロック (厚2~3mm) を全体的に均一に含む。
3. 黄褐色粘質土 燧石殻を全体的に均一に含む。
4. 黄褐色粘質土 燧石殻1層に均一につかぬ。
5. 褐色粘質土 3に準ずるが、黄褐色土層 (厚0.5~1mm) を少量含む。
6. 黒褐色粘質土 燧石殻を全体的に均一に含む。

第25号土坑十層説明

1. 黒褐色粘質土 燧石殻および黄褐色土層を全体的に均一に含む。

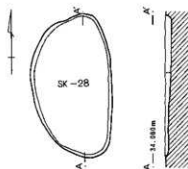


第51図 1区第9号・21号・22号・23号・24号・25号上坑



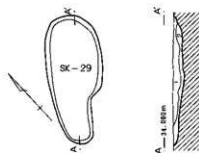
第26号土坑断面図

1. 暗褐色粘質土 しまり、粘性共に強く、酸化鉄を全体的に均一に含む。



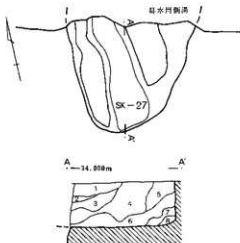
第28号土坑断面図

1. 褐色粘質土 しまり、粘性共に強く、酸化鉄を全体的に均一に含む。
ところどころ暗褐色粘質土ブロック (厚0.5~2cm) を含む。



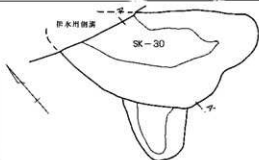
第29号土坑断面図

1. 褐色粘質土 酸化鉄を全体的に均一に含む。
暗褐色粘質土ブロックを少量含む。
2. 灰褐色粘質土 酸化鉄を全体的に均一に含む。



第27号土坑断面図

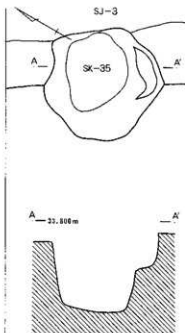
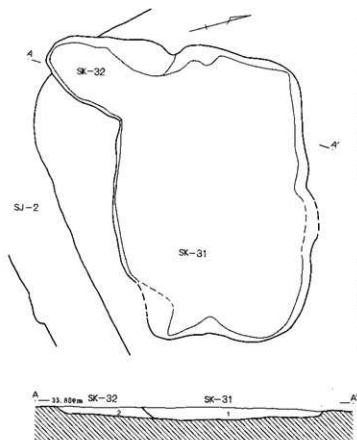
1. 灰褐色粘質土 酸化鉄および黄褐色土粒を全体的に均一に含む。
2. 暗褐色粘質土 酸化鉄を全体的に均一に含む。
3. 暗褐色粘質土 酸化鉄および黄褐色土粒を全体的に均一に含む。
4. 暗褐色粘質土 酸化鉄および黄褐色土粒を全体的に均一に含む。
5. 暗褐色粘質土 酸化鉄および黄褐色土粒を全体的に均一に含む。
3層に似ている。
6. 暗褐色粘質土 酸化鉄を全体的に均一に含む。
7. 暗褐色粘質土 酸化鉄を全体的に均一に含む。
8. 暗褐色粘質土 混入物に特に目につかない。



第30号土坑断面図

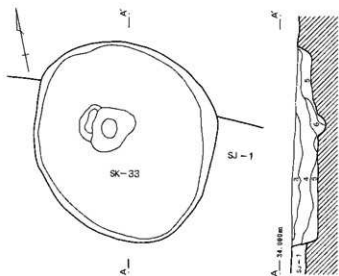
1. 褐色粘質土 しまり、粘性共に強く、酸化鉄およびスコリアを全体的に均一に含む。
2. 暗褐色粘質土 しまり、粘性共に強い、酸化鉄・スコリア・黄褐色土粒 (厚0.5mm) を多量に含む、酸化鉄を少量含む。
3. 暗褐色粘質土 2層より強い、しまり、粘性共に強い、酸化鉄・スコリア・黄褐色土粒を多量に含む、酸化鉄を少量含む。
4. 暗褐色粘質土 しまり、粘性共に強く、酸化鉄を全体的に均一に含む、酸化鉄を少量含む。
5. 褐色粘質土 しまり、粘性共に強く、酸化鉄を全体的に均一に含む。





第31・32号土坑土層説明

1. 粘褐色粘質土 しまり、粘性共に強い、酸化鉄を全体的に均一に含み、黄褐色土ブロック（厚2〜3mm）を多量に含み、粘質共に強い、酸化鉄を全体的に均一に含み、黄褐色土ブロック（厚1〜2cm）を少量含む。

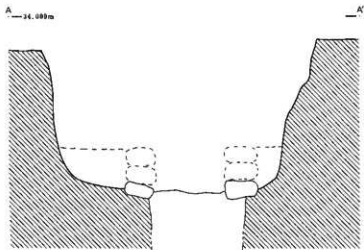
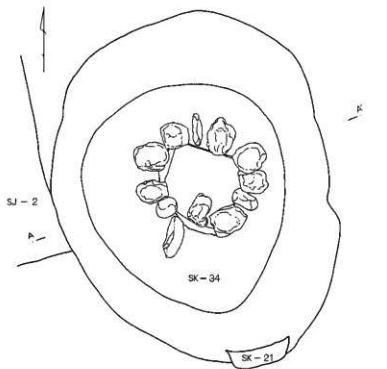


第33号土坑土層説明

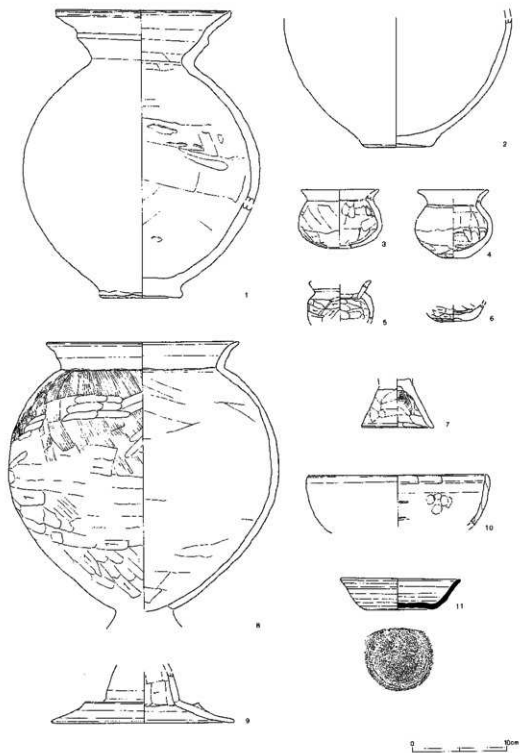
3. 粘褐色粘質土 しまり、粘性共に強く、酸化鉄を全体的に均一に含む。
4. 粘褐色粘質土 しまり、粘性共に強く、酸化鉄を全体的に均一に含む。第3層より砂質弱。
5. 凝褐色砂質土 しまりは強いが、粘性は弱い。酸化鉄を全体的に均一に含む。
6. 凝褐色粘質土 しまり、粘性共に強い、酸化鉄を全体的に均一に含み、砂化物（厚3〜4mm）を多量に含む。

0 2m

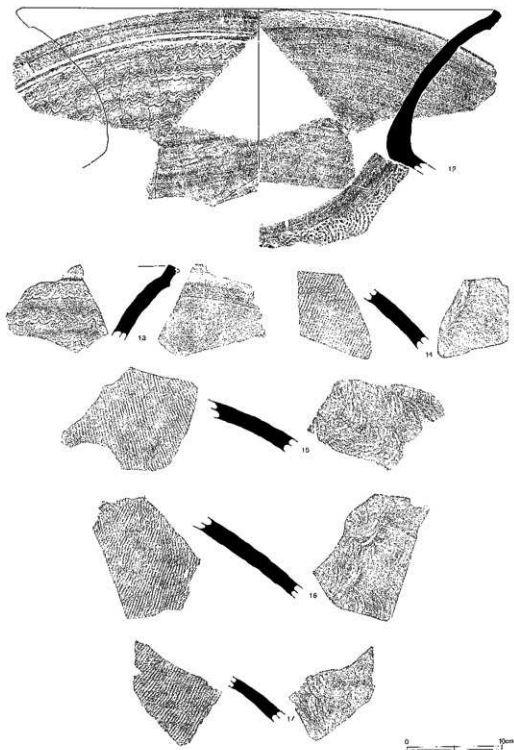
第53図 1区第31号・32号・33号・35号土坑



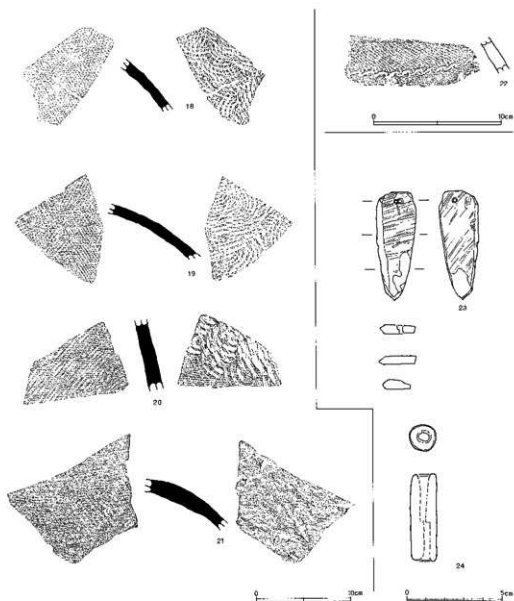
第54图 1区第34号土坑



第55图 1・2区堀没河川出土遺物(1)



第56图 1・2区埋没河川出土遺物(2)



第57図 1・2区埋没河川出土遺物(3)

埋没河川(全体図)

1区西端から2区東端に検出された。遺構確認面での幅は約30mを測る。流向は不明だが、遺跡周辺の地形から判断すれば、南から北ということとなろう。調査は出水が激しく充分行えなかった。遺物は古墳時代の上師器(第55図1~10)をはじめ、第1号埋甕と同一個体と思われる須恵器の壺片(第56図14~17)、S字状結節文を有する弥生後期の土器片(第57図22)、剣形模造品(23)、管玉(24)などが多く出土している。

剣形模造品は滑石製で、長さ5.6cm、最大幅2.1cm、厚さ0.4cm、孔径1.5mmを測る。穿孔は仕損じており、1孔は未貫通である。管玉は長さ4.5cm、直径1.4cm、孔径0.4cmを測る。両端から穿孔が行なわれているが、中央部ではずれが生じている。

1区・2区埋没河川出土遺物(第55～57図)

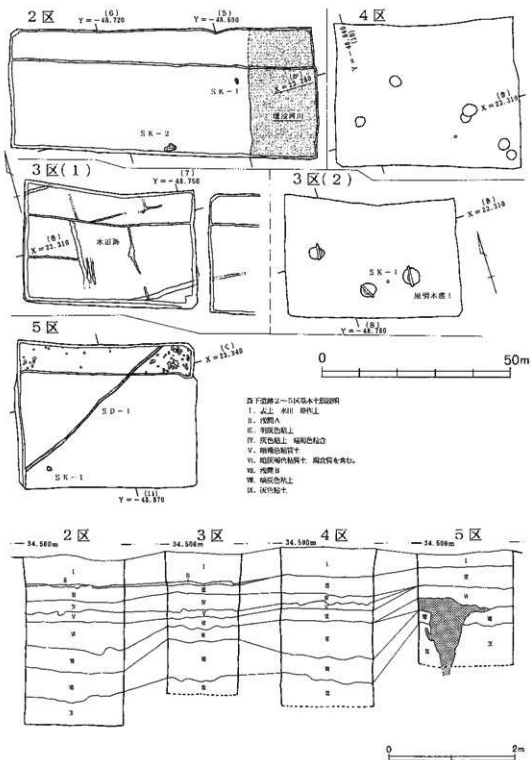
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	(18.8)	(22.5)	7.6	WW'B'R	B	にぶい褐	50	覆土 磨耗顕著
2	壺	—	(13.5)	6.8	WW'B'R	C	明赤褐	35	覆土 剥落著しく調整不明
3	小型壺	—	(6.1)	—	WW'R	C	にぶい褐	—	覆土 頸～底部片
4	小型壺	—	(6.2)	1.8	WW'砂	B	明赤褐	60	No2 ミニチュアか
5	小型壺	—	(4.0)	—	WW'B'	B	橙	—	覆土 頸～胴部片
6	小型壺	—	(1.7)	2.3	WW'B'	B	橙	—	覆土 底部片
7	台付甕	—	(5.1)	7.6	WW'B'	C	橙	—	No4 脚部95%残
8	台付甕	(19.8)	28.0	—	WW'	B	橙	50	No13 磨耗顕著
9	高坏	—	(5.4)	19.0	WW'R	B	橙	—	覆土 脚部下半
10	鉢	(19.0)	(5.3)	—	WW'B'R	B	橙	—	覆土 口縁片 磨耗著しく調整不明
11	坏	(13.0)	3.2	7.0	W	B	灰白	50	覆土 底部回転糸切
12	甕	(50.4)	(16.8)	—	WW'	A	褐灰	—	覆土 波状文5本歯 口～頸部片
13	甕	—	—	—	WW'	A	褐灰	—	12と同一個体
14	甕	—	—	—	WW'	B	褐灰	—	覆土 同一個体胴部片
15	甕	—	—	—	WW'	B	褐灰	—	第1号埋没と同一個体か
16	甕	—	—	—	WW'	B	褐灰	—	外面格子状板目印
17	甕	—	—	—	WW'	B	褐灰	—	
18	甕	—	—	—	W	B	灰黄褐	—	覆土 同一個体制部片
19	甕	—	—	—	W	B	灰黄褐	—	SD-2の4・5と同一個体か
20	甕	—	—	—	WW'	B	灰白	—	覆土 胴部片
21	甕	—	—	—	W	B	灰	—	覆土 胴部片
22	壺	—	—	—	WW'	B	にぶい黄褐	—	覆土 半部LR縄文 S字状結節文

(2) 2区(第58図)

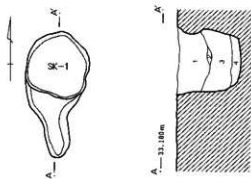
2区は3区・4区とともに浅間B軽石(西暦1108年降下)が薄く残存しているため、水田跡の検出される可能性があった。軽石は直径5cm～7cm程の円形の窪みに堆積しており、これを慎重に除去することとなった。当初、これらは稲株の痕跡ではないかとも考えられたが、畦畔らしき遺構はまったく認められなかった。わずかに3区との境において、帯状の高まりが認められた(後述)にすぎない。これに反し、円形の窪みは調査区全面に広がっており、しかも間隔や配置にはまったく規則性が窺えなかった。東端の埋没河川部分においても状況は同様で、掘り下げても水田らしきものは確認されなかった。

浅間B軽石下は厚く無遺物・無遺構層が堆積しており、1区遺構確認面の相当層に至るまでは約1.6mもある。この面はやや立ち上がっていくものの、3区・4区もほぼ同様である。そして、5区で大きく傾斜して、6区で平坦面となる。このことから、2区～4区は埋没河川から続く谷状の緩やかな傾斜地であったものと推定される。

遺物は唯一、須恵器の皿(第60図上段左1)が表採されている。70%の残存で、口径14.0cm、器高2.1cm、底径6.9cmを測る。焼成は悪く、色調はにぶい橙色である。底面は回転糸切りの後、指などで加えられている。

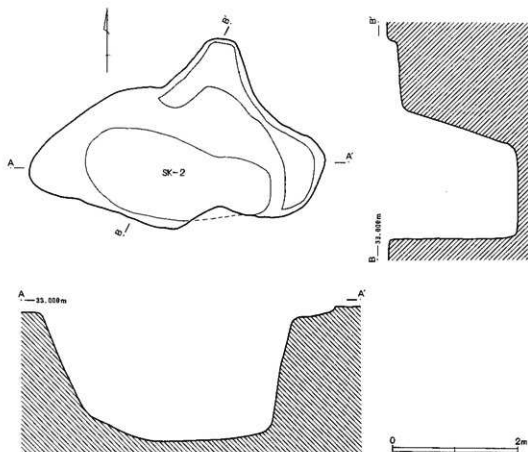


第58图 森下遺跡2区・3区・4区・5区全体图



第1号土坑土層説明

1. 暗褐色粘質土 しまりあり。粘性あり。
2. 黄灰色粘質土 しまりあり。粘性あり。
3. 暗褐色粘質土 しまりあり。粘性あり。しまりが1層より弱い。
4. 黄灰色粘質土 しまり弱い。粘性あり。2層より弱るい。



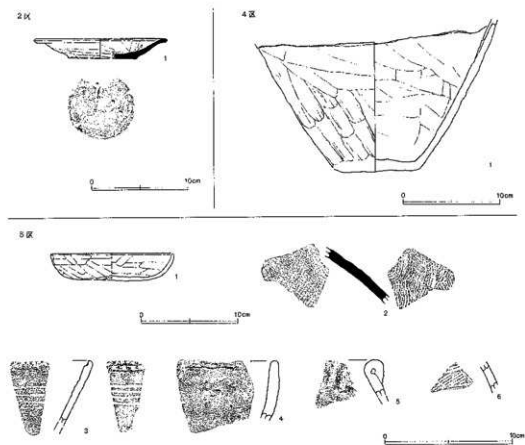
第59回 2区第1号・2号土坑

土坑(第59図)

上記のように遺構確認の可能な面は、現地表下2.3m程にある。この面では埋没河川脇より土坑2基の検出があった。それまでの堆積土除去中には、遺物の出土は見られなかった。

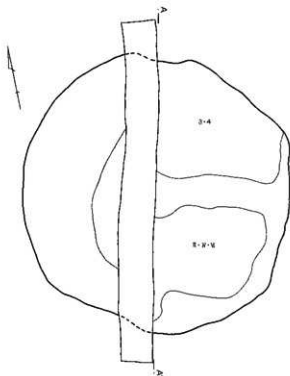
第1号土坑は直径約65cmの円形で、深さも65cmを測る。横断面は円筒形に近く、底面は平出となる。図示できなかったが、縄文土器(後期?)の微小片が出土している。

第2号土坑は2.70m×1.50mの楕円形で、北西にテラス状の段がある。深さは約1.45mで、壁は一部でオーバー・ハングしている。遺物の出土は認められなかった。覆土の状態は第1号土坑に近似しており、全体の形状はTピット様である。



第60図 2区・4区・5区出土遺物

風倒木痕 1



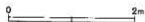
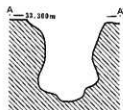
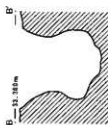
風倒木痕 1 土層説明

1. 地山 黄褐色粘土
2. 地山+砂 黄褐色
3. 黒色土 粘質
4. 黒色土+地山 暗褐色粘質土、黒色土が多い。
5. 黒色土+地山 ローリングによる膠状の混入。地山土が多い。量少。
6. 黒色土+地山 ローリングによる膠状の混入。黒色土が多い。量少。
7. 黒色土+砂

風倒木痕 1 基本土層説明

- I. 地山
- II. 砂層 1
- III. 腐植砂層 1
- IV. 砂層 2
- V. 腐植砂層 2
- VI. 砂層 3

SK-1



第61図 3区風倒木痕 1・第1号土坑

(3) 3区

水田跡(第58図)

2区に引続き、浅間B軽石の除去を行なったところ、帯状に延びる酸化鉄を多量に含んだ暗褐色土が確認された。帯は南北方向に2本、東西方向に3本が走り、両者はほぼ直交するようである。東西方向の帯のうち、南と北のものは他よりも幅が太い。高まりはほとんどなく、水田跡との確認は得られなかったものの、畦畔の一部と考えて大過ないと思われる。

検出分のみで水田の単位や規模を把握することは、かなり無理があるかもしれない。しかし、南北の太い帯を大区画、それ以外を小区画と捉えれば、小区画はおおよそ東西18m、南北12mとなる。面積は216㎡で、方向はおおよそN-5°-Wを指す。

遺物はなんら出土していないが、浅間B軽石直下である点を考慮すれば、12世紀初頭以前の水田跡ということになる。

風倒木痕(第61図)

2区と同じく、水田跡の下を1.5m程掘り下げたところ、3基の大型土坑が検出された。いずれも平面は直径約4.5mの円形で、覆土の堆積は乱れている。遺物の出土は見られなかった。覆土の状態から見て、風倒木痕であろう。

第1号土坑(第61図)

風倒木痕と同一面で検出された。上面は直径1.25mの円形、断面は深さ1.30m程の円筒状を呈する。底面は円形に一段低く掘り込まれている。壁の崩落を考慮すれば、袋状の土坑であったものかとも思われる。遺物はなんら出土していない。

(4) 4区(第58図)

4区は浅間B軽石の堆積がきわめて薄く、全面に広がっている状態でもなかった。このため、同面で水田跡の検出を試みたものの、確認はついにできなかった。

そこで3区とほぼ同程度の掘り下げを行なったところ、風倒木痕6基が検出された。3区のものよりはやや小規模で、覆土の状態や形状は同様である。やはり遺物の出土はなかった。

風倒木痕の確認時、縄文土器の出土があったが、遺構などは確認できなかった。土器(第60図上段右1)は後期の深鉢で、摩滅が著しく上半部を欠く。文様や底部の圧痕などは見られない。

(5) 5区(第58図)

5区も浅間B軽石は薄く、水田跡の検出は困難であった。下位の遺構確認面は6区ほどではないにせよ、先述のようにかなり上昇している。最も高いのは調査区中央部で、これより東の4区に向けて傾斜している。また、北方向へも傾斜が見られることから、5区は6区から続く微高地の北東端部という立地になる。

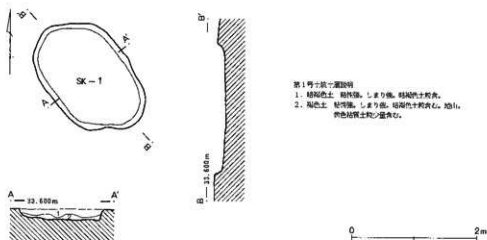
検出された遺構は土坑と溝が各1基である。第1号土坑(第62図)は1.60m×0.90mの楕円形を呈し、平坦な底面までの深さは約10cmとなっている。遺物の出土はない。

第1号溝はおおよそ地形の傾斜に沿い、西から東へ直線的に延びる。検出長は約50m、幅は40cm~60cm、深さは5cm~30cmをそれぞれ測る。横断面はU字形で、底面はやはり西(高)から東(低)へ傾斜している。遺物は図示できなかったが、土師器の細片がわずかに出土している。時期や性格は明ら

かとしえないが、6区の集落跡との関係が考えられる。

北端部に多く見られた小穴はシミ状のもので、人為的な遺構と断定できるものではない。

なお遺構確認に際し、縄文後期の土器片(第60図下段3～5)、弥生土器片(6)、土師器環(1)、須恵器の甕片(2)がわずかながら出土している。このうち、土師器環は60%の残存で、口径12.8cm、器高2.8cmを測る。焼成は普通(B)、色調はにぶい黄橙色を呈する。また、弥生土器はRL縄文帯を沈線で区画する後期の甕片で、南関東地方の土器の特徴を備えている。本遺跡をはじめ、周辺でも該期の遺構は確認されておらず、1区埋没河川出土とともに注意を喚起させるものである。



第62図 5区第1号土坑

(6) 6区(第63図)

6区は森下遺跡西端の調査区である。南西部が最も高位で、これより北、および東へ向けて緩やかに傾斜している。北西端部では埋没河川が検出されている。

遺構も地形の変化に準拠し、南西部に集中する傾向が看取される。これらは奈良・平安時代に属するもので、遺構間の重複もかなり見られる。集落跡としては北東の端部に当たるもので、その中心は本調査区の南西にあるものと思われる。

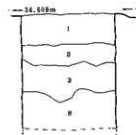
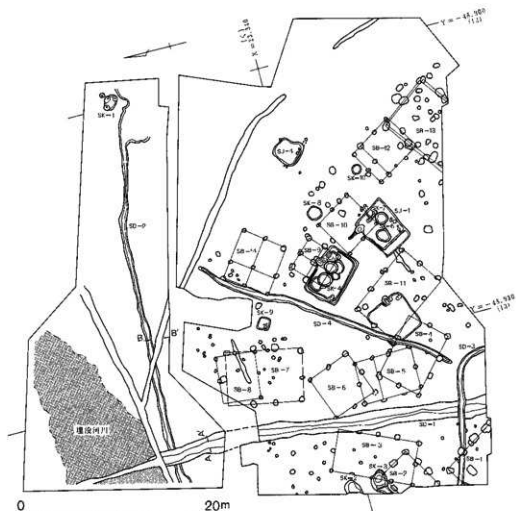
第1号住居跡

き—12—23グリッドを中心に位置する。第6・7号土坑を埋め戻し、第10号掘立柱建物跡を切断して営まれる。拡張の行なわれた住居跡で、新旧2時期に別れる。

旧住居跡(第64図)は軸長4.00m×3.50m、面積は約14.00㎡を測る。全体的は長方形であるが、北壁は新住居跡のために不明確となり、東隅はやや突出している。主軸方向はおよそN—58°—Eを指す。

床面は概ね平坦で、新住居跡のそれより約8cm深くなっている。

カマドは東壁の中央部に付設されており、燃焼部は50cm×60cmの略方形を呈する。火床面は床面からは25cm程掘り込まれ、中央に自然石の支脚が据えられる。煙道は天井部が残り、長さは約80cm

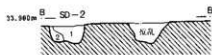
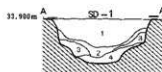


第1号溝土層説明

1. 暗褐色粘質土 しまり、粘性共に強く、スコリア、酸化鉄を全体的に均一に含む。また、小門鏝(厚3~8mm)を多く含む。底に層下平部に黄褐色土層(厚0.1~1mm)を多く含む。
2. 緑灰色粘質土 しまり、粘性共に強く、酸化鉄を全体的に均一に含む。
3. 赤褐色粘質土 しまり、粘性共に強く、酸化鉄を全体的に均一に含む。
4. 緑灰色粘質土 しまり、粘性共に強く、酸化鉄を全体的に均一に含む。

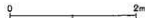
第2号溝土層説明

1. 赤褐色粘質土 しまり、粘性共に強く、酸化鉄を全体的に均一に含む。
2. 緑灰色粘質土 しまり、粘性共に強く、酸化鉄を全体的に均一に含む。



森下0区基本土層説明

1. 黄土 水田耕作土
2. 緑褐色土 粘質土。しまり強。灰黄色黄鉄少量内。
3. 緑褐色土 粘質土。しまり強。弱灰色粘土。
4. 地山 褐色土。粘性あるが、砂質を多く含む。しまり強。

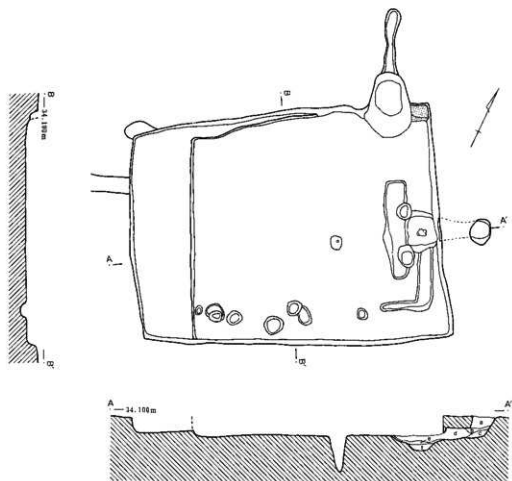


第63図 森下遺跡 6区全体図

である。このうち35cm程は煙り出しの開口部となっている。袖は拡張に際して取り除かれたものと思われ、確認することができなかった。但し燃焼部の手前、焚き口に相当するであろう部分には、二つの浅い小穴が見られた。袖の構築にあたり、芯とする土器が据えられた跡と推測される。燃焼部には南と焚き口部に溝状の施設が付帯し、燃焼部からは周溝状の溝がカギの手形に延びる。ともに浅く、性格は不明である。

本跡で明確な柱穴の検出はなかったが、カマドの正面にやや深いものが認められた。南壁際に並ぶ小穴はいずれも深さ10cm以下である。

遺物の出土はまったく見られなかった。



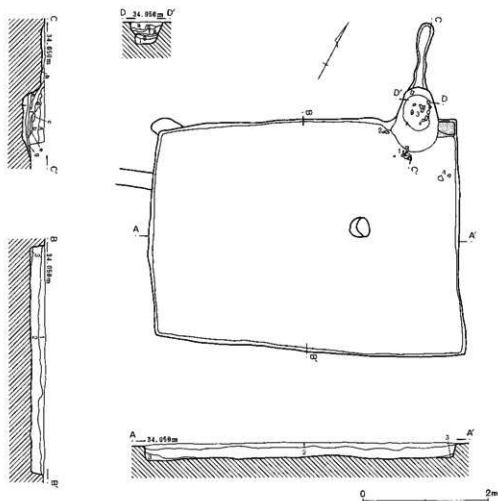
第1号住居跡(古)カマド土層図

- a. 灰土褐色粘質土。焼土少。
 b. 褐色粘質土。
 c. 暗褐色粘質土。壁内時に産産口からふりつまった土と思われる。
 d. 暗褐色粘質土。粘土ブロック(径2-3cm)多。
 e. 暗褐色粘質土。焼土黄白色粘質土層。
 f. 暗褐色粘質土。

0 2m

第64図 6区第1号住居跡(旧住居)

新住居跡(第65図)は西方へ約1mの拡張が行なわれている。規模は4.90m×3.60mを測り、面積は約17.60㎡となる。主軸方向はカマド位置が変わったため、およそ90°移動したN-32°-Wを指している。



第1号住居跡土層説明

1. 暗褐色粘質土 しまり強、粘性強。マンガン粒?含む。炭や灰化物少量。
2. 暗褐色粘質土 しまり強、粘性強。マンガン粒?含む。炭土。灰化物多。
3. 暗黄褐色土 粘質。しまり強。粘性強。褐色土をブロック状に含む。

第1号住居跡(新)カマド土層説明

- a. 暗褐色粘質土 しまり強、粘性強。炭土灰化物少量。
- b. 暗褐色粘質土 しまり強、粘性強。炭土灰化物多。
- c. 暗黄褐色土 炭土。灰化物含む。やや砂質。
- d. 黄褐色土 ブロック。灰化物含む。やや砂質。
- e. 黄土
- f. 暗褐色土 粘性強。灰化物多。
- g. 灰状層
- h. 暗褐色 黄土多。
- i. 灰状層 炭土ブロック混入。

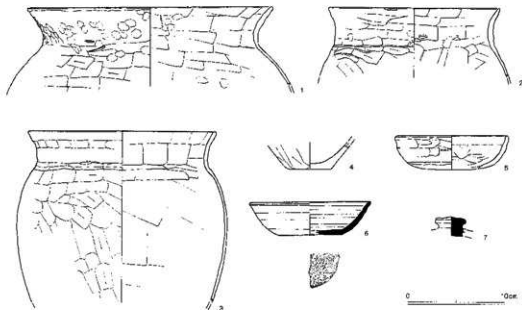
第65図 6区第1号住居跡(新住居)

拡張部の床面は地山面そのまま、旧住居跡の部分は黒色土を充填して貼床としている。旧カマドはきれいに取り払われ、平面的には確認ができなくなっている。新しい床面は中央部がわずかに高まり、いくぶん凹凸を有している。遺構確認面からの深さは約20cmである。

カマドは北壁の東隅に付け替えられている。袖はほとんど検出できなかったが、隅部においてわずかな残存が認められた。これによれば袖は造り付けによるもので、暗褐色土と黄褐色の砂質土からなっている。燃焼部は長径100cm×短径60cmの鶏卵形で、半分ほどは壁外へ突出している。突出部分の壁はよく焼け、硬くしまっている。火床面は床面よりも最大で14cm深く、灰の堆積が見られた。この上部からは、土師器の甕(第66図1・2)が出土している。煙道は長さ100cm、幅15cm程で溝状に延びる。なお、煙道も含めたカマドの軸は、住居跡の壁に対して直交せず、わずかながら東へ偏している。

柱穴や壁溝など、付属施設はまったく検出されなかった。

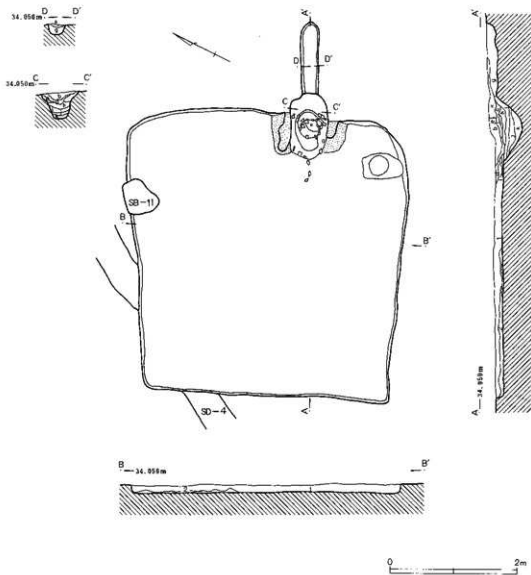
遺物はカマドのほか、覆土中より土師器坏(5)、須恵器坏(6)、同蓋(7)などが出土している。



第66図 第1号住居跡出土遺物

第1号住居跡出土遺物(第66図)

番付	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	(25.6)	(8.2)	-	WW'B'	B	明赤褐	-	カマドNo 3 口縁~胴部片
2	甕	(18.0)	(7.2)	-	WW'	C	にぶい橙	-	カマド一括 口縁片
3	甕	(19.8)	(17.9)	-	WW'R	B	明赤褐	-	カマドNo 1 口縁~胴部片
4	鉢	-	(2.9)	4.5	WW'	B	にぶい褐	-	カマド一括 底部片
5	坏	(12.0)	(3.5)	-	WW'B'	B	にぶい橙	20	覆土 膠料顯著
6	坏	(12.9)	(3.5)	(6.4)	W針	C	灰白	40	覆土 底部回転糸切 南比企産
7	蓋	-	(2.0)	-	W針	B	褐灰	-	覆土 ツマミ径3.2cm 南比企産



第2号住居跡上層説明

1. 粘褐色土 マンガン粒、白色土粉多量、炭化物、鉄土塊多。
2. 凝褐色土 赤褐色土ブロック多量。

第2号住居跡のキマツ上層説明

- a. 灰褐色土 粘性強、白色土粉多量、炭化物。
- b. 凝褐色土 住居跡層(1)に近似する。高褐色土ブロック多量。
- c. 灰褐色土 粘土塊多量。粘性あり。赤褐色土ブロック多。
- d. 凝褐色土 粘性あり。硬質、鉄土多量。
- e. 凝褐色土 質に近似。より砂っぽくなく、高褐色土ブロック多量に含む。
- f. 凝褐色土 砂質。白色土粉多量。
- g. 凝褐色土 に近似。同一層多量。粘性あり。
- h. 地上ブロック キマツ地層(1)より上。
- i. 凝褐色土 質土。粘土ブロック多量。粘性強。
- j. 凝褐色土 多量の粘土を含む。粘性強。
- k. 灰褐色土 粘性強。地上に近似。粘土塊多量。

第67図 6区第2号住居跡

第2号住居跡(第67図)

き—13—21グリッドを中心に位置する。重複する遺構のうち第4号掘立柱建物跡、第4号溝は本跡が切るが、第11号掘立柱建物跡との関係は不明である。全体は方形を呈し、北および東の隅が丸みを有する。軸長4.50m×4.20mを測り、面積は約18.90㎡となる。主軸方向はおよそN-63°-Eを指す。

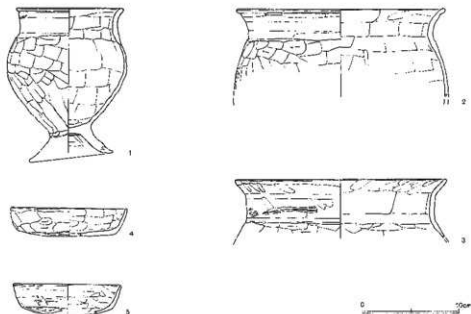
床面は概ね平坦で、遺構確認面からの深さは10cm～15cmである。床自体は貼床であり、黄色の粘質土を基本に砂・小礫が混じる。しまりはよく、特にカマド周辺では硬い。

カマドは東壁の中央、やや南寄りに設けられる。袖は砂礫混じりの粘土を用いて成形されたもので、長さ約60cm(左袖)、幅約30cmである。燃焼部は100cm×60cmの楕円形で、一部は壁外へ突出している。床面からは30cm掘り込まれているが、底から20cm程は使用されておらず、暗褐色土が充填されている。壁は赤焼が顕著で、火床面には薄い灰の堆積がある。煙道は115cm×25cmの溝状で、底面の立ち上がりはきわめて緩い。覆土より台付甕(第68図1)、坏(4)が出土している。

カマドの右手、東隅部やや内側には土坑状の掘り込みがある。60cm×40cmの楕円形で、深さは約25cmを測る。貯蔵穴であろうか。覆土より坏片(5)が出土している。

柱穴、壁溝は検出されなかった。

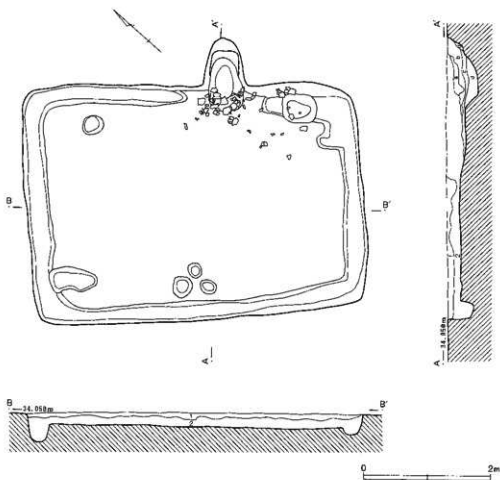
カマド以外の遺物はいずれも覆土中からの出土で、甕や坏の破片が少量である。



第68図 6区第2号住居跡出土遺物

第2号住居跡出土遺物(第68図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	台付甕	11.2	(14.9)	—	WW'B'	C	暗赤褐	80	カマドNo.1
2	甕	(22.0)	(9.2)	—	WW'B'R	C	にぶい橙	—	覆土
3	甕	(22.2)	(6.1)	—	WW'B'	B	にぶい赤褐	—	覆土
4	坏	12.2	2.9	(10.6)	WW'B'	B	にぶい橙	50	カマド一括
5	坏	(11.4)	(3.1)	—	WB'	B	にぶい褐	20	P ₁



第3号住居跡土層説明

1. 暗褐色土 硬質。底5mm前後のマンガン粒多量、赤土粒散在。
2. 暗褐色土 1より厚軟弱。焼土ブロック(径1~2cm)断片多量。

第3号住居跡カマド土層説明

- a. 暗赤褐色土
- b. 赤褐色土。焼土ブロック多。天井構造上。
- c. 赤褐色土。灰、灰層
- d. 暗褐色土。焼土粒・灰・灰少量含む。

第69図 6区第3号住居跡

第3号住居跡(第69図)

き—12—20グリッドを中心に位置する。第9号掘立柱建物跡の柱穴を切断し、第4・5号土坑を埋め戻して設置される。軸長5.30m×3.70mの隅丸長方形で、面積は約19.60㎡を測る。主軸方向はおよそN—45°—Eを指す。

床面は緩やかな凹凸を有し、北から南へやや傾斜している。開口していたと思われる第4・5号土坑部分は貼床となり、それ以外の部分は地山のままである。遺構確認面からの深さは約20cm、壁の立ち上がりは急となっている。

カマドは北東壁に備わる。位置的には中央からわずかに南へ寄る。燃焼部は115cm×65cmの楕円形で、大きく壁外へ突出している。掘り込みは床面から20cmにおよぶが、第2号住居跡と同じく、厚く充填土が詰められている。火床面はほぼ平坦で、灰層の堆積が見られる。これより床面にかけて炭片(第70図1~4)が4個体分出土している。袖、および煙道は検出されなかった。

壁溝は幅約30cmで、カマド部分を除き全周する。深さは10cm程であるが、北西壁下は3cm前後とかなり浅い。

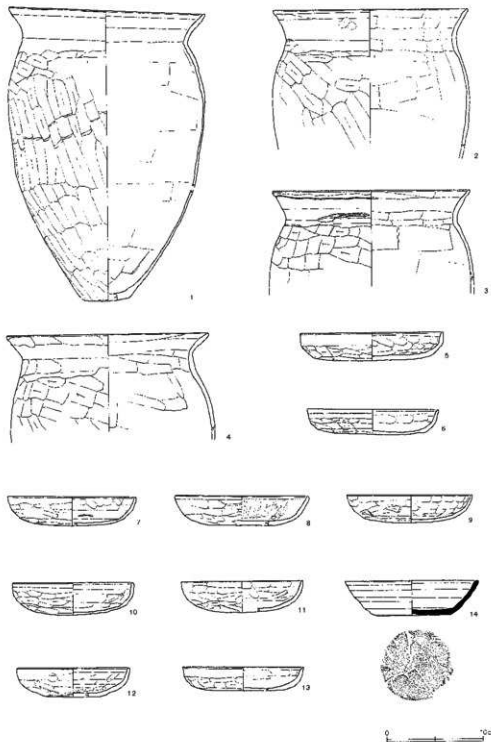
貯蔵穴はカマドの右脇、東隅の壁溝中に穿たれる。55cm×50cmの隅丸方形様で、壁溝底からの深さは約20cmである。覆土上位より須恵器の坏(14)が出土している。

小穴は床面に5本確認された。いずれも柱穴とするにはごく浅いものであるが、南西壁中央の3本はカマドの対位置にあり、入口に関する施設である可能性がある。

遺物の出土はカマドと貯蔵穴の周辺に集中し、覆土中にはほとんど含まれていなかった。

第3号住居跡出土遺物(第70図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	装束	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	20.6	(30.3)	4.2	WW'B'	B	明赤褐	60	カマド 磨耗強い
2	甕	20.2	(14.6)	-	WW'B'	B	橙	25	カマド 口縁歪む 磨耗顕著
3	甕	21.6	(10.1)	-	WW'B'	B	橙	25	カマド 磨耗顕著
4	甕	(20.6)	(10.0)	-	WB'	B	明赤褐	-	カマド 口縁~胴部片 歪み強い
5	坏	(15.0)	3.0	-	WW'	B	橙	50	No.1 磨耗顕著
6	坏	13.8	2.6	-	WW'	B	明赤褐	90	No.6 磨耗顕著
7	坏	(13.6)	3.1	-	WW'	B	橙	30	No.11 磨耗顕著
8	坏	(14.0)	(3.1)	-	WB'	B	にぶい橙	10	覆土 磨耗顕著
9	坏	(12.8)	2.9	-	WW'B'	B	明赤褐	50	No.2 磨耗顕著
10	坏	12.6	3.4	-	WW'B'	B	橙	70	No.10 磨耗顕著
11	坏	(12.8)	(3.3)	-	WW'B'	B	橙	20	覆土 磨耗顕著 9と同一個体か
12	坏	(12.0)	(3.0)	-	WW'B'	B	にぶい橙	20	覆土 磨耗顕著
13	坏	(12.8)	(2.5)	-	WW'R	B	橙	15	覆土一括 磨耗顕著
14	坏	(13.8)	3.7	7.1	WW'針	B	灰白	60	貯蔵穴上層 底部回転糸切 南北企産



第70图 6区第3号住居跡出土遺物

第4号住居跡(第71図)

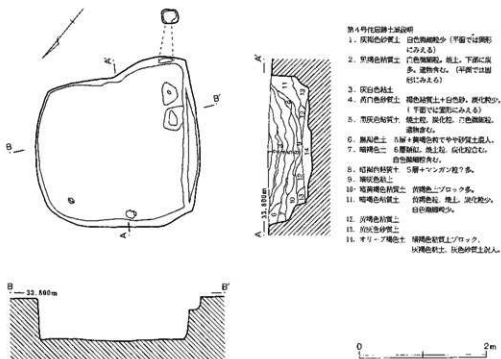
く—12—3グリッドを中心に位置する。他の遺構との重複は認められない。本跡は当初、土坑として調査に着手したことから、カマド部の精査を行なわなかったなどの不備が生じてしまった。また、形状やカマドの位置も不明確であり、最後まで住居跡として認識することが困難であった。このため、以下ではかなりの憶測を含んだ記述となる。現状では軸長2.60m×2.30mの不整形で、面積は約6.00㎡となる。主軸方向はおよそS—38°—Eを指す。しかし、南西の壁の段を本来的な壁と考えると、全体は隅丸の方形で、面積ももっと減少するのかもしれない。

観察記録によれば覆土は自然堆積を示し、最下層の14層のみが貼り詰められたもの(貼床)のようである。底面はかなりの凹凸を有し、14層上面は中央部が高まっている。床のとして検出が行なわれていないため、同面の状態は不明である。土層図では、遺構確認面からの深さは約55cmとなる。

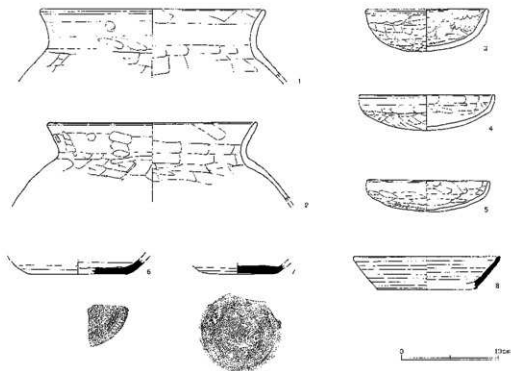
カマドは住居跡の北隅に備わっていたらしい。写真撮影のための清掃を行なったところ、壁に煙道の穿孔が現われた。これにより、本跡がカマドを備える住居跡であったことが判明した。時既におそし。カマド本体はすべて破壊してしまっており、構造についてはなんら観察できなかった。予断をもって調査に臨むことの恐ろしさ。敢て戒めとしたい。

遺物は覆土上層より土師器の甕、坏、須恵器の坏が少量出土している。

強いて本跡の特徴を挙げるならば、非常に小型の住居跡であること、またカマドの位置が他に比して大きく異なること、となろう。



第71図 6区第4号住居跡



第72図 6区第4号住居跡出土遺物

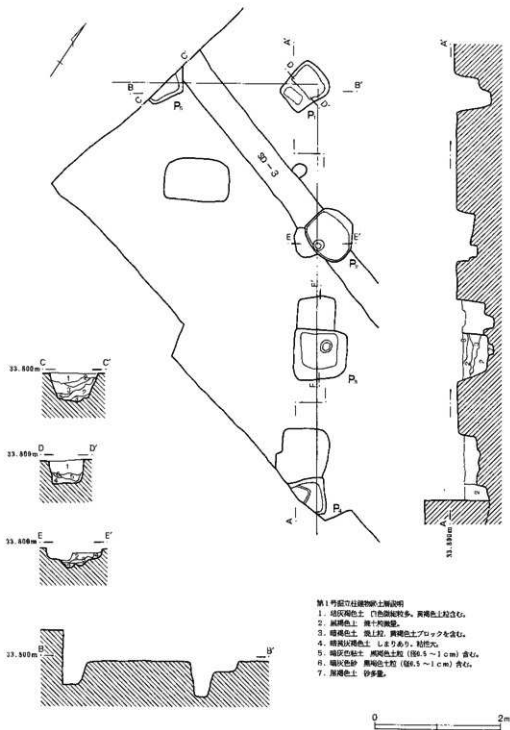
第4号住居跡出土遺物(第72図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	施釉	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	(23.6)	(7.1)	—	WW'B'	B	にぶい褐色	—	4層 口縁片 磨耗顕著
2	甕	(22.0)	(8.3)	—	WW'	B	橙	—	4層 口縁片 磨耗顕著
3	環	13.0	4.4	—	WW'B'	B	明赤褐色	100	No.2 内面黒色処理
4	環	14.2	3.7	—	WW'B'	B	橙	100	No.1 磨耗顕著
5	環	13.2	3.2	—	WW'B'	B	橙	100	6層 磨耗顕著
6	環	—	(1.6)	(10.4)	WB'針	B	黄灰	—	覆土 底部回転へラ削り 南北企
7	環	—	(1.2)	7.5	W	B	黄灰	—	4層 底部回転糸切・底縁へラ削り
8	環	(15.4)	(3.45)	(10.6)	WW'	B	灰	20	4層 底部周縁回転へラ削り

第1号掘立柱建物跡(第73図)

き-13-13グリッドを中心に位置し、第3号溝を切断している。南および西は調査区外へ延びており、全体の規模や形状は不明である。3間×2間の南北棟であろうか。検出分では南北6.30mを測り、その方向はおおよそN-33°-Wを指す。なお、P₂~P₄には重複する柱穴が見られる。本建物跡よりP2のものは新しく、P3とP4のものは古い。後者はなんらかの建物を構成する柱穴と考えられるが、それぞれの建て替えなのか、別の建物なのかは明らかとしえなかった。

本跡を南北棟と仮定するならば、桁行はP₁-P₂間が2.50m、P₂-P₃間が1.50m、P₃-P₄間が2.30mとなり、かなり不規則である。また、中央のP₂とP₃は柱筋の外側へやや出ている。梁行は



第73図 6区第1号掘立柱建物跡

P_1 — P_3 間で2.50mとなる。

柱穴の掘り方は方形ないし長方形で、横断面は逆台形を呈する。長辺80cm前後、深さは40cm程である。底面は概ね平坦で、 P_2 と P_3 には小穴が伴う。覆土は充填されたような様子が窺えず、いずれでも柱痕は観察できなかった。

遺物は P_2 から須恵器の甕片(第88図上段1・2)が出土している。 P_1 ・ P_2 ・ P_3 からも土師器の甕、須恵器の坏などが出土しているが、微細な破片であるため図示できなかった。

第2号掘立柱建物跡(第74図)

き—13—22グリッドを中心に位置する。重複関係は、第3号掘立柱建物跡よりも新しく、第3号土坑よりも古い。西側は調査区外となるため、全体の規模は不明である。可能性としては、3間×2間の東西棟と考えられる。この場合の規模は、桁行4.70m×梁行3.60mを測り、主軸方向はおおよそN—58°—Eを指す。柱間は桁行が1.60m、梁行が1.80mとなる。

柱穴の掘り方は70cm×50cm程の長方形を基本とし、深さは35cm～60cmと統一性に欠ける。南側棟の柱筋は通りがやや悪く、第1号掘立柱建物跡同様、中央の2穴は外側へずれている。隅柱穴は構造上からか、斜位に掘り込まれている。柱痕は P_4 のみで観察された。これより推定される柱の太さは、約20cmである。

遺物は P_3 より須恵器の甕片(第88図中段左1)が出土している。他の柱穴からも土師器の甕などが出土しているが、いずれも細片であるため図示できなかった。

なお、本跡を3間×2間の東西棟と想定すると、西側妻と第1号掘立柱建物跡の東側棟のラインは一致する。間隔は約1.80mである。構造的にも両者は近似しており、同時併存した建物跡の可能性が高い。

第3号掘立柱建物跡(第75図)

き—13—22グリッドを中心に位置する。第2号掘立柱建物跡、および第1号溝に切られる。4間×2間の南北棟で、桁行8.70m×梁行4.50mをそれぞれ測る。柱間は桁行が2.15m、梁行2.20mとほぼ等間隔である。主軸方向はおおよそN—25°—Eを指す。

柱穴の配置は概ね整然となされているが、北側妻の中央柱は柱筋の外側へ外れている。

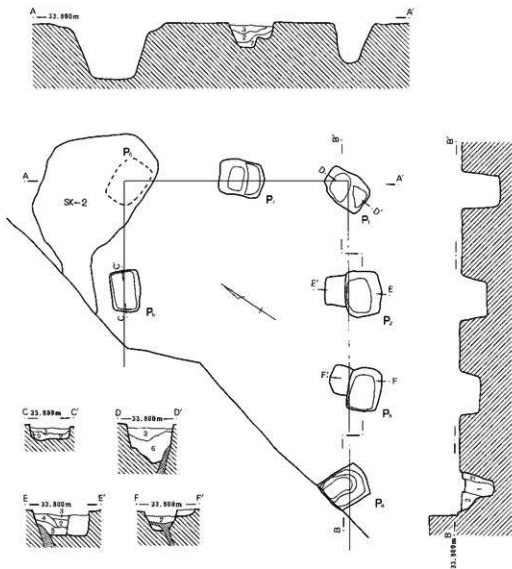
掘り方は長辺35cm～50cm、短辺25cm～40cmの隅丸長方形を基本としている。総じて掘り込みは浅く、深さは10cm～40cmである。特に西の棟側は著しく浅い。明瞭な柱痕は観察できなかった。

遺物は P_6 ～ P_8 ・ P_{10} より土師器の甕、須恵器の坏が出土しているが、細片で図示できるものはなかった。

第4号掘立柱建物跡(第76図)

き—13—16グリッドを中心に位置する。 P_2 は第2号住居跡の床面精空中に検出されたが、 P_4 は既に底面まで削られてしまっていた。第5号掘立柱建物跡は本跡の P_1 が、第4号溝は同じく P_2 がそれぞれ切っている。3間×2間の南北棟で、桁行7.00m×梁行4.70mを測る。柱間は桁行・梁行ともに2.30mを基本とするようであるが、 P_1 — P_3 間が2.50m、 P_2 — P_3 間が1.80mと乱れる部分がある。主軸方向はおおよそN—25°—Eを指す。

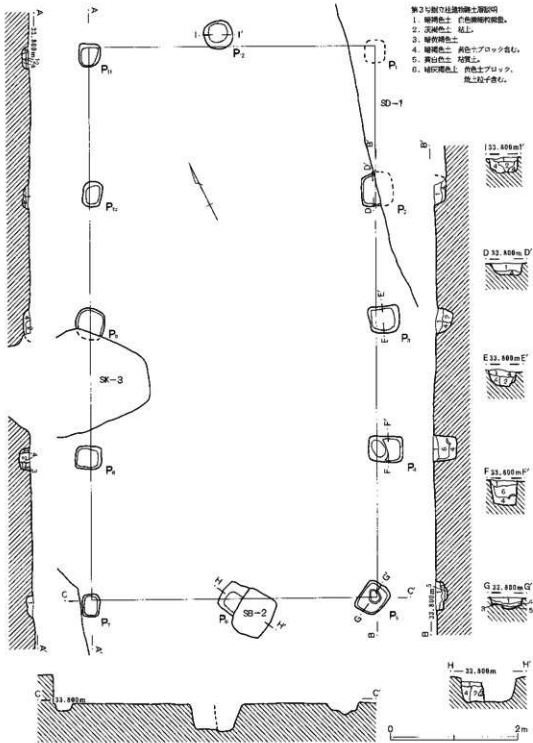
柱穴の配置はおおよそ整ったものながら、南側棟の中央2穴は第1・2号掘立柱建物跡と同様、

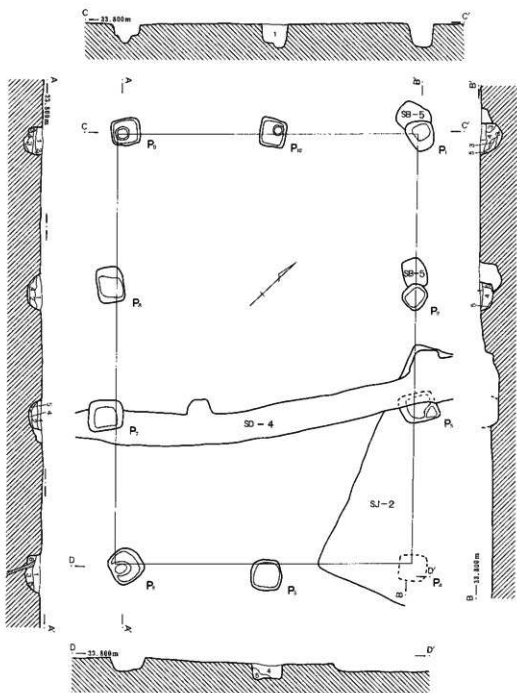


第2号柱立柱礎跡土層説明

1. 暗灰褐色土 炭粉層。
2. 灰褐色土 黄土ブロック (厚1~2cm) を含む。
3. 暗灰褐色土 白色炭粉粒多、黄土粒層層、黄褐色土ブロック (厚1~2cm) を含む。
4. 暗灰褐色土 白色炭粉粒少、砂少。
5. 暗灰褐色土 砂質土、4層土に多量に砂を含む。
6. 暗褐色土 黄土粒、炭化残存。
7. 黄褐色土 砂多量。

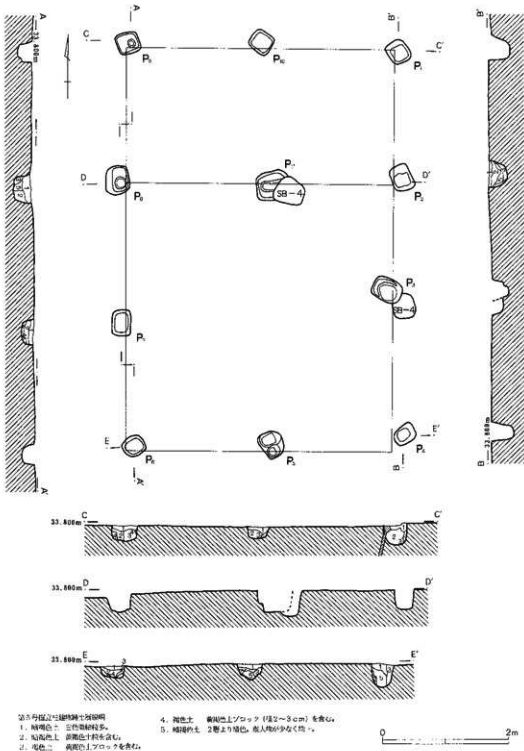
第74図 6区第2号掘立柱建物跡





- 第4号掘立柱建物跡土層説明
1. 赤褐色土 白色炭粉的多。
 2. 暗褐色土 白色炭粉粒多。黄色粘質土。1層よりやや細かい。
 3. 暗褐色土 黄色粒(径2~3mm)多。
 4. 黒褐色土
 5. 暗褐色土 黄色ブロック(径2~3cm)含む。
 6. 暗褐色土 砂質土(噴砂の影響によるもの)

第76図 6区第4号掘立柱建物跡



第77図 6区第5号掘立柱建物跡

柱筋の外へやや出ている。また、東側妻の中央柱も同様で、棟持柱状の配置である。

掘り方は隅丸の方形ないし長方形で、一辺40cm～60cmを測る。掘り込みは浅く、遺構確認面からの深さは25cm～35cmである。柱痕は観察されなかった。

遺物はP₆～P₈で土師器の甕が出土しているが、細片のため図示できなかった。

第5号掘立柱建物跡(第77図)

き—13—21グリッドを中心に位置する。第4号掘立柱建物跡にP₉とP₁₁を切られる。3間×2間の南北棟で、中央棟筋の北側にも柱穴を備える。2間×2間の身舎に庇のつく建物跡かとも思われたが、庇とすれば北庇となり不自然である。身舎と庇の間隔も桁行と等しいことを加味すれば、P₁₁はむしろ東柱と考えるべきであろう。

このときの規模は桁行6.30m×梁行4.20mを測り、柱間は桁行・梁行ともに2.10mとなる。主軸方向はほぼ座標北を指す。

柱穴の配置はいくぶん乱れている。南東隅のP₆は棟側・妻側とも柱筋から大きく外れ、西側棟のP₇・P₈も柱筋の外へ出ている。また、北側妻の中央柱P₁₀も外側へ外れ、棟持柱様の配置となっている。

柱穴の掘り方は略方形から長方形で、長辺は25cm～40cmである。遺構確認面からの深さは20cm～40cmと浅く、隅柱が深い傾向にある。

いずれも細かい破片のため図示できなかったが、P₉・P₁₀・P₁₁それぞれより土師器の甕が出土している。

第6号掘立柱建物跡(第78図)

き—13—21グリッドを中心に位置する。調査終了後、図面整理の段階で確認された。第1号溝、および噴砂によって切断される。北側妻(?)の中央柱は検出されていないが、ほぼ正方形を呈する2間×2間の建物跡である。主軸は不明ながら、桁行と梁行はそれぞれ4.80mを測り、柱間もともに2.40mとなる。南北棟とすれば、主軸の方向はおよそN—20°—Wである。

柱穴の配置は比較的整っており、概ね各柱穴の長辺を柱筋に揃えている。

柱穴の掘り方は長辺40cm～60cm、短辺35cm～45cmの長方形で、深さは15cm～30cmと全体に浅い。柱痕など覆土については、性格不明のピットとして調査を行なったため、まったく不明である。

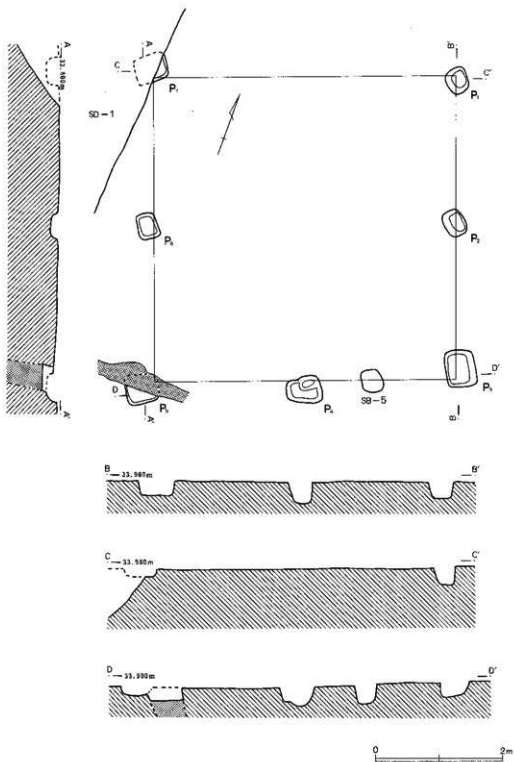
遺物は図示することができなかったが、P₁・P₂・P₃・P₄より土師器の甕片などが少量出土している。

第7号掘立柱建物跡(第79・80図)

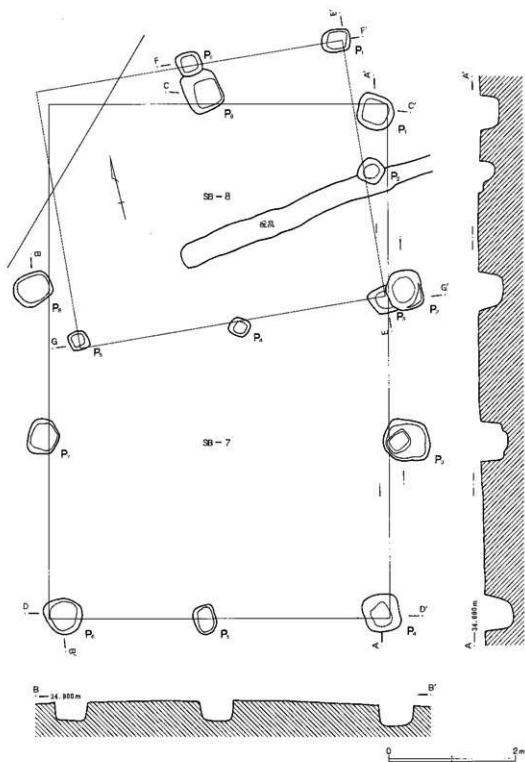
く—13—6グリッドを中心に位置する。本跡も調査後に図上で検出された遺構であり、北西隅は調査区外となる。第8号掘立柱建物跡を切る3間×2間の南北棟で、規模は桁行8.10m×梁行5.40mである。柱間は桁行・梁行ともに2.70mとなり、主軸方向はおよそN—14°—Eを指す。

柱穴の配置は第1・2・4号掘立柱建物跡と同じく、両側棟の中央2穴が柱筋の外へ出ている。建物の構造上、こうした特徴が何に起因するのかは定かとしえない。また、北側妻の中央柱も外へ外れている。

掘り方は楕円形、ないしは隅丸の長方形を呈し、長径45cm～75cmを測る。遺構確認面からの深さ



第78图 6区第6号掘立柱建物跡



第79图 6区第7号・8号掘立柱建物跡(1)

は25cm～45cmで、30cm前後のものが多く。調査では建物跡として扱っていないため、覆土の観察は充分に行なわれていない。このため、柱痕等についてはまったく不明である。

遺物はP₁より須恵器の坏、P₆・P₇より土師器の甕が出土している。いずれも細かい破片であるため、図示することができなかった。

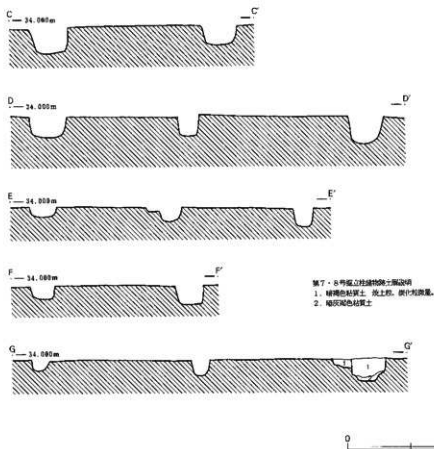
第8号掘立柱建物跡(第79・80図)

く-13-6グリッドを中心に位置する。P₃は第7号掘立柱建物跡に切断される。北西部は調査区外となるため、全体の間数や規模は不明である。現状から推せば、2間×2間の東西棟となるようである。この場合の桁行は4.90m、梁行は4.10mを測り、柱間は桁行が2.45m、梁行が2.05mとなる。同じく主軸の方向はおよそN-86'-Wを指す。

西側の甕では検出されていないが、他の柱筋とともに中央の柱が外へ出る配置となっている。

柱穴の掘り方は隅丸方形で、かなり小型である。一边は30cm～40cm、確認面からの深さは15cm～30cmを測る。本跡も建物跡として調査に臨んでいないため、柱痕等の観察は行なわれていない。

図示できなかったが、P₃より土師器の甕片が出土している。



第80図 6区第7号・8号掘立柱建物跡(2)

第9号掘立柱建物跡(第81図)

き—12—24グリッドを中心に位置する。第3号住居跡と重複し、南隅のP₃が同住居跡の床面精査中に検出された。しかし、P₄・P₅はその推定される位置での確認はできなかった。2間×2間の総柱建物で、一辺3.60m、柱間とともに1.80mとなる。

北西辺と南東辺の柱筋は中央柱が外へ出ており、棟持柱様の柱穴配置となっている。このことから、両辺が裏の側になるものと考えられる。この時の主軸方向はおよそN—45°—Wを指す。

柱穴の掘り方は隅丸方形を基本としながらも、楕円形、長方形のものがあるなど一定しない。長辺は45cm～80cm、深さは15cm～40cmである。P₁およびP₃で柱痕が観察された。これより想定される柱の太さは、15cm程度である。

遺物はなんら出土していない。

第10号掘立柱建物跡(第82図)

き—12—23グリッドを中心に位置する。南隅のP₁を第1号住居跡に削取られ、かつ第7号土坑に切断される。2間×2間の倉庫様建物だが、中心の束柱は検出されなかった。規模は一辺4.40mを測り、柱間とともに2.20mとなる。桁行・梁行の方向は不明である。仮に主軸を北西—南東にとれば、その方向はおよそN—37°—Wとなる。

柱筋は四辺とも、その中央柱がやや外へ外れている。

柱穴の掘り方は円形から隅丸方形を呈し、径(辺)は35cm前後である。深さは15cm～35cmと一定しないが、全体的には25cm程のものが多く、P₁～P₅では柱痕が観察された。それらから想定される柱の太さは、15cm程度である。

遺物の出土はまったく見られなかった。

第11号掘立柱建物跡(第83図)

き—12—20グリッドを中心に位置する。第2号住居跡と重複するが、新旧関係は明らかとしえなかった。遺構確認時に本跡の柱穴が検出されなかったことを考えれば、既に第2号住居跡に切られていた可能性がある。全体は3間×2間の南北棟で、規模は桁行8.00m×梁行5.20mを測る。主軸方向はおよそN—36°—Wを指す。

柱間は桁行2.70m、梁行2.60mとほぼ等間隔である。但し、西側棟の柱筋がやや斜行するため、北側妻は広く(5.40m)、逆に南側妻は狭い(4.80m)柱穴の配置となる。

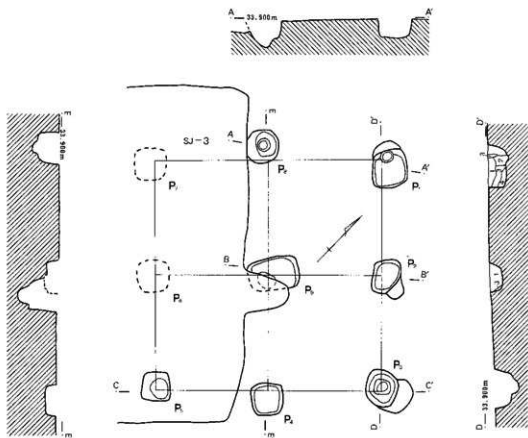
柱穴の掘り方は楕円形、ないしは隅丸方形を基本としているようである。柱は抜き取られたものらしく、掘り方は大きく広がっている。この掘り込みは斜めに入っており、覆土はほとんど単一となっている。現状では長径40cm～65cm、深さ15cm～45cmをそれぞれ測る。

本跡に伴うか否かは不明だが、柱穴脇から土師器の坏(第88図中段右1・2)が出土している。

第12号掘立柱建物跡(第84図)

き—12—18グリッドを中心に位置する。第13号掘立柱建物跡と重複するが、直接切り合う柱穴がないため新旧関係は不明である。全体は2間×2間の身舎に北庇のつく特異な構造で、桁行・梁行4.10mの方形建物である。主軸の方向はおよそN—32°—Wを指す。

柱穴を均等に配置しようとする意図は窺えるものの、西側の棟は1本多く、しかも柱間や柱筋も



第9号掘立柱建物跡土層図例

1. 暗褐色土 炭屑较多、黄色土粒(径2~3mm)含む。
2. 暗灰色粘質土。
3. 黄褐色粘質土 黄色土粒多。
4. 暗褐色土 黄色土ブロック(径2~3mm)多。

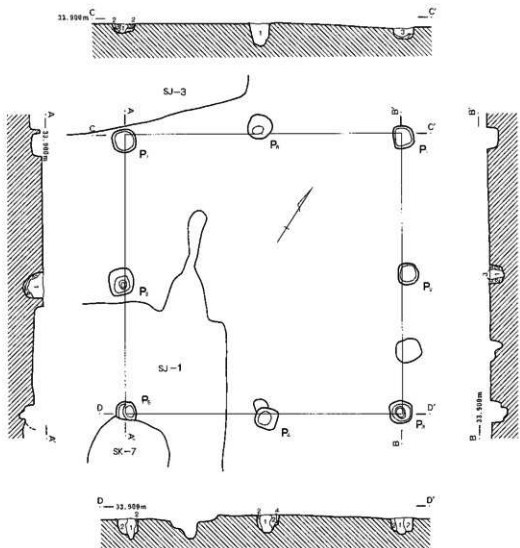


第81图 6区第9号掘立柱建物跡

かなり乱れている。さらに P_4 を除けば、いずれの中間柱も規模が小さい。基本的には、桁行・梁行とも柱間は2.05mとなろう。北側の妻と庇の間は1.15mを測る。

柱穴の掘り方は円形、ないしは隅丸方形である。規模は隅柱と P_4 が径50cmで深さ40cm前後、それ以外の中間柱が径30cmで深さ20cm前後となっている。観察された隅柱($P_1 \cdot P_2 \cdot P_3$)の柱痕からは、太さ約15cmの柱が想定される。

遺物の出土は見られなかった。

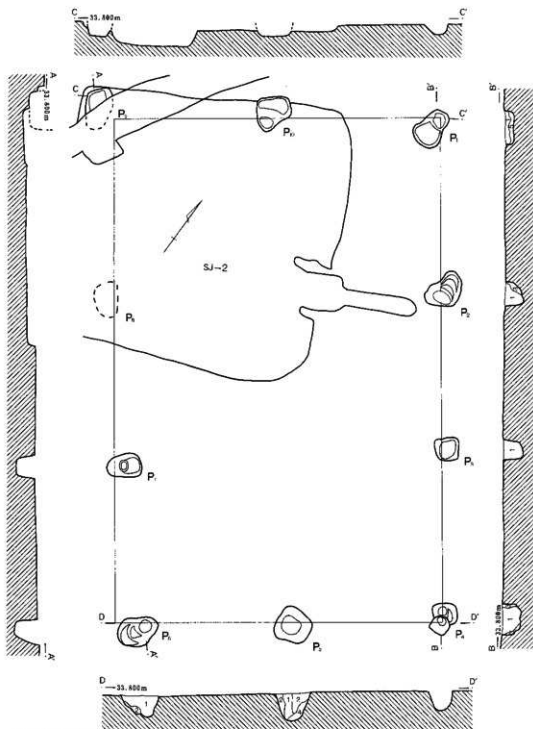


第10号窟立柱跡地層説明

1. 黄褐色土 第十层、厚1.0m余。
2. 黄褐色土 黄色土较多。
3. 桔褐色土 白色陶磁片、土粒稍重。
4. 褐色土 黄色土ブロック状。

0 2m

第82図 6区第10号窟立柱建物跡

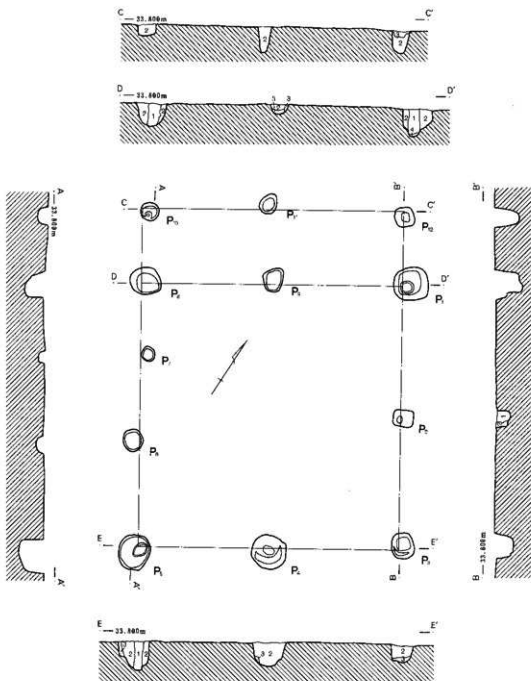


第11号居住跡の土層説明

1. 黒褐色土 均一、黄土少。
2. 緑褐色土 灰色粒少。
3. 褐色 黄色土ブロック含む。
4. 黒褐色土 一部踏圧、やや明るい。
5. 暗褐色砂質土 (地山砂質)

0 2m

第83図 6区第11号住居跡



第12号掘立柱建物跡土層説明

1. 暗赤褐色土、粘土、粘板。
2. 暗褐色土、黄土層、灰化灰少層。
3. 褐色土、黄色土ブロック (厚1~2cm) 。
4. 灰褐色粘土。
5. 暗褐色砂質土、地山砂合。

第84図 6区第12号掘立柱建物跡

第13号掘立柱建物跡(第85・86図)

き-12-12グリッドを中心に位置する。南西部は調査区外へ延びているため、全体の規模や構造は不明である。現状では梁行2間、桁行2間以上の南北棟になると推定される。柱穴には各々建て替えによると思われる重複が見られる。なかでもP₅・P₆は新しいものが古いものを完全に掘り抜いている。ここでは本跡を南北棟と仮定したうえで、新旧それぞれの建物跡について述べていく。

旧建物跡は桁行(5.80m)×梁行5.90mで、桁行の柱間は2.90mとなる。梁行の柱間はP₅・P₆が掘り抜かれているため不明確であるが、おそらくは同程度の寸法になると考えられる。主軸方向はおおよそN-49°-Eを指す。

柱穴は柱筋に対し平行、または直交する配置を取るが、隅柱は斜めとなっている。

掘り方はP₄のみが方形で、他は隅丸の長方形である。規模的にも長方形のものが65cm×110cm程度と大型であるのに比し、P₄は一辺約55cmと小さい。但し、深さには差がなく、概ね50cm～70cmの範囲内におさまる。

新建物跡は桁行(5.60m)×梁行6.30mを測る。柱間はおおよそ桁行が2.80m、梁行が3.15m程となる。主軸方向はおおよそN-52°-Eを指す。

柱穴の配置はほぼ旧建物跡のそれを踏襲しているが、結果的には主軸方向がやや西へ偏したものとなっている。

掘り方は長方形が主体的で、P₆のみが不整の円形を呈している。長径は90cm前後で、深さは40cm×100cmと一定していない。柱痕はP₁・P₃・P₄で観察されており、これより想定される柱の太さは約20cmとなる。

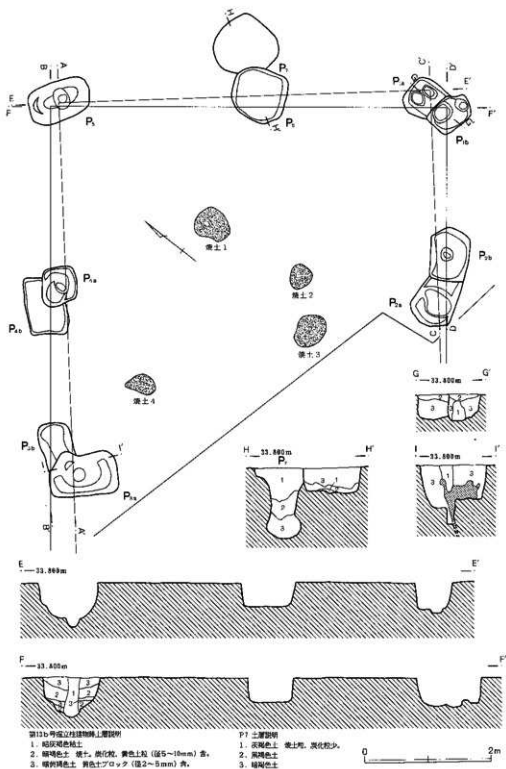
遺物は現地で一括して収納してしまっているため、新旧いずれの柱穴に伴うものかはわからなくなっている。註記によれば、P₁より須恵器の坏(第88図下段3)、および甕(6)、P₄より甕(5)、P₆より坏(4)の破片が出土している。

なお、本跡に伴うとの確証は得られなかったが、建物内部には4箇所焼土分布が見られた。各焼土の広がり円形に近く、その周囲にもやや散っている。建物の柱穴よりも上位で確認された点を考慮すれば、屋内の炉跡としてもよさそうである。しかし、焼土は炉跡のような明確な掘り込みは持たず、地山がそのまま焼けたものようである。また、炉床のように硬く焼けしまったものでもなく、全体が一つのブロック状となっている。焼土1から土師器の甕片(1)、焼土3から蓋と思われるつまみ部片(2)が出土している。

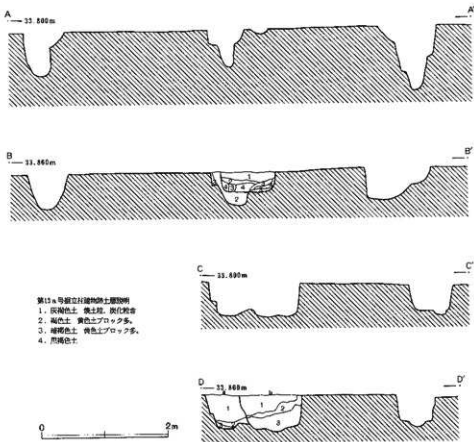
第14号掘立柱建物跡(第87図)

く-12-4グリッドを中心に位置する。調査後に図上で検出された。第4号溝と重複するが、観察を怠ったため新旧関係は明らかでない。2間×2間の総柱建物、あるいは1間×2間の身舎に北庇のつく建物に復元される。しかし、柱穴の配置は乱れており、柱筋の通りはかなり悪い。可能性として挙げてはおくが、建物跡とはならないかもしれない。

本跡を南北棟の総柱建物と仮定すると、桁行は5.30m、梁行は4.80mとなる。柱間は梁行が2.40mとほぼ同等であるものの、桁行はP₁-P₂間で1.80m、P₂-P₃間で3.60m、またP₇-P₈間で2.40m、P₈-P₉間で3.00mなどと不揃いになってしまう。主軸方向も取りづらいが、おおよそN-54°



第85図 6区第13号掘立柱建物跡(1)



第86図 6区第13号掘立柱建物跡(2)

—Wとなる。

掘り方は隅丸の方形ないしは楕円形で、長径35cm～55cm、深さ25cm～35cmと小型である。いずれの柱穴(?)においても断面の観察は行なっていないため、柱痕などは不明である。

遺物は図示できなかったが、P₁以外からは土師器の壺片が出土している。建物跡か否かはともかく、柱穴自体は他の掘立柱建物跡と同時期としてよさそうである。

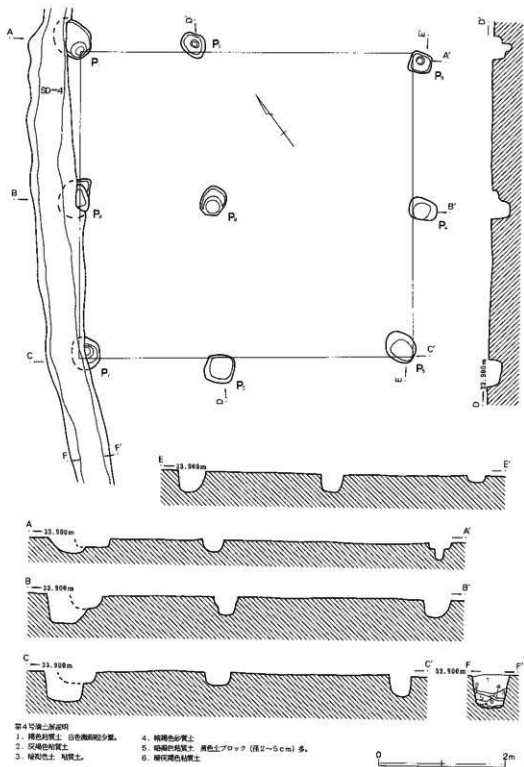
第1号土坑(第93窟)

調査区の北東端、く—11—15グリッドに位置する。1.50m×1.10mの楕円形を呈するシミ状の遺構である。掘り込みは明確なものではなく、壁はだらだらと下がっていく。遺構確認面からの深さは約5cmときわめて浅い。

底面は概ね平坦で、壁際には小土坑3基が存在する。いずれも楕円形の浅いもので、覆土も同様である。本跡の北東に見られる土坑は、周りに他の遺構が検出されていないことから、関連したものではないかと思われる。

覆土中から土師器の壺が1点出土している。細片のため、図示できなかった。

こうした状況から見て、本跡は奈良・平安時代に属する遺構と考えられる。



第4号出土品説明

1. 褐色粘質土 白色微細砂少量。
2. 灰褐色粘質土。
3. 緑褐色土 粘質土。

4. 暗褐色砂質土。
5. 暗褐色粘質土 黄色土ブロック (厚2~5cm) 多。
6. 暗灰褐色粘質土。

0 2m

第87図 6区第14号掘立柱建物跡

SB-1



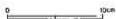
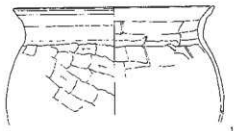
SB-2



SB-11



SB-13



第88图 6区第1号・2号・11号・13号掘立柱建物跡出土遺物

第1号・2号・11号・13号掘立柱建物跡出土遺物(第88図)

SB-1

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	—	—	—	WW'	B	灰	—	P ₂ 外面叩き 内面ナデ
2	壺	—	—	—	W	B	灰	—	P ₂ 外面叩き+ナデ 内面ナデ

SB-2

1	壺	—	—	—	WW'	B	灰	—	P ₃ 外面格子状叩き+ナデ 内面ナデ
---	---	---	---	---	-----	---	---	---	--------------------------------

SB-11

1	坏	(13.0)	(3.6)	—	WW'B'	B	明褐	45	磨耗顕著
2	坏	13.0	3.2	—	WW'B'	C	にぶい黄橙	70	磨耗顕著

SB-13

1	壺	(21.0)	(11.4)	—	WW'B'	C	橙	—	焼土1 口縁片
2	蓋	(5.0)	(4.1)	—	WW'	C	にぶい黄橙	—	焼土3 ツマミ部片
3	坏	(11.8)	(3.5)	(6.8)	WW'針	B	灰	20	P ₁ 底部周縁回転ヘラ削り
4	坏	—	(1.6)	(5.0)	W'針	B	灰	—	P ₄ 底部回転糸切
5	壺	—	—	—	WW'	B	灰	—	P ₄ 同一個体
6	壺	—	—	—	WW'	B	灰	—	P ₁ 外面格子状板目叩き

第2号土坑(第89図)

く-13-3グリッドに位置する。西側は調査区外となるため、全体の規模や形状は不明である。現状では2.80m×2.30m程の楕円形となる。壁の掘り込みは急で、確認面からの深さは約0.80mを測る。底面はおよそ平坦なものの、横断面は舟底形を呈する。

覆土はほぼ粘質の灰褐色土単一で、大型の礫を含んでいる。

遺物の出土は見られなかったが、覆土の状態から見て中世以降の所産と考えられる。

第3号土坑(第89図)

き-13-23グリッド、第2号土坑の南側に並ぶようにして検出された。2.00m×1.80mの不整の楕円形で、確認面からは1.30mの深さを有する。上部は0.30m程でいったんテラス状の平坦部となり、その中央が直径約1.90mの円形に掘り込まれる。この横断面は逆台形を呈し、底面は概ね平坦となる。第3号掘立柱建物跡を切断していること、覆土の状況などから推して、本跡は中世以降の構築と考えられる。

覆土は第2号土坑に近似し、大型礫を含む灰褐色粘質土を主体としている。

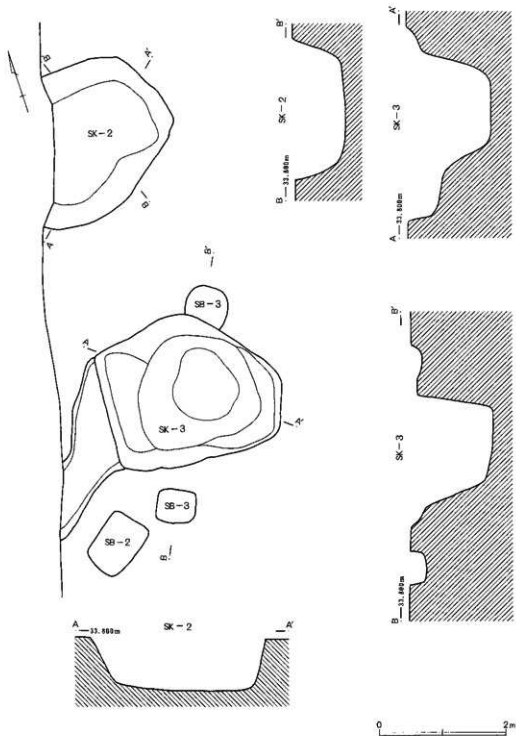
遺物は図示できなかったが、土師器の壺片が出土している。

第4号土坑(第90図)

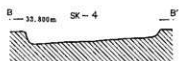
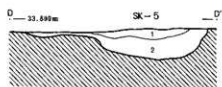
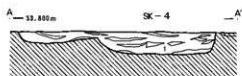
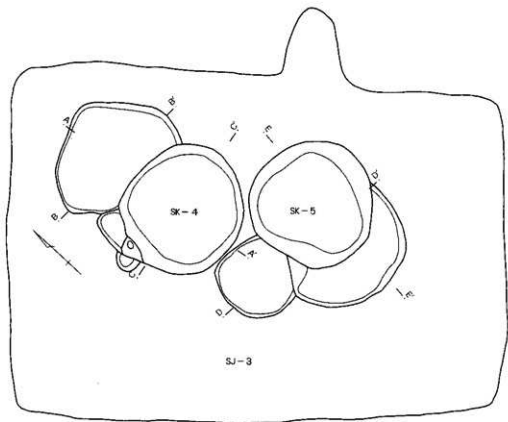
き-13-23グリッド、第3号住居跡の中に位置する。同住居跡の床面中に検出された土坑で、円形のものが2基重複したような形態である。南の土坑は直径2.00mで深さ約40cm、北側のそれは径2.10m×1.70mで深さ約20cmである。北側の土坑は円が崩れ、やや不整形である。

覆土は共通しており、暗褐色土中に黄褐色土の薄層を幾重にも挟み込んでいる。これは第3号住居跡の構築に際し、人為的に充填されたもので、かなり硬くしまっている。このことから、第4号土坑はいわゆる住居内土坑と判断される。

遺物は覆土中より壺(第91図左1)の口縁が出土したのみである。



第89图 6区第2号・3号土坑



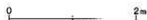
第4号土坑土層説明

1. 暗褐色土 人為的な埋め戻しと考えられる。黄褐色土の海層を部分的に残す。

第5号土坑土層説明

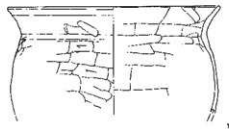
1. 暗褐色土 粘性、しまり大、白色無細砂多。

2. 暗褐色土 粘性、しまり大、焼土粒、炭化粒多。

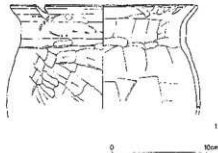


第90図 6区第4号・5号土坑

SK-4



SK-5



第91図 6区第4号・5号土坑出土遺物

第4号・5号土坑出土遺物(第91図)

SK-4

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	(22.0)	(11.2)	-	WW'B'	C	明赤褐	-	覆土 口縁片

SK-5

1	甕	(19.6)	(10.8)	-	WW'B'	B	明赤褐	-	覆土 口縁片
---	---	--------	--------	---	-------	---	-----	---	--------

第5号土坑(第90図)

第4号土坑同様、第3号住居跡の床面精査中に検出された。グリッド上の位置も同じで、第4号土坑の南に隣接している。3基の円形土坑が重複し合ったような形状であるが、覆土の観察からは新旧関係が窺えない。規模は北西のいちばん深い土坑で径2.00m、深さ50cmである。

やはり覆土は人為的に充填されたもので、上層(第3号住居跡の床面部分)は特に硬くしまっている。本跡もいわゆる住居内土坑であろう。

遺物は細片であるが、土師器の坏や甕(第91図右1)がわずかながら出土している。

第6号土坑(第92図)

き-12-19グリッド、第1号住居跡の中に位置する。検出は旧住居跡の床面精査中である。全体は径1.30m×1.20mの略円形で、旧住居跡床面からの深さは約15cmである。掘り込みは比較的明確に行なわれ、底面はほぼ平坦となっている。

覆土は暗褐色土の単層で、硬く踏みしまっている。故意に埋め戻されたものと思われる。

遺物は微細破片のため図示できなかったが、土師器の甕、須恵器の坏がそれぞれ出土している。

第7号土坑(第92図)

き-12-19グリッドで第6号土坑に東隣する。やはり第1号住居跡の床面精査中に検出されている。規模と形状は第6号土坑に等しく、径1.30m×1.20mの略円形である。掘り込みはやや緩やかで、深さは約23cmを測る。底面は概ね平坦となっている。

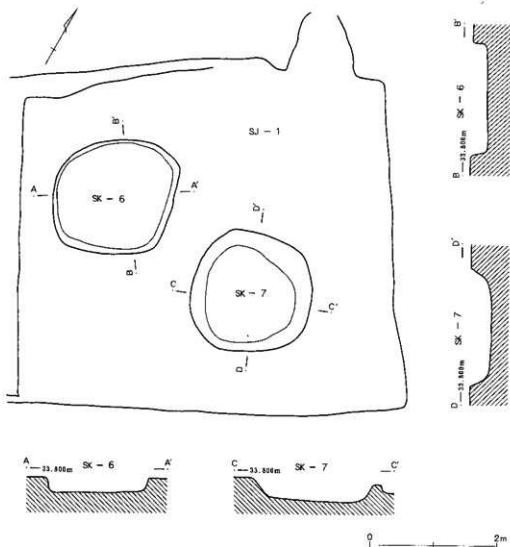
覆土も第6号土坑とまったく同一で、人為的に充填されたものである。このことから、本跡もいわゆる住居内土坑と判断される。

覆土中より土師器の甕が出土しているが、微細な破片のため図示できなかった。

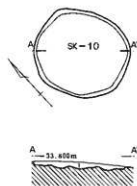
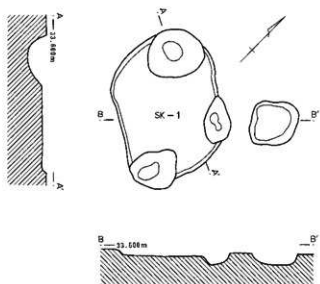
第8号土坑(第93図)

き一12—23グリッドに位置する。直径約1.35m、深さ約23cmを測る円形の土坑である。掘り込みはほぼ垂直に行なわれ、壁は直立している。しかし、底面は凹凸を有しながら中央へ傾斜しているため、全体的な印象は深い皿のようである。

覆土は自然堆積を示し、これより土師器の坏・甕片の出土があった。いずれも細片で図示することはできなかった。

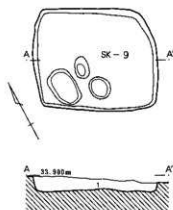


第92図 6区第6号・7号土坑



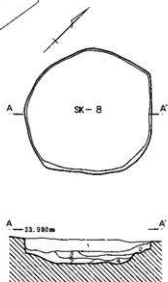
第10号土坑土層説明

1. 暗褐色土 焼土、炭多量、遺物否。



第9号土坑土層説明

1. 暗褐色土 焼土粒、炭化粒少、黄色土ブロック(厚1~2cm)多。



第8号土坑土層説明

1. 暗褐色土 粘性、しまりあり、焼土粒多、炭化粒多。
2. 暗褐色土 粘性、しまりあり、焼土粒等少ない、土層より薄い。
3. 暗褐色土 粘性強、しまりあり、焼土粒少量。
4. 暗褐色土 しまり、粘性あり、焼土、黄色土粒混入。



第93図 6区第1号・8号・9号・10号土坑

第9号土坑(第93図)

く-12-10グリッドに位置する。隅丸長方形の浅い土坑で、長軸1.30m×短軸1.08m、深さ10cmをそれぞれ測る。底面は概ね平坦であるものの、中央部はいくぶん高まっている。また、底面には3基の小穴が存在するが、ともにごく浅いもので、凹凸といってもよいほどの窪みである。

覆土より土師器の甕が出土しているが、小片のため図示できなかった。

第10号土坑(第93図)

き-12-18グリッドに位置する。全体は1.00m×0.90mの楕円形を呈し、掘り込みはだらだらとした不明確な土坑である。底面も一定せず凹凸が激しい。確認面からの深さは6cm程度である。

覆土中には焼土と炭化物を多量に含み、須恵器の坏片1点を混じていた。但し、遺物は細片のため、図示することができなかった。

第1号溝(第63図)

調査区の西辺を南北に走る溝である。検出長は約36mで、北端は埋没河川に達した部分で切れている。断面観察などで確認された他の遺構との重複は、第2号溝および第3号掘立柱建物跡よりも新しく、第3号溝よりも古い関係を示している。幅約1.80m、横断面は有段の逆台形で、深さは約0.70mである。底面は地形に従い、南から北へ向けて傾斜している。溝の北端部はやや西へ曲がっているが、その走向はおおよそN-8°-Eを指している。

覆土には常時水が流れていたというような様子は窺えないが、溝が集落跡の中心部から埋没河川へ向けて開鑿されている点を考慮すれば、本跡には排水路的な機能が想定できよう。

遺物は小片のため図示しえなかったが、覆土の最上面より須恵器の坏が出土している。

第2号溝(第63図)

調査区の北側、東西に走る浅い溝である。第1号溝に切断される。位置的には集落跡と埋没河川の間にあり、両者を分けるように横たわっている。検出長約42m、幅約60cm、深さは30cm前後である。西から東へ向けて直線的に延び、やがて微妙に屈曲していく。端部は不明確で、だらだらと広がっている。5区では検出されていないため、6区内で開放してしまうものと思われる。直線部の走向はおおよそN-96°-Wを指す。

覆土には通水した様子はない。集落と河川を分ける境界的な遺構でもあろうか。遺物の出土は見られなかった。

第3号溝(第63図)

調査区の南西隅に検出されている。第1号溝埋没後の開鑿で、後に第1号掘立柱建物跡に切断される。溝の北西部は大きく屈曲し、調査区外へ延びている。検出長約16.5m、幅約60cm、深さ約20cmをそれぞれ測る。横断面は箱形で、底面は凹凸を有している。遺物の出土は見られなかった。

第4号溝(第63図)

調査区中央部を南西から北東へ延びる。埋没後に第4号掘立柱建物跡が構築される。全長約28.5m、幅約70cm、深さ約45cmを測る。横断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。本跡は地形の勾配に直交するように掘られ、底面は低地部へ向けて傾斜している。やや蛇行しているが、おおよその走向はN-35°-Eである。やはり覆土に通水の痕跡は認められず、遺物の出土もなかった。

IV 戸森松原遺跡の調査

1 遺跡の概要

戸森松原遺跡はおよそ北緯36°12'42"、東経139°17'00"付近に位置する。深谷バイパスの路線上では、森下遺跡と約200mを隔てた西方に所在する。同遺跡、および西隣の起会遺跡とは後背湿地状の低地、ないし埋没河川によって分けられる。戸森松原遺跡の調査区は長さ約480m、幅約45mで、面積は22,080m²におよぶ。調査前は全面が水田であった。標高は35m前後である。

遺跡は自然堤防状の微高地に立地するが、大きく見れば、調査区は微高地を斜めに横切るような形となっている。その中心部から北西へは急激に、また南東へは緩やかに傾斜している。北西部には埋没河川が存在し、マコモ層も検出されている。マコモ層の倒れた方向から、水流は南西から北東方向であったと判断できる。南西部では埋没河川の確認はできなかったものの、遺跡の乗る微高地は、河川に浸食された細長い島状になるものと推定される。この微高地の長さは不明だが、幅はおそらく100m程度であろう。遺構の分布もこの範囲内に限られており、地形に沿った占地を窺うことができる。

本遺跡のおおまかな地形的特徴は上記のとおりであるが、決してこの微高地が平坦というわけではない。調査区中央の西側(路線の幅が一段広がった部分)、ここの西端には埋没河川に注ぎ込むような入江状の谷が存在する。谷は南から北へ向けて深く、かつ広くなっていく。遺構もこの谷を境に時期や性格が異なっているなど、何やら微高地を東西に画しているようである。この一画には谷に並行するよう小規模な谷(水流で抉れたもの)や、縄文土器を包含する大きな窪地も存在する。また、弘仁9年(818)ないしは元慶2年(878)の地震で生じたとされる、噴砂の亀裂も多く観察されている。噴砂は埋没河川とほぼ同方向に走り、遺構を激しく離断している。

表土から遺構確認面までの状況は地点によって異なる。微高地の中央部分では30cm程の耕作土単一で、削平を受けている(第6号周溝墓土層図参照)。これが傾斜に従い深くなり、埋没河川寄りでは90cmを測る。耕作面も浅間A軽石層を挟んで2枚あり、その下に浅間B軽石層が現われる。ここまでは地表から約40cmで、以下は自然堆積層となる。奈良・平安時代の遺構は浅間B軽石層下20cm程、古墳時代の遺構は同じく40cm程から掘り込まれている(第4号周溝墓、第7号溝土層図参照)。

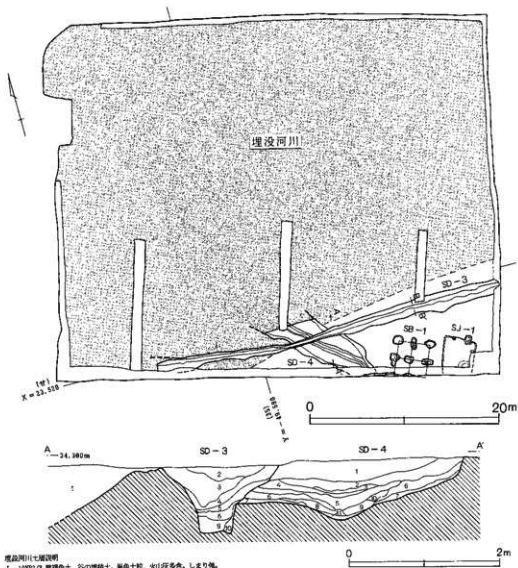
調査により検出された遺構は、縄文時代の土坑1基、古墳時代の住居跡2軒、周溝墓13基、埋設土器1基、溝2条、奈良・平安時代の住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、溝4条、中世の溝3条、時期不明の土坑6基、溝15条である。このほか、縄文時代後期の遺物包含層が確認されている。

奈良・平安時代の住居跡と掘立柱建物跡は調査区の西端、古墳時代の住居跡は中央部に分布している。本遺跡で特徴的な周溝墓には、円形と方形のものが見られ、細長い微高地の尾根筋に列をなして並んでいる。現状ではいっさい重複が見られない。

なお、本遺跡では森下遺跡や起会遺跡のように、調査区全体を1区・2区・3区…などと小区画に分割していない。このため、次項以下の記述は小区ごとではなく、遺構別に行なっている。

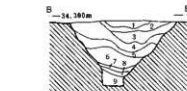


第94図 戸森松原遺跡調査区と周辺の地形



埋没河川七層説明

1. 10792/3 黒褐色土 谷の埋没土、黒色土粒、火山灰多量、しまり強。



第3号溝七層説明

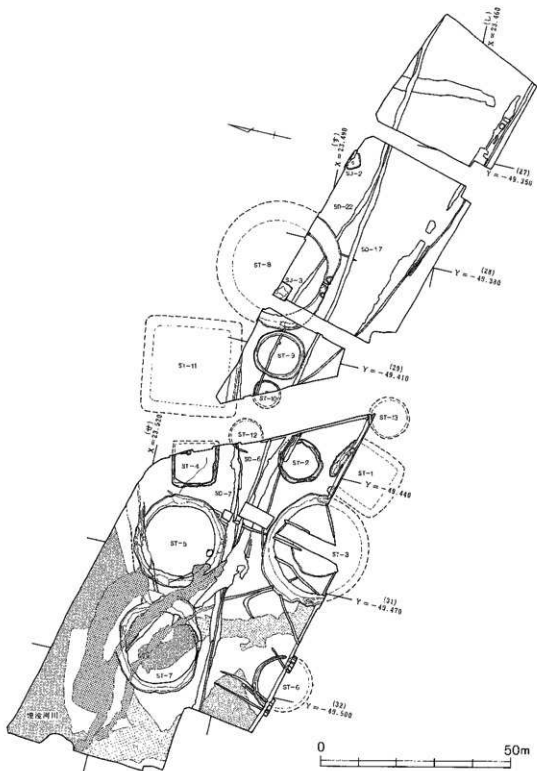
1. 10797/8 黄褐色土 黄色土(池山)ブロックよりなる。
2. 1.513/2 黒褐色土 黄色土粒少量
3. 10794/6 褐色土 黄色土ブロック、黄色土粒多量
4. 10792/2 黒褐色土 2に準ずるが、黄色土ブロックは小さく少ない。
5. 10792/3 黒褐色土 3に準ずるが、黄色土ブロック多。鉄分多。
6. 10793/3 暗褐色土 4に準ずるが、粘性强。黄色土ブロック形化強。
7. 10794/1 におい黄褐色土 黄色土小ブロック多量、粘質。

8. 10794/2 灰黄褐色土 黄色土小ブロック多量、粘質。
9. 10795/2 におい黄褐色土 黄色粘質土、鉄分多。
10. ほとんど埋没土、壁の礫化層入り。

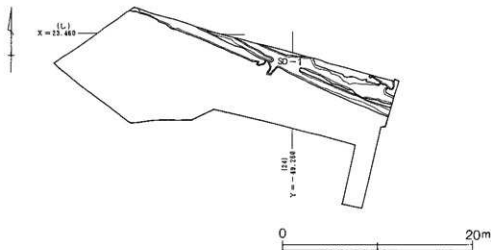
第4号溝土層説明

1. 10792/3 黒褐色土 多量の礫土、灰黄褐色ブロックを含み、2との境界は薄い砂によって示される。
2. 1.513/3 暗褐色土 1に似るが収縮によって明分化する。小礫土、灰化物ブロックを少量含む。
3. 7.0184/6 褐色土 灰化強、鉄分多
4. 10792/2 黒褐色土 礫土粒をよく含み、灰化物粒が若干見られる。
5. 10792/1 黄褐色土 黄色土粒をよく含み、粘性強。
6. 1.514/4 オリーブ褐色土 2に近似するが、鉄分を含まない。黄色土粒少量。
7. 1.5135/6 明黄褐色土 黄色土ブロック多量なる。壁の礫化層。
8. 10793/2 黒褐色土 わずかに灰色土粒を含むが、単一的粘質土層。
9. 10793/3 黒褐色土 礫土に似る。黄色土粒も多量。
10. 10793/2 暗褐色土 黄色土、灰色土ブロックよりなる。
11. 1.514/2 暗黄褐色土 単一的粘質土層。

第95図 戸森松原遺跡全体図(1)西端部



第96图 戸森松原道跡全体图(2)中央部



第97図 戸森松原遺跡全体図(3)東端部

2 検出された遺構と遺物

(1) 住居跡

上述のように、検出された3軒の住居跡は調査区の西端部に1軒(第1号住居跡)、および中央部に2軒(第2号・3号第住居跡)である。第1号住居跡は埋没河川に臨む微高地の最北縁に営まれており、隣には第1号掘立柱建物跡も存在する。時期的には両者とも奈良時代に属しているが、集落跡としての広がりには東へは延びていない。このことから、同時代の集落跡は調査区の南側に展開しているものと思われる。

第2号・3号第住居跡はいずれも古墳時代前期、五領式期のもので、微高地内では最も高い地点の一面に占地している。集落跡としては調査区の北側に広がるのであろうが、平坦部が限られていることから、数軒程度の小規模なものと考えられる。

第1号住居跡(第98図)

すー34—17グリッドを中心に位置する。微高地の平坦部はほぼ本跡付近で終わり、これより北側は埋没河川へと落ち込んでいる。調査前に掘削した排水用の側溝やポンプ設置坑により、住居跡の南辺は切断してしまった。このため、全体の規模は不明である。とはいえ、調査区の壁面には本跡が現われていないことから、現状を大きく越えるものではないと推測される。現軸長は東西・南北ともに3.30mである。本来の平面形はわずかに南北が長い長方形であろう。主軸方向はおよそN—20°—Eを指す。

覆土は自然堆積を示し、軽石粒(浅間B?)を多く含む。壁の掘り込みはほぼ垂直になされ、床までの深さは約15cmを測る。床面は概ね平坦ながら、中央部が高まり気味である。カマド全面は硬くしまるのに比し、他はむしろ軟質といってよい。

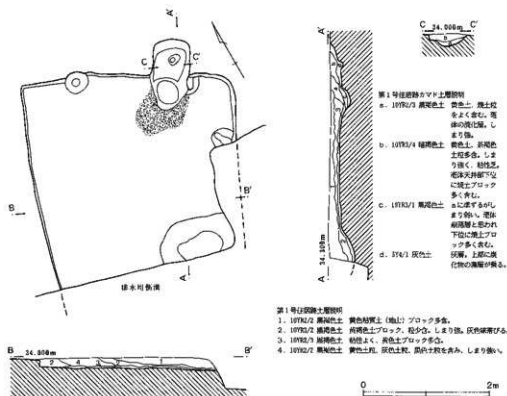
カマドは北壁に付設されている。中央部からは東へ寄っており、燃焼部は大きく壁外へ突出して

いる。燃焼部全体は110cm×60cmの楕円形を呈するが、内部は2段構造になっている。焚き口部側は径50cm程の楕円形で、火床面は床面から15cm前後低くなっている。奥部はまた床と同レベルとなり、緩やかに傾斜しながら立ち上がっている。機能的には焚き口部側の掘り込みが主体で、奥部は煙道的な部分であろう。袖は右袖のみ確認された。長さ約30cm、幅約20cmの地山を削出したものである。煙道は検出されなかった。覆土より土師器の壺片(第99図1)が出土している。

貯蔵穴は不明だが、南東隅部には土坑状の掘り込みが見られる。長径1.20mを越える大型のものである。

北壁および東壁にピットが検出されたものの、ともにきわめて浅く、位置的にも柱穴とはいえない。壁溝も検出されなかった。

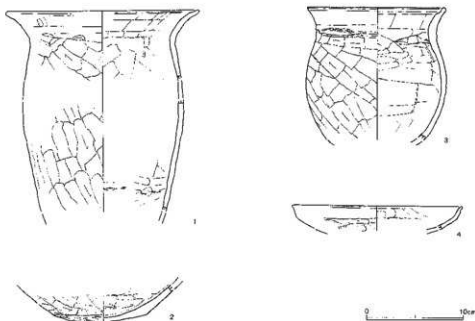
カマド以外でも遺物の出土はほとんどなく、覆土中から壺や坏の破片が数点見いだされているにすぎない。



第98図 第1号住居跡

第1号住居跡出土遺物(第99図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	施成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	(20.4)	(21.1)	—	WW'B'	B	によい橙	70	カマド 磨耗顯著
2	壺	(14.4)	(13.9)	—	WW'B'	C	橙	30	覆土 磨耗顯著
3	壺	—	(4.0)	—	WW'B'	B	橙	—	覆土 底部片
4	坏	(18.0)	(2.5)	—	WW'	B	橙	—	覆土 口縁片



第99図 第1号住居跡出土遺物

第2号住居跡(第100図)

しー27—22グリッドを中心に位置する。北西部が調査区外となるほか、中央部に近代の攪乱溝が走っている。南東隅部の屈折はやや鋭いながらも、全体はほぼ隅丸長方形を呈する。軸長は東西が3.75m、南北は推定で4.20mとなる。この時の面積は約15.8m²を測り、主軸方向はおよそN—27—Wを指す。

覆土はほとんど単一だが、故意に埋め戻された様子はない。床面は概ね平坦で、南東部がわずかに高まっている。壁もそのまま緩やかな立ち上がりとなる。

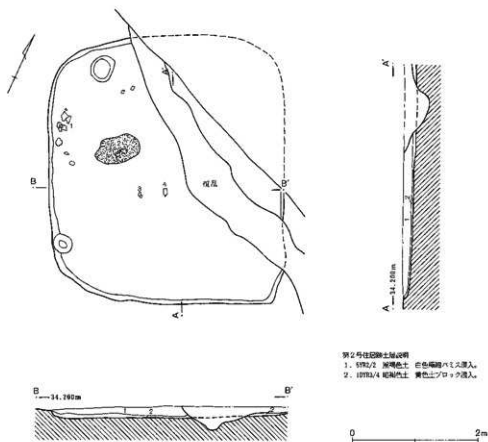
炉跡は攪乱溝で破壊されてしまったものと思われる。スクリーン・トーンで図示した範囲は床面の焼土化した部分で、炉床面のように焼けしまったり、掘り込まれたりしたものではない。

ピットは壁際2箇所で見出されている。ともにごく浅いもので、柱穴とは思われない。南のものは覆土に焼土を多く含んでいた。

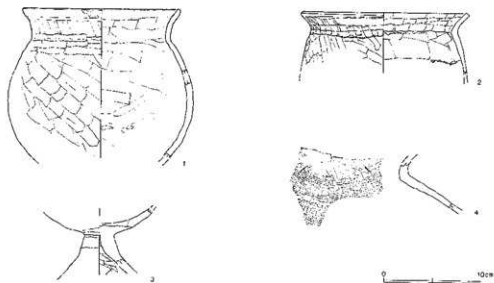
遺物はきわめて少量、かつ小片であった。北西部の床面上を中心に、罍や壺、高坏などが出土している。

第2号住居跡出土遺物(第101図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	顔色	調	残存	出土位置・その他
1	罍	(16.6)	(15.6)	—	WW'B	B	にぶい黄橙	30	No.4 台付罍か腐蝕顯著
2	罍	(17.6)	(6.4)	—	WW'R	B	橙	—	No.9 口縁片 磨耗顯著
3	高付	—	(7.0)	—	WW'B'	B	にぶい橙	—	No.10 頸部片
4	壺	—	(4.5)	—	WW'	B	にぶい黄橙	—	No.11 頸部内外面赤彩



第100図 第2号住居跡



第101図 第2号住居跡出土遺物

第3号住居跡(第102図)

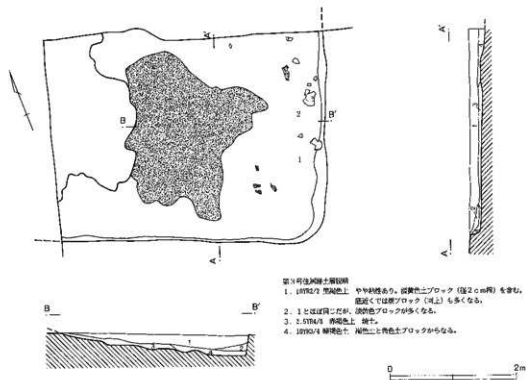
第2号住居跡の西方約40m、しー27—22グリッドを中心に位置する。第8号周溝墓の中心部付近である。北と西は調査区外となるため、全体の規模や形状は不明である。現状では東西4.35m×南北3.30mを測る。検出された範囲での壁は直線的であることから、平面形は隅丸の方形、ないしは長方形になるものと推測される。主軸線を南北に想定すれば、その方向はおよそN-22°-Eとなる。

覆土中には炭化材や焼土を多く含むほか、中央寄りの床面上には厚さ5cm前後の焼土層が広がっている。火災により焼失した住居跡であろうか。本跡は出土遺物から見て、第8号周溝墓構築以前の遺構であることは確実である。但し、覆土は自然地積を示しており、周溝墓構築に際して埋め戻されたような形跡は窺えない。

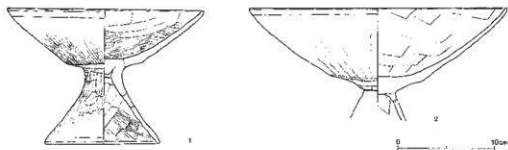
床面は西から東へ向けて著しく傾き、さらに段状の凹凸も生じている。床面が斜めとなっているため、西端部は削平を受けて消失している。もちろん、こうした状況は本来のものではない。おそらくは、前述した古代の地震に起因するであろう。

炉跡・貯蔵穴・柱穴は確認できなかった。

遺物は東壁下に集中している。被災住居としては出土量が少ない印象を受ける。図示しえたものは高坏が2点のみで、第103図1は壁によりかかり、2は床に伏せられていた。



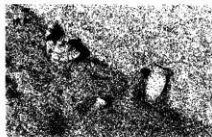
第102図 第3号住居跡



第103図 第3号住居跡出土遺物

第3号住居跡出土遺物(第103図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	高環	(21.0)	(14.0)	(12.4)	WW'B	B	橙	70	No.1 磨耗顯著
2	高環	(27.0)	(10.9)	—	WW'B	B	にぶい橙	40	No.4 磨耗顯著

第3号住居跡
遺物出土状態第1号住居跡
第1号掘立柱建物跡

(2) 掘立柱建物跡

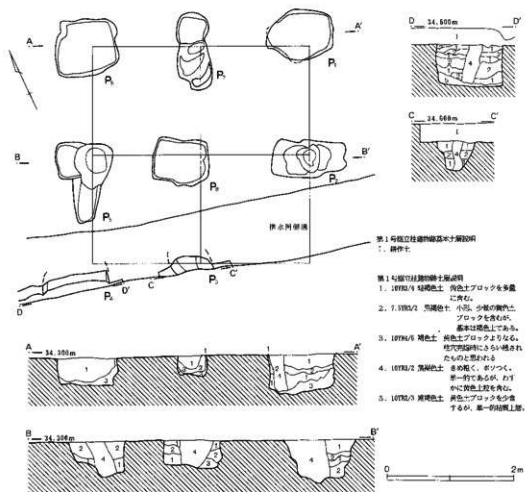
第1号掘立柱建物跡(第104図)

す—34—18グリッドを中心に位置する。第1号住居跡と同様、微高地平坦面の最北縁に構築されている。南側は調査区外に延びているため、間数を含めた全体の規模は不明である。中心に東柱と思しきP₉が存在することを考慮すれば、2間×2間の総柱建物となろう。この場合の規模は一辺が3.40mを測り、柱間は各1.70mとなる。また、南北棟と仮定すれば、主軸方向はおよそN—25°—Eを指し示す。

柱穴は2～3基が重複するように見受けられるが、平面・断面観察の限りにおいては、ともにその形跡は確認できなかった。基本となる柱穴の掘り方は楕円形、ないしは長方形で、長辺が1m程度のもが多い。深さは中央棟筋の3基が30cm前後、他は70cm前後である。

覆土のうち、4は柱痕と考えられる部分であるが、極端に幅の広いものや斜めのものもあり、やや判然としない。幅の広いものは抜き取りの跡かもしれない。4以外は根固めの充填土である。きちんと版築されたものではなく、黄褐色の粘質土(地山)と褐色土を交互に詰め込んだものである。

遺物はまったく出土しなかったが、周囲の状況から見れば、第1号住居跡と同時期の遺構としてもよさそうである。



第104図 第1号掘立柱建物跡

(3) 周溝墓(古墳)

前項でも触れたように、本遺跡の乗る自然堤防状の微高地は東西に細長く、平坦部はあまり広いものではない。検出された13基の墳墓はここに集中し、しかも調査された範囲内では重複は見られない。分布の東限は明らかでないが、西限は微高地を南北に分断する谷であろう。13基は3～4列にきれいに並んでおり、各周溝間はきわめて接近している。

第96図の復元(調査区外の破線部分)は重複がないことを前提に、それぞれの形状や周溝の規模から推定したものである。

このときの墳墓の形態とその内訳は、円形のもの10基、方形のもの3基である。規模的には台部の直径、または一辺が18mを超える大型が5基、9m～13m程の中型が6基、6m強の小型が2基となっている。

遺物は第6号および第9号周溝墓でまともに出土した以外、全体的に見れば少ない。土器はい

ずれも和泉式後半から鬼高式初頭の範疇で捉えられるものである。

なお、これらの墳墓については、

- ①円形と方形からなる単一の「周溝墓」群。
- ②方形周溝墓群と、円墳群の混成したもの。
- ③円墳と方墳からなる単一の古墳群

のいずれかの場合が考えられる。13基のうち、方形のものからは遺物の出土がなく、円形のものとは時期的に断絶する可能性もある。しかし、現状では重複がないうえ、墓域の形成上、偶然とは思えない規則的な配置性が窺われる。もちろん該期の古墳であれば、埴輪や埋葬主体部などが必ず検出されるとはいえない。むしろ円形ものは「古墳」と認識すべきかもしれないが、直ちにそれと断定しうる確証に欠ける部分もある。そこで、本書では配置の規則性という点を重視し、同一墓域を構成する一連の遺構として、あえて「周溝墓」の名で統一した。

安易に名称を付与することは、遺構の性格を規定するばかりでなく、古墳時代の墳墓の概念にまで混乱をきたすこととなる。ここでは本遺構群はすべて「周溝墓」で、「古墳」は存在しないということではないことを明示し、そのいずれと呼ぶべきなのは、巻末においてあらためて検討することとしたい。

第1号周溝墓(第105図)

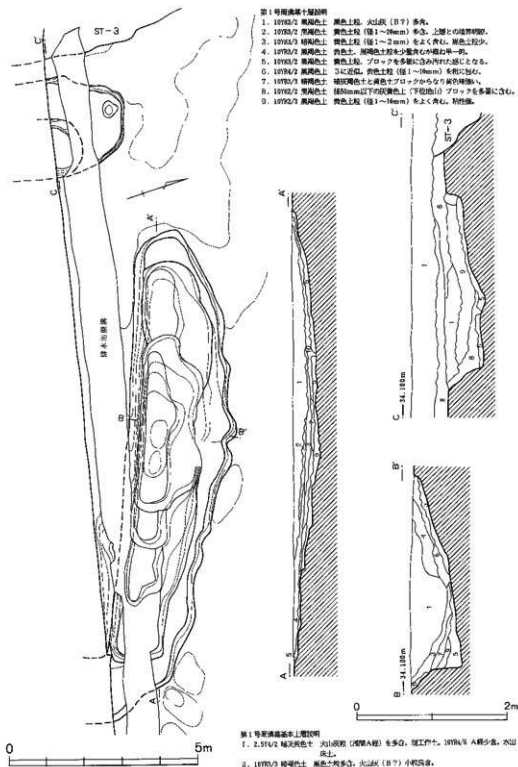
シ-29-10グリッドを中心に検出された。南側が調査区外となるため、全体の規模や形状は不明である。しかし、確認された北溝と西溝の状況から判断すれば、台部の平面は方形を呈するものと考えられる。また台部が正方形であると仮定すれば、その一辺は約12mとなる。さらに、南北に主軸を取った場合、方向はおよそN-24°-Eを指す。墳丘の盛土については、調査区南壁の観察によっても確認できなかった。

北溝は長さ約12m、幅は中央部で約2.8mを測る。方台部側は直線的であるのに対し、外側は丸みを有している。他溝の状況が不明のためあくまで憶測にすぎないが、本跡は外周が円形、台部が方形となるものかもしれない。北西隅部は1.5m程掘り残され、ブリッジとなっている。

溝の掘り込みは方台部側が急で、ほぼ垂直となっている。最も深い中央部では、確認面からの深さが約70cmである。底面はこれより外側へ向けて緩やかに高まり、外壁へと移行していく。底面と壁の境は不明瞭、というよりも区別はなく、斜行して立ち上がってしまう。溝の縦断面の場合も同様で、中央部から東西へだらだと立ち上がり、壁との区別もないまま両端部へ達する。遺構図では溝中土坑が存在するような表現となってしまったが、これはわずかに付く段を表わしたもので、溝中土坑などは確認されていない。また、覆土は自然堆積を示し、特に墳丘の崩落痕といえるような土層は観察されなかった。

西溝は北端のごく一部が検出されたにすぎない。幅は約2.6mで、方台部側は一段低くなっている。これも溝中土坑ではなく、北溝にも見られた緩い段と思われる。外側は第3号周溝墓の周溝と迫っている。その間はわずか50cm程だが、現状での重複は認められない。断面観察(C-C')の限りでは、本跡埋没後に第3号周溝墓が構築されているように見受けられる。

遺物の出土は見られなかった。



第105図 第1号周溝墓

第2号周溝墓(第106図)

第1号周溝墓の北側、しー29-20グリッドを中心に位置する。同周溝墓と最も接近する部分の間隔は約2m、さらに北の第12号周溝墓とは同じく約7mである。北端部分は第5号溝や近代の農業用水路などに切断され、遺存状態が悪い。

全体は台部の直径が約9.3mの円形で、規模的には中型の部類に属する。周溝は幅1.4m前後で巡り、現状では掘り残されてブリッジとなった部分は見られない。反面、南東部は外側を削がれたようになっており、この部分だけが直線的である。幅も約0.8mとほぼ半減する。その起因するところは明らかでないが、南西に第3号周溝墓が存在することを重視すれば、あるいはこれを意識した上での変形であるのかもしれない。

しかし、両者の周溝間は約3mもあり、本跡の周溝がそのまま円弧を描いたとしても、重複することはありえない。にもかかわらずそのようなになされたのは、この部分がなんらかの機能を有していたからではなかろうか。中央に遺構を伴わない単独の土器設置が行なわれたり、南東は第1号周溝墓のブリッジ部へ通じているなど、まさに「墓道」のようである。だからこそ、その規制を受けた第2号周溝墓は変形されたのではあるまいか。

上記以外でも周溝の掘り込みは一様でない。溝底は南端部で確認面から約15cmと最も浅く、北へ向かうに従い深度を増す。北西部では段を有して一層深まり、最大で60cmに達する。壁の立ち上がりは概ね急であって、やや台部側が緩やかであるものの、外側との際立った差は見られない。覆土は自然堆積を示し、やはり墳丘盛土が崩落したような痕跡は認められなかった。

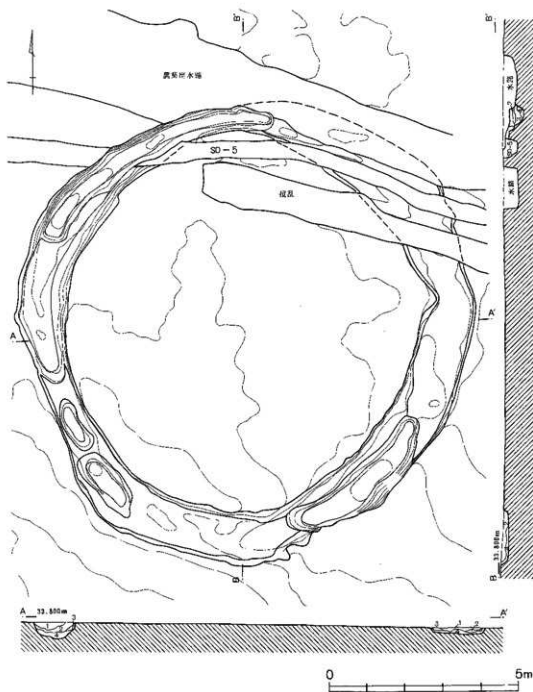
底面には3箇所で楕円形の落ち込みが検出された。南東のものは長さ約4.5m、溝底からの深さ約25cmである。南西の2基はともに深さ10cm前後で、南のものは1.8m×0.8m、北のものは1.5m×0.5m程度の規模である。3基の覆土はいずれも周溝のものと同じで、埋没過程で掘り込まれたとは思われない。

主体部などの施設の検出や、周溝中からの遺物の出土は見られなかった。

なお、その所属するところの遺構は不明であるが、本跡と第3号周溝墓の間一先に墓道と想定した部分一に据え置かれた土器についてここで触れておきたい(第107図)。土器は大型の壺(第108図下段2)で、上半部は欠失している。破片が内部に落ち込んだり、周囲に散ったりしていないことから推して、設置の当初より下半部のみであったものと思われる。但し、内部には別個体の壺の底部(1)が入っていた。

壺はほぼ正立の状態で置かれ、原形を保っていた。土器の掘えられた小穴は直径40cm前後で、遺構確認面から上では掘り込みの形跡が窺えなかった。確認面からの深さは約15cmで、印象としては深皿のような窪みである。

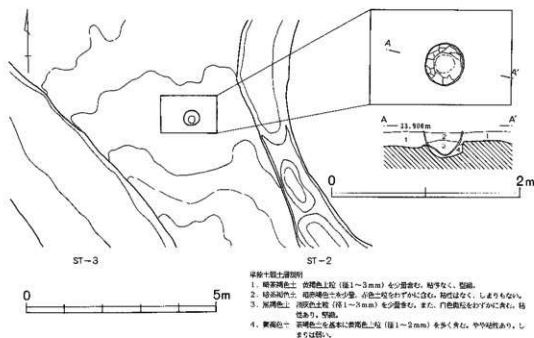
性格についても判然としませんが、少なくともどちらかの周溝墓に関係したものの、との見方は成り立つであろう。



第2号周溝第七層説明

1. 暗茶褐色土 淡黄色粘土粒（径1mm以下）を少量、白色塵粒（径1mm以下）を多く含む。粘性あり。堅硬。
2. 暗黄褐色土 淡黄色粘土粒（径3～5mm）を多量、白色塵粒（径1mm以下）を多量に含む。粘性強く、堅硬。
3. 暗黄褐色土 基本的に第2層と同じだが、淡黄色粘土粒が若干少ない。
4. 黄褐色土 淡黄色粘土ブロック（径1～3cm）を多量に含む。暗黄褐色土を少量含む。

第106図 第2号周溝某



第107図 周溝墓間埋設土器

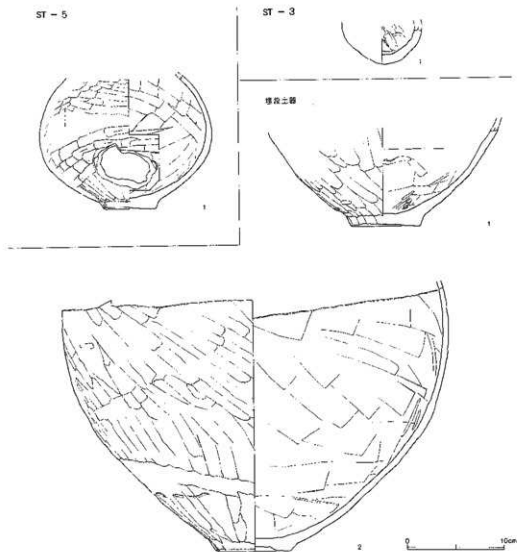
第3号周溝墓(第109・110図)

1-30-14グリッドを中心に位置する。本跡から見た各周溝墓の方向と距離(最も接近した周溝間以下同)は、東0.5mに第1号、北東3mに第2号、北9.5mに第5号、西13mに第6号となっている。南側は調査区外となり、全体はやや歪んだ円形を呈している。台部の直径約23.5mを測る大型の周溝墓で、規模的には第8号周溝墓に次いで大きい。西頂部付近には噴砂の亀裂が走り、段差が生じている。

周溝は全周しており、途切れたりブリッジ状に掘り残されたりはしていない。北東部では上幅約2.8m、下幅約1mとおおよそ均一ながらも、北西部は外側が膨らみ、上幅約4.8m、下幅約2.3mと倍増している。溝底は概ね平坦で、東西両側は一段低くなっている。壁の立ち上がりは第1号周溝墓とは逆で、外側がほぼ垂直となるのに対し、台部側はかなり緩やかである。

また、平面的には北東部がやや直線的となり、東頂部で屈曲しているように見受けられる。本跡は第1号周溝墓埋設後の構築と思われるが、東頂部の屈曲はあたかもその存在を意識しているかのようである。北東部の状態についても、第2号周溝墓との間が墓道であるとすれば、首肯されるどころではある。手前勝手な穿った見方であろうか。

周溝の覆土は自然堆積を示し、墳丘の盛土が崩落したような形跡は確認されなかった。さらに、本跡では中央部に水路がかかったため、遺構確認面より上位の堆積土層も観察することができた。その結果、遺構の掘り込みは確認面の40cm以上上から行なわれていることが判明した。台部の中央一帯は窪んで一遺構確認面でも同様である一 おり、ここに周溝掘削時の排土を投入している。しかし、排土層の上面は削平面となり、より上位の土層は観察できなかった。盛土による墳丘が榮か



第108図 埋設土器・第3号・5号周溝墓出土遺物

第3・5号周溝墓・埋設土器出土遺物(第108図)

ST-3

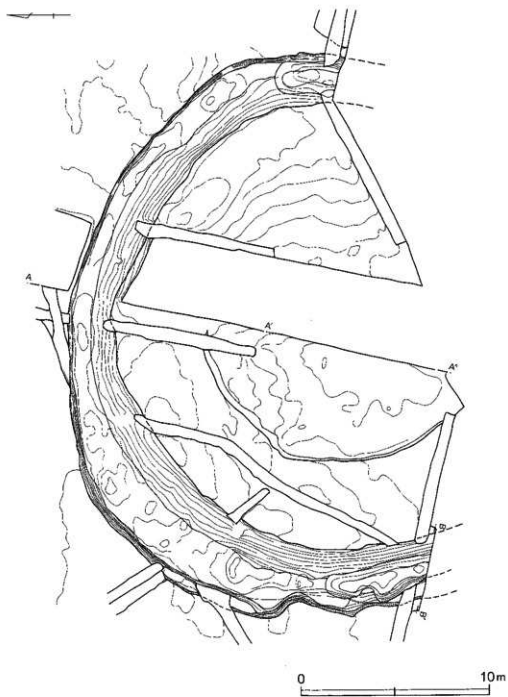
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	ミチユア	-	(3.9)	-	WW'R	A	橙	-	覆土 変形か

ST-5

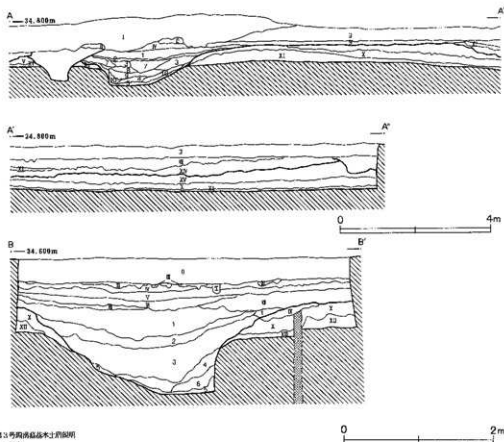
1	壺	-	(13.6)	5.4	WW'B'	C	にぶい黄橙	40	No1・2 焼成後割部穿孔
---	---	---	--------	-----	-------	---	-------	----	---------------

埋設土器

1	壺	-	(10.3)	7.2	WW'B'	B	にぶい褐	-	底部片
2	壺	-	(26.3)	7.8	WW'B'R	B	橙	-	下半部完存



第109図 第3号周溝墓(1)



第3号周溝墓木土層説明

- I. 砂土
- II. 土平土
- III. 浅層土層
- IV. 10713/3 暗褐色土 黒色土粒多量。火山灰（M7）小粒散在。
- V. 10716/6 黄内土 暗褐色一均。黄赤土粒少量。木屑以下はブイマリーな堆積上であり、基層層は本層以上の層り込みとなる
- VI. 10716/2 黄褐色土 基本結り解。黄褐色。火山灰散在多量。
- VII. 深褐色土 上下層間にあって砂粒に引く堆積。ほぼ一均。
- VIII. 暗褐色土 黄赤土を全体に混和し、薄く団粒となる。火山灰少量。
- IX. 10712/1 黄褐色土 黄赤土粒を良く含むが、概ね一均的。粘性強。
- X. 10712/2 黄褐色土 黄赤土粒を良く含むが、概ね一均的。粘性強。
- XI. 10712/3 黄褐色土 褐色土中に黄赤土ブロック（小）を良く含む。基本は砂。黄赤土粒・ブロックを多量し、汚れた感じとなる。
- XII. 10714/4 褐色土 地山。
- XIII. 10712/3 黄褐色土 径10mm程の黄赤土ブロックと褐色土よりなる。
- XIV. 10714/4 褐色土 黄赤土ブロック（地山崩りのつら込み）よりなる。径50mm以上。
- XV. 10712/2 黄褐色土黄赤土粒を少量含むが、一均的。上層との境界不明。

第3号周溝墓土層説明

1. 10713/2 黄褐色土 褐色土（黄赤）火山灰粒多量。
2. 10712/3 黄褐色土 火山灰粒。黄赤土粒ブロック多量。粘性強。
3. 10712/3 黄褐色土 褐色土粒。黄赤土粒少量。一均的。粘性強。
4. 10712/3 黄褐色土 Xに準ずる。黄赤土粒をわずかに含む。黄赤染斑。分離明瞭。
5. 10716/4 暗褐色土 ほとんど地山。黄、赤の凝軟化層
6. 深褐色土 黄赤土粒。ブロック多量。黄内結核。
7. 10712/3 黄褐色土 褐色土粒少量するが概ね一均的。黄赤土粒強。
8. 10712/1 黄褐色土 粘り弱く、褐色粒強く土層と明分化。
9. 10712/2 黄褐色土 黄赤土粒の含有多く、全体にも凝結する。
10. 10712/3 黄褐色土 褐色土を少量含むするが、全体はその境面により明るく、粘性強。

第110図 第3号周溝墓(2)

れた可能性は否定できないものの、周溝中に排土層の流入が見られないことはやや疑問である。あるいは、盛土も窪地を埋める程度だったのかもしれない。

遺物は微量、かつ細片であった。覆土中よりミニチュア土器(第108図上段右1)のほか、図示できなかったが土師器の甕や高坏の細片が出土している。

第4号周溝墓(第111・112図)

第2号周溝墓の北約16m、す—30—16グリッドを中心に位置する。西側は周溝間約2mを隔てて第5号周溝墓、南東は同じく約3.5mで第12号周溝墓である。東側は農業用水路が調査区を横断するため、全体の規模は不明である。但し、水路の反対側には第11号周溝墓が検出されていることから、ほぼ台部の一辺は10.5m程の方形を呈するものと考えられる。このときの軸方向はおよそN—13°—Wを指す。

検出範囲内の周溝は全周するものの、西溝の南寄り70cm前後が高く掘り残され、ブリッジ状となっている。幅は0.8m～1.0mと概ね一定している。平面図で北西隅部が広いように見えるのは台部側が崩壊したためで、溝底の幅は同様である。なお、西溝の北寄りには地震の亀裂が走り、段差が生じている。覆土は自然堆積を示しており、盛土が流入したような形跡は窺えなかった。遺構確認面から溝底までの深さは北および西溝で約15cm、南溝で約30cmである。底面は平坦といえるものの、緩やかな起伏を有している。ブリッジ北側の溝底には土坑が掘り込まれている。100cm×45cmの楕円形を呈し、溝底からの深さは約8cmである。覆土は周溝のものと区別はなく、周溝埋没の過程で設置されたものとはいえない。壁の立ち上がりは第3号周溝墓ほどではないにせよ、外側は急角度である。これに比し、台部側はかなり緩やかなものとなっている。

本跡の場合も調査区の壁により、旧地表と考えられる面が観察された。これによれば、周溝の掘り込みは遺構確認面よりも25cm程度上位からで、台部に盛土がなされた様子は認められなかった。

台部の北東隅部付近には、調査区外へ延びる土坑状の遺構が検出されている。規模や形状は明らかでないが、長方形の土坑が2基重複するような形状である。現状では2.5m×1.0m、深さ約25cmを測る。南側土坑の底面は平坦であるのに比し、北側は凹凸が激しく斜めに傾いている。掘り込みは周溝と同一面ながら、遺物の出土がまったくないため、主体部であるか否かは判然としない。

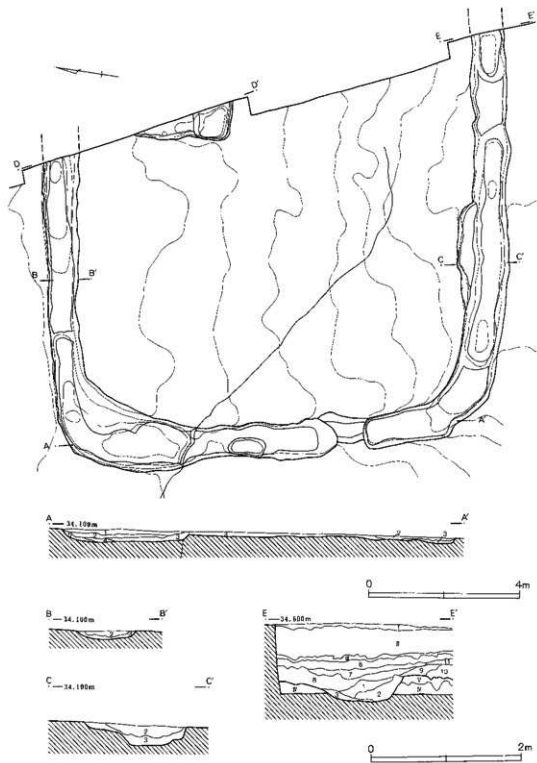
遺物は周溝より微量の縄文土器片が出土しているにすぎない。



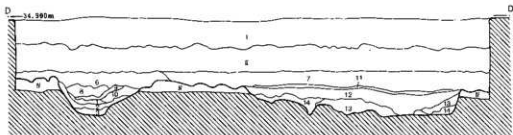
第3号(奥)・第5号(手前)周溝墓



第5号周溝墓周溝



第111图 第4号周溝墓(1)



第4号周溝墓基本土層説明

- I. 表土
- II. 10YR3/4 赤褐色土 第2水層、ほぼIと同じ、火山灰少量。
- III. 成層II終り層
- IV. 黄褐色土 地山
- V. 10YR3/1 赤褐色土及び暗赤褐色土ブロックよりなる、わずかに火山灰混。

0 2m

第4号周溝墓土層説明

1. 暗褐色土 赤褐色土を基本に赤褐色土粒 (径3~5mm) を多量含む、また、白色微粒を適量含む。粘性あり、堅固。
2. 暗褐色土 基本的に第1層と同じだが、1層に比べ、赤褐色土粒が少ない、白色微粒及び、炭化粒を伴い含む。粘性あり、堅固。
3. 黄褐色土 暗褐色土粒 (径3~5mm)、同ブロック (径2~3cm) を多く含む。
4. 黄褐色土 赤褐色土を基本に黄褐色土ブロック (径0.5~1cm) を少量含む。粘性あり。
5. 淡黄褐色土 赤褐色土を基本に黄褐色土ブロック (径5~10cm) を部分的に含む。堅固。
6. 10YR3/3 暗褐色土 赤褐色土粒、火山灰をよく含む、しまり強。
7. 10YR2/2 暗褐色土 赤褐色土粒の大量ブロックを多量に含む。
8. 10YR2/2 暗褐色土 赤褐色土を多量に含むが、赤褐色土を多量に含む。しまり強。
9. 10YR2/2 暗褐色土 赤褐色土を多量に含む。
10. 10YR2/2 暗褐色土 赤褐色土を多量に含む。
11. 10YR3/4 暗褐色土 赤褐色土を多量に含む。
12. 10YR3/2 暗褐色土 赤褐色土を多量に含む。
13. 10YR3/2 暗褐色土 赤褐色土を多量に含む。
14. ほとんど地山。

第112図 第4号周溝墓(2)

第5号周溝墓(第113・114図)

す—30—20グリッドを中心に位置する、円形の周溝墓である。東側は周溝間約2mで第4号周溝墓、西側は同じく約3mで第7号周溝墓、南側も同じく約9.5mで第5号周溝墓がそれぞれ存在する。北東、および南東部分には大規模な噴砂の亀裂が走り、本跡を分断・破壊している。台部の直径約19.5mで、形態的には他周溝墓に比べ整った円である。

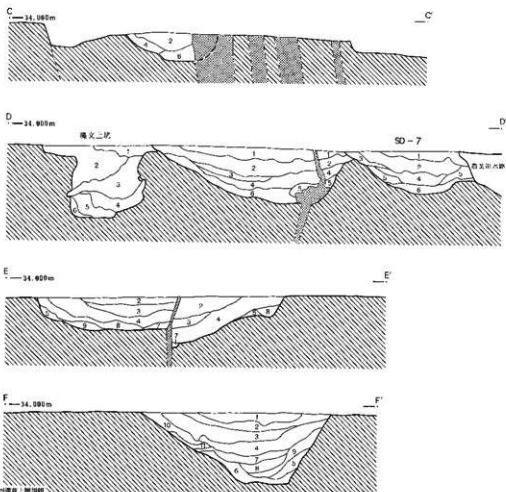
周溝は全周する。西半部は地震のためやや変形しているが、幅はおよそ3m前後である。溝底までは北から西部分が浅く30cm~45cm、東から南は段を有して深くなり75cm~95cmとなる。壁の立ち上がりは外側が急、台部側が緩である。底面は浅い部分でやや広く、深い部分は台部側の立ち上がり角度を保っているため、それよりもかなり狭くなっている。覆土は自然堆積を示し、盛土が流入したような形跡は観察されなかった。なお、確実とはいえないが、覆土中位の3層にはFA(榛名二ツ岳噴出火山灰)と思しきブロックが含まれていた。

台部は中心に向かってわずかに傾斜している。全体的には皿状の窪みのようで、ほぼ周溝の円と同心となっている。その覆土は埋没谷と同様に黒色土が主体で、縄文後期の土器や土製品などを多く含んでいる。このことから、本跡の中央部分は縄文時代後期には浅い窪地であったものと判断される。さらに、南端部には同時期の土坑も検出されている。反面、周溝墓の盛土については確認できなかった。

縄文時代以外の出土遺物は、焼成後に胴部が穿孔された古墳時代の壺(第108図上段左上1)片のみである。

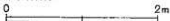


第113図 第5号円溝墓(1)



第5号周溝墓上層説明

1. 10797/6 赤黄褐色土 淡黄色粘土ブロックを主体的に多く含む。暗褐色土粒を少量含む。また白色微粒をまばらに含む。
2. 10797/2 灰褐色土 淡黄色粘土粒を少量。石灰粒を僅かに含む。白色微粒は多く含む。粘性なく堅縮。
3. 10794/2 灰褐色土 赤褐色土を基本に淡黄色粘土ブロック・粒・白色微粒を多量に含む。炭化粒をまばらに含む。やや粘性があり。堅縮。
4. 10793/2 灰褐色土 淡黄色粘土粒をまばらに含む。白色微粒を多量に含む。粘性なく。堅縮。
5. 10797/5 暗黄褐色土 ほとんどが暗褐色粘土（基本土層）で構成され。黄色土をまばらに含む。白色微粒。炭化粒を僅かに含む。粘性があり。堅縮。
6. 7. 10792/1 暗褐色土 淡黄色土塊・ブロックを多量に含む。白色微粒。炭化粒を僅かに含む。粘性あり。堅縮。
7. 10793/4 暗褐色土 第4層によく似ているが土層が薄く。淡黄色粘土ブロックを少量含むだけ程度である。白色微粒を僅かに含む。若干粘性があり。堅縮。
8. 10793/2 黄褐色土 暗黄褐色土を基本に淡黄色土粒を多量に含む。黄褐色土ブロックを少量含む。白色微粒を僅かに含む。
9. 10794/3 に近い黄褐色土 淡黄色粘土粒・ブロックを多量に含む。白色微粒を僅かに含む。粘性があり堅縮。
10. 10796/1 に近い黄褐色土 暗黄褐色土を基本に黄褐色粘土ブロック・粒を多く含む。白色微粒及び炭化物を少量含む。粘性なく堅縮。
11. 10795/5 暗褐色土 基本的に10層と同じだが。10層に比べ黄褐色粘土ブロックが大きい。白色微粒を少量含む。粘性なく堅縮。
12. 10792/2 暗褐色土 黄褐色粘土粒を少量。白色微粒を多量に含む。縄文晩期の土層を多く含む層である。粘性なく堅縮。
13. 10793/4 暗褐色土 黄褐色粘土粒を上層よりも多量に含む。黄ブロックを少量含む。また白色微粒を多量に含む。粘性なく堅縮。



墳文上層説明

1. 暗褐色土 炭化物粒を多く含む。しりじり。
2. 暗褐色土 炭化物粒を多く含むが。横断面 中。
3. 暗褐色土 炭化物粒。炭土粒を多く含む。炭土粒を多く含む。
4. 暗褐色土 炭化物粒。炭土粒。炭土粒。炭土粒を多く含む。
5. 暗褐色土 黄褐色土ブロックを多量に含む。炭化粒を多く含む。
6. 暗褐色土 ほとんどが黄褐色土。

第7号周溝墓説明

1. 10794/4 黄褐色土 淡黄色土粒を主体的に多く含む。白色微粒を多量に含む。
2. 10793/4 暗褐色土 淡黄色土粒を少量。白色微粒を多量に含む。
3. 10793/3 暗褐色土 淡黄色土粒を多く含む。粘性あり堅縮。
4. 10792/3 黄褐色土 2. 3層と基本的に同じだが。淡黄色粘土ブロックを少量含む。白色微粒の量が少ない。
5. 10794/1 黄褐色土 淡黄色粘土ブロックを多量に含む。白色微粒を多量に含む。
6. 7. 10794/1 暗褐色土 淡黄色粘土ブロックを多く含む。白色微粒は僅かに含む。

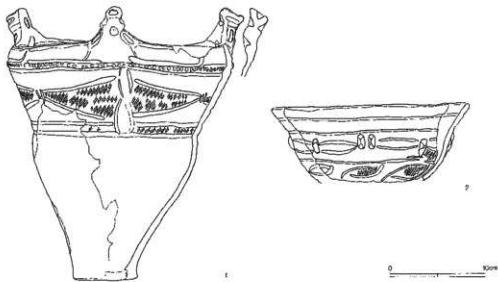
第114図 第5号周溝墓(2)

第5号周溝墓出土の縄文時代遺物(第115~119図)

第115図1は部分的に欠損はあるが、口縁部から底部まで残存する個体である。口唇部に3単位の突起を有し、頸部は内屈している。胴部上半は直線的に外傾し、括れを介して底部にいたる。底部直上の立ち上がりは、緩やかにすぼまっている。頸部の無文帯は上端を沈線、下端を沈線で挟まれた刺突帯で区画される。胴部上半の文様帯下端は括れ部に一致し、2条の沈線と縄文で区画される。沈線で菱形のモチーフが3単位描かれ、沈線の交差部に対弧文が配される。地文はLR単節。加曾利B2式に属する。

同図2は平縁の浅鉢形土器である。口縁部下に沈線が施される。括れ部下にレンズ状のモチーフが描かれ、沈線の取込部に2個1対の突起が貼付されている。胴部下半には弧線文が入り組むモチーフが描かれ、内部に縄文が施文される。器面の剝落が激しく、詳細は不明だが、口縁部直下とレンズ状モチーフの外側には縄文が施されていたと考えられる。地文はLR単節。レンズ状のモチーフと縦長の突起という組み合わせは、瘤付系土器群との強い関連をうかがわせるもので、口唇部、胴部下半の弧線文の特徴から、後期末末に属すると考えられる。

第116図1は深鉢で、口縁部直下にヘアピン状の沈線文と貫通孔を有する。堀之内1式。2は平縁の深鉢で、口唇部直下に突帯を有し、突帯上に8の字状の突起が貼付される。胴部上半には、縄文帯によって直線的なモチーフが描かれている。堀之内2式。3は浅鉢。口縁部は刺突帯によって区画された無文帯で、胴部には磨消し縄文でモチーフが描かれている。口縁部にはボタン状の突起が2個縦列して貼付されている。地文はRL単節。加曾利B2式。4は波状縁のやや小型の深鉢。突起は末広りの形状で、側面に4個、上面に2個、内面に1個の未貫通孔があり、中央に貫通孔が1個あけられる。文様帯上端は沈線で挟まれた刺突帯で区画される。意匠の詳細は不明だが、直線、



第115図 第5号周溝墓出土の縄文時代遺物(1)

鏡の手状の沈線文が描かれている。加曾利B2式。5はそろばん玉状の形態を持つ鉢形土器の体部。弧線文が磨消し縄文で描かれている。形態、描線ともにやや崩れており、加曾利B3式の終末に位置づけられよう。地文はRLだが、前々段の磨が弱い。6は波状縁の深鉢。口唇部内面が肥厚し、体部に条線が描かれる。7は加曾利B2式の粗製深鉢。格子状の沈線文が描かれ、その上に2条の突帯が巡る。8～11は同一個体で、無文地上に刺突を伴う沈線が施される深鉢である。11・12は同一個体で無文地上に沈線が描かれるもの。12の山形の沈線の取東部には円形の突起が剥落した痕跡が認められる。沈線の底面には微細な条痕が目立ち、施工具の断面が粗いものであったことが推測できる。同様の類型は岡部町原ヶ谷戸遺跡からも出土している。8～13は高井東式に属すると考えられる。14は小型の土器で、2条1組の微隆帯で曲線的なモチーフが描かれている。後期中葉に属すると考えられる。

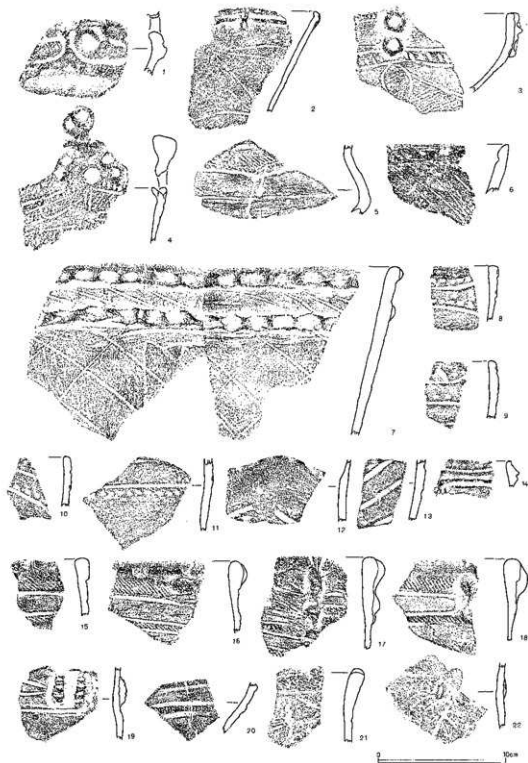
同図15～18は安行1式隆起帯縄文系の深鉢形土器。16～18は縦長の突起が施される。地文はすべてRL単節。19は安行2式の深鉢体部破片。括れ部直上にレンズ状の弧線文が描かれ、弧線の取東部に2個1対の縦長の突起が貼付される。突起上には横位の刻みが施されている。第115図2同様瘤付系土器群との関連がうかがわれる。20は鉢形土器の体部。隆起帯上には刻みが施される。安行2式。21は平縁の深鉢。口唇部はやや肥厚し、頸部が緩やかに括れる。口唇部上には突起が認められるが、おそらく2個1対のものの一部であろう。口唇部直下には縄文帯があり、その下位に文様帯が位置する。蛇行して下垂する沈線と、稲妻状の沈線文が組み合う意匠が見られる。安行2式に属する。22は器面の摩耗が著しく、詳細は不明だが、やや縦長のボタン状の突起を中心に意匠が展開している。

第117図1・2は同一個体。2個1対の突起を有する平縁深鉢で、口縁部には2条の沈線と刺突帯が施される。突起下には縦長の突帯が貼付される。胴部上半でごく緩やかに括れる。安行1式に併行すると考えられる。3～7・9は紐線文系土器。口縁部が直立、または外反するもので、9は頸部に磨消し縄文による意匠が描かれている。3～7は安行1式。8は粗製深鉢の体部破片。文様帯の下端が2条の沈線で区画されている。体部にはLR縄文と条線がわずかに認められる。10は無文の鉢形土器で、口唇部上に輪状の突起が2個貼付されている。突起上面には竹管による押圧がなされている。11～13は無文の深鉢で、口唇部に2個1対の突起が作り出されたものである。

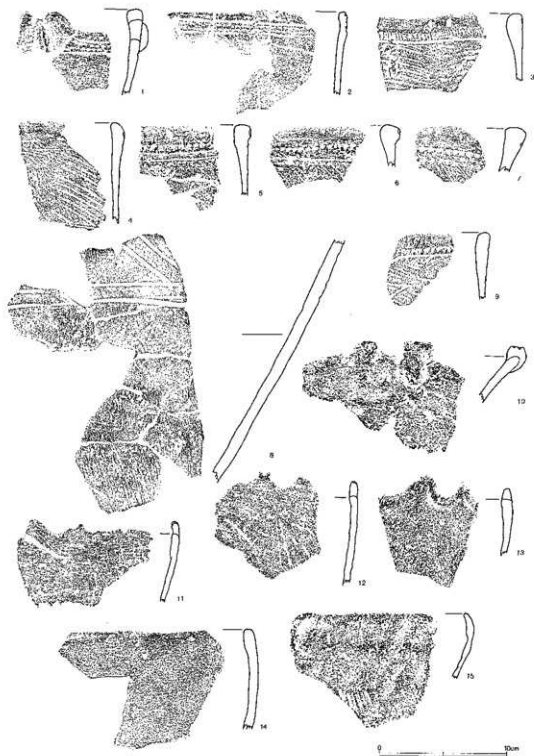
第117図14・15、第118図は無文の深鉢である。第117図14、第118図1はやや厚手で、器面が平滑化されているもの。他は器面の調整が丁寧ではなく、平滑化した様子が認められない。第117図15は口縁部が内曲している。他は緩やかに内湾するか(第117図14、第118図2・5～10)、直線的に立ち上がるもの(第118図3・4・11)が多い。第118図1は口縁部に屈曲が認められる。

第119図1～10は底部破片。1は立ち上がりややすぼまるもので、後期中葉以前の深鉢であろう網代痕がみられる。8は安行系の波状縁深鉢の底部。10は安行1式の鉢または深鉢であろう。体部下半に条線がみられる。

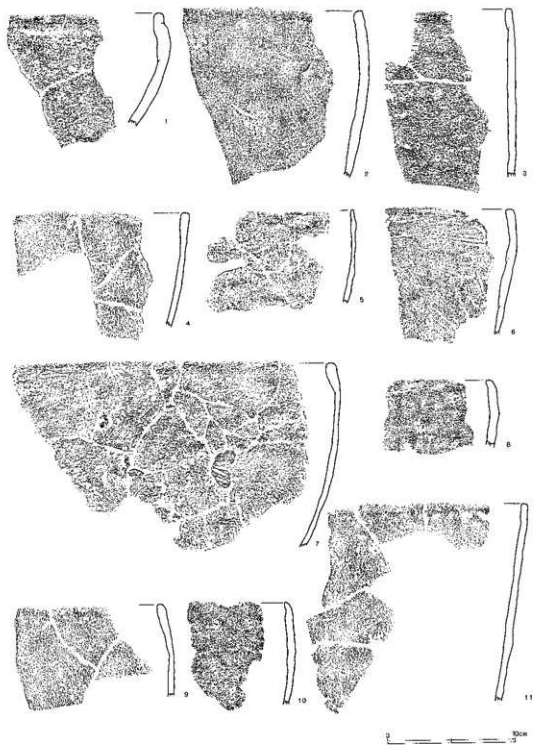
第119図11～13は耳栓。11と12は大きさ、形態、裝飾とも酷似しており、対をなすものと考えられる。図上上面の縁辺に刻みが一巡し、突起が1単位貼付される。13は無文で、ドーナツ状の形態である。



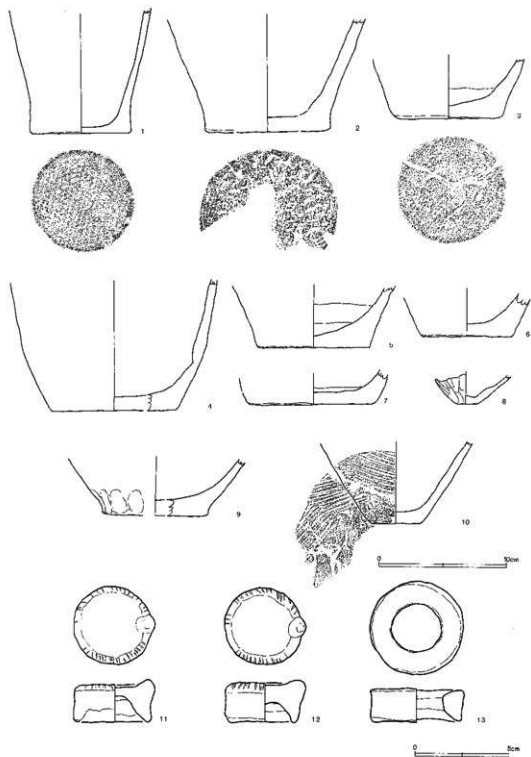
第116図 第5号周溝墓出土の縄文時代遺物(2)



第117図 第5号周溝基出土の縄文時代遺物(3)



第118図 第5号周溝墓出土の縄文時代遺物(4)



第119図 第5号周溝墓山上の縄文時代遺物(5)



第5号周溝墓縄文土器出土状態

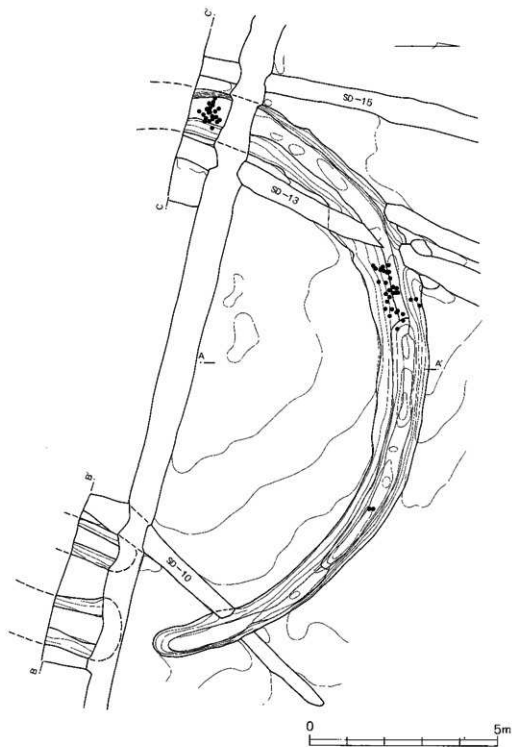
第6号周溝墓(第120～122図)

しー31—15グリッドを中心に位置し、南半部は調査区外となる。西側は微高地を分断する埋没谷が迫っており、墓域としては最東端にあたる。本跡の東西両側にも浅い谷が入り、北側で両谷が接近している。このため、占地部分は自然の地膨れ状となり、周溝墓はこの地膨れに合わせたような円形を呈している。東側の第3号周溝墓とは約13m、北側の第7号周溝墓とは約15mをそれぞれ隔てる。

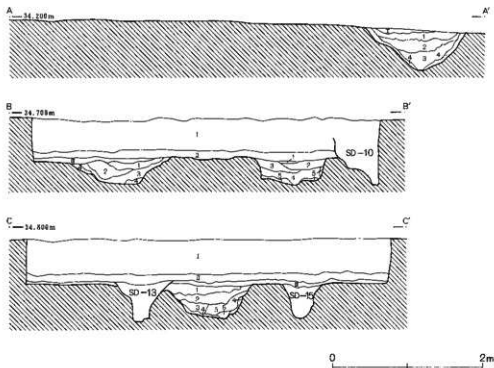
なお、第7号周溝墓との中間の谷部、グリッドでいえばくすー33—13からはメノウ製の勾玉(第123図10)が出土している。長さ3.8cm、幅1.2cm、厚さ1.0cm、孔径1.5mmを測る。丁寧に研磨され、均整の取れた優美なものである。

周溝墓は台部の直径約12.5mで、規模的には中型に属する。周溝は東頂部が掘り残され、ブリッジとなっている。排水用の側溝が入ってしまったため正確な幅は明示できないが、最大でも1mは越えないであろう。周溝の上幅は、西頂部から北頂部までは約1.2mと均一である。しかし、これより東頂部にかけては次第に細くなり、ブリッジの北側では約0.8mとなる。これは遺構確認面の傾斜に比例したことであって、より上位で確認されたブリッジの南側はまた太くなっている。溝底は北東部で一段深く、下幅も減少している。横断面も北西部が逆台形であるのに対し、北東部は逆三角形に近くなっている。覆土は自然堆積を示し、盛土などが流入した形跡は見られない。

本跡周溝からは遺物の出土がかなり多い。ブリッジ北端より約7mの溝底には環(第123図8)と埴(9)、北頂部やや西側の覆土中位には壺(1・2)・小型壺(4)・甗(3)、西頂部の覆土上位からは埴(5)・高埴(6・7)などが検出されている。程度の差こそあれ、いずれも周溝の埋没過程で投入されたものであろう。後二者は破片となって散乱し、完全に復元されたものはない。



第120図 第6号周溝墓(1)



第6号周溝墓基本土層説明

- Ⅰ. 粉砂土
 Ⅱ. 1079A/2 灰褐色土 全体に黄色土を混入する形。A粒石を少量、しまり強。
 Ⅲ. 1079B/3 暗褐色土 底分が多く灰色。赤色土粒を多含する。基本は下層。

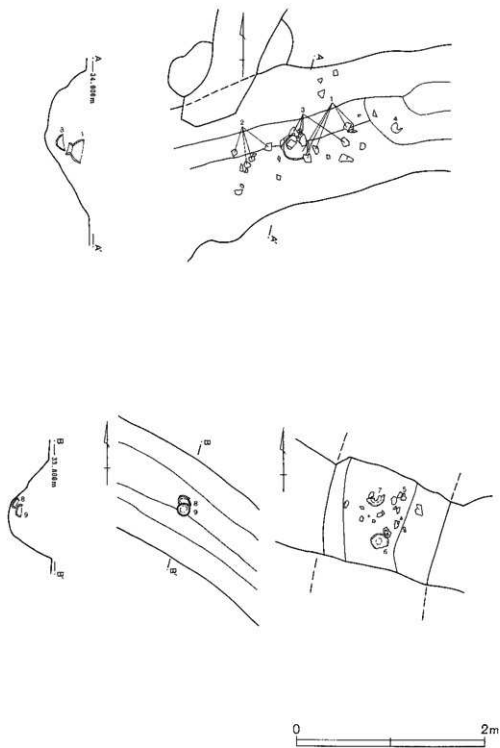
第6号周溝墓土層説明

1. 1079C/3 黒褐色土 黄色土粒を少量するが、礫石一見。
 2. 1079D/3 黒褐色土 黄色土粒を少量する(1より粒径大)が、礫石一見。粘性強く砂土との境界明確。
 3. 1079E/3 暗褐色土 黄色土粒、ブロック多量。粘性強。
 4. 1079F/4 暗褐色土 ほとんど殆山(黄色土)型。底の腐植化層。
 5. 1079G/3 黒褐色土 黄色土をほとんど含まず単一的、しまり強。
 6. 1079H/2 黒褐色土 黄色土粒、ブロックをよく含む。3に近似。

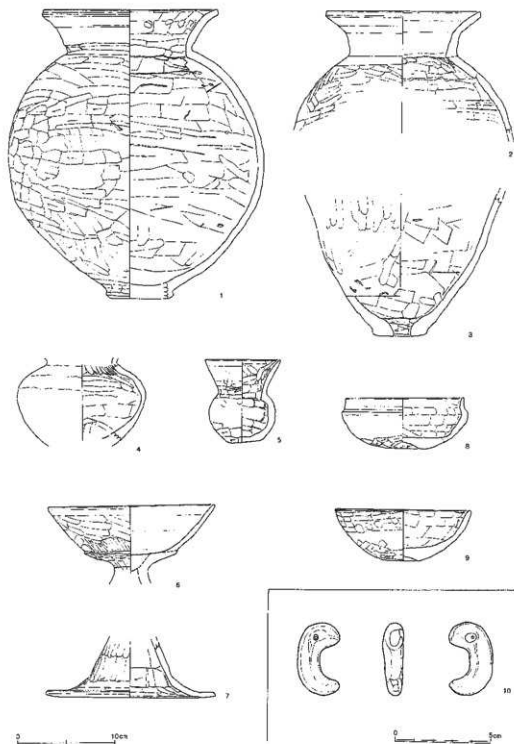
第121図 第6号周溝墓(2)

第6号周溝墓出土遺物(第123図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	18.2	30.3	(7.1)	WW'B'R	B	明赤褐	75	No 1・5~7・12・13・31・32
2	壺	(16.2)	(12.7)	-	WW'R	B	橙	-	No 16・21・24~26 口縁片
3	壺	-	(14.8)	5.6	WW'R	B	明赤褐	50	No 9・51・52 孔径1.7cm
4	小型甕	-	(8.0)	-	WW'	B	明赤褐	40	No 3 磨耗顕著
5	埴	(7.9)	8.7	3.2	WW'B	A	にぶい褐	80	No 49 ミニチュア壺か
6	高坏	(17.7)	(7.3)	-	WW'B'R	B	明赤褐	-	No 47 坏部70%残 内面剥落
7	高坏	-	(5.9)	17.9	WW'B'R	B	橙	-	No 39 脚部80%残
8	坏	12.4	5.3	3.5	WW'B'	C	赤褐	90	No 2
9	甕	14.2	5.4	3.5	WW'B'	B	明赤褐	100	No 1



第122図 第6号周溝墓遺物出土状態



第123図 第6号周溝墓・グリッド出土遺物

第7号周溝墓(第124・125図)

す—31—14グリッドを中心に位置する。南東から北西方向にかけ、2条の噴砂の亀裂が走る。亀裂は最大幅3mにも達し、本跡を大きく離断している。特に北西部は水平方向に2m近くもずれ、著しく変形している。現状では台部の直径約18.5mを測る円形の大型周溝墓である。

本跡は周溝墓群のなかで最も北西にあり、北側は埋没河川、西側はこれに注ぐ埋没谷が墓域を画している。第5号周溝墓は西側約3m、第6号周溝墓は南側約15mである。

全周する周溝は、南頂部付近でその外側が東西両側から先細り、外周10m程が直線的に成形されている。周溝自体も2.3mを掘り残して立ち上がり、ブリッジとしている。ブリッジ部では深さ5cm程になり、幅も60cmを測るのみとなる。また、東側では極度に幅が広く、最大で4.5mにもなる。他の部分はおおよそ均一で、約2.3mで巡っている。溝底は概ね平坦で、南東部がやや低くなるものの、遺構確認面からは深さは75cm前後とさほどの起伏はない。壁の立ち上がりは外側が急角度をなすのに対し、台部側はかなり緩やかである。覆土は自然堆積を示し、盛土が崩落したような形跡は窺えない。逆に、観察された限りにおいては、埋没は周溝の外側から始まっている。溝中土坑はブリッジの東側直下に認められた。2.0m×0.9mの楕円形を呈し、溝底からの深さ約15cmを測る。

台部は噴砂の亀裂のほか、第3号周溝墓の西から続く浅い埋没谷が中央部を走っている。埋没谷は幅約6m、深さ約30cmで、谷というよりも流水跡といった程度のものである。第5号周溝墓の窪地同様、覆土はほとんど黒色土単一となっている。但し、遺物の出土はいっさい見られなかった。また、盛土の存否については、これを確認するに至らなかった。

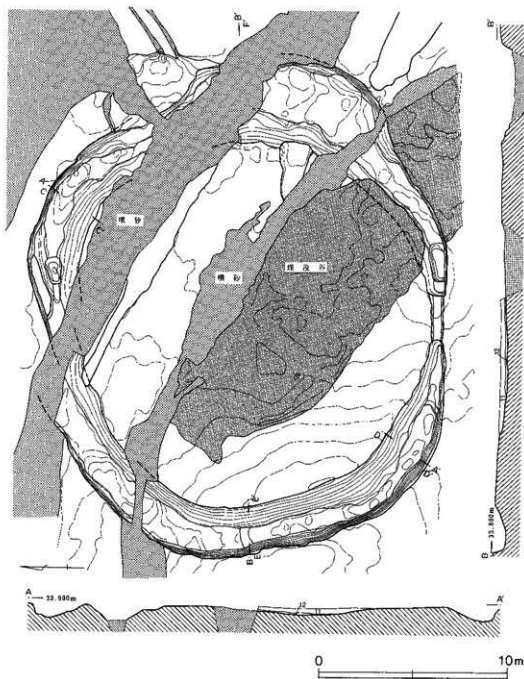
本跡周溝中には遺物が少なく、北頂部の覆土中位より小型高坏(第126図4)と壺(1)、南東部の同じく上位より脚付碗(2・3 同一個体か)が出土しているにすぎない。いずれも半存以下の破片である。



第7号周溝墓周溝(西側)



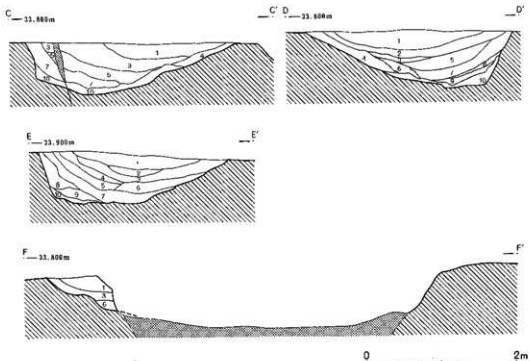
第7号周溝墓ブリッジ部



第124図 第7号円溝墓(1)

第7号円溝墓出土遺物(第126図)

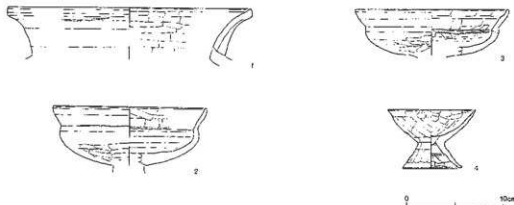
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	(26.0)	(5.4)	—	WW*	A	濃い黄橙	—	Ⅲ区 磨耗顕著
2	脚付碗	(16.2)	(6.2)	—	WW*B	B	橙	—	Ⅳ区 口縁片
3	脚付碗	(16.2)	(4.8)	—	WW*	B	橙	—	Ⅳ区 口縁片
4	小型耳環	(9.4)	6.1	(6.3)	WW*BR	B	橙	50	Ⅲ区 磨耗顕著



第7号周溝基二部説明

1. 1078/2 灰褐色粘土 淡褐色粘土層、暗茶褐色土粒を全体的に多量に含む。炭化粒を僅かに含む。粘性があり堅固。
2. 1078/3 に似る黄褐色土 淡褐色粘土を基本に暗褐色土粒を多く含む。炭化粒を平均に含む。粘性があり堅固。
3. 1078/7 に似る黄褐色土 淡褐色粘土を基本に暗褐色土粒を少量含む。炭化粒を僅かに含む。粘性があり堅固。
4. 2.5%の 黄灰色土 淡褐色粘土層、暗茶褐色土粒を多量に含む。稀く僅かに炭化粒を含む。2層によく取っている。
5. 1078/1 黄褐色土 灰白色土粒を全体的に多く、黄ブロックを部分的に少量含む。炭化粒を平均に含む。粘性あり堅固。
6. 1078/2 に似る黄褐色土 淡褐色粘土を基本に暗褐色土粒を多く含む。また黄ブロックを少量含む。粘性あり堅固。
7. 1078/1 黄褐色土 基本的には第5層に同じだが、5層に比べ、濃い黄褐色粘土粒を多量に含む。部分的に黄ブロックを含む。粘性あり堅固。
8. 1078/2 黄褐色土 濃い黄褐色粘土粒。黄ブロックを多量に含む。粘性があり堅固。
9. 1078/4 灰褐色粘土 基本土層で構成される。黄褐色土を少量含む。粘性があり堅固。
10. 1078/1 黄褐色土 淡褐色粘土を全体的に多量に含む。
11. 7.1078/1 黄褐色土 に似る黄褐色土粒をまばらに含む。また白色炭粒を多量に含む。粘性なく堅固。
12. 1078/3 に似る黄褐色土 淡褐色粘土ブロック、炭を多量に含む。部分的に黄褐色土を含む。中々粘性があり堅固。

第125図 第7号周溝基(2)



第126図 第7号周溝基出土遺物

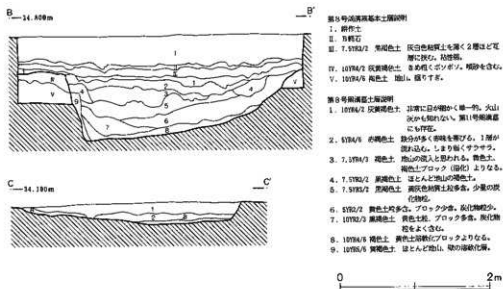
第8号周溝墓(第127・128図)

す—28—2グリッドを中心に位置する円形の大型周溝墓で、調査範囲内では最も東寄りに検出された。西側に構築された第9号周溝墓との間隔は、わずか80cmと極度に狭くなっている。重複する第22号溝は本跡がこれを切断している。台部中に設営された第3号住居跡も、遺物から見て本跡に先行するものである。

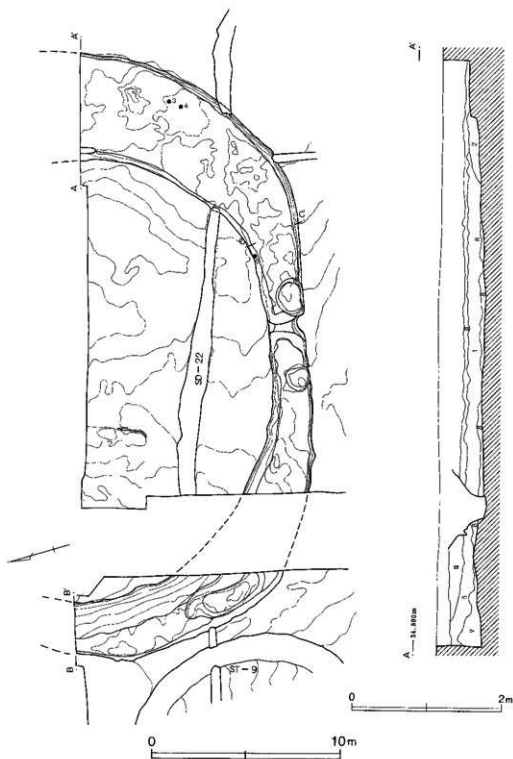
北側は調査区外となるため、全体の規模は明らかとしえない。現状から推せば、台部の直径は約24mとなり、周溝墓中で最大のものとなる。

周溝は全周するが、第7号周溝墓と同様に南頂部の外周は直線的となる。円弧は約16mにわたって削ぎ落とされたような形である。その中央部はわずかに掘り残され、ブリッジとなっている。周溝の上幅は東部が約5.5mと広いのに比べ、西部は約3mと他の大型周溝墓と同程度である。直線的となる南部では、これが約2mにまで減少する。下幅はより極端で、東部は約4.8m、西部から南部は約1.4mである。ところが、溝底までの深さはそれと反比例しており、東部が20cmを越えないのに対し、西部は約50cmにまで達している。これは遺構確認面からの深さで、標高的に見ればその差は70cm程もある。壁の立ち上がりは外側が急、台部側がかなりの緩となっている。覆土は自然堆積を示し、台部側から盛土が流入した形跡は観察できなかった。

ブリッジ部は周溝が完全に掘り残されたものではなく、溝底が幅約1.4m、高さ約10cmばかりがなだらかに盛りあがったものである。確認面からも約10cmとなっている。周溝の外側は絞ったように狭まり、幅は約1.5mとなっている。東西両側には、それぞれ円形の落ち込みが見られる。ともに深さ10cm未満のごく浅いもので、土坑というにはいささか雅がある。

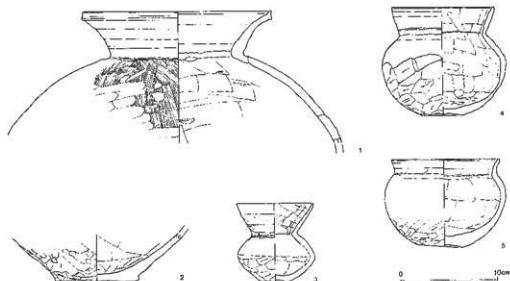


第127図 第8号周溝墓(1)



第128図 第8号周溝墓(2)

遺物は南東部の溝底より小型広口壺(第129図4)と埴(3)、ブリッジ東方4mの台部壁より小型広口壺(5)、各々の完存品が出土している。このほか、覆土中からは破片(1・2 同一個体か)も見いだされている。



第129図 第8号周溝墓出土遺物

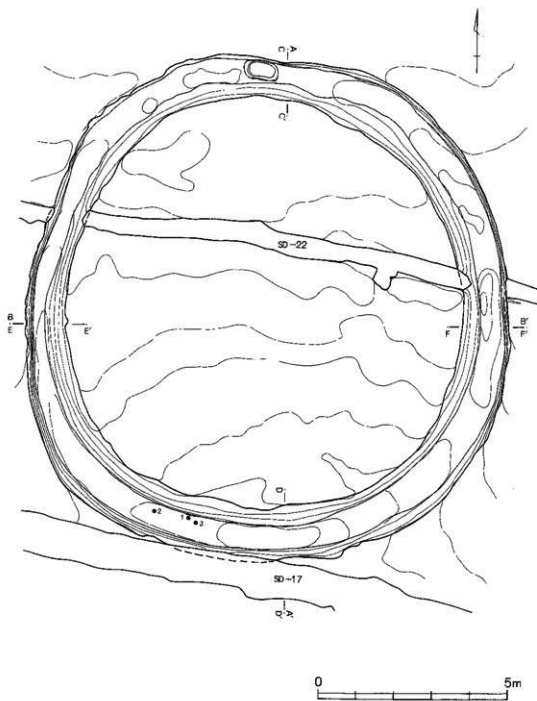
第8号周溝墓出土遺物(第129図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	施装	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	19.8	(13.8)	—	WW'B'	B	にぶい黄橙	—	覆土 口縁~肩部片
2	壺	—	(5.0)	8.6	WW'B'R	B	にぶい黄橙	—	覆土 底部片
3	埴	8.0	8.3	2.4	WW'B'	A	明赤褐	95	No 3 磨耗強い
4	小型壺	10.7	11.3	4.3	WW'B	B	橙	100	No 2 広口
5	小型壺	11.2	9.2	4.5	WW'R	B	明赤褐	90	No 1 広口

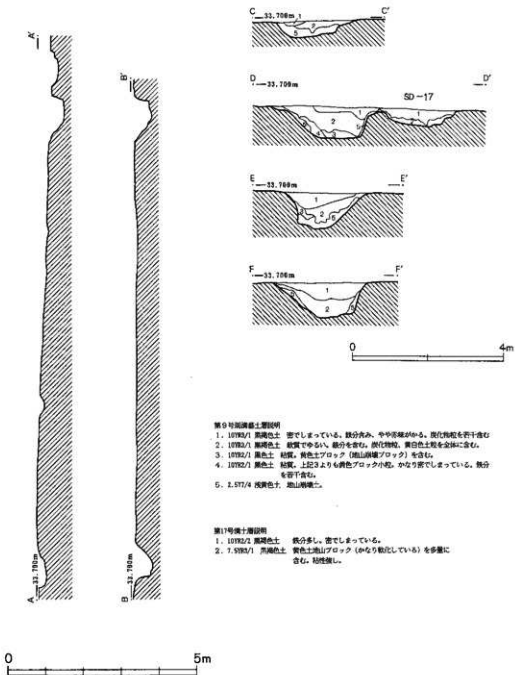
第9号周溝墓(第130~132図)

す—29—1グリッドを中心に位置する。中央部を横断する第17号溝、および南頂部に接する第17号溝を切断している。台部の直径は東西約11m、南北約11.5mを測り、全体はやや楕円形気味である。東側の第8号周溝墓、西側の第10号周溝墓とは一直線に並び、両者との間隔はともに約80cmと狭い。三者の新旧関係は明確でないが、本跡が楕円形気味であるのは、なにやら後から両者の間に割り込ませたためのような感を受けさせる。そうでないにしろ、これだけ接近していながらも重複がないのは、後続の周溝墓が先行のものの存在を充分意識した上で、新たに構築されたことを示しているといえるのではなからうか。別の見かたをすれば、周溝が完全に埋没するのを待たず、短期間に次々と構築されていったということにもなる。

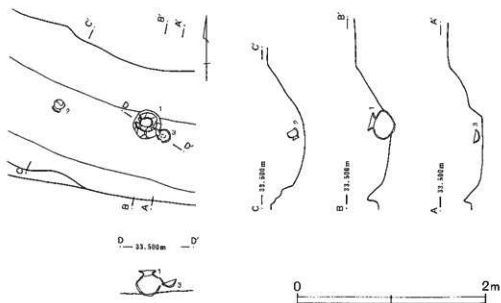
周溝は全周し、ブリッジなどの掘り残しは認められない。幅は1.4m前後であるものの、やはり東西2基の周溝墓が接近する部分は1m~1.2m程と狭まっている。本跡の占地部分は北から南へ傾



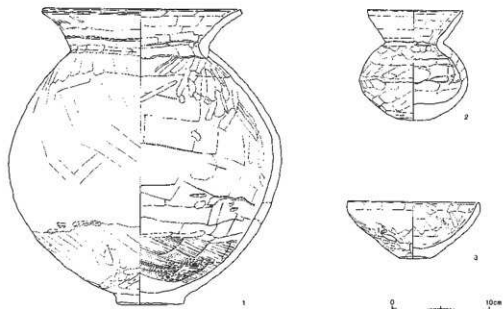
第130图 第9号周溝基(1)



第131図 第9号周溝墓(2)



第132図 第9号周溝墓遺物出土状態



第133図 第9号周溝墓出土遺物

第9号周溝墓出土遺物(第133図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	20.8	30.9	7.0	WW'B'	B	にぶい褐	70	No.1 磨耗顕著
2	埴	10.0	11.6	3.6	WW'B'	B	にぶい赤褐	90	No.3
3	碗	13.8	6.0	3.3	WW'B'	B	にぶい赤褐	95	No.2

斜しているが、確認面からの深さは45cm程で概ね一定している。但し、北頂部は約20cmと浅くなっている。溝底は幅約80cmの平坦面をなし、段や凹凸は有していない。壁の立ち上がりは外側がほぼ垂直、台部側がその半分の45度程度である。覆土は自然堆積を示し、盛土が崩落した様子などはまったく窺えない。なお、北頂部の溝底には径90cm×50cm、深さ10cm程の掘り込みが存在する。覆土など特に目立った点はないことから、周溝掘削と同時に掘り込まれたものと考えられる。

遺物は南頂部のわずかに西寄り、溝底に接して壺(第133図1)と埴(3)、やや浮いて小型埴(3)が出土している。壺は据え置かれたものと思われ、正立した状態で原形を保っていた。

第10号周溝墓(第134・135図)

すー29—2グリッドを中心に位置し、東から延びる第22号溝を切断している。第9号周溝墓の西側に並ぶ小型円形の周溝墓で、周溝の外周間はわずかに80cmを隔てるにすぎない。この部分は円弧が崩れており、あたかも第9号周溝墓をよけているかのようである。西半部は調査区外となるが、台部の直径はおよそ6.3mである。

検出範囲内における周溝は全周している。幅は40cmから70cmと一定せず、台部・外周側ともに掘り込みのラインは乱れる。意識的には北部よりも南部を太くしているように思われる。確認面からの深さは25cm前後で、これも南側がいくぶん深く掘られる傾向にある。底面は幅30cm程で、緩やかな起伏を有している。壁の立ち上がりは外側が急、台部側が緩である。覆土は自然堆積を示し、盛土などが流入した様子は窺われなかった。

台部の中央には現状で径約70cm、深さ20cm程の円形の土坑が検出されている。調査区壁の断面観察によれば、この土坑の掘り込みは基本土層VIより行なわれたことが明確である。これに対し、本跡周溝の掘り込みは不明確であり、同層からのものとは断定しがたい。

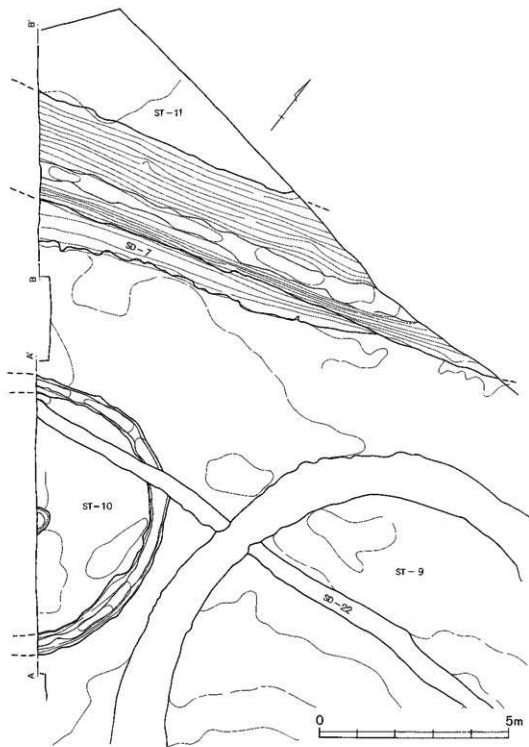
基本土層VIからの掘り込みは、北隣の第11号周溝墓でも確認された。では、なぜ第10号周溝墓の周溝のみが相違するのであろうか。それは、①本跡周溝の掘り込みが基本土層VIIからであり、基本土層VIは後の堆積である。②本跡周溝に基本土層VIが流入したため、掘り込みのラインが不明確となった。このとき、盛土は存在しなかったことが前提。③本跡周溝の埋没後に第11号周溝墓が構築された。という三つのケースが想定される。しかし、①の場合には第11号周溝墓の周溝に基本土層VIの堆積が見られないこと、③の場合には周溝墓群が既存のものを意識した上で、しかも短期間に構築されたと思われること、などを考慮すればいずれも肯定しづらい。このことからすれば、観察の不十分さも含め、②が妥当なところではないかと考えられる。

各遺構の掘り込みをこのような理解で捉えたと、台部中央の土坑は第10号周溝墓に伴う主体部などの施設である可能性も浮上してくる。

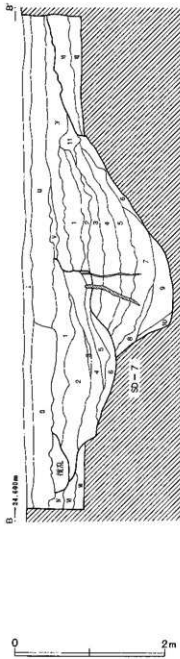
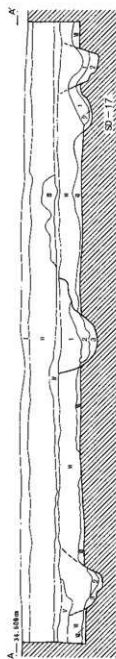
遺物は周溝、土坑ともになら出土しなかった。

第11号周溝墓(第134・135図)

すー29—12グリッドを中心に検出された。大部分は調査区外となり、直線的に延びる13m弱の溝が確認されたにとどまる。南東の第9号周溝墓とは、周溝の最も接近した部分で約3.5mを測る。南の肩部は並行する第7号溝に切断される。本跡を周溝墓と認定したのは、溝の横断面形が他のものと同様の形態であり、溝が西側の調査区まで達しておらず、かつ隣り合う第4号周溝墓と方向が一



第134图 第10号・11号周溝墓(1)



第10・11号周溝基本土層説明

- I. 376/1 灰色土 砂質土。
- II. 富士 A 礫石、茶褐色土ブロックよりなりボソボソ。
- III. 376/2 灰イロ土 砂質土。
- IV. 10793/2 暗褐色土 砂分(黄色)多。
- V. 10794/6 褐色土 地山の黄色土ブロックよりなる。火山灰多。
- VI. 10792/2 暗褐色土 茶褐色土ブロックを少量混在する。火山灰をよく含む地山。
- VII. 10794/3 に近い黄褐色土。砂質シルト。地山は礫質土。

第10号周溝基本土層説明

1. 10792/2 暗褐色土 黄色土ブロックを含む。
2. 10793/2 暗褐色土 黄色土ブロックを多量する粘質土層。
3. 10794/4 褐色土 ほとんど地山。砂、礫の砂礫化層。

第10号周溝基本土層説明

1. 10793/2 暗褐色土 黄色土ブロック多量。
2. 10793/3 暗褐色土 黄色土ブロック多量。
3. 10793/4 暗褐色土 黄色土ブロック多量。

第7号溝土層説明

1. 10793/2 暗褐色土 少量の黄色土塊を含むが、礫を多く含む。
2. 10794/4 褐色土 ほとんど地山。

第7号溝土層説明

1. 10793/2 暗褐色土 火山灰、砂分を多量。
2. 10792/2 暗褐色土 黄色土ブロック多量。遺物多。
3. 10794/1 暗褐色土 砂分より粘質土。
4. 10792/3 暗褐色土 2とほぼ同。やや砂質。
5. 10792/2 暗褐色土 2、4とほぼ同。黄色を多く含む砂質土。
6. 10792/2 暗褐色土 黄色土層。ブロック多量。粘質土。

第11号周溝基本土層説明

1. 7.5794/3 褐色土 暗灰色粘質土ブロックをよく含む。
2. 10793/4 暗褐色土 きろみ少く、しりり地山の粘性土。礫を多く含む。土層との境界明確。
3. 10793/3 暗褐色土 粘性土塊を少量含む。上面は灰色火山灰(F.A?)を多量する。
4. 10793/2 暗褐色土 茶褐色土を基本とし、暗灰色粘質土(5)をブロック混在する。
5. 10792/2 暗褐色土 黄色土層をよく含む粘質土。
6. 7.5793/2 黄褐色土 しりり粘質土を多量する。
7. 10792/1 黄褐色土 黄色土層・ブロックを多量する粘質土。基本土層Vと対応。
8. 2.576/4 黄褐色土 地山礫質土層で粘質土化
9. 2.574/2 オリーブ褐色土 地山礫質土層で(7)と混合し粘質土化。
10. 2.576/4 に近い黄褐色土 ほとんど地山。礫の砂礫化土層。
11. 10792/3 暗褐色土 基本土層Vにほぼ、基本土層IIとの境界明確。

第135図 第10号・11号周溝基(2)

致している点を重視したからである。

検出された周溝の形状から見て、全体は方形を呈するものと判断される。規模についてはまったくの推測にしかすぎないが、他の周溝墓と重複しないことを前提にすれば、方台部の一辺はおよそ20mとなる。主軸の方向は、周溝の傾きからN—5°—Wが得られる。

検出された周溝は南辺の一部にあたり、上幅は約2.5mである。これに比して溝底の幅は50cm前後と著しく狭く、そのうえ丸みを有している。確認面からの深さは約1.2mでほぼ一定している。壁の立ち上がりは外側が垂直に近く、方台部側は40度以下とかなり緩やかである。覆土は自然堆積を示し、中位に基本土層VIの流入は認められるものの、より下位に盛土などが崩落した形跡は窺えなかった。というより、むしろ埋没は方台部側よりも外側から始まっているようである。

遺物の出土は認められなかった。

第12号周溝墓(第136図)

す—29—10グリッドを中心に検出された。第7号溝で切断されるほか、東半部は調査区外、南は流失—ないしは、掘り込みが確認面までおよんでいない—しているため、検出はわずかである。現状から推せば、台部の直径約6.4mを測る小型円形のものとなる。他の周溝墓との距離関係などは不明であるが、重複はないように見受けられる。位置的には第8号・9号・10号周溝墓と並ぶラインに乗っている。規模的にも第10号周溝墓とほぼ同一で、関係は深いものと思われる。

本跡と第10号周溝墓間の状況は不明ながら、両者の規模から見れば、周溝間は約6mあくことになる。この間にもう1基の存在を想定することは不可能とはいきれない。仮に、それが円形で重複がないとすると、台部の直径は4m程度のごく小型のものとなる。

検出された周溝は幅約0.6mで、南は確認面の傾斜に従い狭まり、溝底が確認面と一致した地点で消失する。その溝底は平坦で、深さは最大で20cmを測る。横断面は丸底状となり、浅いためか大型のもののような壁の立ち上がりとはならない。覆土は自然堆積を示し、盛土などが流入した様子は観察されなかった。

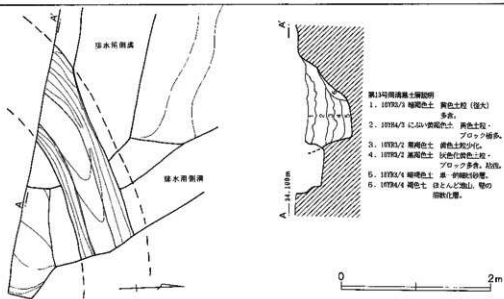
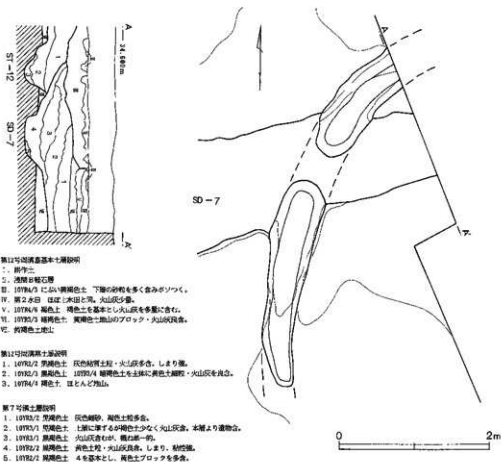
遺物はなんら出土していない。

第13号周溝墓(第136図)

し—29—10グリッドに位置する。図面整理の段階で検出されたもので、当初は単なる溝遺構として調査を実施している。大部分は調査区外であり、全体の形状や規模は不明である。平面および断面の形状から推測すれば、第2号周溝墓程度の円形の周溝墓となる。

周溝の幅は約0.95m、確認面からの深さは約60cmである。溝底は概ね平坦で、壁の立ち上がりは台部側が急、外側が緩となっている。これは西隣する方形の第1号周溝墓とは同様であるが、他のものとは逆になっている。あるいは本跡も円形ではなく、方形となるのであろうか。断面図に記録された覆土は他の周溝墓と同様に自然堆積を示し、盛土などが崩落、流入した様子は看取されなかった。

遺物の出土は見られなかった。



第136図 第12号・13号周溝墓

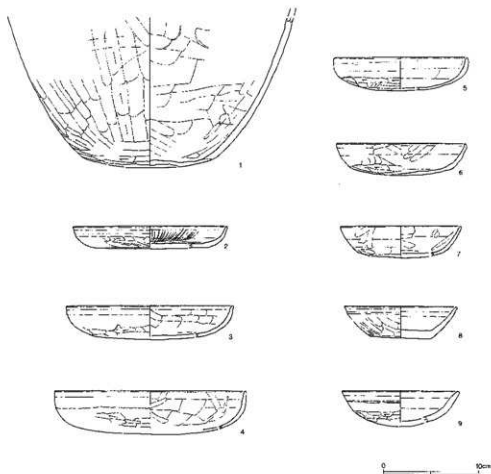
(4) 溝

先述のように、戸森松原遺跡から検出された溝は25条である。ここでは古墳時代の2条、および奈良・平安時代の4条を中心に述べ、中世や時期不明の15条については割愛する。

第1号溝(第97図)

調査区の東方、さ・しー23・24グリッドにわたって検出された。微高地の平坦面は本跡部分で終わっており、これより東と南は湿地状の低地へと移行していく。検出長は約30mで、幅約1.2m、深さ30cm前後の浅い溝である。全体は2条が並行するような形態で、平坦な溝底は西から東へわずかに傾斜している。断面図を紛失してしまったため土層図を掲載できないが、覆土はほぼ砂からなっている。おそらくは排水用の水路であったものと考えられる。集落跡は北西方面に存在する可能性が高い。

遺物は多量に出土しているものの、すべてが小さな破片であり、かつ砂層中にあったため摩滅が著しい。このため図示できるものは少ない。中心は土師器の坏で、これに微量の甕が混じている。



第137図 第1号溝出土遺物

第1号溝出土遺物(第137回)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	—	(15.7)	—	WW'B'	B	にぶい褐	—	覆土 胴~底部片
2	坏	(16.4)	(2.4)	—	WW'B'	B	橙	30	覆土 内面放射状暗文
3	坏	(17.6)	(3.6)	—	WW'B'	B	橙	—	覆土 磨耗顯著 口縁片
4	坏	(20.0)	(4.6)	—	WW'B'	B	にぶい橙	80	覆土 磨耗顯著 口縁片
5	坏	(14.2)	(3.5)	—	WW'	A	橙	30	覆土 磨耗顯著
6	坏	(13.6)	(3.4)	—	WW'B'	B	にぶい橙	30	覆土 磨耗顯著
7	坏	(12.6)	(3.3)	—	WW'B'	B	橙	40	覆土 磨耗顯著
8	坏	11.9	3.3	6.5	WW'	B	橙	65	覆土 磨耗顯著 底面ヘラ削りか
9	坏	(12.1)	(3.7)	—	WW'B'	B	にぶい赤褐	40	覆土 磨耗顯著

第3号溝(第95回)

本跡は調査区の西端、すー34グリッドに検出された。ほぼ座標軸の東西、また埋没河川の肩部に沿うように展開している。南側には同時期の第1号住居跡や、第1号掘立柱建物跡が存在する。集落跡と河川をわける溝であろうか。東側の調査区は全面が攪乱を受けており、続きは検出できなかった。自然流路と思われる第4号溝埋没後の開鑿である。

検出長は約37m、上幅は約1.5mを測る。確認面からの深さは90cm前後で、横断面は箱葉研形を呈する。覆土は自然堆積を示し、水が流れた跡や波濤された様子は窺えない。

遺物(第138回1~14)はいずれも小片であるが、覆土中より土師器では甕・台付甕・坏、須恵器では甕・高台付壺・坏などが出土している。

第4号溝(第95回)

すー34から35グリッドに位置する。完全埋没後、交差する第3号溝に切断されている。検出長は約12mで、北側は埋没河川に落ち込んでいる。幅は約4mだが、北へ向かって広がる傾向にある。溝の中央はさらに一段深まり、横断面は船底状を呈している。溝底も南から北へ傾斜している。流水の形跡は窺えなかったものの、本跡はその形状から推して人工のものではなく、降雨などの自然的営力によって形成されたものと判断される。

覆土は自然堆積を示すが、焼土や灰の薄層なども存在する。完全に埋没する以前、その時々底面で火が焚かれたようである。

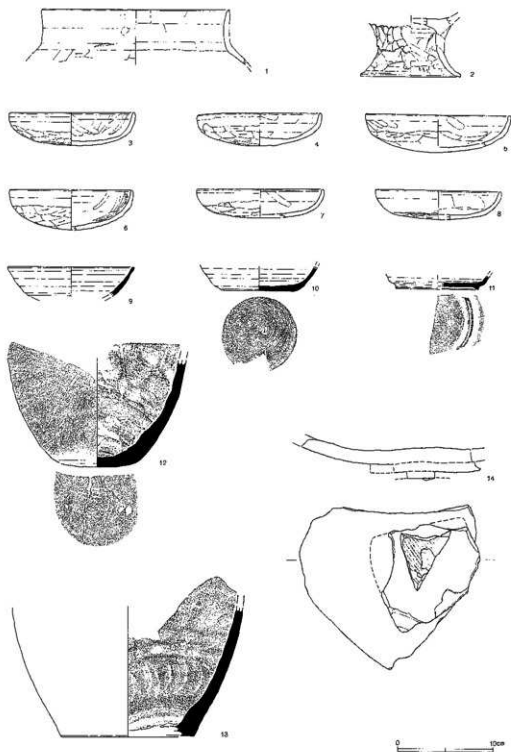
遺物の出土は少なく、またいずれも小片である(第139回図上段)。

第6号(17号)溝(第96回)

調査区の中央をほぼ一直線に横切る長大な溝である。調査時には便宜上、用水路を挟み西側を第6号溝、東側を第17号溝としたが同一の遺構である。差渡しを検出長は約195mにおよぶ。

他の遺構との重複も多く、その大半は本跡を切断している。本跡から分岐するような形で延びる第22号溝のみは、ほぼ同一時期の所産と思われる。土層観察では明瞭な切り合いも看取されず、覆土も非常によく似ている。ある時期には両者は併存し、ともに埋没していったのではなかろうか。

溝は東部から中央部までは上幅1.2m、下幅0.4m前後と長さの割りに一定している。ところが西へ行くに従ってそれは狭まり、西部では重複が激しいとはいえ上幅0.4m、下幅0.2m前後にまで減少する。横断面は逆台形を呈し、溝底は概ね平坦である。これも西部では壁の立ち上がりが垂直に近



第138图 第3号清出土遺物

くなり、深い箱形に変化している。覆土は自然堆積を示し、波深や埋め戻しが行なわれた様子は窺えない。

遺物は覆土の上位から中位にかけて埴(第139図下段3・4)、壺(1)、S字状口縁の台付壺(2)が出土している。このほか図示できなかったが、器表面に赤色塗彩を施した壺の破片5点が広範に散乱していた。これらは同一個体で、故意に破砕されたものと思われる。

第7号溝(第96図)

調査区の中央部から西部にかけて検出された東西溝である。東端部から第11号周溝墓、第12号周溝墓と切断し、西部では第6号溝と合流するように走る。

検出長は約98mで、南へわずかに膨らむものの、概ね直線的である。幅は2m内外であるが一定せず、部分的には広狭の差が大きい。溝底も一律ではなく、土坑状の掘り込みや段状の起伏を多く有している。確認面からの深さは平均で30cm程度となろうか。横断面も当然乱れているが、基本的には浅い箱形、ないしはごく緩いU字形である。覆土は自然堆積を示し、流水や波深などの痕跡は観察されなかった。

遺物は第4号周溝墓の南側部分で出土が多かった(第140図1～28)。土師器の坏を主体に、須恵器が少量混在している。いずれも覆土中位以上からの出土で、大半は摩耗が著しいうえ、小片のため図示できたものは少ない。なお、同地点の土坑状の掘り込みからは、滑石製の紡錘車(28)が見いだされている。紡錘車は直径4.9cm、厚さ1.4cm、孔径0.8cmを測り、側面には金属器によると思われる削痕がよく残る。

第22号溝(第96図)

調査区東半に検出された東西溝である。上述のように東端部は第17号(6号)溝と重複している。第2号住居跡の南側部分で北に分岐し、第8号・9号・10号周溝墓に切断されながら西へ延びていく。しかし、用水路の西側調査区では検出できなかった。掘り込みが浅いためこちら側には達しなかったのかとも思われたが、調査区の壁面にも現われていないことから、この未調査区内で収束している可能性が高い。

検出長は約100mで、このうち第17号(6号)溝と重複した部分は約25mである。幅は80cm前後で確認面からの深さは30cm程度である。横断面は逆台形を基本とし、底面は概ね平坦である。

遺物は細片であるため図示できなかったが、土師器の甕?が1点出土している。

(5) 土坑

ここでは時期不明のものは割愛し、第5号周溝墓の台部縁より検出された縄文時代の1基について述べる。土坑は第5号周溝墓の南頂部付近、す—30—10グリッドに位置する(第113図)。

平面はおよそ2.10m×1.40mの楕円形を呈し、北側に浅い突出部を持つ。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、中位はややオーバー・ハングしている。底面は平坦であるが、南側は傾斜面となり、そのまま壁へと移行している。遺構確認面からの深さは約95cmである。覆土は自然堆積を示す。

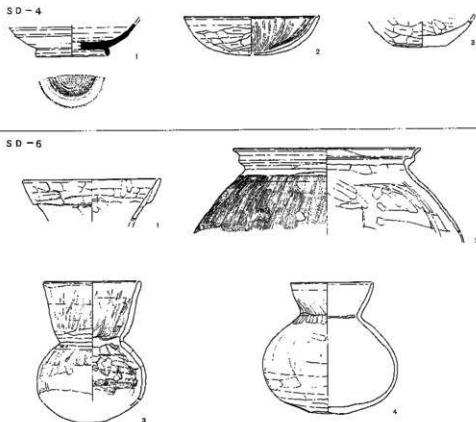
遺物は細片のため図示できなかったが、縄文時代後期の土器が少量出土している。

第3号溝出土遺物(第138図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	施成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	(20.0)	(5.8)	—	WW'B'	B	橙	—	覆土 口縁片
2	台付甕?	—	(6.3)	(10.4)	WW'	B	にぶい橙	—	覆土 胴部50%残
3	坏	13.3	3.4	—	WW'B'	B	橙	80	覆土 磨耗顯著
4	坏	13.0	3.4	—	WW'B'	B	にぶい橙	80	覆土 磨耗顯著
5	坏	(15.4)	(3.9)	—	WW'B'	B	橙	—	覆土 口縁片 磨耗顯著
6	坏	(13.0)	(4.2)	—	WW'B'	B	橙	30	覆土 磨耗顯著
7	坏	13.6	(3.0)	—	WW'B'	B	橙	—	覆土 口縁片 磨耗顯著
8	坏	(13.2)	(3.0)	—	WW'B'	B	橙	40	覆土 内面放射状暗文か
9	坏	(13.8)	(3.1)	—	W針	B	灰	—	覆土 口縁片
10	坏	—	(2.6)	7.8	WW'針	A	灰	50	覆土 底部回転ヘラ削り
11	高台付甕	—	(1.5)	(8.6)	W	A	灰	—	覆土 底部片
12	甕?	—	(13.6)	(14.0)	WW'	B	灰	—	覆土 胴~底部片
13	甕	—	(11.4)	7.5	WW'	B	灰	—	覆土 胴~底部片
14	甕	—	—	—	WW'	B	灰	—	覆土 胴部片 焼台付着

第7号溝出土遺物(第140図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	施成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.8)	4.1	—	WW'B'	B	にぶい橙	60	覆土 磨耗顯著
2	坏	13.8	3.9	—	WW'B'	B	橙	70	覆土 全体に歪む
3	坏	(13.0)	4.1	—	WW'	B	橙	30	覆土 磨耗顯著
4	坏	(12.8)	3.8	—	WW'B'R	B	橙	40	覆土
5	坏	(14.0)	4.0	—	WW'	B	橙	30	覆土 磨耗顯著
6	坏	(12.0)	(3.5)	—	WW'B'	B	灰黄褐	20	覆土
7	坏	12.4	3.3	—	WW'B'	B	橙	95	覆土 磨耗顯著 口縁歪む
8	坏	(12.2)	(3.3)	—	WW'B'	A	にぶい黄橙	25	覆土
9	坏	(13.2)	(3.3)	—	WB'	B	にぶい橙	40	覆土 磨耗顯著
10	坏	14.2	(4.2)	—	WW'B'	B	橙	50	覆土
11	坏	(14.4)	(4.1)	—	WW'R	B	にぶい黄橙	25	覆土 内面暗文か
12	坏	(13.4)	(4.6)	—	WW'	B	橙	40	覆土 磨耗顯著
13	坏	(14.6)	(6.1)	—	WW'	B	にぶい黄橙	25	覆土 磨耗顯著
14	坏	13.6	(4.6)	—	WB'	B	橙	30	覆土
15	坏	(14.0)	(4.4)	—	WW'B'	B	橙	25	覆土 磨耗顯著
16	坏	12.0	3.7	—	WW'B'	B	にぶい橙	90	覆土 磨耗顯著 内面暗文か
17	坏	(10.0)	3.1	—	WW'	B	橙	60	覆土
18	坏	9.2	3.6	—	WW'	B	橙	70	覆土
19	坏	13.4	3.8	—	WW'	B	明赤褐	90	覆土 内面放射状暗文
20	坏	(12.6)	(3.2)	—	WW'	B	にぶい橙	50	覆土 内面放射状暗文
21	坏	(12.0)	(2.2)	—	WW'	B	にぶい黄橙	50	覆土 内面放射状暗文
22	皿	(17.4)	(3.7)	—	WW'	B	橙	50	覆土 磨耗顯著
23	皿	(16.4)	(3.6)	—	WW'	B	橙	30	覆土 磨耗顯著
24	蓋	—	(2.9)	—	W	B	灰	—	覆土 ツマミ径3.7cm
25	坏	(12.4)	(2.8)	—	W	B	灰	—	覆土 口縁片
26	甕	—	(8.3)	7.6	WW'	B	灰黄	20	覆土 長頸瓶か 底部回転ヘラ削り
27	甕	(9.0)	5.6	5.7	WW'	C	にぶい黄橙	50	覆土 磨耗顯著



第139図 第4号・6号溝出土遺物

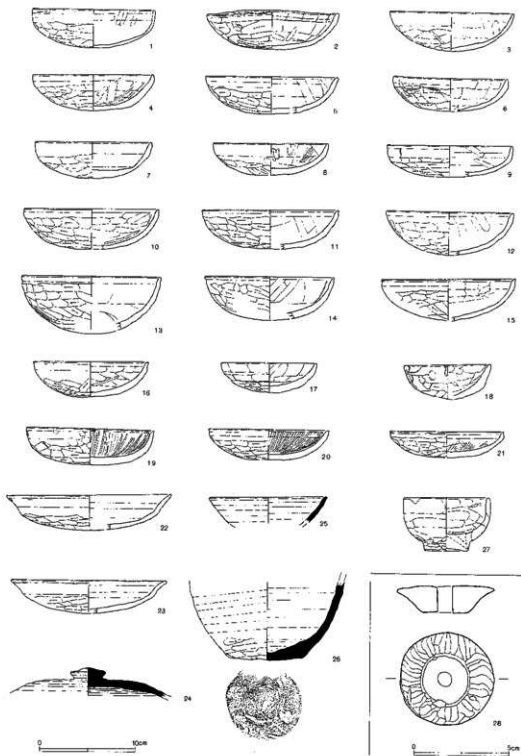
第4号・6号溝出土遺物(第139図)

SD-4

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	高台付碗	—	(3.3)	(9.4)	W	A	灰白	—	覆土 底部片 灰釉
2	坏	(14.4)	(4.1)	—	WW'	B	にぶい黄橙	20	覆土
3	甕?	—	(2.7)	5.6	WW'B'	B	にぶい褐	—	覆土 底部片

SD-6

1	壺	(14.6)	(4.4)	—	WW'	B	にぶい橙	—	覆土 口縁片
2	台付甕	(19.8)	(9.0)	—	WW'B'	C	にぶい黄橙	—	覆土 口~胴部片
3	埴	10.3	(12.5)	—	WW'B'	B	明赤褐	—	覆土 口~胴部片
4	埴	8.8	13.6	2.9	WW'B'	C	にぶい黄橙	90	No.1 磨耗顯著



第140圖 第7号溝出土遺物

V 起会遺跡の調査

1 遺跡の概要

深谷バイパスの路線上で見た場合、起会遺跡の東端と戸森松原遺跡の西端は約160mを隔てている。西端は農業用水路をもって矢島南遺跡と接している。遺跡中心部の位置は、およそ北緯36°12'45"、東経139°18'28"である。周辺は現在、平坦な水田が広がっており、標高は約35.5mで起伏はほとんど認められない。

調査区は総延長880m(幅は平均42m)と長大なもので、その面積は37,100㎡にも及ぶ。このため、調査は全体を東よりⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅳ区と4分割し、各々2名の調査員を配して実施した。区割りには便宜上、調査区を横断する道路によって行なっており、地形や遺構の内容などを考慮したものではない。

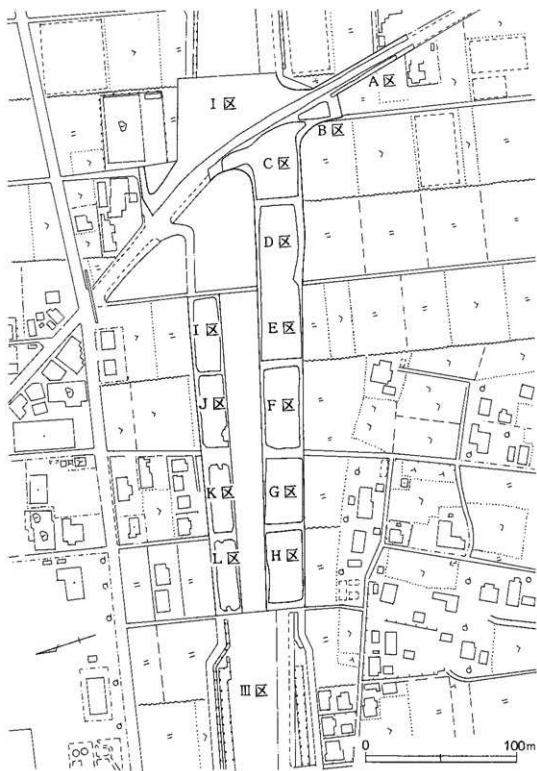
調査はⅠ区が昭和61年度、他が62年度の実施である。期的にはいずれも出水期—梅雨から台風シーズンにかけて—に限られていたこともあり、充分な断面観察の記録を残していない。したがって、本書ではこれらの図を掲載することができなかった。不十分な内容ではあるが、調査時のメモや部分的な観察などから見れば、基本的な層位や地形的な特徴は各区とも共通している。まず、耕作土の下は氾濫土が1m～1.5m程も厚く堆積し、やがて天仁元年(1108)降下とされる浅間B軽石の純層に達する。堆積は傾斜部から低位部で厚く、高所ではまったく認められない部分もある。このことから、軽石は直接の降下を示すものではなく、その後吹き溜ったものと考えられる。同層は5cm～10cm程の厚みを有し、直下は黒色の腐植土層となる。黒色土は30cm～40cm程で青灰色の粘質土へと変化し、これがかなり厚く下位へ続いていく。

森下遺跡や戸森松原遺跡で遺構確認面となった黄色粘質土層はほとんど認められず、状況は大きく異なっている。住居跡も全体で2軒が検出されたにすぎず、しかも遺存の状態はかなり悪いものである。

浅間B軽石の堆積が厚いことや、他遺跡で主体となる黄色土部分の希薄な点を重視すれば、起会遺跡は自然堤防状の微高地から外れた遺跡であると評価できる。すべての調査区というわけではないが、浅間B軽石以下の堆積土は北から南へ向けて傾斜している。したがって、微高地は調査区の北側、東西方向に横たわっているものと推測される。

一方、南側には集落の乗る島状の微高地が存在している。遺跡としての中心はむしろこちら側かもしれない。調査結果や迅速測図の地形から推測すれば、調査区の大部分は埋没河川の上に設定されたことになる。

いきおい、調査の主体はこの浅間B軽石層を除去し、直下の状況を把握することとなった。その結果、各調査区からは以下のような遺構や遺物が検出された。なお、記述はⅠ区からⅣ区まで、各区ごとに行なう。



第141図 起会遺跡I区・II区調査区と周辺の地形

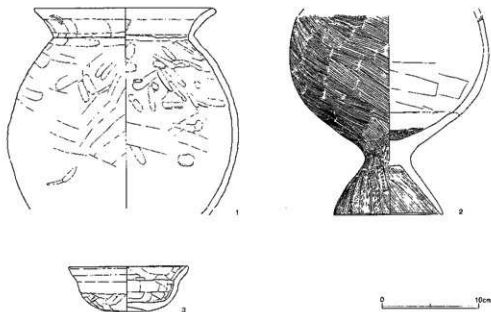
2 検出された遺構と遺物

(1) I区

起会遺跡東端の調査区(第142・143図)で、II区とは県道伊勢崎・深谷線によって分けられる。面積4,100㎡と全体では最も狭い。浅間B軽石の除去を行なうも、なんら遺構らしき存在は確認できなかった。このため、数条のトレンチを設定し、直下の黒色土を1m程掘り下げた。しかし、遺構の検出のないまま激しい出水となり、調査続行は不可能となった。

遺物は黒色土中より壺(第142図1)、台付甕(2)、甕(3)が出土している。いずれも古墳時代の土器であるが、時期的にはやや開きがある。県道西側のII区に古墳時代の溝が検出されていることから、これらはII区側から流れ込んだものと考えられる。

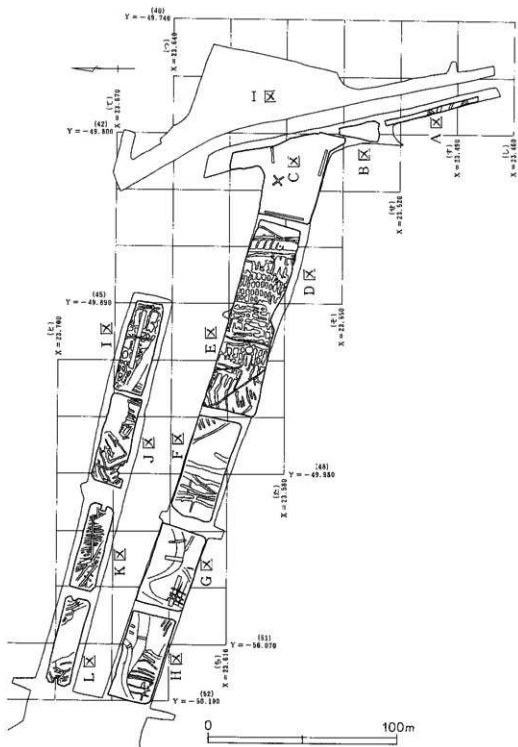
以上のような状況から見て、I区は微高地—南西方向に予想される—から落ち込んだ谷状の部分に相当する調査区と判断される。



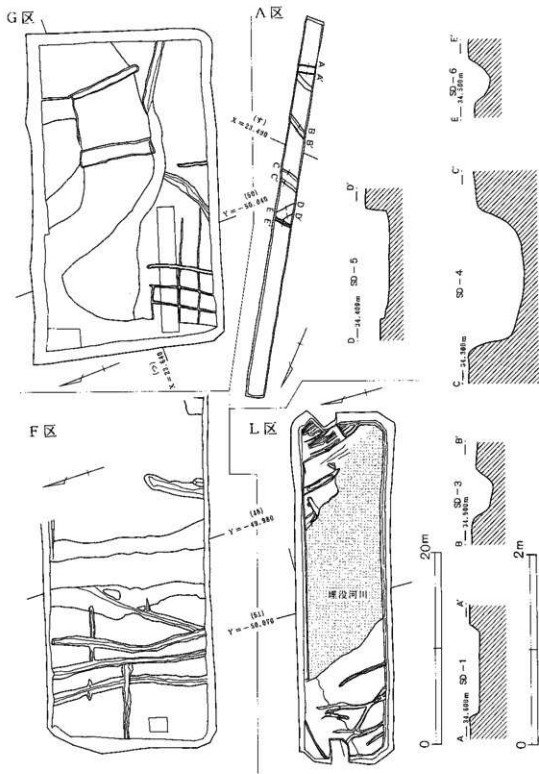
第142図 起会遺跡I区出土遺物

I区出土遺物(第142図)

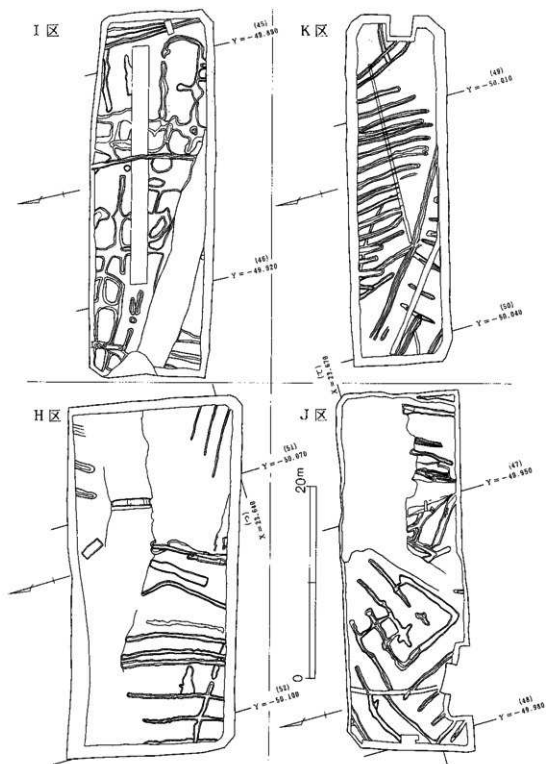
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	構成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	19.4	(21.1)	—	WW'BR	B	明赤褐	70	トレンチ } 磨耗顯著
2	台付甕	—	(21.1)	11.2	WW'R	B	明赤褐	50	
3	甕	12.7	4.7	2.0	WW'	B	にぶい赤褐	100	



第143图 起会遗址I区·II区全体图



第144图 紀会遺跡II-A区・F区・G区・L区全体図



第145图 起会遗址II-H区·I区·J区·K区全体图

(2) II区

II区は県道伊勢崎・深谷線から西側、約320mが調査の範囲である。中央部は農業用水路が東西に走るため、南北に二分されている。調査区は現道などが数多く横断するため、便宜上A～Lまでの小区に分割した(第141図)。

微高地は東半のA～E区に現われたのみで、他はほとんどが浅い氾濫原となっている。検出された遺構は古墳時代後期の住居跡1軒、土器集中1箇所、平安時代の溝30条、床上げ田(苗代)状遺構1区画、時期不詳の住居跡1軒、中世土坑1基である。このほか、埋没河川(平安時代以前3条、近世以降1条)などが確認されている。

第1号住居跡(第147図)

L区の東辺、て—50—12グリッドに位置する。浅間B層石層の下に検出されたが、大部分は既に流失し、わずかにカマドとその近辺の形骸が確認されたにすぎない。おそらくは(長)方形を呈していたと思われるものの、その規模や施設についてはまったく不明である。さらに、時期不明の溝によって切断されている。

壁や覆土、また床はすべて失われており、カマドも火床面のみの残存である。カマドは焼土化の範囲で東壁に付設されたこと、燃焼部は壁外に突出していること、袖は削出されたものであることが読み取れる。よって、遺物の出土はなんら認められていない。

カマドの南側には2基の土坑が存在する。東側のものは遺物の出土こそないものの、覆土に焼土や炭化物を多く含み、本跡に伴う可能性がある。西側のもの(第1号土坑)は溝の埋没後に設置されており、覆土中からは中世の「かわらけ」を出土している(第148図2・3)。

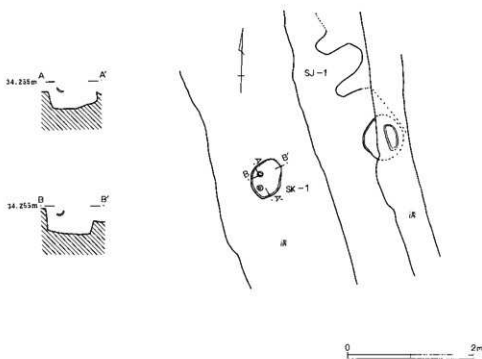
住居跡に伴う遺物はないが、浅間B層石を含む溝が本跡を切断していることから、平安時代以前のものと考えられる。



第146図 II区第1号土坑出土遺物

第1号土坑出土遺物(第146図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	組成	色調	残存	出土位置・その他
1	高台付陶	(14.0)	6.0	7.3	WW'B'	C	明褐色	50	No4~6 焼成悪く軟質
2	カワラケ	10.2	2.5	5.8	WW'	B	浅黄橙	100	No8 底部回転糸切
3	カワラケ	9.9	2.6	6.2	WW'	B	浅黄橙	100	No7 底部回転糸切



第147図 II区第1号住居跡・第1号土坑

第2号住居跡(第148図)

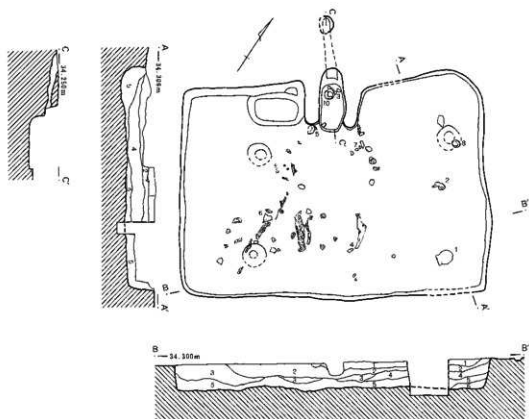
第1号住居跡の東方約15m、K区の西端で—50—12グリッドに位置する。浅間B軽石下の平行する溝群に断面観察用のトレンチを入れたところ、土師器の壺(第149図1)などが出土した。一帯は黒色土が厚く広がっており、平面確認による検出はきわめて困難であった。そこで直交するトレンチを設け、識別に努めた。やがてカマドを検出するに至り、ここに住居跡の存在を確認した。

平面形はついに確定できなかったが、断面観察を援用して推定復元するならば、およそ4.90m×3.30m程の長方形となる。主軸方向はカマドから見て、N—32°—Wである。

床面も黒色土中にあり、特に硬化したような部分も看取されなかった。但し、炭化物の散る層—というよりもライン—が断面に現われ、以下は無遺物層となる。この面を床と認定して精査を続行したところ、カマドの燃焼部に達した。検出された床面は緩く大きな起伏を有しており、かつ全体的には東から西へわずかながら傾斜している。浅間B軽石下からの深さは約40cmを測る。

カマドは西壁の中央部に設けられる。燃焼部は100cm×40cmの楕円形で、壁面は非常によく焼けている。火床面は平坦で、床よりも5cm程低く掘られている。直上から小型壺(第149図3)が出土している。確実ではないが、袖はおそらく削出されたもので、確認された範囲では幅約25cm、長さ約65cmである。壁から直角に垂下し、先端部を焚き口とすれば、その内法は約35cmとなる。煙道は長さ80cm、幅15cm、直径8cmのトンネル状で、主軸からはやや南に振れている。

遺物の出土は多く、床面上に壺(2)や高坏(4)、碗(5~11)が散乱していた。



第2号住居跡土層説明

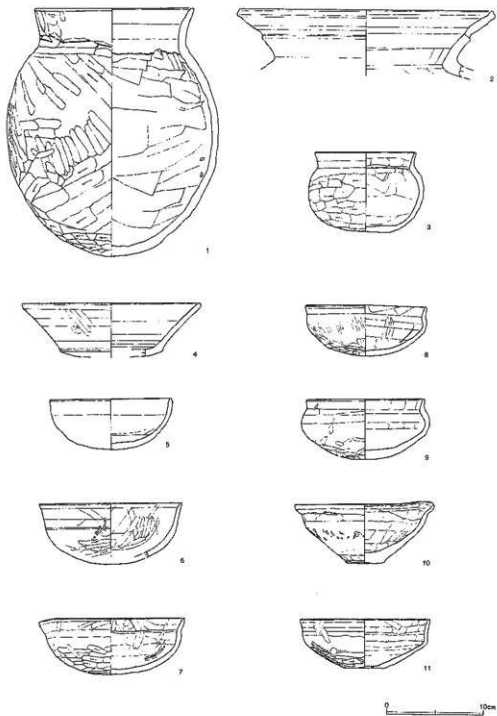
1. 暗褐色粘質土 焼土粒、炭化粒少量含、マンガン鉄?含。
2. 暗褐色粘質土 焼土粒、炭化粒少量含、1層より厚い、二酸化鉄多。
3. 灰褐色粘質土 現在埋もアロック状(2~50cm)にあり、マンガン鉄含。
4. 灰褐色粘質土 3層より粘質弱く、灰色強い、炭化物少量含、マンガン鉄含。
5. 灰褐色粘質土 4層粘、炭化物微量含、マンガン鉄含。
6. 灰褐色粘質土 マンガン鉄少量含。

0 2m

第148図 II区第2号住居跡

第2号住居跡出土遺物(第149図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	装束	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	16.7 (26.6)	25.9 (6.2)	-	WW'B'	B	にぶい褐色	100	トレンチ 底部磨滅
2	壺	-	-	-	WW'	B	明赤褐色	-	No.35 口縁片
3	小型壺	10.7	8.2	4.2	WW'B'	C	褐色	90	No.58~62・66・67 外面赤彩か
4	高環	(18.8)	(5.5)	-	WW'	B	褐色	-	No.14・17・18・39 坏部片
5	壺	12.9	5.3	-	WW'	C	褐色	90	No.25・44 磨耗・剝落顕著
6	壺	(15.0)	(5.7)	5.7	WW'	A	にぶい褐色	-	No.51 口縁片
7	壺	15.4	5.9	-	WW'	B	にぶい褐色	75	No.26~29 磨耗顕著
8	壺	12.6	5.3	-	WW'	B	明赤褐色	95	No.34 口縁歪む 磨耗顕著
9	壺	(12.8)	6.3	-	WW'	B	褐色	50	No.67
10	壺	14.7	6.2	3.6	WW'B'	B	明褐色	95	No.63
11	壺	13.7	5.1	4.9	WW'	B	にぶい褐色	75	No.22 磨耗顕著



第149图 II区第2号住居跡出土遺物

床上げ田状遺構(第150～153図)

D区とE区を中心に、西端部はF区にまで達している。東側はC区、西側はF区の埋没河川によって限られている。北側のI区は近世の河川跡などで判然としないが、こちらまでは延びていないようである。

遺構は多数の溝によって構成されるもので、方向的には南北とこれに直交する東西のものからなる。幅は1m内外、深さは20cm弱である。覆土は粗い砂粒や炭化物を多量に含む黒色粘質土が主体となっている。また部分的とはいえ、その上には浅間B軽石が5cm程の厚さで堆積している。このことから、溝群はほぼ同時期に開鑿されたものということが出来る。

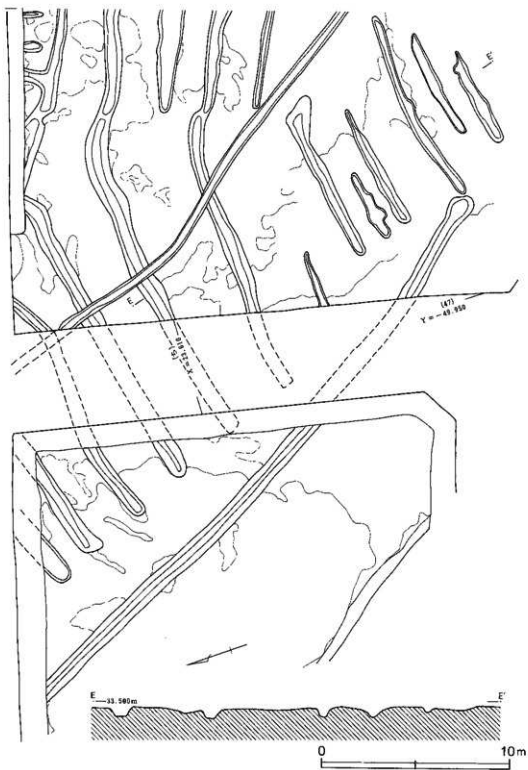
以下、推測に頼る部分が大いだが、これらを西から復元的に見ていくことにする。まづ、埋没河川の脇にはこれと平行する1条の溝が走り、そこに直交するような13条の東西溝が存在する(第150図)。中央部の溝は長さ約18m、幅は1m前後である。各溝の東端は東側の方形区画の東西溝と連接しているが、それらの接合部はブリッジ状に浅く掘り残されている。西端はきれいに揃っており、その計画性が看取される。

この東側は広く方形(格子状)の小区画が展開している(第151・152図)。区画は整然とした部分もある反面、中央部(た—45グリッド—帯)のようになりに形の崩れたところもある。状態のよい東半部の溝は、南北間が約2.5m、東西間が約4mをおいてほぼ等間隔に配されている。南北溝がいくぶん湾曲して掘られているのは、地形を意識した上でのことと思われ、規則性という点ではなんら遜色がない。東西溝は南北溝に比して掘り込みがやや深く、遺存状態がよい。また、溝の各交差部は皿状に窪み、新旧の関係はない。これらに囲まれた小区画は3.5m×2m程度の長方形で、面積はおおよそ7㎡となる。溝の覆土には水が通されたような形跡がないことから、溝群が水利施設として掘鑿されたものとは考えられない。

東端部は西端と同様、東西溝のみとなる(第153図)。方形区画部とは向きを換え、東側の埋没河川に直交するように延びる。いずれも細長い土坑状で、長さは10mに満たないものと思われる。埋没河川と平行する6条の溝(内、蛇行する1条は近世)に切断されているが、西端のE区からF区に検出された東西溝とは、全体での位置や形態がよく似ている。やはり東端はきれいに揃い、溝群の終わりを明示している。

遺物には古墳時代後期から奈良・平安時代の土器が少量ある。いずれも小片のため、図示することはできなかった。但し、その中に溝群に伴うと積極的に評価しうるものは認められない。

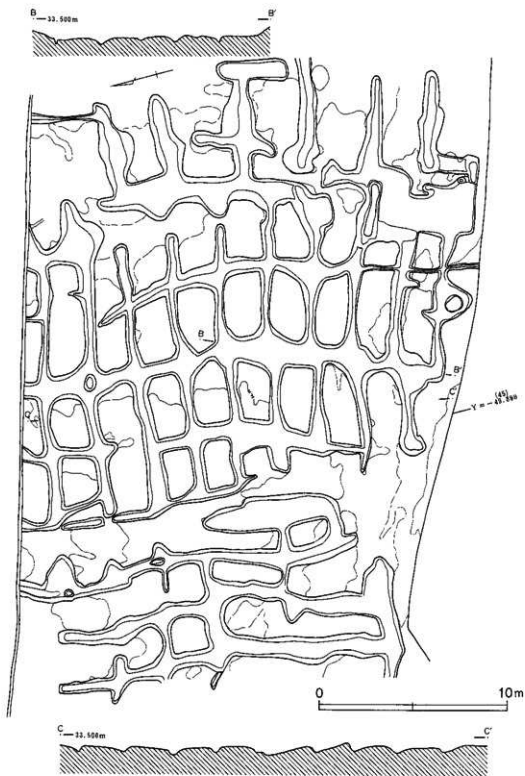
なお、これらの溝によって形成される区画を一つの遺構として捉えた場合、その呼称を何とするかは苦慮するところである。上述のように、その性格を明確にはできなかったが、本書では調査担当者の考えを尊重し、頭書のように床上げ田状遺構としておく。名称は遺構の性格をも規定するという危惧を孕むため、今後の類例に幣をおよぼさないよう、ここではあくまでも便宜上のものであることを明記しておきたい。



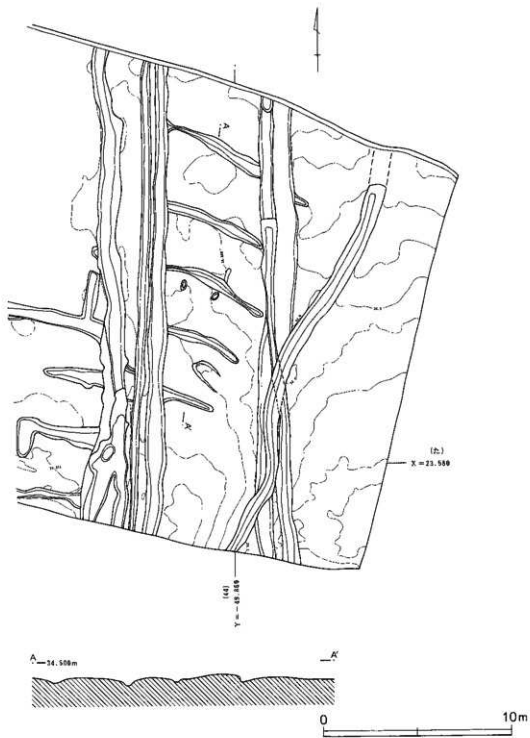
第150图 II区床上埕田状遗構(1)



第151图 II区床上げ田状遺構(2)



第152図 II区床上げ田状遺構(3)



第153回 II区床土: 埴田状遺構(4)

溝(第143・144・145図)

上記にかかる溝以外は大半が時期不明、ないしは近世以降の所産である。このうち、K区に検出された南北方向の溝群(第145図)は規模的、間隔的に規則性が看取される。加えて、覆土も床上げ田状遺構と酷似しており、同時期の開鑿で関連深いものかもしれない。

土器集中(第154図)

調査区の西北端であるL区、て-51-22グリッドを中心に検出された。L区の中央には埋没河川が存在するが、土器はその西側肩部に集中している。土器群は埋没河川に沿い、ほぼ1列に並んで見いだされた。層位的には浅間B粒石層下の黒色土中で、レベル的にも同一高である。遺構については周囲を精査したにもかかわらず、ついにこれを確認できなかった。土器の分布は西北に鉢からなる小型品、中央に壺や台付甕、甌、高環からなる大型品の集中が指摘できる。これらはすべて古墳時代中期、和泉式の範疇で捉えられるものである。

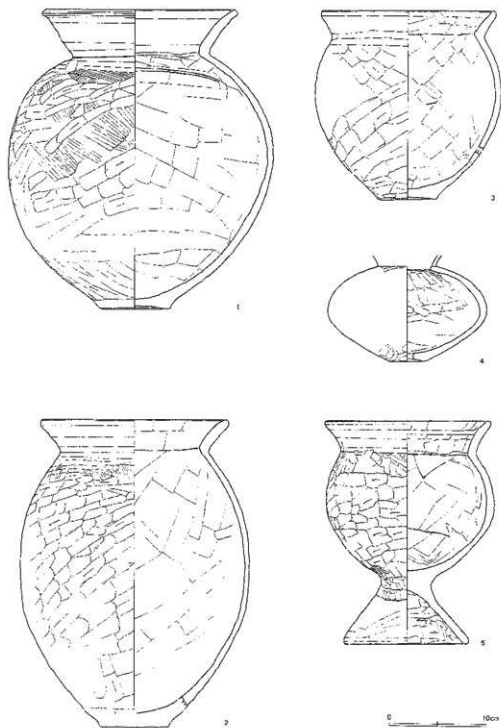
鉢(第156図11~第157図25)はいずれも口径17cm前後、器高4cm強で、器内の厚い画一の製品である。色調や胎土もよく似ており、同時に、しかも同一人物によって作られたかのようである。また、台付甕や甌も同様で、そのなかに含めることが容易である。但し、25のみは器肉が薄く、底部もほとんど窪まないなど異質である。

土器集中出土遺物(第155~157図)

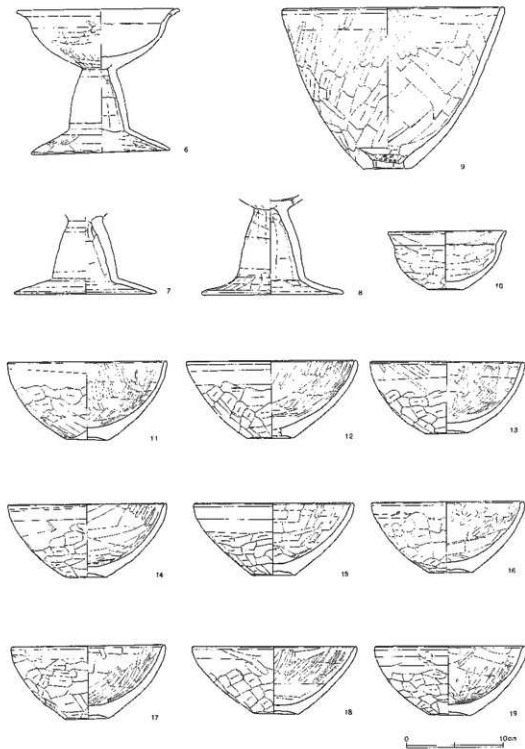
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	(20.8)	30.2	7.3	WW'	B	にぶい赤褐	70	No173 磨耗顯著
2	甕	(20.0)	(30.1)	-	WW'BR	B	にぶい黄橙	20	No176
3	甕	(18.0)	(19.6)	5.7	WW'R	B	にぶい橙	40	No3・4・105・106・180
4	甕	-	(9.9)	3.3	WB'R	B	にぶい黄橙	40	No178 磨耗顯著
5	台付甕	17.4	23.2	13.2	WW'B'	B	にぶい褐	80	No31・101・170~172 赤彩か
6	高環	-	(14.6)	(17.6)	WW'B'	A	橙	40	No164 磨耗顯著
7	高環	-	(8.0)	(14.8)	WW'	B	にぶい橙	-	No177 脚部40%残
8	高環	-	(9.9)	(14.8)	WW'B'BR	B	にぶい橙	-	No172 脚部50%残
9	甌	23.4	16.8	4.9	WW'BR	B	にぶい橙	90	No174 孔部3.3cm
10	甌	12.4	6.1	3.5	WW'BR	C	にぶい橙	90	No165 磨耗顯著
11	鉢	16.8	8.1	4.2	WW'B'	B	にぶい褐	70	No155・168 磨耗顯著
12	鉢	18.0	8.1	4.7	WW'B'	B	にぶい黄橙	50	No175・176 磨耗顯著
13	鉢	16.2	7.5	4.2	WW'B'	B	にぶい黄橙	60	No153 磨耗顯著
14	鉢	16.7	7.6	4.1	WW'B'	B	にぶい褐	100	No180
15	鉢	16.7	7.5	4.2	WW'B'	B	にぶい褐	95	No156
16	鉢	15.8	7.4	4.4	WW'B'	B	灰黄褐	40	No154 磨耗顯著
17	鉢	16.2	7.6	4.3	WW'B'	B	にぶい黄橙	70	No159
18	鉢	17.4	7.0	4.3	WW'B'	C	灰黄褐	70	No108・111・115・120 磨耗顯著
19	鉢	16.2	7.2	4.2	WW'B'	B	にぶい褐	70	No160 磨耗顯著
20	鉢	18.0	7.4	4.1	WW'B'	B	にぶい黄橙	90	No158 磨耗顯著
21	鉢	17.1	6.9	4.2	WW'B'	B	にぶい橙	90	No162 磨耗顯著
22	鉢	17.6	6.9	4.0	WW'B'	B	にぶい黄橙	90	No157 磨耗顯著
23	鉢	16.3	6.4	(3.7)	WW'R	C	にぶい赤褐	50	No78・90・91 磨耗顯著
24	鉢	19.3	6.2	4.3	WW'B'	C	にぶい黄橙	70	No119・175 磨耗顯著
25	鉢	16.6	6.5	3.4	WW'B'	C	淡赤橙	90	No152 磨耗顯著



第154图 II区土器集中

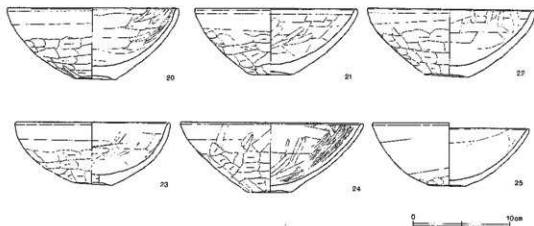


第155图 II区土器集中出土遺物(1)



第156图 II区土器集中出土遺物(2)

こうした検出状況やその特徴から推せば、土器群は河川の肩に意識的に並べられたもので、かつ日常使用しているものではなく、特別に用意されたものと見ることができよう。確実ではないものの、台付甕の口縁と台の端部には赤色塗彩が施されているようである。ここから導き出される土器群の性格は、なんらかの「祭祀」に伴うものということにならう。検出状況からは、これらが祭祀に用いられた後に「投棄」されたものとは思えない。貯蔵具や調理具、食膳具が揃っている点を重視するならば、「調理・供献行為」がなされた一調理はこの場と断定できないが—と解釈してもよいのではなかろうか。対象の特定は困難ながら、河川とのかかわりが大きいと考えられることから、農耕生活に密接に結びつく「水霊」を想定したい。



第157図 II区土器集中出土遺物(3)

(3) III区

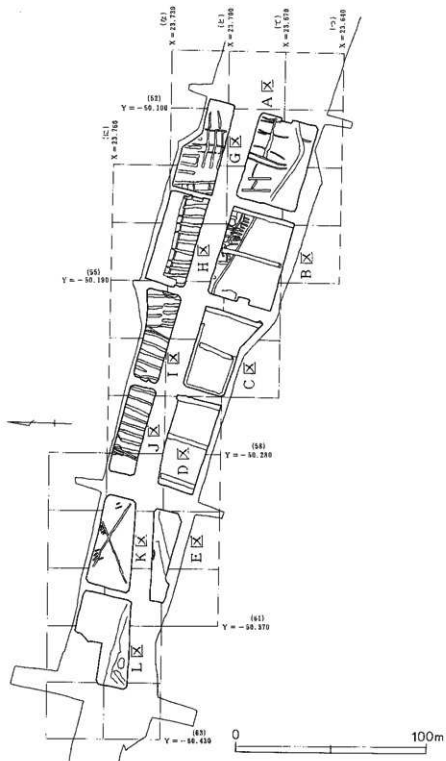
III区は調査区を横断する現道によって、東のII区、西のIV区と区分している。遺跡の内容や地形的な相違に基づくものではなく、区分はあくまでも調査工程上の便宜である。路線上的距離は約310mで、幅はやや広いものの、面積的にはII区と同程度である。調査はやはり全体をA～Lまでの小区に分割して実施した(第158図)。

調査区の状況もII区と同様で、厚い氾濫土の下は浅間B軽石層を挟み、黒色の腐植土層となっている。調査区全体は南に傾斜しており、遺構は北半部に集中している。このことから、III区は東西に延びる微高地の南縁をなぞるように設定された調査区ということができる。

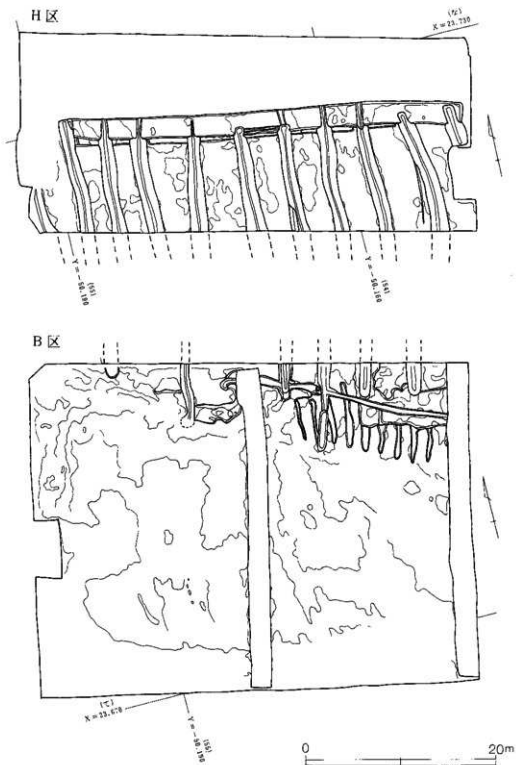
検出された遺構は平安時代の溝110条、土器集中1箇所などである。また、遺構に伴うものではないが、古墳時代や平安時代の土器が少量出土している。これらはグリッド出土土器として一括した(第164図1～8)。



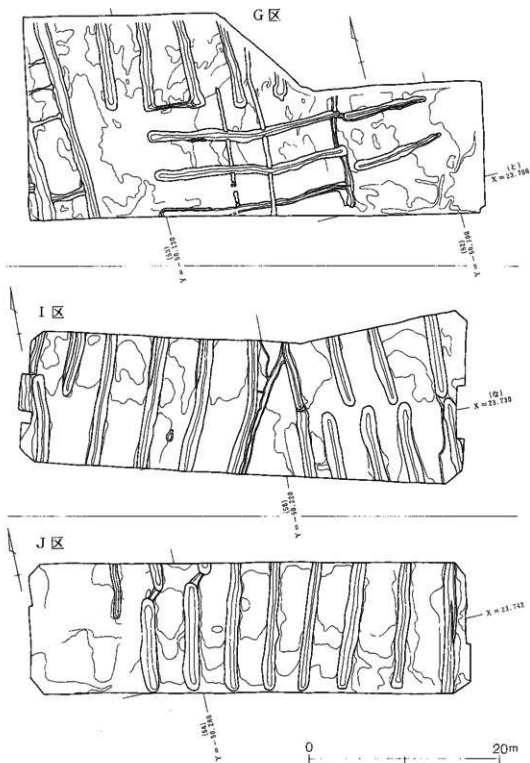
第158図 起会遺跡Ⅲ区調査区と周辺の地形



第159图 起会遗址山区全体图



第160图 起会遺跡Ⅲ-B区・H区全体图



第161图 起会遗址III-G区·I区·J区全体图

溝(第159～161図)

平安時代の溝はA・B・G～J区に大半が検出されている。特にH～J区では同等規模のものが方向を揃え、等間隔に並び群をなしている。溝の多くは幅1.5m前後で、約5m間隔で平行している。II区のように格子状の区画をなすものはなく、ほとんどが南北溝である。

これらの溝を方向的なまとまりとして見てみると、G区には東西(3条)・南北(5条)の2単位、H～I区には北端を揃えた1単位(17条)、I区にはその北側に接するような1単位(4条)、およびJ区に連なる1単位(14条)、という5群に分けられる。G区の東西溝は長さ20m程のやや湾曲したもので、東側にはさらに短い溝が存在する。北側の南北溝との重複関係は明らかでないものの、南北溝はその南端を揃えている。H～I区の溝群は南のB区に続く可能性もあるが、やや方向的にずれがある。あるいはI区のように、ブリッジ状となって接しているのかもしれない。

G区の東西溝を除き、他の南北溝は長さが不明である。しかし、南や北には立ち上がりがあることから、両端の限られた細長い土坑状となるものと推測される。覆上中にはやはり浅間B経石の堆積が認められ、溝底には植物の炭化層が遺存していた。

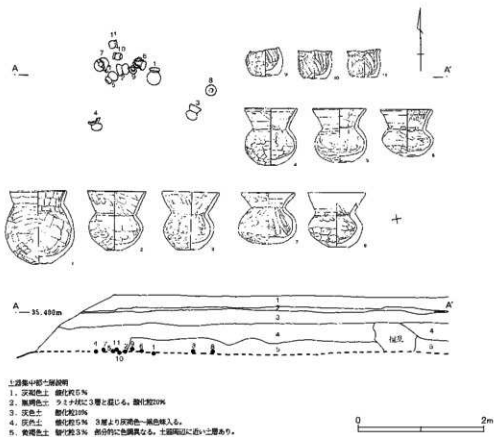
こうした規則的な配置性や覆土の状態は、II区の床上げ田状遺構を含むそれとときわめて類似している。したがって、尚調査区の溝群はおおよそ同時期の開墾で、関連性の強い遺構群と捉えることができよう。

土器集中(第162図)

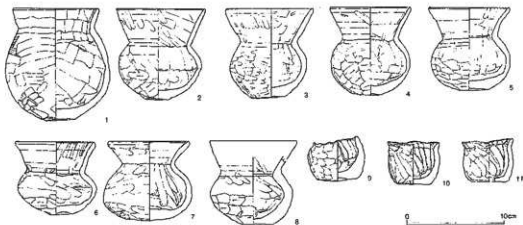
H区の北西、と一54—22グリッドにおいて検出された。上記溝群の確認面からは40cmほど下位、灰色から黄色味を帯びた褐色土中の出土である。1m弱の範囲内に11個の土器が集中しているもので、レベル的にはほぼ同一面上にある。これらは住居跡などに伴う可能性もあったため、慎重に周囲の精査を行なった。しかし意に反し、遺構らしき掘り込みはついに検出できなかった。こうした状況から見て、土器群は当時の地表面に放置されたものであると判断された。多くは横転した状態で検出されたが、本来は正立していたのではなかろうか。なお、調査区が南に向けて傾斜している点を考慮すれば、土器群の位置は微高地の肩部に当たることになる。

土器は古墳時代中期、和泉式の範疇で捉えられる一群である。内訳は小型壺1(第163図1)、埴7(2～8)、手捏ね3(9～11)となっている。埴はいずれも口径8.5cm、器高9.5cm前後の小型品である。但し、II区土器集中の鉢のように画一性は窺えず、胎土や色調などは個々は微妙に異なっている。

さらにII区の土器集中と比較するならば、まづ個体数や範囲といった規模が小さく、構成する土器は小型の貯蔵具となっていることが挙げられる。一方、祭祀遺物としての手捏ね土器が3個体も含まれていることは、この土器群が日常性の薄いものであることを示している。内容的にはII区の土器集中と大きく隔たるが、やはり性格的には「祭祀」にかかわる遺物ということができよう。対象はこれも水を意識させるものがあり、「水霊」ということになろうか。反面、行為的にはII区が「調理」から「供献」という流れを想起させるのに対し、本区では「調理」面は欠落し、「供献」面のみが強く打ち出されている。あるいは、土器そのものが「供献」の対象であったのかとも思われる。時期も地域も、また対象も同様でありながら、行為に一律でないものがあることは非常に興味深い。



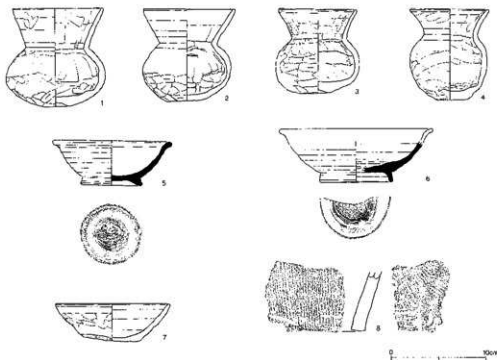
第162図 III区土器集中



第163図 III区土器集中出土遺物

土器集中出土遺物(第163図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	小型壺	9.0	11.7	2.8	WW'B'	A	橙	100	No48
2	埴	9.2	9.5	2.3	WW'B'	B	にぶい橙	100	No51 磨耗顯著
3	埴	9.3	8.4	3.5	WW'B'	B	にぶい赤褐	100	No42 口縁歪む
4	埴	(8.2)	9.2	2.1	WW'	B	にぶい橙	80	No56
5	埴	8.5	8.7	2.5	WW'B'	B	にぶい赤褐	80	No52
6	埴	8.1	7.6	2.0	WW'B'	B	にぶい褐	70	No49
7	埴	8.4	8.4	丸底	WW'B'	B	橙	100	No53
8	埴	—	(7.1)	3.2	WW'B'	A	明赤褐	70	No43
9	手握ね	4.3	4.2	4.0	WW'	B	にぶい赤橙	100	No50
10	手握ね	5.3	3.4	4.3	WW'B'	A	にぶい褐	100	No54
11	手握ね	(5.3)	4.2	3.5	WW'B'	B	にぶい赤褐	70	No55



第164図 Ⅲ区グリッド出土遺物

グリッド出土遺物(第164図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	埴	9.2	10.3	2.3	WW'B'	B	にぶい橙	90	No18
2	埴	9.6	9.7	3.0	WW'R	B	にぶい褐	95	17KT 磨耗顯著
3	埴	8.3	8.9	2.8	WW'B'	B	にぶい赤褐	80	No19
4	埴	8.4	9.6	3.0	WW'B'	B	橙	100	No140
5	高台付碗	(12.4)	4.7	6.5	WW'	C	明赤褐	40	No135-136 土師質
6	高台付碗	—	(4.3)	(9.2)	W	A	灰白	20	No137 灰釉
7	坏	12.0	3.9	5.8	WW'	C	黒褐	90	東 全面にウルクシ状物質付着
8	円筒磁碗	—	—	—	WW'B'	B	橙	—	不明 底部片

(4) IV区

起会遺跡の調査区としては西端に当たり、西側は農道を挟んで矢島南遺跡と連続している。範囲はおよそ210m×25mである。II区やIII区と同様、調査は便宜上西からA区、B区、C区、D区と4分割して実施した(第165図)。

調査区全体はIII区から続く傾斜地となっており、遺構確認面となる黄色粘質土層は見られない。浅間B軽石は5cm~10cmの厚さで全面に堆積しており、その下層は黒色土から青灰色のシルト層となっている。調査は浅間B軽石層の除去が主体となったが、II区~IV区では遺構・遺物ともなら検出できなかった。

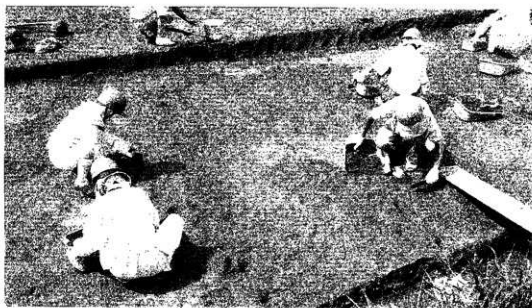
畝状遺構(第166図)

調査区としては西側のB区、ぬ-68グリッドを中心に検出された。北側は調査区外、南側は近代水路に切断される。水路の南側では検出されなかったことから、遺構自体は途中で終わっているものと思われる。

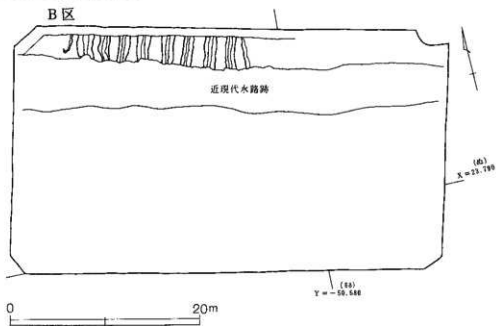
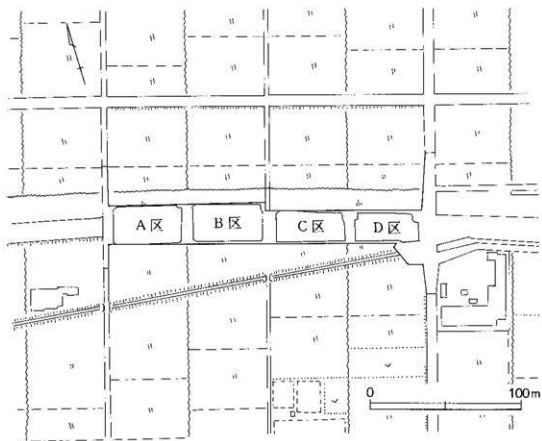
遺構は幅約1m、検出長約2mの畝状の高まりで、南北方向に8条が確認された。高まりは20cm前後で、上面は小穴状の凹凸が多く見られる。中間部は浅間B軽石の下が溝状に窪むため、遺構全体は波板のように起伏している。

遺構の全容が把握できず、性格についてはまったく不明である。しかし、中間部の窪みを溝と見れば、起会遺跡II区・III区で検出されている平行する溝群に酷似する。耕作跡とする積極的な根拠には欠けるが、群馬県黒井塚遺跡のように、畑の畝、ないしは苗代である可能性も捨て切れない。

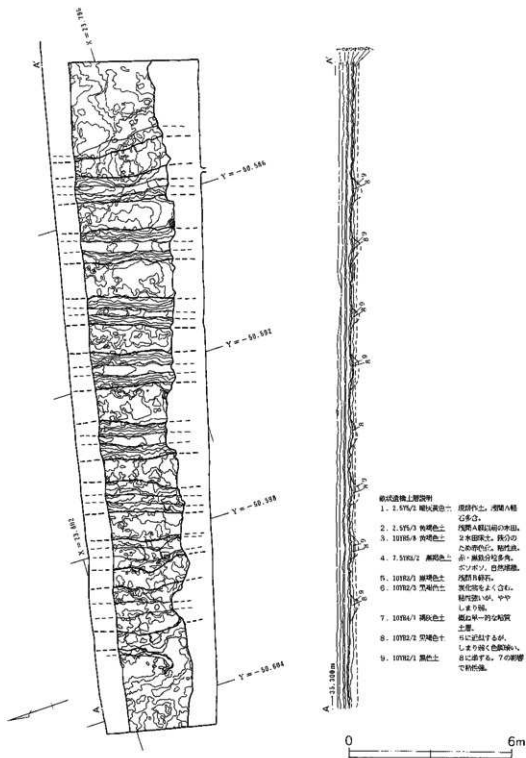
遺物の出土は見られなかったものの、遺構の機能した時期は平安時代と考えられる。それも全体が浅間B軽石に直接覆われ、畝の起伏が明瞭な点から見れば、12世紀初頭の所産として大過ないものと思われる。



畝状遺構検出風景



第165図 起会遺跡IV区調査区と周辺の地形(上)・B区全体図(下)



第166図 IV区断面遺構

VI 森下遺跡出土土器の胎土分析

1 分析の目的

森下遺跡1区からは、古墳時代中期(和泉式期)から後期(鬼高式期)初頭にかけての住居跡が8軒検出された。住居跡によって多寡はあるものの、出土遺物には良好な遺存状態を示すものが少なくない。特に、唯一カマドを備える第7号住居跡は焼失家屋であり、70個体近い各種の土器が床面上から見いだされている。

これらの住居跡から出土した土器は、既に胎土分析を実施した柳町遺跡(鋤持 1993)とほぼ同時期のものである。森下遺跡と柳町遺跡は約3kmを隔てるが、ともに妻沼低地の自然堤防上にある集落跡である。両遺跡の中心となる時期は妻沼低地において集落が激増する初期にあっており、カマドの出現など、看過できないものがある。

そこで以下の諸点を明らかにすべく、森下遺跡出土土器の胎土分析を行なうこととした。但し、時間的・地域的に近接する柳町遺跡の分析結果は、いうまでもなく比較検討の好対象となる。そのため、分析の実施に際しては遺跡間相互(小地域)の異同の検証を念頭に置き、柳町遺跡の分析目的に準拠するものとした。なお、各目的には柳町遺跡での分析結果を付記した。

1. 土器作りの方法は集団内に共通しているのか。

各住居跡の土器を一括遺物として見た場合、住居跡間および各遺跡(森下遺跡と柳町遺跡)間の傾向はどのようであるか。いずれに相違・共通するものが認められるのか。またその起因するところは何であるのか。

柳町遺跡の分析結果……試料となった2軒の住居跡間には際立った特徴や相違はなく、関連性の高いものと報告されている。

2. 「この器種」には「この胎土」といったような、用途に応じた作り方が存在するのか。

胎土中の鉱物組成や粒径、胎土自体の密度(空隙の疎密)、土器の焼成程度、その他で器種ごとに共通性や相違は認められるのか。もし、器種間に違いがあれば、それは器の大きさ(強度上)、使用状態(煮沸具と貯蔵具)、内容物(固形か液体か)など、いずれの差によるものなのか。逆に、指摘できるほどの相違が認められないとすれば、いかなることが考えられるのか。

柳町遺跡の分析結果……石英と斜長石の相関関係において、大型の土器(甕・甕・埴)と小型の土器(甕・高環・脚付甕)が集中するグループのあることが指摘された。その起因するところは土器自体の大きさにあるものの、それは製作上の問題で、使用状態の違いによるものではないとのことである。

3. 搬入品といえるものがあるか。

分析に供した土器の中で、特異な胎土組成を示すものは認められるか。あるとすれば、それは非在地産であるといえるのか。

柳町遺跡の分析結果……試料20点のうち12点は在地、あるいは在地近傍の可能性が高いとされたにとどまる。残る8点についても、石英と斜長石の相関を加味すれば、特異な存在は認められず、

搬入品と鑑定されたものは存在しない。

4. カマドの出現によって土器の作り方は変化するのか。

1および2に関係するが、より高い火熱を受けることとなる煮沸具の胎土組成に変化は認められるか。認められるとすれば、その起因するところは何か。また、カマドの出現を契機として、土器全体の製作方法に変化は現われるか。

この点については柳町遺跡での分析は実施していない。それは同遺跡の住居跡がすべてカマドを備えるものであったため、今回はこれを有さない住居跡との比較を行なうこととした。

森下遺跡の分析試料は20点で、柳町遺跡との比較を容易とするため、器種もそれに沿うように選出した。内訳は森下遺跡1区第3号住居跡から壺1点(第15図8)、埴2点(第17図23・24)、高坏1点(第17図4)、第4号住居跡からも壺1点(第21図1)、埴2点(第21図4・5)、高坏1点(第21図12)、第7号住居跡から壺2点(第30図1・2)、甕2点(第31図8・10)、高坏3点(第33図22・27・28)、脚付碗3点(第32図16・17・19)、碗2点(第34図46・第35図61)である。

因に、柳町遺跡の分析では壺3点、埴3点、甕4点、高坏2点、脚付碗2点、碗6点を対象としている。

森下遺跡20点の試料に対する実際の分析作業は、縄第四紀地質研究所の井上麻氏に委託することとした。井上氏には試料提出に先立ち、前掲の分析目的、および以下の所見を伝えてある。

- ①分析委託した試料は、森下遺跡1区の3軒の住居跡(第3号・第4号・第7号)から出土したものである。
- ②3軒の住居跡のうち、2軒(第3号・第4号)はカマド出現以前のものである。
- ③試料とした土器はおおよそ古墳時代中期(和泉式期)後半から、後期(鬼高式期)初頭に位置づけられる。
- ④器種は壺・埴(小型壺)・甕・高坏・脚付碗・碗の6種で、当該期に特徴的なものである。
- ⑤搬入品や特異なものは見られず、いずれも典型的なものばかりである。
- ⑥既に分析を実施した柳町遺跡は約3km東方にあり、その試料は森下遺跡の第7号住居跡とほぼ同時期の土器である。

分析に提供する試料は井上氏の指示により、3cm四方程度を各土器から切り取った。その部位はまったくの任意で、口縁部や底部を除く胴部が中心ではあるものの、全体的な統一性はない。

また、柳町遺跡の分析では同一個体でありながら、石英-斜長石の相関において差異の生ずることが明らかとなっている。これは石英の強度は同様でありながら、斜長石の強度が突出するものである。突出するのはいずれも土器表面が黒色—直接焼成の火炎があたりなかった部分—である試料で、粗砂粒を多く混入していた影響の現われと判断された。このため、森下遺跡遺跡の分析ではこうした偏向を避けるため、個体内で平均的と思われる部分を選出した。

2 分析の結果

柳町遺跡のときと同様、今回も井上氏からは実験結果として、本文・図表・写真・データディスクからなる大部の報告書が提出された。やはり本書でもこれをすべて掲載することは不可能である。科学的データとしては明示しなければならないことばかりではあろうが、ここでは前項にかかる部分を中心に、咀嚼のおよぶ範囲においてこれを要約することとする。したがって、膨大な科学的記述やデータの大半は、編集者(鶴持)の責任においてこれを割愛した。井上氏からは報告書を前にしてのレクチャーも受けたが、十分な理解ができたか否か不安は拭い切れない。

(1) 実験

井上氏の分析は、実験段階として次の二つがまづ行なわれる。第一は土器胎土中の粘土鉱物、および造岩鉱物同定のためのX線による回折試験である。第二は土器胎土の組織、粘土鉱物およびガラス生成の割合についての電子顕微鏡観察である。そしてこれらの実験結果は、「胎土性状表」に細かく記入される。

(2) 実験結果の取り扱い

a 組成分類

三角ダイヤグラム…モンモリロナイト、雲母類、角閃石のX線回折試験における、チャートの強度を%で表示するもので、各胎土についての位置分類が行なわれる。

菱形ダイヤグラム…モンモリロナイトと緑泥石、雲母類と角閃石の組み合わせを表示するもので、やはり各胎土についての位置分類が行なわれる。表の内容は四つの鉱物それぞれについて、X線回折試験のチャートの強度を各々の組み合わせごとに%で表わしている。

b 焼成ランク

区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量で行なわれ、これをI~Vの5段階に分けている。

c タイプ分類

各々の土器胎土の組成分類に基づき、三角ダイヤグラム、菱形ダイヤグラムの位置分類による組み合わせから行なわれる。そこには「同じ組成を持った土器胎土は、位置分類の数字組み合わせも同じはずである。」という、分析にあたっての基本的な見解がある。

(3) 実験結果

a タイプ分類

森下遺跡出土土器の胎土は、試料提出時に柳町遺跡、および上敷免遺跡のものと一緒にタイプ分類するよう依頼してある。3遺跡から出土した土器(総試料数96点)はA~Kの11タイプが認められるが、最も多い土器胎土のタイプは28個のHタイプで、以下GタイプとKタイプが各15個、Fタイプが9個、CタイプとDタイプが各7個、Iタイプが5個、Aタイプが4個、Bタイプが3個、Jタイプが2個、Eタイプが1個となり、分散傾向にある。

森下遺跡ではD・E・Jを除く8タイプが認められる。各タイプの特徴は次に示したとおりである。森下遺跡に付した数字は、後掲の石英-斜長石相関図に示した土器の番号である。

胎土性状表

試料 No	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類		年度鉱物および造岩鉱物														
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch-Mi-Hb	Mont.	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qtz	Pl	Crist	Mullite	K fels	Halloy	Kaol	Pyrite	Au	ガラス
森下-1	K	III	14	20						1399	325	174							中粒
森下-2	K	II~III	14	20						674	813	230							中~粗粒
森下-3	B	III	1	15	162	121	121			3189	323	123	50						中粒
森下-4	G	III	7	9		101	88	159		2329	392	104		166					中粒
森下-5	G	III	7	9		112	91	177		1810	320	149							中粒
森下-6	H	III	7	20		60	54			2270	242	171							中粒
森下-7	K	III	14	20						1418	306	129			76				中粒
森下-8	I	III	8	20		117				2075	393	131		64					中粒
森下-9	G	III	7	9		119	109	166		1532	641	135							中粒
森下-10	A	III	1	1	271	175	214	286		2179	992	100							中粒
森下-11	F	III	6	20		110	130			2635	563	141							中粒
森下-12	H	III	7	20		143	108			2777	826	129							中粒
森下-13	C	III	1	16	151	122	92			2860	513	105							中粒
森下-14	H	III	7	20		93	93			2861	436	178							中粒
森下-15	K	I~II	14	20						2459	348	113	54						中~粗粒
森下-16	K	I~II	14	20						2702	301	158	56				106		中~粗粒
森下-17	H	III	7	20		83	60			2775	431	132							中粒
森下-18	H	III	7	20		122	80			2874	408	91							中粒
森下-19	H	III	7	20		133	90			2876	413	178							中粒
森下-20	H	III	7	20		137	125			3099	399	93							中粒

焼成ランク I : ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。

II : ムライトとクリストパーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。

III : ガラスのなかにクリストパーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。

IV : ガラスのみが生成し、原土(薬地上)の組織をかなり残して。ガラスは微小な葉状を呈する。

V : 原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

Mont : モンモリロナイト Mica : 雲母類 Hb : 角閃石 Ch : 緑泥石 Qtz : 石英 Pl : 斜長石 Crist : クリストパーライト Mullite : ムライト
K fels : 正長石 Halloy : ハロサイト Kaol : カオリナイト Pyrite : 黄鉄鉱 Au : 普通輝石

- Aタイプ…モンモリロナイト、雲母類、角閃石、緑泥石の4成分を含む。上敷免の土器2個、森下(10—第7号住居跡の壺1)と柳町の土器が各1個。
- Bタイプ…モンモリロナイト、雲母類、角閃石の3成分を含み、緑泥石1成分に欠ける。柳町の土器2個、森下の土器1個(3—第3号住居跡の埴24)。
- Cタイプ…モンモリロナイト、雲母類、角閃石の3成分を含み、緑泥石1成分に欠ける。組成的にはBタイプと類似するが、検出強度が異なる。柳町2個、森下遺跡1個(13—第7号住居跡の高坏22)、上敷免4個の土器で構成される。
- Dタイプ…角閃石1成分を含み、モンモリロナイト、雲母類、緑泥石の3成分に欠ける。上敷免の土器8個で、上敷免の土器だけで構成される。
- Eタイプ…雲母類、角閃石、緑泥石の3成分を含み、モンモリロナイト1成分に欠ける。上敷免の土器1個。
- Fタイプ…雲母類、角閃石の2成分を含み、モンモリロナイト、緑泥石の2成分に欠ける。柳町3個、森下1個(11—第7号住居跡の甕8)、上敷免5個の土器で構成される。
- Gタイプ…雲母類、角閃石、緑泥石の3成分を含み、モンモリロナイト1成分に欠ける。組成的にはEタイプと類似する。柳町7個、森下3個(4—第3号住居跡の高坏28、5—第4号住居跡の壺1、9—第7号住居跡の壺2)、上敷免5個の土器で構成される。
- Hタイプ…雲母類、角閃石の2成分を含み、モンモリロナイト、緑泥石の2成分に欠ける。柳町8個、森下7個(6—第4号住居跡の埴4、12—第7号住居跡の甕10、14—同高坏27、17・18—同脚付埴16・19、19・20—同埴46・61)、上敷免13個の土器で構成される。組成的にはFタイプに類似する。
- Iタイプ…雲母類1成分を含み、モンモリロナイト、角閃石、緑泥石の3成分に欠ける。柳町、森下(8—第4号住居跡の高坏12)の土器各1個、上敷免3個の土器で構成される。
- Jタイプ…モンモリロナイト、角閃石の2成分を含み、雲母類、緑泥石の2成分に欠ける。柳町1個、上敷免3個の土器で構成される。
- Kタイプ…モンモリロナイト、雲母類、角閃石、緑泥石の4成分に欠ける。主に、 $mAl_2O_3 \cdot nSiO_2 \cdot 1H_2O$ (アルミナゲル)で構成される。森下5個(1—第3号住居跡の壺8、2—同埴23、7—第4号住居跡の埴5、15—第7号住居跡の高坏28、16—同脚付埴17)、上敷免10個の土器で構成される。

以上の結果からは、「G・Hタイプは上敷免西と東、森下、柳町遺跡の土器が6~7個平均で検出され、平均に各遺跡から検出されているのが特徴である。Kタイプは上敷免と森下遺跡の土器のみで、柳町遺跡の土器は検出されない。全体として土器の胎土は多様であるが、「各タイプには森下、柳町、上敷免の土器が混在し、関連性が認められる。各タイプに含まれる土器は器種的には統一性がなく、共存する。」という傾向が導き出されている。

b 石英(Qt)―斜長石(Pl)の相関について

前段までの分析に加え、胎土中に混ぜられる砂、つまり石英と斜長石の比率も計測されている。これは井上氏の分析において最も重要な観点であり、同時に分析姿勢の立脚点ともなっている。そ

これは「自然状態における各地の砂は個々の石英と斜長石の比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地域における砂は各々固有の石英—斜長石比を有している。」という前提のもと、「土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して紫地土を作ると言うことは個々の集団が持つ土器製作上の固有の技術であると考えられる。」という理由から実施されている。

そして石英(Qt)—斜長石(Pl)の強度を図化したものが第167図である。タイプ分類に用いられた3遺跡の土器は10のグループに分けられるが、このうち森下遺跡のものはII・III・IV・VI・VII・VIIIの6グループ、および“その他”に属する。

- Iグループ…上敷免の坏が集中し、柳町の坏が混在する。
- IIグループ…柳町の壺と甕が集中し、上敷免の坏が共存する。森下の壺(9—第7号住居跡2)。Gタイプの胎土で代表される。
- IIIグループ…上敷免の坏と森下の壺(1—第3号住居跡8、5—第4号住居跡1)、埴(7—第4号住居跡5)高坏(8—第4号住居跡12)が共存し、柳町の坏1個が混在する。
- IVグループ…森下の壺(10—第7号住居跡1)、柳町の甕と壺、上敷免の坏が混在する。
- Vグループ…上敷免の坏、柳町の甕が混在する。
- VIグループ…上敷免と柳町の坏が集中し、柳町の高坏、森下の壺(11—第7号住居跡8)各1個が混在する。坏が集中するグループとして特徴付けられる。
- VIIグループ…上敷免の坏が集中し、森下の高坏(4—第3号住居跡28、15—第7号住居跡28)、埴(6—第4号住居跡4)、脚付碗(16—第7号住居跡17)、柳町の坏が混在する。坏と高坏のグループ。
- VIIIグループ…上敷免の坏が集中し、森下の脚付碗(17・18—第7号住居跡16・19)と碗(19・20—同46・61)も同様に集中する。森下の埴(3—第3号住居跡24)、高坏(13・14—第7号住居跡22・27)、柳町の甕、高坏、坏が共存する。坏、高坏、脚付碗、碗で構成されるグループ。特にHタイプの胎土の土器が集中し、特徴的である。
- IXグループ…上敷免の坏が集中する。
- Xグループ…上敷免の坏が集中する。

“その他”…柳町の上下で異なる胎土を使っている土器が多い。[編者註—これは井上氏の勘違いで、実際は焼成火炎を直接受けた部分とそうでない部分の相違である。] 森下の埴(2—第3号住居跡23)は石英の強度が低く異質である。

以上の結果からは、「IIとIIIグループには甕や壺など大型の土器が、VIとVIIグループには坏と高坏、VIIIグループにはHタイプの胎土の碗と坏、高坏が集中する。」との所見が示されている。また森下遺跡の土器に関しては、カマド導入以前のもの(第3号・第4号住居跡)はIIIとVIIグループに集中し、導入後のもの(第7号住居跡)はVIIIグループに集中する傾向が指摘されている。

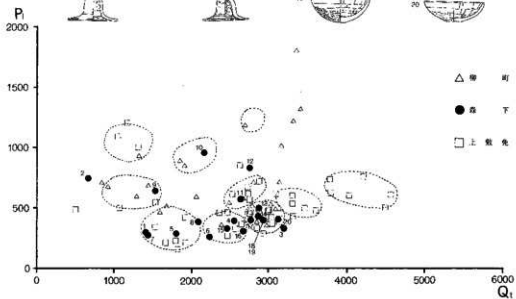
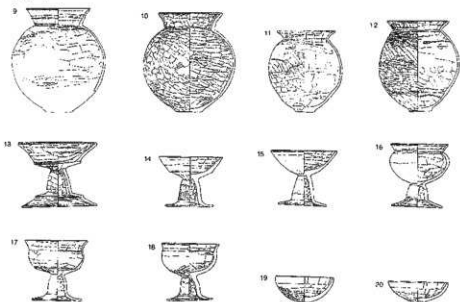
SJ-3



SJ-4



SJ-7



第167圖 分析試料と石英(Qt) - 斜長石(Pl)相關圖

(4) まとめ

上記のような分析結果をふまえ、森下・柳町・上敷免の3遺跡については次のようにまとめられている。

- ①森下・柳町・上敷免の各遺跡から出土した土器胎土はA～Kの11タイプに分類された。最も多いタイプはHタイプで28個、次いで、GとKタイプの15個、Fタイプの9個、CタイプとDタイプの各7個となり、多様にわたるのが特徴的である。森下と柳町遺跡だけで見ても、Eタイプを除くタイプが検出され、検出頻度の構成も3遺跡のものほとんど同じである。このように3遺跡の土器の胎土の構成では関連性が高いと推定された。
- ②石英(Qt)と斜長石(P1)の相関ではI～Xの10グループと”その他”に分類された。IXとXグループは上敷免の坏だけで構成され、異質である。他のグループは柳町、森下、上敷免の3遺跡の土器が共存、あるいは混在し、Qt-P1の相関の面からも3遺跡の関連性が認められた。また、壺や甕など大型の土器と坏や碗などの土器は異なるグループを形成する傾向が読み取れる。“その他”の異質な土器としては森下の埴(2-第3号住居跡23)がある。この土器は石英の強度が低く、異質である。
- ③森下遺跡の土器のうち、縄普及以前の住居跡から出土した土器はIIIとVIIグループに集中し、以後の土器はVIIIグループに集中する。両者の間には明らかな差があるように見受けられる。特に以後の土器は胎土もHタイプと統一され、VIIIグループに集中し、統一性がある。

以上が提出された報告書の概要である。最後に分析の目的に掲げた4点の事柄について、補足的に述べてみることにする。

1. 土器作りの方法は集団内に共通しているのか。

この点は柳町遺跡の分析でも触れたことであるが、「ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器製作上の固有の技術である」というのが井上氏の論拠するところである。今回は森下遺跡と柳町遺跡の比較を中心に、やや時期が異なる上敷免遺跡を加えて検討をお願いした。その結果、3遺跡の関連性は高いとされた。時期差を越えて関連するものを、同一の集団が製作したものと認定するのは躊躇せざるをえない。但し、多くがVIIIグループ、それもHタイプに集中することは特筆されよう。あるいはこの一群が、周辺では中心的な一集団を意識するならば、土器製作上の伝統的技法—土器となるのかもしれない。

2. 「この器種」には「この胎土」といったような、用途に応じた作り方が存在するのか。

この点については、石英と斜長石の相関において検証されている。それによれば、壺や甕などの大型品はばらつきがあるものの、坏や高坏などの小型品は集中する傾向がある。両者は明らかに異なるグループを形成しており、とても一緒に製作されたものとは思われない。但し、大型品もばらつきになりまとまる傾向は見られる。この作り分けについては、その起因するところが明確でないが、後述するカマドの有無と関係があるようで興味深い。

3. 搬入品といえるものがあるか。

搬入品として明示されたものはないが、森下遺跡第3号住居跡の埴(23)は混合された砂(石英と斜長石)の相関が異質で、柳町遺跡と上敷免遺跡を加えてみた場合でも収まるグループは存在しない。器形的にはなんら特異なものとも思われないが、分析データからは搬入品の可能性が窺われる。

4. カマドの出現によって土器の作り方は変化するのか。

この点に関しては、今回の分析を通じて最大の収穫がえられた。カマドを備えない森下遺跡第3号・第4号住居跡の土器は、二つのグループに集中するとはいうもののばらつきが多い。これに対して、カマドを有する第7号住居跡の土器は統一性があり、砂の混合比も胎土組成もきわめて集中している。柳町遺跡を加えた場合でもこの傾向は看取される。前掲の2についても、その傾向は第7号住居跡においてであり、カマド出現以前のものではこれほど集中していない。

報告書にはその理由が記されていないため、井上氏に直接伺ったところ、次の2点を可能性として挙げられた。第1点は土器製作技術の向上・安定、第2点は土器供給源の一定化である。あるいは個別のものではなく、相関するものであるのかもしれない。これはカマドの導入と、その背景にある社会的変革を考える上で、示唆に富んだ見解である。

柳町遺跡の場合も同様であるが、「集団」についてはその輪郭が不鮮明であるとの感否めなかった。ある程度の時期を隔てたとしても、地域的に接近していれば、関連性は深くなるようである。その土地の粘土に最も適した砂の混合比は、器形や器種といった土器の変化にかかわらず、概ね踏襲されるのであろうか。今後は時期を絞り、地域的な関連性のなかで追求していくことが肝要と思われる。

今回は住居跡にカマドが出現する前と後で、土器製作上に相違のあることが判明した。これもカマド導入を社会現象として検討する際の傍証ともなりえるため、土器の分析も慎重に進めていく必要がある。

VII 結語

1 戸森松原遺跡の周溝墓について

戸森松原遺跡からは円形10基、方形3基の周溝遺構が検出されている。これらはその形状や遺物の出土状態から見て、いずれも墳墓と認識しうるものである。出土土器は和泉式の新段階から鬼高式の初頭、おおよそ5世紀の後半に位置づけられる。

この場合、問題となるのは遺構の名称である。円形のを古墳、方形のを周溝墓とすればよいとも思われるが、本書では「周溝墓」という共通の名称で扱うこととした。遺構の説明でも述べたように、その理由としては、

- ①同一墓域を構成する一連の墳墓群と捉えられること。
- ②墳墓群の配置には強い規則性が認められること。
- ③円形のを積極的に古墳と評価しうる確証に欠けること。

の3点を挙げた。但し、円形のものが「古墳」であることを否定したわけではない。当該期の古墳については、必ず埴輪などの外部施設を有するものでもなく、埋葬主体も検出されることが多くないことは周知のとおりである。ともすれば円形のものが主体的であるなど、「周溝墓」も適切な名称ではないのかもしれない。

「周溝墓」か「古墳」かという問題は、単なる形態上の呼び分けにとどまらず、それぞれの性格、ひいては地域の古墳文化そのものにまでかかわってくる。このため、以下では上記の3点を前提に、まづ戸森松原遺跡の墳墓群の特徴を明らかとし、そのうえであらためてこれを検討することとした。

(1) 分布および形態上の特徴

a. 占地と分布

検出された13基の周溝墓は、東西方向に延びる自然堤防上に構築されている。この自然堤防は幅の狭い微高地で、北側は旧河道、南側は氾濫原状の低地となっている。微高地は埋没河川から急激に立ち上がった後、南に向けて緩やかに下降する。そして、中央部からは再度上昇に転じ、南側の低地部へこれも緩やかに落ち込んでいく。この変化は後述するように、周溝墓の占地に影響を与えている。

周溝墓群はその中央部、いわば微高地の尾根筋に沿って分布している。その範囲は推定分を含め東西約135m、南北約70mに及んでいる。分布の東限は調査区外となるため不明だが、西側は北向きに開口した埋没谷によって限られている。このことから、占地としてはかなり地形に制約されたものといえる。

周溝墓群は分布上、4つの墓列として捉えることが可能である。

第1列—円形の第7号(大型)・5号(大型)、方形の第4号(中型)・11号(大型)4基からなる。墓域西端から中央に向け、ほぼ一直線上、等間隔に並ぶ。第11号の南辺を延長すると、第5号の南頂部に到達する。このラインはおおよそN-92°Eの方向を指す。第4号と7号はライ

ンよりわずかに北へ偏在している。

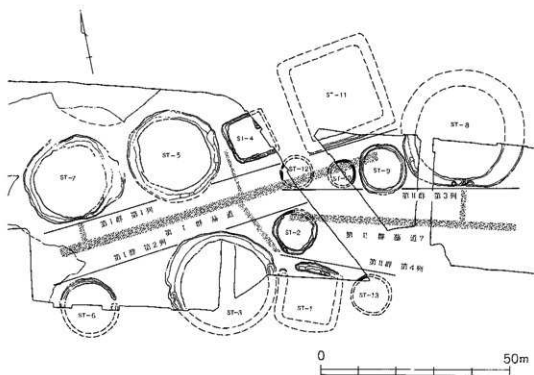
第2列—第6号(中型)・3号(大型)・2号(中型)の円形3基からなる。第1列の南側、概ね同一方向に連なる。第6号と3号の間は浅い流路があるためか、やや間隔が広がっている。

第3列—第12号(小型)・10号(小型)・9号(中型)・8号(大型)の円形4基からなる。幕域としては中央から東端に分布する。周溝の南頂部を揃え(第9号は突出しているが、これについては後述)、近接して構築される。4基のなすラインはおよそN-80°-Wを指す。

第4列—方形の第1号(中型)・円形の13号(中型)2基からなる。他列が3基〜4基であることを考慮すれば、東側の調査区外にもう1基〜2基の存在が想定できそうである。しかし、地形的には本列付近で東へ、第3列からは南へ向けかなり低くなっていくため、2基のみである可能性も高い。ラインにはおよそN-67°-Wの方向が得られる。

4列はいずれも東西方向に並ぶもので、中心を描えるのではなく、頂部ないし辺をほぼ直線上に置く形となっている。第1列と2列は平行関係にあり、中央に幅10m〜15mの空白部(微高地がいったん低くなる部分に一致している。)を挟み、南北に1基づつが対応するように位置している。第3列と4列もほぼ平行しているが、第1列・2列のラインとはかなりずれている。

加えて、分布上最も特徴的であるのは、検出範囲内とはいえ、重複がいつさえ認められないことである。周溝間はきわめて接近する部分がありながらも、決して先行するものを切断して構築されることはない。第9号周溝墓のように全体を楕円形気味に変形させるなど、充分にその存在を意識



第168図 群分類と基趾の復元

周溝墓一覧

周溝墓	形態	台部径(辺)	周溝幅	周溝深さ	ブリッジ	その他
第1号	方形	(12.0)m	最大2.8m	最深0.7m	北西隅部	
第2号	円形	9.3m	1.4m	0.15~0.6m	—	南西部 変形(幅0.8m)
第3号	円形	23.5m	2.8~4.8m	0.6m	—	第1号周溝埋没後の構築
第4号	方形	10.5m	0.8~1.0m	0.15~0.3m	西溝南寄り	ブリッジ北側に溝中土坑
第5号	円形	19.5m	3.0m	0.3~0.95m	—	覆土中層にFA含む
第6号	円形	12.5m	0.8~1.2m	0.35~0.5m	東頂部	
第7号	円形	18.5m	2.3m	0.75m	南頂部	ブリッジ部外周が直線化
第8号	円形	(24.0)m	2.0~5.5m	0.2~0.5m	南頂部	ブリッジ部外周が直線化
第9号	円形	11.0×11.5m	1.0~1.4m	0.45m	—	全体は楕円形気味となる
第10号	円形	6.3m	0.4~0.7m	0.25m	—	中心部に土坑
第11号	方形	(20)m	2.5m	1.2m	—	
第12号	円形	6.4m	0.6m	0.2m	—	
第13号	円形?	—	0.95m	0.6m	—	方形の可能性あり

した結果の表われであろう。したがって、墓域としてはさほど長期にわたって形成されたものではなく、きわめて規則的に、かつ短期間に次々と構築されていったものと考えられる。

b. 規模と形態

頭書のように、周溝墓は円形が10基、方形が3基である。しかし、第13号周溝墓は検出がわずかなうえ、溝の断面形が第1号周溝墓と近似するなど、方形であるのかもしれない。

おおまかに13基の内訳を見ると、台部の直径(一辺)が18mを越える大型が5基、9m~13m程度の中型が6基、6m強の小型が2基となる。量的には円形が卓越するものの、特に形の違いによる規模上の優劣は認められない。各周溝墓の規模は別表に示したとおりである。

さらに、形態上の特徴としては、以下の諸点を挙げることができる。

- ①周溝は概ね全周するものと思われるが、第1号・4号・6号・7号・8号周溝墓では、ブリッジ状に途切れたり、浅く掘り残されている。
- ②円形の周溝墓のうち、第2号は南西部、第7号と8号は南頂部のブリッジ部分がともに変形され、外周が直線的となっている。なお、第9号は既に触れたとおり、東西が狭まって楕円形気味となっている。
- ③中型から大型の周溝墓では、周溝壁の立ち上がりが方形のものは台部側、円形のものは外側が急である。但し、第11号は例外となる。後者は墳丘を意識した構築方法であろうか。
- ④周溝の掘り込みは一様ではないものが多く、第1列と3列では南側、第2列と4列では北側、それぞれがいくぶん深く、かつ広くなされる傾向にある。
- ⑤土層観察では明確な盛土、および周溝中への崩落痕は認められない。しかし、第3号・4号・10号・11号周溝墓においては地山成形が行なわれ、低墳丘を有していた可能性が窺われた。
- ⑥埴輪が出土していないのをはじめ、外部施設を有した様子は認められない。
- ⑦石室など、内部施設の存在を示すような痕跡はいっさい認められない。

(2) グルーピングと墓道

このように、本周満墓群には分布上では規則的配置性が、形態上では個々に正面観とでもいうような方向性が、それぞれ看取される。これを整理すると、周満墓は大きく二つの群(系列)に分化することができる。またそれに伴い、各群にかかる墓道の想定も可能であると思われる。

第I群

分布上で分化した第1列と第2列で構成される。第1列と第2列は同一方向に一直線に並び、そのうえ各墓列の周満墓(第11号を除く)は対象位置に構築される。中間部は両列側から傾斜し、帯状の窪地をなしている。この空白部に対し、第2列は明確でないものの、第1列では第7号周満墓がブリッジを向けるほか、第5号・4号周満墓は周満を深く掘り込んでいる。これは空白部を強く意識した現われで、造墓の基本ラインを意味している。すなわち、この帯状の空白部こそ墓道、しかも主道にあたるものと考えられる。

第1列は円形で大型のものが2基、方形で大型と中型のものが各1基づつ並び、さらに2つのグループに分けることもできる。但し、ともに同じ支群を構成する要員であり、形の相違による配置上の区別は認められない。

第2列は円形で大型のもの1基と、中型のもの2基からなる。第2号周満墓は占地上、円弧を崩す必要性が認められないにもかかわらず、第3号周満墓と最も接近する南西部を变形させている。また、その部分の中央には土器の設置が見られ、延長上には第1号周満墓のブリッジが開口している。この点を重視すれば、第2号・3号周満墓の中間部は主道から分岐する支道で、第4列はこれより東へ展開する墓列という捉え方もできる。

しかし、第3号周満墓は土層観察により、第1号周満墓の周満埋没後の構築であることが明らかである。したがって、墓列の形成としては第4列が先行することになる。この場合、第4列は主道の方向からは大きくずれてしまう。その後方向の一致する第2列が形成されるのは、いかにも不自然である。第1号周満墓のブリッジ方向も偶然の産物であろうか。

第II群

4基の円形周満墓で構成される第3列、および第4列が相当する。地形に制約されるため、同じ東西方向の墓列でありながらも、第I群とはラインが異なっている。占地も同群の主道部分に大きく入り込んでおり、第11号周満墓への通路を造っている。

第8号周満墓のブリッジや、第9号周満墓の遺物出土位置が示すように、第II群の墓道は南側であろう。第8号周満墓のブリッジ部は、やはり円弧を削ったように直線化している。このラインを延長すると、第10号と第12号周満墓の南頂部に一致する。ここでも他の墓列と同様、配置には強い規則性が看取される。

ところが、第9号周満墓のみはこのラインから突出している。再三述べているとおり、同周満墓は円形が崩れて楕円形気味となっている。さらに周囲の状況を見ても、両側の周満墓との間隔は極度に狭い。なにやら、後から無理やりこの場へ割り込ませたように思える。形を崩しながらも、ある程度の規模は保ちたかったのであろうか。

第8号周満墓を第II群の主墓とし、第9号周満墓の構築を上記のように仮定すれば、造墓には第

8号→第10号→第12号→第9号という流れが考えられる。第1群の古道に深く入り込んだことも、当初から意図したものではなからう。

第4列は第3列の南側、20m程の間隔をあけてほぼ並行する。上述のように第1群第2列に先行し、同群には含まれない墓列である。

(3) 墳墓群としての位置づけ —「周溝墓」か「古墳」か—

前項では本周溝墓群が規則的、かつ連続して構築されたことを前提に、一つの墳墓群としての特徴を述べてきた。全体は2群4列に分化でき、それぞれには配置の規制が遵守されていることが認められた。また、円形と方形のものには、規模や配置に優劣や区別のないことも窺われた。

既に触れたように、方形のものからは遺物の出土がなく、第3号周溝墓は第1号周溝墓の周溝埋没後の構築である。この事実からすれば、方形のものは方形周溝墓、円形のものには後出の円墳とすることもできる。しかし、墳墓群が配置に強い規則性を持ち、連続して構築されたであろうことは上に見たとおりである。方形周溝墓群と古墳群という、二つの異なる墳墓群が重複もなく、時間を置いて偶然このような分布を持ったとは考えづらい。また、すべてが古墳であるとしても、方形のものに方形周溝墓以上の古墳的要素は認めたい。円墳と方墳が共存する古墳群は県内でも18箇所ある(埼玉県教育委員会 1994)が、本遺跡と同様の時期で、しかもこれほどの規則性を有するものは見当たらないようである。

そこで、方形周溝墓と円墳が“一つ”の墳墓群を形成しうるのか、言い換えれば13基を「周溝墓」とすべきか、あるいは「古墳」とすべきかについて検討していくこととしたい。

「周溝墓」と「古墳」の関連性や系譜など、両者を最も強く意識させるのは、いうまでもなく周溝墓の終末、あるいは古墳の出現の時期であろう。その辺の状況については、児玉周辺の古墳を追求された坂本和俊氏が各遺跡の要点を手際よくまとめておられる(坂本ほか 1985)ので、これを参考に比較の対象としていくつかの例を挙げてみることにする。

a. 周辺遺跡の例

①美里町神明ヶ谷戸遺跡(坂本・岡本 1980)

周溝墓8基が検出され、うち1基が円形(きれいな円形ではなく、だいぶ形は崩れている。)である。しかし、方形のものが五領式期後半から終末の土器を出土したのに対し、円形のものからは鬼高I式の広口壺が見いだされている。

②阿部町安光寺遺跡(中島・増田 1981)

丘陵上に2基が接して検出されている。1号墓は東西15.8m、南北13.5mで、0.7mの盛土を有する。コ字形に周溝を巡らせるもので、五領式期終末から和泉式期初頭の土器が出土している。2号墳は内径27m、外形32mの円墳で、直刀・剣・鉄斧などを副葬した粘土椀の主体部を備える。和泉式期前半の築造とされている。

この古墳群は1号墓(方形台状墓)から2号墳(円墳)への変遷が実証される、数少ない例と評価されている。

③阿部町千光寺遺跡(増田 1975)

丘陵の北斜面上から並列する方形周溝墓2基(五領II式)、単独の方形台状墓1基(五領末～和泉初

頭)、方形周溝墓2基の上に変形墳1基(和泉I式)、並列する円墳2基(鬼高I式)、およびこれらとは離れて帆立貝式古墳1基(鬼高II式)が調査されている。このうち、方形周溝墓は15m×12m前後の長方形で、方形台状墓は20.1m×18.6m、約0.6mの盛土を有する。変形墳は内径30m、コ字形ないし半円形の周溝で、0.5mの墳丘が存在する。全体的には配置の規則性は薄いが、連続と継続する墳墓群とされている。

④本市下野堂遺跡(並木 1976・本市 1976)

和泉式期の方形周溝墓13基、同時期と考えられる円形周溝墓1基などが調査されている。方形周溝墓は一辺15m以下の小型のもの、15m～20mのもの、20mを越える大型のものがある。うち2基には0.5m～1mの盛土が認められている。遺物は壺・埴が多いもので10数個、少ないもので1～2個が周溝内から出土している。一辺24mと最大規模のものからは、碧玉製の石剣も検出されている。円形周溝墓は直径15mで、この中に重複せずに構築されている。その他、方形周溝墓と報告されているが、もう1基、円形に近いものが存在する。

下野堂遺跡の周溝墓群には、群集するなかにも方向を揃えるなど、規則性が窺えて興味深い。なお、遺物の時期を五領式末に位置づけ、円形周溝墓を新しくする考えもある(坂本ほか 1985)。

これら以外にも熊谷市の万吉下原遺跡(駒宮ほか 1991)や、見玉町と美里町にまたがる生野山古墳群(菅谷・駒宮 1973)では、低墳丘を有する方形周溝墓のなかに、円形の周溝を有するものが検出されている。

b. 戸森松原遺跡の位置づけ

坂本氏はこうした状況を総合し、方形周溝墓の消滅と古墳の形成関係を次のように解かれた。それは、「周溝が明らかに方形を呈する墳墓は和泉期になると築造されず、この時期が方形周溝墓群の形成の終焉と推定される。」(坂本ほか 1985)もので、和泉式期になると「整備された大型古墳の出現と同時に、方形周溝墓群に代わって小円墳が出現する」(坂本ほか 1986)というのである。

戸森松原遺跡では、方形の周溝墓に遺物の出土が見られなかったものの、第1号周溝墓(方形)は第3号周溝墓(円形)に先行することが明らかである。安光寺遺跡や千光寺遺跡でも、一つの墓域に五領式期から和泉式期にわたって、継続して墳墓が構築されている。そしてその移行期には、周溝の形態が方形から円形に変化している。坂本氏の説に従えば、本遺跡で方形のものは五領式期以前の方形「周溝墓」、円形のは和泉式期後半の「円墳」ということになる。そのように仮定すると、和泉式期前半には墳墓が構築されなかったことになる。

たしかに、方形周溝墓から古墳への移行は、形態も明確な転換を見せるのではない。安光寺遺跡の第2号墳や千光寺遺跡の5号墳は、どちらかといえば方形か円形か判断がしづらいものである。また、万吉下原遺跡や生野山古墳群方形周溝墓は、円形の台部に方形の周溝が巡るという、折衷型とでもいうような形態である。このことから、方形から円形への変化は突発的なものではなく、まづは方形が崩れることから始まったものと考えられる。菅谷浩之氏と駒宮史朗氏はその経緯を、「平面プランは、周溝が方台部に沿って方形となるものと(第3・4号墓)、外側が若干膨らんで不整形となるタイプ(第2号墓)がある。このタイプの違いは築造年代の相違によるものと思われ、新しい段階に入り、方形から円墳を意識し、古墳築造の影響を受けた在地周溝墓に特徴的な形態といえ

よう。](駒宮ほか 1991)とされている。

戸森松原遺跡においては、第1号周溝墓外周が円となる可能性を除き、このような中間形態の墳墓は検出されていない。では、特徴として高掲した墓域の中での配置性という点は、どのように解釈したらよいのであろうか。可能性としては次のような場合が考えられる。

①坂本氏がいうように、方形のものと円形のは、時期的に連続しない別個の墳墓群である。

②万吉下原遺跡などとは異なり、方形から円形への変化は突然起こったもので、連続する墳墓群である。

③時期的には一時途絶えるが、結果的には連続する規則性のある墳墓群となった。

このとき①では配置の規則性は偶然か、②では方形も円形も整然としているといった疑問がある。

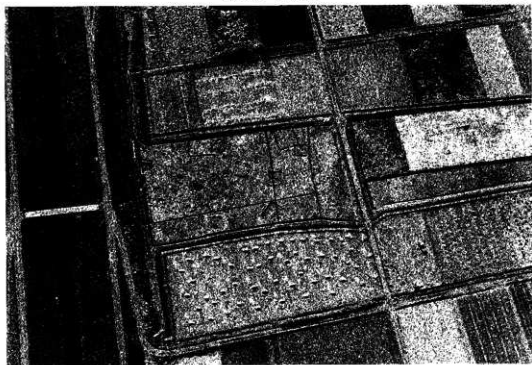
しかし、③では低墳丘の存在を想定すれば、先行する墳墓を意識した規則性は、十分に遵守されることが考えられる。築造の中断した時期と大型の古墳が整備された時期が一致するということは、地域内で政治・社会的な再編成を経て、再び築造が開始されたことを物語るのかもしれない。すなわち方形と円形、それぞれの墳墓を築いた集団は同一と考えることが、より現状に適していると思われるのである。

そうであれば、方形の第1号、第4号、第11号は「周溝墓」、他の円形のは「古墳」と呼ぶべきになる。戸森松原遺跡の墳墓群が、周溝墓群から初期の群集墳の姿を示しているならば、本地域においては重要な例となる。周辺に中心となる大型の古墳は未確認であるが、その被葬者に従属したであろう人々の一部は、本遺跡に規則性の強い墳墓群を構築し続けたのである。

引用・参考文献

- 岡本幸男 1980「4 神明ヶ谷戸遺跡の調査」『第13回遺跡発掘調査報告会 発表要旨』埼玉考古学会・埼玉県遺跡調査会・埼玉県教育委員会
- 駒宮史朗ほか 1991「万吉下原遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査報告 第18集 埼玉県教育委員会
- 坂本和俊ほか 1985「前組羽根倉遺跡の研究」『紀要』12 埼玉県立博物館
- 1986『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県史編さん室
- さきたま資料館 1994『埼玉県古墳詳細分布報告』埼玉県教育委員会
- 中島 宏・増田逸朗 1981「清水谷・北坂・安光寺」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第1集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 並木 隆 1976「7 本庄市旭古墳群の調査」『第9回遺跡発掘調査報告会 発表要旨』埼玉考古学会・埼玉県遺跡調査会・埼玉県教育委員会
- 本庄市 1976『本庄市史』資料編
- 増田逸朗ほか 1975「千光寺」埼玉県遺跡調査会報告 第27集 埼玉県遺跡調査会

写 真 图 版



航空写真



地上写真



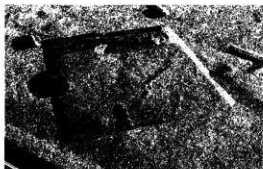
1区第1号住居跡



1区第2号住居跡



1区第3号住居跡遺物出土状態



1区第3号住居跡



1区第4号住居跡貯藏穴遺物出土状態



1区第4号住居跡



1区第5号住居跡



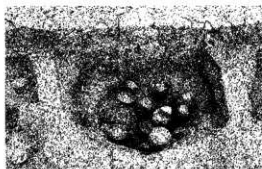
1区第6号住居跡



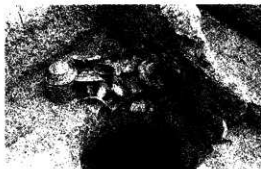
1区第7号住居跡遺物出土状態(部分)



1区第7号住居跡カマド



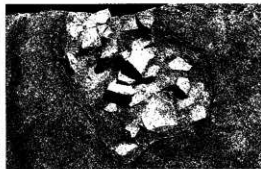
1区第7号住居跡カマド東土坑遺物出土状態



1区第7号住居跡貯蔵穴遺物出土状態



1区第7号・8号住居跡



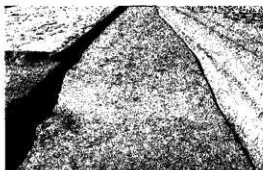
1区第1号埋葬



1区第2号埋葬



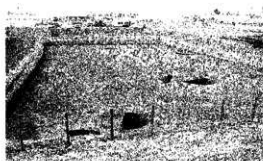
1区第34号土坑(井戸跡)



2区全景



3区全景



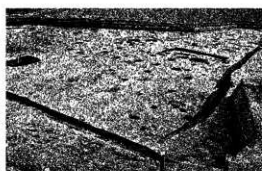
4区全景



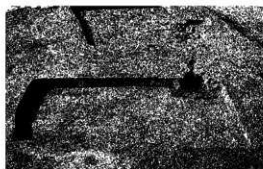
5区全景



6区全景



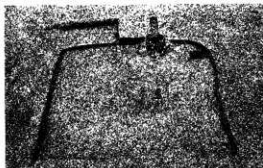
6区中央部



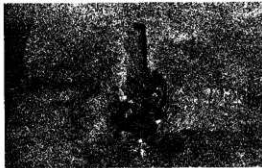
6区第1号住居跡(新)



6区第1号住居跡(新)カマド



6区第2号住居跡



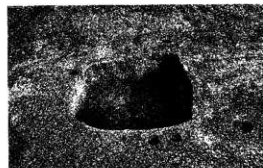
6区第2号住居跡カメラ



6区第3号住居跡



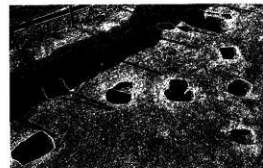
6区第3号住居跡カメラ



6区第4号住居跡



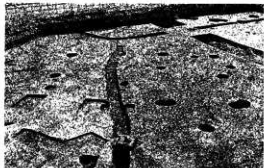
6区第1号掘立柱建物跡



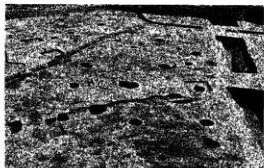
6区第2号掘立柱建物跡



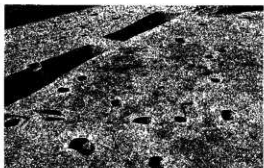
6区第3号掘立柱建物跡



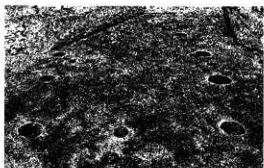
6区第4号掘立柱建物跡



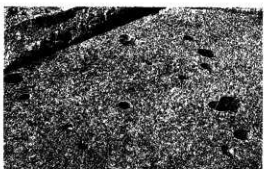
6区第5号掘立柱建物跡



6区第6号掘立柱建物跡



6区第7号掘立柱建物跡



6区第8号掘立柱建物跡



6区第9号掘立柱建物跡



6区第10号掘立柱建物跡



6区第13号掘立柱建物跡